

茨城県教育財団文化財調査報告第269集

大堀東遺跡

小貝川中流部河道掘削事業地内
埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

平成19年3月

国土交通省 下館河川事務所
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第269集

お お ほり ひがし
大堀東遺跡

小貝川中流部河道掘削事業地内
埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

平成19年3月

国土交通省 下館河川事務所
財団法人 茨城県教育財団



調査ⅡB区遠景（南東から）



第48号住居跡出土土器

序

国土交通省は21世紀を迎え、鬼怒川・小貝川流域の均衡ある発展を目指し、流域と多くの人々が一体となり、安心安全でうおいのある川づくりを推進しております。その一環として、治水・利水・環境のバランスのとれた河道整備として小貝川の流下能力向上のため河道内の掘削事業が進められております。

この事業地内には、埋蔵文化財包蔵地である大堀東遺跡が所在します。財団法人茨城県教育財団は、国土交通省関東地方整備局下館河川事務所から埋蔵文化財発掘調査についての委託を受け、平成16年10月から平成16年12月、平成17年10月から平成18年3月まで大堀東遺跡の発掘調査を実施してまいりました。

本書は、大堀東遺跡の調査成果を収録したもので、本書が学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から本書の刊行に至るまで、委託者である国土交通省関東地方整備局下館河川事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、下妻市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し感謝申し上げます。

平成19年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 人見 實 徳

例 言

1 本書は、国土交通省関東地方整備局下館河川事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が、平成16年度及び平成17年度に発掘調査を実施した、茨城県下妻市樋橋字大堀東407-1番地ほか（平成16年度）、同大堀東444番地ほか（平成17年度）に所在する大堀東遺跡（大堀東遺跡）の発掘調査報告書である。

2 発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。

調 査	平成16年度	平成16年10月1日～平成16年12月31日
	平成17年度	平成17年10月1日～平成18年3月31日
整 理	平成17年度	平成17年12月1日～平成18年3月31日
	平成18年度	平成18年4月1日～平成19年3月31日

3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、以下の者が担当した。

平成16年度	首席調査員兼班長	吉原 作平	
	主任調査員	浦和 敏郎	
	主任調査員	田月 淳一	
平成17年度	首席調査員兼班長	吉原 作平	
	首席調査員	白田 正子	
	主任調査員	石川 義信	平成18年3月1日～平成18年3月31日
	主任調査員	近藤 恒重	
	主任調査員	照山 大作	
	主任調査員	齋藤 貴史	
	調 査 員	菊池 直哉	平成17年10月1日～平成17年11月30日
	調 査 員	小林健太郎	平成18年1月1日～平成18年3月31日

4 整理及び本書の執筆・編集は、整理第二課長大森雅之のもと、以下の者が担当した。

平成17年度	主任調査員	田月 淳一	第1章第1節～第3章第3節・まとめ・写真図版
平成18年度	主任調査員	近藤 恒重	第1章第1節～第3章第2節への平成17年度調査分の加筆・第3章第4節・まとめ・写真図版

5 遺跡内の地質について、元筑波大学助教授（陸環境研究センター）池田宏氏、独立行政法人産業技術総合研究所地質標本館テクニカルスタッフ目代邦康氏にご教示いただいた。

6 本書の作成にあたり、当遺跡から出土した金属遺物の成分分析は、バリノ・サーヴェイ株式会社に委託し考察は付章として掲載した。また、出土した木製品の樹種同定については、独立行政法人森林総合研究所木材特性研究領域識別データベース化担当チーム長名城修一氏に、木製品の種別については首都大学東京考古学研究室准教授山田昌久氏にご指導いただいた。

7 同一遺跡内ではあるが、平成16年度と平成17年度で調査区が離れているため、様相、性格等を考慮し、平成16年度調査区をⅠ区、平成17年度調査区をⅡ区として表した。更に、Ⅱ区は排水路により調査区が分断されるため、排水路の北側をⅡA区、南側をⅡB区とした。（第1図 大堀東遺跡調査区設定図参照）

凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点とし、 $X = +18,760\text{m}$ 、 $Y = +15,400\text{m}$ の交点を基準点 (A 1a1) とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…、西から東へ1、2、3…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は、次のとおりである。

遺構 S I - 住居跡 SK - 土坑 SD - 堀跡・溝跡 SE - 井戸跡 P - 柱穴 PG - ビット群
K - 攪乱

遺物 P - 土器 TP - 拓本記録土器 DP - 土製品 Q - 石器・石製品 M - 金属製品・古銭
W - 木製品

土層 K - 攪乱

- 3 土層観察と遺物における色調の判定には、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

- 4 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

- 遺構全体図は400分の1、遺構実測図は60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。
- 遺物実測図は原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合があり、それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。
- 遺構及び遺物の実測図中の表示は次の通りである。

	焼土・施軸・火熱痕		炉・火床面・織維土器断面						
	甕部材・粘土・炭化物・黒色処理		煤・油煙						
●	土器・拓本土器	○	土製品	□	石器・石製品	△	金属製品・古銭	▲	木製品
---- 礫化面									

- 5 遺物観察表及び遺構一覧表の作成方法については、次のとおりである。

- 計測値の単位は法量をm、cm及び重量をgで示したが、大きさにより異なる場合もありそれらについては個々に単位を表示した。
- 遺物観察表及び遺構一覧表とも()は現存値、[]は推定値であることを示している。
- 備考欄には、土器の残存率及び写真図版番号その他必要と思われる事項を記した。

- 6 「主軸」は、竈を持つ堅穴住居跡については竈を通る軸線とし、他の遺構については長軸(径)を通る軸線を主軸とみなした。「主軸及び長軸(径)方向」は、それぞれの軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N-10°-E)。

抄 録

ふりがな	おおほりひがしいせき								
書名	大堀東遺跡								
副書名	小貝川中流部河道掘削事業地内埋蔵文化財調査報告書								
巻次	1								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告								
シリーズ番号	第269集								
著者名	近藤 恒重 田月 淳一								
編集機関	財団法人 茨城県教育財団								
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL029-225-6587								
発行日	2007(平成19)年3月23日								
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因	
大堀東遺跡 I区	茨城県下妻市樋橋 字大堀東407-1番地 ほか	08210 060	36度 09分 46秒	140度 00分 17秒	17 ~ 18m	20041001 ~ 20041231	3,384㎡	小貝川中流部 河道掘削事業 に伴う事前調査	
	下妻市樋橋字大堀 東444番地ほか		36度 09分 53秒	140度 00分 22秒		20051001 ~ 20060331	9,869㎡		
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
大堀東遺跡 I区	掘場 集落跡	縄文	陥し穴 土坑	2基 1基	縄文土器				
		平安 中・近世	竪穴住居跡 溝跡	10軒 2条	土師器、須恵器 土師質土器(内耳鍋)、 瓦質土器(甕)、陶器(皿)				
	その他	不明	井戸跡 土坑 溝跡	2基 2基 3条	土師器、須恵器、陶器 (皿)、土製品(置き籠、 石器(磁石))				
II区	集落跡	縄文	周溝状遺構 土坑 屋外炉 ピット群 遺物包含層	1基 39基 2基 2か所 2か所	縄文土器(深鉢・浅 鉢)、石器(鎌・剥片)		埴場に転用した銅付着の 環・小皿、鋳型片が出土 しており、銅製物を生産 したと考えられる工房跡 が確認されている。また、 近世の堤防下から、五輪 塔を組んで構築された、 暗渠と考えられる遺構が 確認されている。		
		平安	竪穴住居跡 工房跡 土坑	63軒 1軒 15基	土師器、須恵器、灰 軸陶器(皿・瓶類)、 土製品(置き籠・支 脚)、石製品(支脚)				
	近世	堀跡 溝跡 石組遺構	1条 9条 1か所	陶器(深鉢・甕)、磁 器(碗・皿)、五輪塔					
	その他	不明	溝跡 土坑 柱穴列跡 ピット群 旧河道跡 旧堤防跡	7条 117基 2か所 4か所 1条 2か所	土師器、須恵器、灰 軸陶器(皿・長頸瓶)、 陶器(碗・瓶・深鉢)、 磁器(碗・皿)、土製 品(置き籠、紡錘車)、 鉄製品(刀子・釘)、 木製品(鉤・杵・杭)				
要 約	平安時代の集落跡を中心とする。縄文時代から中・近世にかけての複合遺跡である。遺跡内に堆積した層は、川の氾濫の影響を受けて形成され、遺構確認面が何層にも分かれている。上部のシルト・砂・粘土層からは、平安時代の竪穴住居跡、中・近世の堀、溝跡、下部の黄褐色土層からは、縄文時代の遺構が確認されている。また、小貝川沿いからは旧河道跡が確認され、土師器、灰軸陶器、木製品などが出土している。								

目 次

序	
例言	
凡例	
抄録	
目次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	8
第3節 I区の遺構と遺物	10
1 縄文時代の遺構と遺物	10
(1) 陥し穴	10
(2) 土坑	11
2 平安時代の遺構と遺物	12
堅穴住居跡	12
3 中・近世の遺構と遺物	25
溝跡	25
4 その他の遺構と遺物	28
(1) 井戸跡	28
(2) 土坑	30
(3) 溝跡	31
(4) 遺構外出土遺物	34
第4節 II区の遺構と遺物	36
1 縄文時代の遺構と遺物	36
(1) 周溝状遺構	36
(2) 土坑	42
(3) 屋外竈	51
(4) ビット群	52
(5) 遺物包含層	54
2 平安時代の遺構と遺物	60
(1) 堅穴住居跡	60
(2) 工房跡	206
(3) 土坑	211
3 中・近世の遺構と遺物	228
(1) 堀跡	228
(2) 溝跡	230
4 その他の遺構と遺物	244
(1) 溝跡	244
(2) 土坑	250
(3) 柱穴列跡	267
(4) ビット群	269
(5) 旧河道跡	276
(6) 旧堤防跡	286
(7) 遺構外出土遺物	290
第5節 まとめ	294
付章 大堀東遺跡出土金属遺物の成分分析	304
写真図版	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

平成16年1月7日、国土交通省関東地方整備局下館河川事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して小貝川中流部河道掘削事業地内に埋蔵文化財の所在の有無及び取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は平成16年1月27日に現地踏査を、平成16年2月16～19日、25・26日、3月1～4日、4月26日、28日、30日、5月6日、平成17年6月7～9日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成16年3月15日、5月17日、平成17年6月29日、茨城県教育委員会教育長から国土交通省関東地方整備局下館河川事務所長あてに事業地内に大堀東遺跡が所在する旨回答した。

平成16年6月23日、国土交通省関東地方整備局下館河川事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、平成16年6月23日、国土交通省関東地方整備局下館河川事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成16年6月25日及び平成17年3月17日、国土交通省関東地方整備局下館河川事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、小貝川中流部河道掘削事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成16年6月30日及び平成17年3月18日、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局下館河川事務所長あてに大堀東遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、国土交通省関東地方整備局下館河川事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成16年10月1日から平成16年12月31日、平成17年10月1日から平成18年3月31日まで発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

調査は平成16年10月1日から12月31日及び、平成17年10月1日から平成18年3月31日まで実施した。その概要を表で記載する。

工程	Ⅰ区（平成16年10月1日～12月31日）			Ⅱ区（平成17年10月1日～平成18年3月31日）						
	10月	11月	12月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
調査準備表土除去遺構確認	■			■		■				
遺構調査	■			■						
遺物洗浄作業 注写真	■			■						
補足調査 撤収				■						■



第1図 大堀東道跡調査区設定図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

大堀東遺跡は、茨城県下妻市榑橋字大堀東407-1番地ほか（Ⅰ区）、同444番地ほか（Ⅱ区）に所在し、小貝川流域の沖積低地に立地している。この沖積低地は、南流する鬼怒川と小貝川の二大河川の洪水氾濫によって形成されたものである。両河川は、栃木県から南に延びる洪積台地を分断するように流れ、台地間に沖積低地を形成している。そして、この沖積低地は、地勢により大きく三つに分けることができる。下妻台地と結城台地に挟まれた「鬼怒川低地」、下妻台地と筑波台地に挟まれた「小貝川低地」、下妻台地の南側にあたる結城台地と筑波台地に挟まれた「鬼怒・小貝川低地」である¹⁾。

両河川流域の沖積低地は、過去約1万年間（完新世）に堆積した地層である、沖積層によって形成されている。縄文海進時、海面下となった地域の沖積層の構造には、海面上昇時に堆積した細粒な物質、その上に後退期に堆積した粗い物質が堆積する傾向が見られる。また、海進が及ばなかった地域の沖積層は、淡水の環境下で河川の洪水氾濫によって堆積した氾濫原堆積物であり、粘土、シルト、細砂、泥を中心とした細粒堆積物によって構成されている。シルト層には腐植物を含有することが多い。氾濫原の堆積物は地表面の地形を反映するため、場所によって堆積物の様相に相違が見られ、沖積層の構造を明瞭に見ることは難しい²⁾。

栃木県内に水源を持つ両河川は、茨城県に入ると川床の勾配が小さくなり、低地をゆったりと流れ、流域は肥沃な穀倉地帯であるとともに水害の潜在的な危険地帯でもある。

当遺跡周辺は、筑波山を北東に望みながら、台地の間を鬼怒川と小貝川がほぼ平行して流れている。流域は、粘土・シルト・砂・泥を主体とした層が厚く堆積し、洪水時に形成される自然堤防とその背後に形成される後背湿地や蛇行流路の痕跡などの旧河道が見られる³⁾。当遺跡は、下妻市南東部にあり、地勢的には、前述した「鬼怒・小貝川低地」に該当する。つくば市と旧千代川村に接する小貝川右岸の標高約17～18mの微高地上に位置し、わずかながら南西から北東へ傾斜しているが、ほぼ平坦な地形である。遺跡の現況は河川敷内で畑、及び雑木林である。

第2節 歴史的環境

大堀東遺跡の所在する地域は、鬼怒川・小貝川の氾濫地域で大小多くの旧河道が存在し、その周囲に発達した自然堤防上に遺跡の存在が認められているが、両河川流域に広がる沖積低地内には、まだ確認されていない遺跡が数多く埋没している可能性も想定される。また、この両河川の周囲の台地上にも多くの遺跡が存在している。ここでは、現在確認されている周辺の遺跡を中心に、時代ごとに述べる⁴⁾。

旧石器時代の遺跡は、「万葉集」の中に歌われている「鳥羽の淡海」に突き出た台地上に、尖頭器が出土している桜塚遺跡（2）がある⁵⁾。

縄文時代になると、平坦な台地の縁辺部に集落が形成されるようになり、小貝川をのぞむ台地上に相の田遺跡（3）、糸織川をのぞむ台地上に多宝院遺跡（4）などがある。また、対岸に安食遺跡（5）、約1.5 km上流の小貝川河川敷内に柳原遺跡（6）がある。安食・柳原両遺跡とも発掘調査が行われていないため、縄文時代の様相は不明であるが、当遺跡から出土した中期の遺物と時期が合致するならば、遺跡周辺の当時の様相を知



第2図 大福東遺跡周辺遺跡分布図(国土地理院5万分の1「小山」・「真壁」・「水海道」・「土浦」に加算)

表1 大堀東遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代							
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世			近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世
①	大堀東遺跡					○	○	○	16	北迎遺跡				○	○	○	○
2	桜塚遺跡	○	○		○				17	山尻遺跡					○	○	
3	相の田遺跡		○			○			18	吉沼明戸南遺跡					○		
4	多宝院遺跡		○		○	○	○		19	小貝川川底遺跡A地点		○	○	○	○	○	○
5	安食遺跡		○						20	小貝川川底遺跡B地点		○	○	○	○	○	○
6	柳原遺跡		○		○	○	○		21	小貝川川底遺跡C地点					○	○	○
7	柏山遺跡		○	○	○	○			22	小貝川川底遺跡D地点					○	○	
8	旭遺跡		○	○	○		○		23	小貝川川底遺跡E地点					○	○	
9	桜塚古墳群		○		○				24	砂子遺跡		○		○	○	○	○
10	西原古墳群				○				25	遠見塚遺跡		○		○	○	○	○
11	安食稲荷塚古墳群				○				26	味川遺跡					○	○	○
12	石堂遺跡		○		○	○			27	八幡遺跡		○		○	○	○	○
13	弁納堂遺跡				○	○			28	押沼遺跡					○	○	○
14	新堀条里遺跡					○			29	中押遺跡		○		○	○	○	○
15	加養条里遺跡					○			30	伊古田遺跡		○		○	○	○	○

る手がかりになると思われる。

弥生時代の遺跡は極めて少なく、柏山遺跡〈7〉、旭遺跡〈8〉のみ見られるだけである。

古墳時代には、新治国と筑波国に属し、6世紀になると市域に古墳が築造されるようになる。高道祖地区の台地上には桜塚古墳群〈9〉や西原古墳群〈10〉などがあり⁸⁾、対岸の台地上に安食稲荷塚古墳群〈11〉がある。集落跡は低地に面した台地の縁辺部に位置し、石堂遺跡〈12〉、前期の土師器壺や後期の長胴甕が出土している弁納堂遺跡〈13〉などがある⁹⁾。

現在、鬼怒川・小貝川はそれぞれ分かれて流れているが、鬼怒川は「毛野川」「衣川」ともいわれ、約2000年前に現在の流路になり、下妻市の南部を東流し比毛のあたりで小貝川と合流していた。「常陸国風土記」では、この毛野川が常陸国と下総国の国境となっていたことが記述されている⁸⁾。古くから洪水をもたらす暴れ川であったため、奈良時代に大規模な河川改修が行われたことが、『続日本紀』の神護景雲二年(768)8月19日条に記載されている。現在の下妻市桐ヶ瀬・赤須周辺から八千代町大船渡周辺に至る新河道が開削されたが、両国の国境は変更されなかった。しかし、この河川改修工事が流路に影響を与え、鬼怒川と小貝川が分流

するようになるのは、平安時代になってからのことと推定されている。『将門記』には「子飼乃渡」の記載があり、承平年間には「子飼川」と呼ばれていたことから推察することができる⁹⁾。

奈良・平安時代の遺跡は、下妻台地南部の「東流毛野川」流域の遺跡として、新堀条理遺跡(14)、9世紀頃の条里制水田遺構が確認されている加養条理遺跡(15)、土師器・須恵器片が広範囲から採集されている北理遺跡(16)、山尻遺跡(17)がある。小貝川流域の遺跡では、吉沼明戸南遺跡(18)、小貝川川底遺跡(A～E地点)(19)(20)(21)(22)(23)、古代瓦が採集されている砂子遺跡(24)、遠見塚遺跡¹⁰⁾(25)がある。また、味川遺跡¹¹⁾(26)では平安時代の溝跡、掘立柱建物跡などが確認されており、その他、古代の遺物が多く採集されている八幡遺跡(27)、土色の異なる地点から須恵器甕が採集されている押沼遺跡(28)、中押遺跡(29)、伊古田遺跡(30)などがある¹²⁾。この中で、下流に所在する小貝川川底遺跡は、小貝川流域に約1.3kmの間に5地点ほど確認されている。川底から縄文時代から近世までの多量の土器が採集されており、土器の年代は8世紀初頭から11世紀前半が中心となっている¹³⁾。この遺跡の全容は明らかではないが、周辺に集落遺跡が存在していたことは想像がつく。当遺跡も含め小貝川流域の自然堤防上から、この時代の遺跡の様相がわかるにつれ、低地への集落の進出と、流域での集落の広がりやその様相が明らかになるであろう。

律令期には、市域は、北は常陸国新治郡、東部の高道祖地区は常陸国筑波郡、南部は下総国岡田郡に属し、10世紀初頭には、岡田郡は豊田郡に改称される。この豊田郡を地盤としていた平将門が乱を起こし、戦乱に巻き込まれる。将門の乱後、平繁盛流平氏が勢力を保持・展開し、地域の開発を押し進めていく。そして、その中から12世紀後半、下妻地方で強大な勢力をほこった下妻広管が登場し、本格的な中世の開始となる¹⁴⁾。

※ 文中の〈 〉内の番号は、表1及び第2図の該当番号と同じである。

註

- 1) 赤井博之「鬼怒・小貝川中流域における低地道跡の基礎的研究」『茨城県史研究』第79号 茨城県立歴史館 1997年10月
- 2) 千代田村史編纂委員会『村史 千代田村生活史 第1巻 自然と環境』千代田村 1998年8月
- 3) 鬼怒川・小貝川読本編纂会議編纂委員会「鬼怒川・小貝川-自然・文化・歴史」鬼怒川・小貝川サミット会議 1993年3月
- 4) 茨城県教育庁文化課「茨城県道跡地図(地名表編・地図編)」茨城県教育委員会 2001年3月
- 5) 下妻市史編纂委員会「下妻市史上 原始古代・中世」下妻市 1993年3月
- 6) 註5) に同じ
- 7) 註1) に同じ
- 8) 註3) に同じ
- 9) 佐久間好雄監修『図説 結城・真壁・下館・下妻の歴史』郷土出版社 2004年2月
- 10) 註1) に同じ
- 11) 小川和博ほか「味川遺跡発掘調査報告書」『千代田村埋蔵文化財発掘調査報告書』第8集 千代田村 2001年11月
- 12) 千代田村史編纂委員会「千代田村の歴史-千代田村道跡分布調査報告書-」千代田村 2001年3月
- 13) 千代田村史編纂委員会『村史 千代田村生活史 第3巻 前近代史料』千代田村 2001年3月
- 14) 註5) に同じ

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

大堀東遺跡は、下妻市の南東部を流れる小貝川流域の沖積低地上に立地し、低地の標高は約17～18mである。平成16年度と平成17年度の2次に渡って発掘調査が行われた。試掘の結果、上下2面の遺構確認面が存在するため、2回の調査とも上面（第一次面）の調査終了後、黄褐色土が表れる面（第二次面）まで下げ、調査を実施した。

平成16年度の調査区（Ⅰ区）は、小貝川右岸の河川敷に広がる遺跡の南西側部分、東西長10m、南北長360mほどで、調査面積は3,384㎡である。現地表面から40cmほど下に第一次面、さらに30cmほど下に第二次面が確認された。第一次面については、全面的に表土除去を行い調査した。第二次面については、トレンチ調査を基本とし、トレンチ内に遺構が確認された場合は、拡張して調査を行った。

調査の結果、第一次面から平安時代の竪穴住居跡10軒、中・近世の溝跡2条、時期不明の土坑2基、井戸跡2基、溝跡3条、第二次面から縄文時代の陥穴2基、土坑1基を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に5箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、土師器（高台付椀・坏・小皿・甕・甔・甗）、須恵器（坏・甕）、土師質土器（内耳鍋）、瓦質土器（甕）、陶器（皿）、土製品（置き甕）、石器（砥石）などである。

平成17年度の調査区（Ⅱ区）は、遺跡の東側、小貝川に沿った部分の東西長最大40m、南北長420mほどで、調査面積は9,869㎡である。第一次面は、川の氾濫によって堆積した砂・シルトを主体とする層の中から、平安時代の遺構が確認された。遺構が確認できる面の高さが一律ではなく、高さを違えて遺構が確認された。それぞれの遺構の時期差は少なく、川の氾濫を受けた後も、集落を営み続けたことが想定される。増堤に転用した銅附着の坏や小皿が出土し、銅製品を生産していたと考えられる工房跡も確認された。また、調査区内には、近世に構築された堤防があり、その下から、五輪塔を組んで暗渠にしたと思われる遺構も確認された。第二次面は、調査区内の5,492㎡ほどを、第一次面から約1.2mまで掘り下げ、調査を行った。

調査の結果、第一次面では、縄文時代の周溝状遺構1基、平安時代の竪穴住居跡63軒、工房跡1軒、土坑15基、近世の堀跡1条、溝跡9条、石組遺構1か所のほかに、溝跡7条、土坑117基、柱穴列跡2か所、ピット群4か所、旧河道跡1条を、第二次面では、土坑39基、屋外炉2基、ピット群2か所、遺物包含層2か所を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に110箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢・浅鉢）、土師器（高台付椀・坏・小皿・甕・甔）、須恵器（坏・甕）、灰瀬陶器（長頸瓶・皿）、陶器（深鉢・皿）、磁器（碗・皿）、土製品（置き甕・支脚）、石器・石製品（支脚・砥石）、五輪塔などである。

Ⅱ区の北側は、第二次面の指標となった黄褐色土が、現地表面から20cmほど下で確認された。この面から縄文時代の遺物が多く出土した周溝状遺構が確認されており、この地が、当時丘陵状になっていた可能性がある。Ⅰ区では陥穴が確認されていることから、南西側に狩猟の場、北側に集落ということも視野に入れ、当該遺跡の縄文時代の様相を考える必要がある。また、第一次面では、Ⅰ区、Ⅱ区で、同時期の平安時代の住居跡が確認されており、広い範囲に渡って集落が形成されていたと考えられる。

第2節 基本層序

河川の氾濫のため、層序が均一に堆積しているのではなく、地点により異なる可能性がある。Ⅰ区では調査区の南部（P 2b3）に、Ⅱ区では、ⅡA区の西部（F 5j8）、ⅡB区の東部（L 4a4）にテストピットを設定して、基本土層（第3図）の観察を行った。以下、テストピットの観察結果から層序の解説を行う。

<Ⅰ区>

第1層は、暗褐色を呈する耕作土層で、粘性・締まりとも普通である。層厚は42～48cmである。

第2層は、褐灰色を呈する粘土主体の層で、白色スコリア粒子を微量含み、粘性は普通で、締まりは強い。層厚は42～50cmである。

第3層は、灰黄褐色を呈する粘土主体の層で、粘性・締まりとも強い。層厚は12～24cmである。

第4層は、にぶい黄褐色を呈する粘土主体の層で、粘性・締まりとも強い。層厚は30～46cmである。

第5層は、黄褐色を呈する粘土主体の層で、粘性・締まりとも普通である。層厚は30～38cmである。

第6層は、黒褐色を呈する粘土主体の層で、粘性・締まりとも普通である。層厚は30～40cmである。

第7層は、褐色を呈する粘土主体の層で、粘性は強く、締まりは普通である。層厚及び下層の様相は未掘のため、不明である。

なお、粘性が一番強かった層は第4層であり、次に第3層である。また、第2～6層にかけて、酸化した鉄分が層中に点在しており、特に第3・4層に多く含まれている。遺構は、第一次面は第2層上面、第二次面は第5層上面で確認されている。

<Ⅱ区>

第1層は、暗褐色を呈する耕作土層で、粘性・締まりとも普通である。層厚は18～28cmである。

第2層は、灰黄褐色を呈するシルト質の層で、粘性は弱く、締まりは普通である。層厚は14～26cmである。

第3層は、灰黄褐色を呈する粘土主体の層で、鉄分が斑状に沈着している。粘性・締まりとも普通で、層厚は12～24cmである。

第4層は、灰黄褐色を呈する粘土主体の層で、白色・灰色の粘土ブロックを含み、粘性はやや強く、締まりは普通である。層厚は10～20cmである。

第5層は、明黄褐色を呈する粘土主体の層で、鉄分が多量に沈着している。粘性はやや強く、締まりは普通で、層厚は6～12cmである。

第6層は、灰黄褐色を呈する粘土主体の層で、鉄分を少量含み、粘性はやや強く、締まりは普通である。層厚は4～12cmである。

第7層は、褐灰色を呈する粘土主体の層で、粘性・締まりともやや強い。層厚は10～20cmである。

第8層は、黒褐色を呈する粘土主体の層で、鉄分を少量含み、粘性はやや強く、締まりは普通である。層厚は16～22cmである。

第9層は、黒褐色を呈する泥質の層で、鉄分を微量含み、粘性はやや強く、締まりは普通である。層厚は20～24cmである。

第10層は、黒褐色を呈する泥質の層で、鉄分を中量含み、粘性はやや強く、締まりは普通である。層厚は30～34cmである。

第11層は、黒色を呈する泥質の層で、粘性はやや強く、締まりは普通である。層厚は30～34cmである。

第12層は、黄褐色を呈する粘土主体の層である。粘性はやや強く、締まりは普通である。層厚及び下層の様相は未掘のため不明である。

第13層は、暗灰黄褐色を呈する粘土主体の層で、シルトを中量含み、粘性・締まりとも普通である。層厚は10～20cmである。

第14層は、褐灰色を呈する粘土主体の層で、粘性はやや強く、締まりは普通である。層厚は6～20cmである。

第15層は、黒褐色を呈する粘土主体の層で、鉄分が斑状に沈着している。粘性はやや強く、締まりは普通で、層厚は10～14cmである。

第16層は、黒褐色を呈する粘土主体の層で、粘性・締まりとも普通である。層厚は18～24cmである。

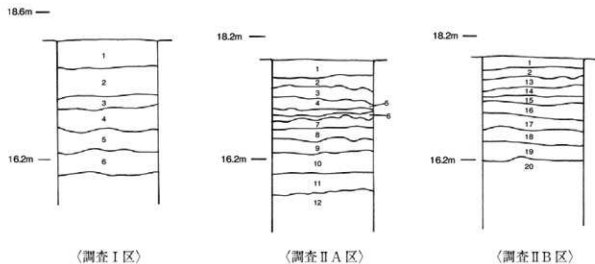
第17層は、黄褐色を呈する粘土主体の層で、粘性・締まりとも普通である。層厚は16～28cmである。

第18層は、黄褐色を呈する粘土主体の層で、鉄分を中量含み、粘性・締まりとも普通である。層厚は16～26cmである。

第19層は、黒褐色を呈する粘土主体の層で、粘性・締まりとも普通である。層厚は20～30cmである。

第20層は、褐色を呈する粘土主体の層で、粘性はやや強く、締まりは普通である。層厚及び下層の様相は未掘のため不明である。

遺構は、第一次面は、第2・13層内、第二次面は第12・18層上面で確認されている。また、遺物包含層は、第9・10層が主体になる層である。



第3図 基本土層図

第3節 I区の遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の陥し穴2基、土坑1基を確認した。以下、確認された遺構及び遺物について記述する。

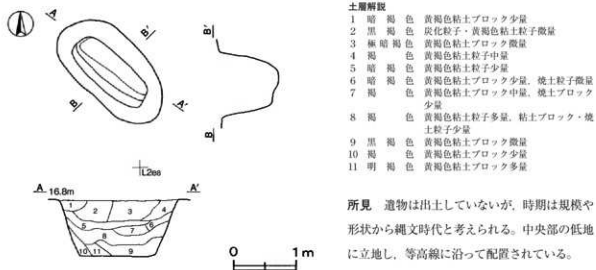
(1) 陥し穴

第1号陥し穴（SK4）（第4図）

位置 調査区中央部のL2d7区で、標高16.5mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 長径20m、短径1.0mの楕円形で、長径方向はN-46°-Wである。深さ98cmで、底面は平坦であるが、北西側に段を有している。断面はU字状である。壁はほぼ直立している。

覆土 11層に分けられる。粘土ブロックを含み、ブロック状の堆積状況を示していることから人為堆積と考えられる。



第4図 第1号陥し穴実測図

第2号陥し穴（SK5）（第5図）

位置 調査区中央部のL2a9区で、標高16.5mの平坦な低地上に位置している。

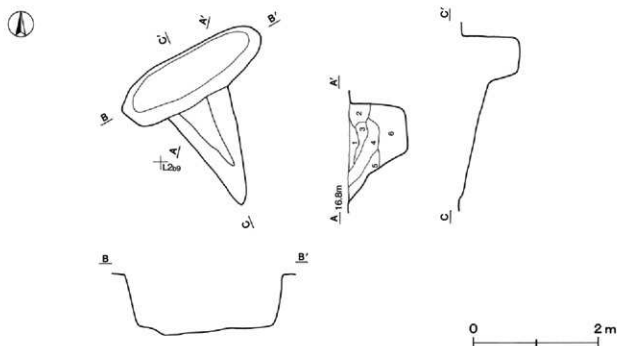
規模と形状 長径2.5m、短径0.8mの楕円形で、長径方向はN-62°-Eである。深さ94cmで、底面は平坦である。断面は逆台形で、南東方向へスロープがつけられている。壁はほぼ直立している。

覆土 6層に分けられる。粘土ブロックを含み、ブロック状の堆積状況を示していることから人為堆積と考えられる。

土層解説

1	黒褐色	黄褐色粘土ブロック少量	4	暗褐色	黄褐色粘土粒子少量
2	灰褐色	黄褐色粘土粒子中量	5	褐色	黄褐色粘土ブロック中量
3	黒褐色	黄褐色粘土粒子微量	6	黒褐色	黄褐色粘土ブロック少量

所見 遺物は出土していないが、時期は規模や形状から縄文時代と考えられる。中央部の低地に立地し、等高線に対してほぼ直交して配置されている。



第5図 第2号陥し穴実測図

表2 陥し穴一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規模		覆土	底面	壁面	出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	L 2 d7	N-46°-W	楕円形	2.0×1.0	98	人為	平坦	直立	-	
2	L 2 d9	N-62°-E	楕円形	2.5×0.8	94	人為	平坦	直立	-	

(2) 土坑

第3号土坑 (第6図)

位置 調査区中央部のL 2 d8区で、標高16.5mの平坦な低地上に位置している。

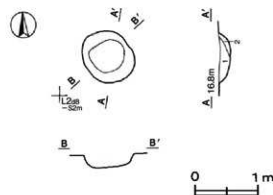
規模と形状 長径0.9m、短径0.8mの楕円形で、長径方向はN-54°-Wである。深さ20cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 黄褐色粘土粒子微量
- 2 暗褐色 黄褐色粘土粒子少量

所見 第二次面で確認され、第1・2号陥し穴の周辺に位置することから、時期は縄文時代と考えられる。



第6図 第3号土坑実測図

表3 縄文時代の土坑一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規模		覆土	底面	壁面	出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
3	L 2 d8	N-54°-W	楕円形	0.9×0.8	20	自然	平坦	外傾	-	

2 平安時代の遺構と遺物

平安時代の竪穴住居跡10軒を確認した。以下、確認された遺構及び遺物について記述する。

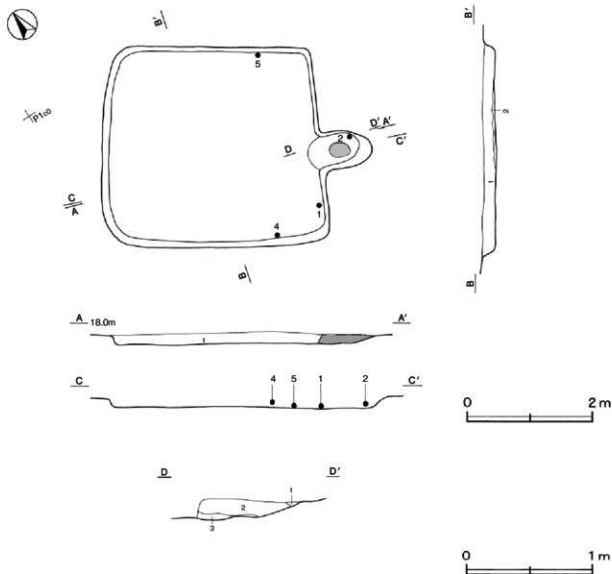
第1号住居跡（第7・8図）

位置 調査区南部のP1c0区で、標高18mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 長軸3.7m、短軸3.2mの長方形で、主軸方向はN-120°-Eである。壁高は15cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦である。

竈 東壁中央部やや南寄りに付設されている。規模は、焚き口から煙道部まで106cm、焚き口幅62cmである。袖部は確認できなかった。火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ58cm掘り込まれて、緩やかに外傾して立ち上がっている。



第7図 第1号住居跡実測図

覆土層解説

- 1 にぶい・赤褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量
 2 灰黄褐色 粘土粒子中量、炭化粒子微量
 3 褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量

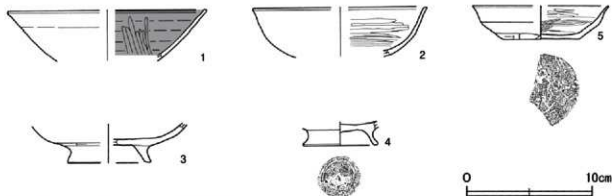
覆土 2層に分けられる。粘土粒子が層内にほぼ均一に堆積している状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 灰黄褐色 粘土粒子中量、炭化物微量 2 褐色 粘土粒子多量

遺物出土状況 土師器片145点（碗類119、小皿1、甕類25）が出土している。その他、流れ込んだ須恵器片3点も出土している。1は南東コーナー部の床面、2は竈内、5は北壁際の床面からそれぞれ出土しており、遺棄されたものと考えられる。3は覆土中、4は南壁際の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。



第8図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表（第8図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	碗	[15.7]	(4.0)	-	雲母	にぶい・橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き	床面	10%
2	土師器	碗	[13.8]	(3.9)	-	雲母・黒色粒子	にぶい・橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き	覆土	10% PL7
3	土師器	高台付碗	-	(3.1)	[6.4]	雲母・石英	にぶい・橙	普通	体部外面下層回転ヘラ磨き 底部回転ヘラ刃立裁高台磨き	覆土中	10%
4	土師器	高台付碗	-	(1.9)	5.8	雲母・長石・石英	にぶい・赤褐色	普通	底部回転ヘラ切り後高台磨き	覆土下層	10%
5	土師器	小皿	[10.8]	2.7	[6.1]	雲母・長石・石英	にぶい・橙	普通	ロクロナデ 外面ヘラ磨き 刃面下層ヘラ磨き 底部回転ヘラ磨き	床面	30% PL7

第2号住居跡（第9・10図）

位置 調査区南部のP1a0区で、標高18mの平坦な低地上に位置している。

重複関係 南部を第5号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.1m、短軸3.4mの長方形で、主軸方向はN-102°-Eである。壁高は15cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

竈 東壁南寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで117cm、袖部幅116cmである。袖部は床面とほぼ同じ高さを基部とし、粘土で構築されている。火床面は確認できなかった。煙道部は壁外へ58cm掘り込まれて、緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土層解説

- | | |
|----------------------------|-------------------------|
| 1 褐灰色 粘土粒子中量, 炭化粒子微量 | 5 濃い黄褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量 |
| 2 褐灰色 粘土粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 褐灰色 粘土粒子中量, 焼土ブロック少量 |
| 3 褐灰色 粘土粒子中量, 焼土ブロック・炭化物微量 | 7 灰黄褐色 粘土粒子多量, 焼土ブロック少量 |
| 4 褐灰色 粘土粒子多量, 炭化物少量 | |

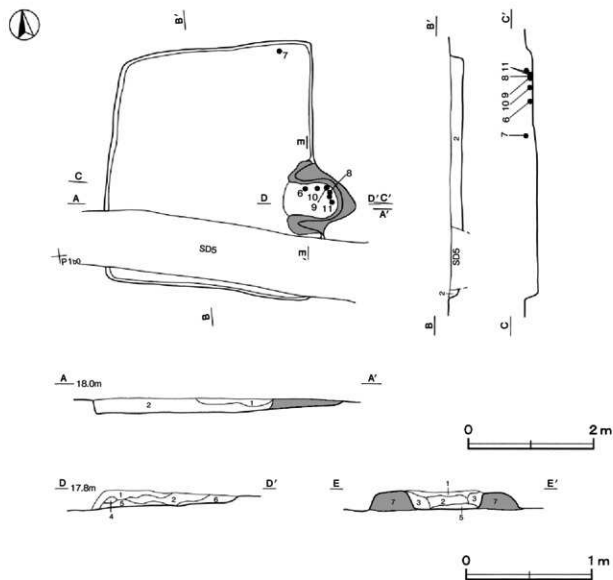
覆土 2層に分けられる。粘土粒子が層内にほぼ均一に堆積している状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

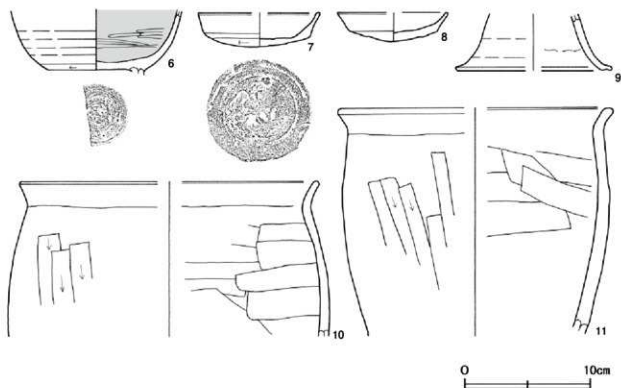
- | | |
|-----------------------|---------------|
| 1 灰黄褐色 粘土粒子中量, 炭化粒子微量 | 2 灰黄褐色 粘土粒子多量 |
|-----------------------|---------------|

遺物出土状況 土師器片183点(碗類142, 小皿2, 甕類39)が出土している。6・10は竈の覆土下層からそれぞれ出土し、遺棄されたものと考えられる。8・9は竈の覆土下層から、11は竈の煙道部に近いところからまとも出土しており廃棄されたものと考えられる。7は北壁際の覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。



第9図 第2号住居跡実測図



第10図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表 (第10図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
6	土師器	高台付椀	-	(5.0)	-	雲母・長石	にぶい赤褐色	普通	ロタロナナデ 西面ヘラ焼き 外面下蓋同転ヘラ削り 底部同転ヘラ切り後高台張り付け	電覆土下層	40%
7	土師器	小皿	[9.6]	2.7	8.3	石英	浅黄褐色	普通	ロタロナナデ 底部同転ヘラ切り 底部丸底	覆土上層	70% PL7
8	土師器	小皿	[8.2]	2.3	[7.0]	雲母・長石	浅黄褐色	普通	ロタロナナデ 底部同転ヘラ切り 底部丸底	電覆土下層	50% PL7
9	土師器	高台付椀	-	(4.6)	[12.3]	長石・石英	にぶい橙	普通	裾部内外面ロタロナナデ 内面輪積直	電覆土下層	30% PL8
10	土師器	甕	[23.4]	(12.3)	-	雲母・長石・石英・赤褐色粘土	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	電覆土下層	10% PL8
11	土師器	甕	[21.7]	(18.2)	-	長石・雲母・赤褐色粘土	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土上層-電覆土下層	10%

第3号住居跡 (第11図)

位置 調査区中央部のO2a3区で、標高17.5mの平坦な低地上に位置している。

重複関係 北東部を第10号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.8m、短軸2.5mの長方形で、主軸方向はN-22'-Eである。壁高は40cmで、壁は直立している。

床 ほぼ平坦である。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで81cm、焚口部幅82cmである。袖部は確認できなかった。火床面及び内壁が火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ59cm掘り込まれて、緩やかに外傾して立ち上がっている。第1層は焼土を含み、天井部の崩落層と考えられる。

電土層解説

- 1 にぶい赤褐色 焼土ブロック・粘土粒子中量、炭化物微量
- 2 灰黄褐色 粘土粒子多量
- 3 灰黄褐色 粘土粒子多量、焼土ブロック少量

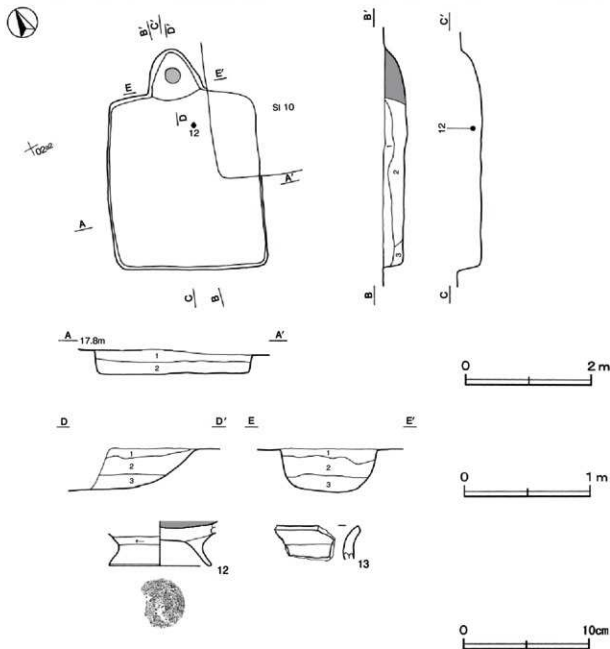
覆土 3層に分けられる。粘土粒子が層内にほぼ均一に堆積している状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 灰黄褐色 粘土粒子中量、炭化物微量
2 灰黄褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
3 灰黄褐色 粘土粒子中量、ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片181点（椀類62、甕類119）が出土している。12は中央部の覆土下層、13は北西部の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器からの特定は困難であるが、重複関係と住居の形態から9世紀後葉と考えられる。



第11図 第3号住居跡・出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表（第11図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
12	土師器	高仔付椀	—	(3.6)	8.0	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面下縁回転へず残り へず切り縁高台貼り付け	覆土下層	20%
13	土師器	甕	—	(2.6)	—	雲母・灰石・石炭・赤色粒子	にぶい橙	普通	口辺部内外面横ナデ	覆土	5%

第4号住居跡（第12図）

位置 調査区中央部のN213区で、標高17.5mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 長軸2.9m、短軸2.8mの方形で、主軸方向はN-10°-Eである。壁高は12cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦である。

竈 北壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで81cm、焚口部幅102cmである。袖部は確認できなかった。火床面及び内壁は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ59cm掘り込まれて、外傾して立ち上がっている。第2層は焼土や炭化粒子を含み、天井部の崩落層と考えられる。

竈土層解説

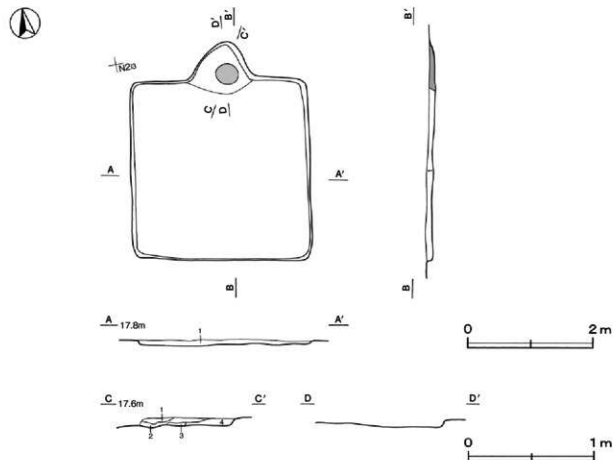
- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| 1 灰黄褐色 粘土粒子中量 | 3 濃い赤褐色 焼土ブロック・粘土粒子中量、炭化粒子微量 |
| 2 赤褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子中量、粘土粒子少量 | 4 黒灰色 粘土粒子多量 |

覆土 単一層である。層厚が薄い。粘土粒子が層内にほぼ均一に堆積している状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 灰黄褐色 粘土粒子多量

遺物出土状況 土師器片6点（坏3、堿類3）、須恵器片2点（坏）が出土している。すべて細片であるため図示できなかった。



第12図 第4号住居跡実測図

所見 時期は、出土土器が細片で細かい時期区分はできないが、出土した土器片や住居跡の形態等から平安時代と推定される。

第5号住居跡（第13図）

位置 調査区中央部のN2j3区で、標高17.5mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 長軸3.0m、短軸2.4mの長方形で、主軸方向はN-106°-Eである。壁高は4cmで、壁は外傾して立ち上がっていたと推測される。

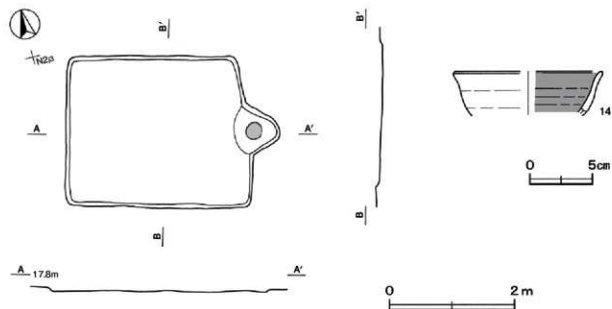
床 はほぼ平坦である。

竈 東壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで72cm、焚口部幅78cmである。袖部は確認できなかった。火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ48cm掘り込まれて、外傾して立ち上がっていたと推定される。

覆土 極めて薄いため堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片8点（椀類6、甕類2）が出土している。14は南東部の覆土中から出土している。出土遺物はすべて細片である。

所見 時期は、出土土器が少ないが、出土した土師器片から10世紀後半と推定される。



第13図 第5号住居跡・出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表（第13図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
14	土師器	椀	[118]	(35)	-	赤褐色・石英・赤色粒土	にぶい橙	普通	ロクロナデ	覆土	10%

第6号住居跡（第14・15図）

位置 調査区南部のP19区で、標高18mの平坦な低地上に位置している。

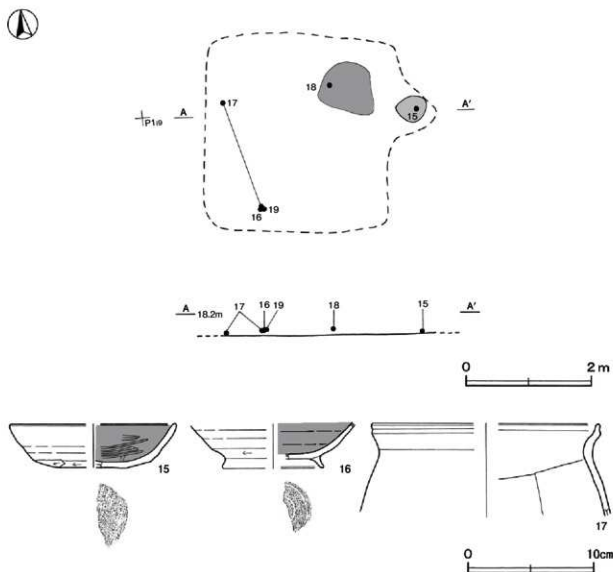
規模と形状 床面が露出した状態で確認されたため、竈と遺物の出土状況から、長軸3.1m、短軸3.0mの方形と推測した。主軸方向はN-95°-Eである。

床 ほほ平坦である。北東部に炭化物が広がって確認されている。

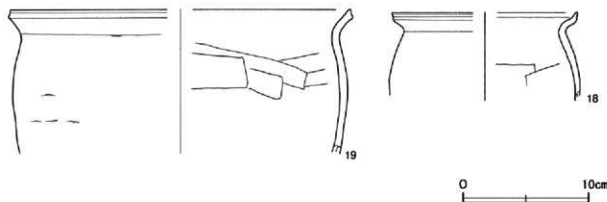
竈 東壁北寄りに付設されている。遺存状態が悪く、火床面が確認されただけである。確認された規模は、焚口部幅84cmで、壁外への掘り込みは62cmと推定される。

遺物出土状況 土師器片182点（椀類16、甕類161、瓶5）が出土している。15は竈内から出土している。16・19は南西部の覆土下層、18は北東部の覆土下層からそれぞれ出土しており、廃棄されたものと考えられる。17は北西部から南西部にかけての覆土下層から出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から10世紀前半と考えられる。



第14図 第6号住居跡・出土遺物実測図



第15図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表 (第14・15図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
15	土師器	坏	[131]	3.5	[5.6]	石英・赤色粒子	浅黄褐色	普通	ロタロナデ 内面ヘラ磨き 外面下層ヘラ削り 底部回転赤切り後ヘラ削り	竈内	30% PL7
16	土師器	高台付碗	-	(3.5)	[8.0]	茶目・長石・石英・赤色粒子	にぶい褐色	普通	ロタロナデ 外縁下層内面ヘラ削り 底部回転赤切り後高台削り付け	覆土下層	10%
17	土師器	甕	[18.0]	(7.3)	-	長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面横ナデ 体部外面ナデ内面ヘラナデ	覆土下層	10% PL8
18	土師器	甕	[14.8]	(6.9)	-	茶目・長石・石英	明赤褐色	普通	口縁部内外面横ナデ 体部外面ナデ内面ヘラナデ	覆土下層	10%
19	土師器	甕	[27.0]	(11.4)	-	茶目・長石・赤色粒子	にぶい褐色	普通	口縁部内外面横ナデ 体部外面ナデ輪郭削り 内面ヘラナデ	覆土下層	10% PL8

第7号住居跡 (第16図)

位置 調査区中央部のN2b5区で、標高17.5mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 長軸2.6m、短軸2.5mの方形で、主軸方向はN-98°-Eである。壁高は15～19cmで、壁は直立きみに立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。竈前面に炭化物が広がって確認されている。

竈 東壁南寄りに付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで134cm、焚口部幅46cmである。袖部は確認できなかった。火床部は床面を浅く皿状に掘りくぼめ、火床面及び内壁は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ98cm掘り込まれて、緩やかに外傾して立ち上がり、火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- | | |
|------------------------|------------------------------|
| 1 にぶい赤褐色 焼土粒子中量、粘土粒子少量 | 3 灰黄褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化物少量 |
| 2 灰黄褐色 粘土粒子多量、焼土粒子微量 | 4 にぶい赤褐色 焼土粒子多量、炭化物少量、粘土粒子微量 |

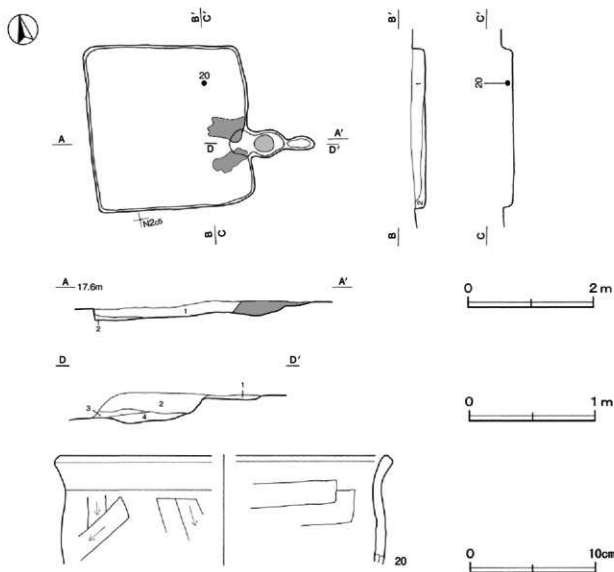
覆土 2層に分けられる。粘土粒子が層内にほぼ均一に堆積している状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-----------------------|--------------------|
| 1 にぶい黄褐色 粘土粒子中量、炭化物微量 | 2 濁灰色 粘土粒子多量、炭化物少量 |
|-----------------------|--------------------|

遺物出土状況 土師器片18点(坏10、甕類8)が出土している。20は北東部の覆土下層から出土している。ほとんどが細片である。

所見 時期は、出土土器が少ないが、出土した土師器片から10世紀前半と考えられる。



第16図 第7号住居跡・出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表（第16図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
20	土師器	甕	[26.2]	(8.7)	-	灰母・長石・石英	にぶい青黒	普通	口縁部内外面横ナデ 体部外面ヘラ削り内面ヘラナデ	竈土下層	10% PLS

第8号住居跡（第17図）

位置 調査区中央部のN2c5区で、標高17.5mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 床面が削平された状態で竈だけが確認されたため、規模及び形状については不明である。主軸方向はN-3°-Eと推定される。

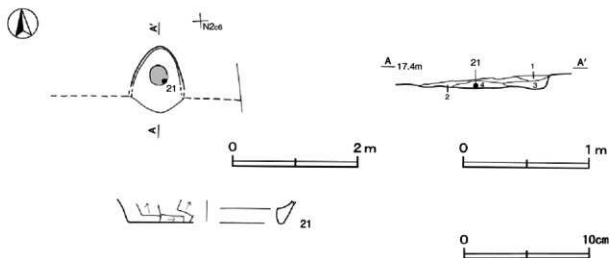
竈 北壁に付設されていたと推定される。遺存状態が悪く、確認された規模は、焚口部から煙道部まで104cm、焚口部幅84cmと推定される。火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は直立きみに立ち上がり、壁外への掘り込みは79cmと推定される。

甕土層解説

- 1 灰黄褐色 粘土粒子多量、焼土粒子微量
 2 褐灰色 粘土粒子多量、焼土ブロック少量
 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量、粘土粒子少量
 4 濃い赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子・粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片8点(坏4、寒類3、瓶か1)が出土している。21は甕の火床面付近から出土している。

所見 時期は、出土土器が細片で細かい時期区分はできないが、出土した土師器片や第4号住居跡と主軸方向がほぼ同じであることから、平安時代と推定される。



第17図 第8号住居跡・出土遺物実測図

第8号住居跡出土遺物観察表 (第17図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
21	土師器	瓶か	-	(18)	[124]	赤・黒・白 灰・赤・黄粘土	明赤褐	普通	体部外面へラ削り 単孔式カ	甕覆土下層	10%

第9号住居跡 (第18図)

位置 調査区中央部のN214区で、標高17.5mの平坦な低地上に位置している。

重複関係 北西部を第3号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.0m、短軸2.9mの方形で、主軸方向はN-118°-Eである。壁高は3cmで、壁は外傾して立ち上がっていたと推定される。

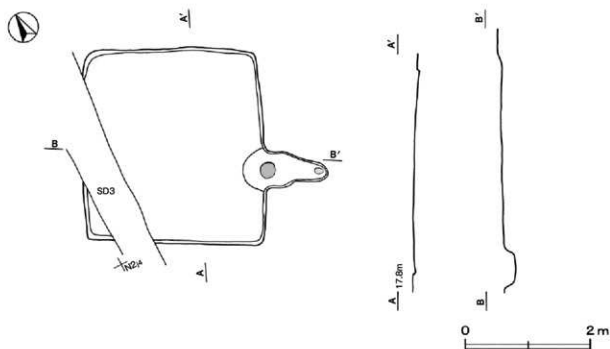
床 はほぼ平坦である。

竈 東壁南寄りに付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで134cm、焚口部幅91cmである。袖部は確認できなかった。火床面及び内壁は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ104cm掘り込まれて、外傾して立ち上がっていたと推定され、焼土が広がっている。

覆土 極めて薄いため堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片20点(高台付碗1、寒類19)が出土している。すべて細片であるため図示できなかった。

所見 時期は、出土土器が細片で細かい時期区分はできないが、出土した土師器片や住居跡の形態等から平安時代と推定される。



第18図 第9号住居跡実測図

第10号住居跡 (第19図)

位置 調査区中央部のO2a3区で、標高17.5mの平坦な低地上に位置している。

重複関係 第3号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸25m、短軸22mの長方形で、主軸方向はN-121°-Eである。壁高は20~25cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦である。

竈 東壁中央部やや南寄りに付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで92cm、焚口部幅81cmである。抽部は確認できなかった。火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ68cm掘り込まれて、外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|--------------------------|------------------------------|
| 1 灰黄褐色 粘土粒子多量、焼土ブロック微量 | 3 灰黄褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック少量 |
| 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化物・粘土粒子少量 | 4 暗赤褐色 焼土ブロック中量、粘土粒子少量、炭化物微量 |

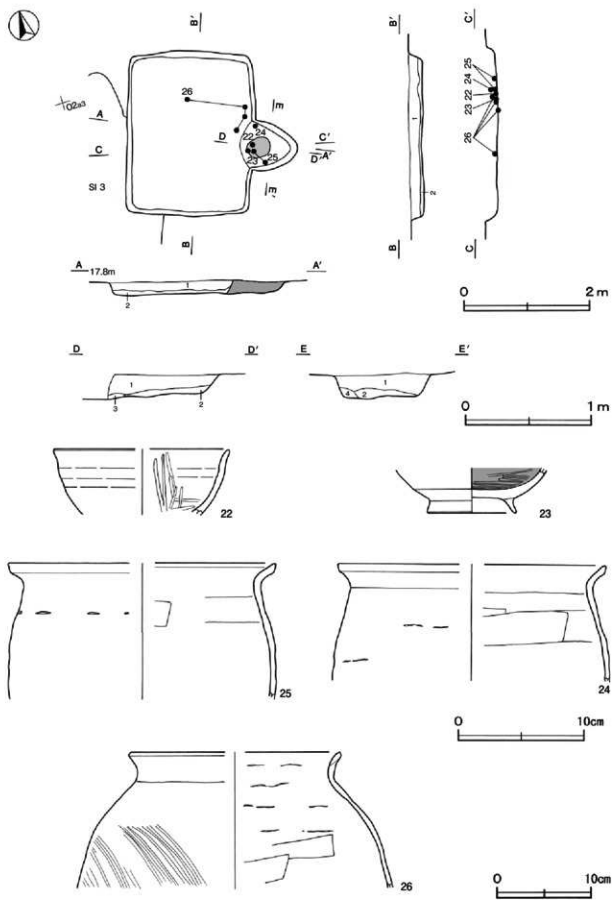
覆土 2層に分けられる。粘土粒子が層内にほぼ均一に堆積している状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|--------------------------|------------------------|
| 1 灰黄褐色 粘土粒子多量、炭化物・焼土粒子微量 | 2 灰黄褐色 粘土粒子多量、焼土ブロック微量 |
|--------------------------|------------------------|

遺物出土状況 土師器片115点(椀類18、甕類97)が竈を中心に出土している。22・23は竈の火床面からそれぞれ出土しており、遺棄されたものと考えられる。24は竈の覆土中層、25は竈の覆土下層から出土している。26は中央部から竈前にかけての覆土下層からそれぞれ出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、重複関係と出土土器から10世紀後半と考えられる。



第19图 第10号住居跡・出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表(第19図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
22	土師器	碗	[137]	(5.2)	-	雲母	にぶい褐色	普通	ロクロナデ 内面へう磨き	竈火床面	10%
23	土師器	高台付碗	-	(3.6)	[7.3]	雲母・石英・赤色粘土	にぶい褐色	普通	ロクロナデ 内面へう磨き ヘラ切り後高台取り付け	竈部回転	10%
24	土師器	甕	[214]	(9.2)	-	雲母・長石・石英	にぶい褐色	普通	口縁部内外面ナデ 輪削直 内面へうナデ	竈部内外面ナデ	10% PLS
25	土師器	甕	[214]	(10.8)	-	雲母・長石・石英・赤色粘土	にぶい褐色	普通	口縁部内外面ナデ 輪削直 内面へうナデ	体部外面ナデ	10%
26	土師器	甕	[222]	(14.4)	-	雲母・長石・石英・赤色粘土	明赤褐色	普通	口縁部内外面ナデ 削い磨き 内面輪削直	体部外面ナデ へうナデ	5% PLS

表4 平安時代堅穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設			覆土	出土遺物	時代	備考 新旧関係(旧→新)
								土間	土間	土間				
1	P 1c0	N-100°-E	長方形	3.7×3.2	15	平坦	-	-	-	覆土1	-	自然土師器片、須恵器片	10世紀後半	
2	P 1a0	N-100°-E	長方形	4.1×3.4	15	平坦	-	-	-	覆土1	-	自然土師器片	10世紀後半	本跡→SD5
3	O 2a3	N-22°-E	長方形	2.8×2.5	40	平坦	-	-	-	覆土1	-	自然土師器片	9世紀後半	本跡→SI10
4	N 2i3	N-10°-E	方形	2.9×2.8	12	平坦	-	-	-	覆土1	-	自然土師器片、須恵器片	平安時代	
5	N 2j3	N-100°-E	長方形	3.0×2.4	4	平坦	-	-	-	覆土1	-	不明土師器片	10世紀後半	
6	P 1i9	N-65°-E	[方形]	[3.1]×[3.0]	-	平坦	-	-	-	覆土1	-	土師器片	10世紀前半	
7	N 2b5	N-88°-E	方形	2.6×2.5	15~19	平坦	-	-	-	覆土1	-	自然土師器片	10世紀前半	
8	N 2c5	[N-3°-E]	-	-	-	-	-	-	-	覆土1	-	土師器片	平安時代	
9	N 2i4	N-108°-E	方形	3.0×2.9	3	平坦	-	-	-	覆土1	-	不明土師器片	平安時代	本跡→SD3
10	O 2a3	N-121°-E	長方形	2.5×2.2	20~25	平坦	-	-	-	覆土1	-	自然土師器片	10世紀後半	SI3→本跡

3 中・近世の遺構と遺物

中世及び近世の溝跡各1条を確認した。以下、確認された遺構及び遺物について記述する。

第4号溝跡(第20図)

位置 調査区北部のJ 3c1~J 3h1区で、標高165mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 調査区域外に延びているため、全容は不明であるが、J 3g1区からはほぼ北方向(N-0°)に直線的に延び、J 3c1区で北東方向(N-20°-E)に緩やかな曲線で延びている。確認された長さは18.0mで、上幅1.20~1.44m、下幅0.32~0.48m、深さ42cmである。断面はU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。

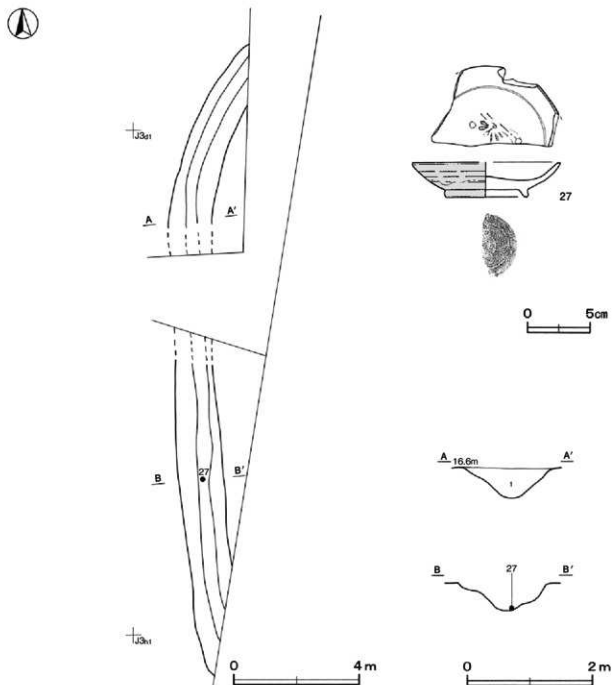
覆土 単一層である。粘土粒子が層内にほぼ均一に堆積している状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

1 にぶい黄褐色 粘土粒子中層

遺物出土状況 陶器片2点(Ⅲ)が出土している。その他、流れ込んだ縄文土器片3点も出土している。27は覆土下層から出土している。

所見 時期は、陶器の年代から近世と考えられる。斜面の高さの低い北東方向に延びていることから、用排水路として機能していたと推定される。



第20図 第4号溝跡・出土遺物実測図

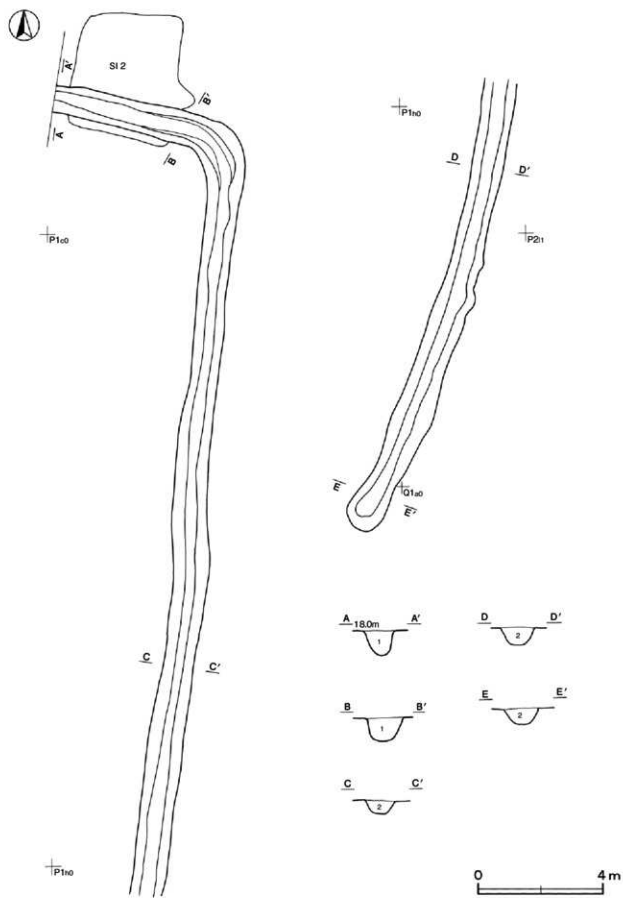
第4号溝跡出土遺物観察表 (第20図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・軸重	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
27	陶器	甌	[116]	2.8	[6.2]	精良・灰釉	灰白・灰白	良好	体部外面施軸 削り出し高台 トチン痕	覆土下層	10% PL7 掘り産

第5号溝跡 (第21・22図)

位置 調査区南部のP1a0～Q1a9区で、標高18mの平坦な低地上に位置している。

重複関係 第2号住居跡を掘り込んでいる。



第21图 第5号沟迹实测图

規模と形状 北部は調査区域外へ延びているため、全容は不明であるが、P 1 a0から東方向(N-100°-E)に直線的に延び、P 2 b1区で南方向(N-5°-E)にはほぼ直角に曲がり、直線的に延びている。確認された長さは41.4mで、上幅0.88～1.36m、下幅0.24～0.48m、深さ40～72cmである。断面は逆台形で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分かれる。粘土粒子が層内にはほぼ均一に堆積している状況から自然堆積と考えられる。

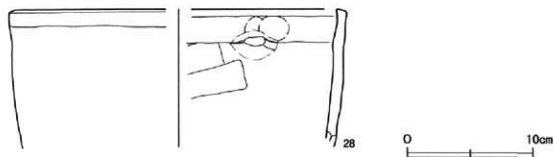
土層解説

1 濃い黄褐色 粘土粒子中量、炭化粒子微量

2 濃い黄褐色 粘土粒子多量

遺物出土状況 土師器片187点(坏17、高台付椀23、甕類147)、須恵器片5点(甕類)、土師質土器片3点(内耳鍋)、瓦質土器片1点(甕)、陶器片8点が出土している。28は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器がいずれも細片であるが、重複関係や土師質土器等が出土していることから中世と考えられる。性格は不明である。



第22図 第5号溝跡出土遺物実測図

第5号溝跡出土遺物観察表(第22図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
28	土師質	内耳鍋	[27.6]	(11.0)	-	茶母・長石・石英	濃い赤黒	普通	口辺部内外面種子穴、器淵部、内耳底部	体部内面ヘラテ	覆土中 10%

表5 中・近世の溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模			断面形	覆土	出土遺物	備考	
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)					深さ(cm)
4	J 3 c1 ~ J 3 h1	N-0° N-20°-E	弧状	(18.0)	1.20 ~ 1.44	0.32 ~ 0.48	42	U字状	自然	陶器片、縄文土器片	近世
5	P 1 a0 ~ Q 1 a0	N-100° N-5°-E	L字状	(41.4)	0.88 ~ 1.36	0.24 ~ 0.48	40 ~ 72	逆台形	自然	土師器片、須恵器片、土師質土器片、瓦質土器片、陶器片	SI2 → 本跡 中世

4 その他の遺構と遺物

時期不明の土坑2基、溝跡3条、井戸跡2基を確認した。以下、確認された遺構及び遺物について記述する。

(1) 井戸跡

第1号井戸跡(第23図)

位置 調査区南部のQ 1 d9区で、標高17.5mの平坦な低地上に位置している。

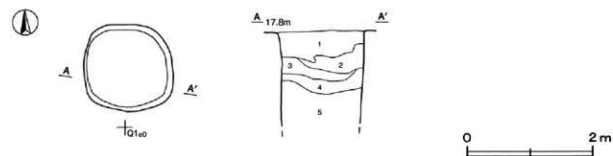
規模と形状 長径1.4m、短径1.4mの隅丸方形で、長径方向はN-82°-Wである。確認面から円筒状に掘り込まれ、深さ約1.5mで、以下湧水のため確認することができなかった。

覆土 5層に分けられる。第4・5層は、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積と考えられるが、第1～3層は炭化物や焼土を含む人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-----------------------------|---------------------|
| 1 黒褐色 炭化物中量、焼土ブロック少量、粘土粒子微量 | 4 灰黄褐色 粘土粒子中量、炭化物微量 |
| 2 灰黄褐色 粘土粒子中量、炭化物・焼土粒子微量 | 5 褐色 粘土粒子多量 |
| 3 黒褐色 炭化物少量、焼土ブロック・粘土粒子微量 | |

所見 時期は、出土土器がないため不明である。自然に埋没した後、人為的に埋め戻されたものと考えられる。



第23図 第1号井戸跡実測図

第2号井戸跡 (第24図)

位置 調査区中央部のO2a4区で、標高17.5mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 長径1.1m、短径1.0mの円形である。確認面から円筒状に掘り込まれ、深さ0.9mで、以下湧水のため確認することができなかった。

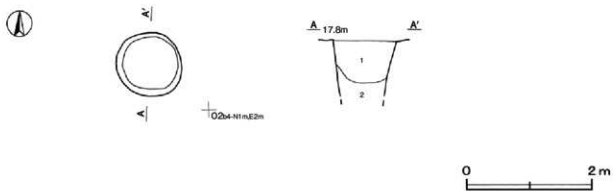
覆土 2層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|---------------|---------------|
| 1 灰黄褐色 粘土粒子中量 | 2 灰黄褐色 粘土粒子多量 |
|---------------|---------------|

遺物出土状況 土師器片4点(坏1、甕類3)が出土している。いずれも細片のため図示できなかった。いずれも埋没時の流れ込みと考えられる。

所見 時期は不明である。



第24図 第2号井戸跡実測図

表6 その他の井戸跡一覧表

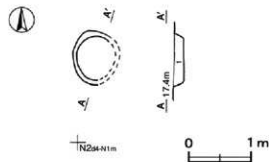
番号	位置	長径方向	平面形	規模		覆土	底面	壁面	出土遺物	備考
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
1	Q1d9	N-82°-W	隅丸方形	1.4 × 1.4	(150)	人為 自然	-	垂直	-	
2	O2a4	-	円形	1.1 × 1.0	(90)	自然	-	垂直	土師器片	

(2) 土坑

第1号土坑 (第25図)

位置 調査区中央部のN2c4区で、標高175mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 長径0.9m、短径0.7mの楕円形と推測され、長径方向はN-2°-Eである。深さ12cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。



覆土 単一層である。粘土粒子が層内にほぼ均一に堆積している状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

1 褐灰色、粘土粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量

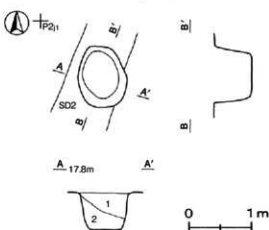
遺物出土状況 土師器片12点(坏1、甕類11)が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

所見 時期は不明である。

第25図 第1号土坑実測図

第2号土坑 (第26図)

位置 調査区南部のP2j1区で、標高175mの平坦な低地上に位置している。



重複関係 第2号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.0m、短径0.8mの楕円形で、長径方向はN-3°-Eである。深さ59cmで、底面は平坦である。壁はほぼ直立している。

覆土 2層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積と考えられる。

土層解説

1 灰黄褐色、粘土粒子中量
2 灰黄褐色、粘土粒子中量、炭化物微量

所見 時期は不明である。

第26図 第2号土坑実測図

表7 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		覆土	底面	壁面	出土遺物	備考
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
1	N2c4	N-2°-E	[楕円形]	0.9 × [0.7]	12	自然	平坦	外傾	土師器片	
2	P2j1	N-3°-E	楕円形	1.0 × 0.8	59	自然	平坦	直立	-	SD2→本跡

(3) 溝跡

第1号溝跡 (第27図)

位置 調査区南部のR1a8区で、標高17.5mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 調査区域外に延びているため、全容は不明である。南東方向(N-135°-E)に直線的に延び、確認された長さは4.5mで、上幅0.60～0.74m、下幅0.18～0.26m、深さ38～40cmである。断面はU字状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

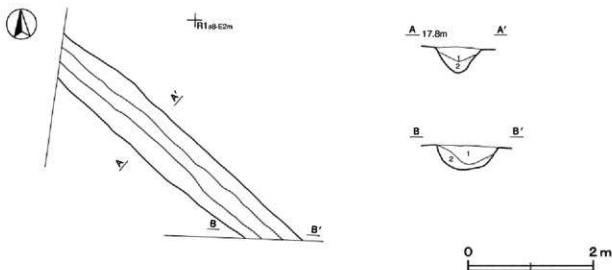
覆土 2層に分かれる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積と考えられる。

土層解説

1 褐灰色 粘土粒子多量、炭化物微量

2 褐色 粘土粒子多量

所見 時期及び性格は不明である。



第27図 第1号溝跡実測図

第2号溝跡 (第28図)

位置 調査区南部のO2j1区からQ2b1区で、標高17.5～18mの平坦な低地上に位置している。

重複関係 第2号土坑、第3号溝に掘り込まれている。

規模と形状 調査区域外に延びているため、全容は不明である。O2j1区から東方向(N-110°-E)に直線的に延び、P2a2区ではほぼ直角に曲がり南方向(N-10°-E)に直線的に延び、Q1b0区でさらに直角に曲がり東方向(N-120°-E)にクランク状に延びている。確認できた長さは56.0mで、上幅0.80～2.16m、下幅0.20～0.56m、深さ32～72cmである。断面はU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4層に分かれる。レンズ状に堆積した自然堆積と考えられる。

土層解説

1 灰黄褐色 粘土粒子多量、焼土ブロック・炭化物微量

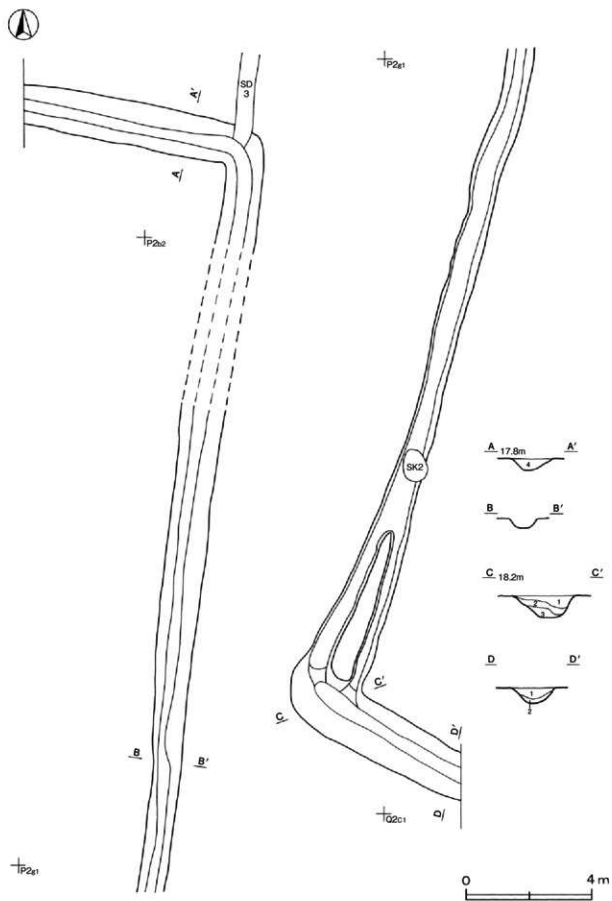
3 灰黄褐色 粘土粒子多量

2 灰黄褐色 粘土粒子多量、焼土粒子・炭化物微量

4 褐色 粘土粒子多量

遺物出土状況 土師器片49点(坏17、寛類32)、須惠器片8点(坏5、寛類3)が出土しているが、埋没時の流れ込みと考えられる。いずれも細片のため、図示できなかった。

所見 時期及び性格は不明である。



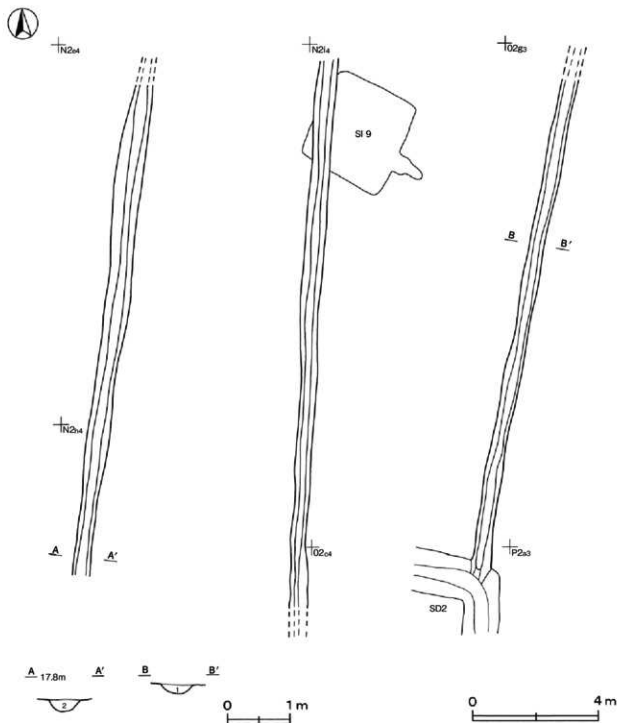
第28图 第2号沟迹实测图

第3号溝跡 (第29図)

位置 調査区中央部 (N2e4区) から南部 (P2a2区) で、標高17.5mの平坦な低地上に位置している。

重複関係 第9号住居跡、第2号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北方向 (N-10°-E) に直線的に延び、P2a2区で第2号溝跡を掘り込んでいる。北部は斜面地により削平されているため、全容は不明である。確認できた長さは48.0mで、上幅0.42~0.88m、下幅0.15~0.40m、深さ15~20cmである。断面はU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。



第29図 第3号溝跡実測図

覆土 2層に分かれる。粘土粒子が層内にはほぼ均一に堆積している状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

1 濃い黄褐色 粘土粒子多量、炭化粒子微量 2 灰黄褐色 粘土粒子多量

遺物出土状況 土師器片5点(坏1、堿類4)、須恵器片1点(堿類)が出土しているが、埋没時の流れ込みと考えられる。いずれも細片のため、図示できるものはなかった。

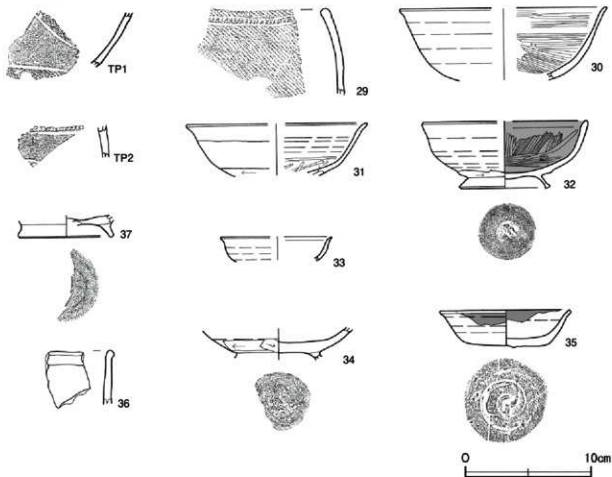
所見 時期及び性格は不明である。

表8 その他の溝跡一覧表

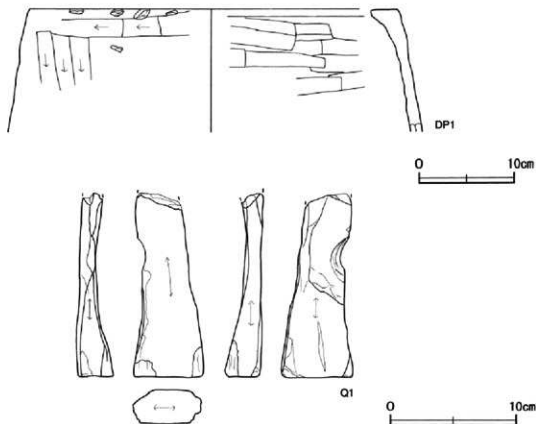
番号	位置	方向	形状	規模				断面	覆土	出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)				
1	R1a8	N-135-E	直線状	(4.5)	0.60-0.74	0.18-0.26	38-40	U字状	自然	-	新旧関係(旧→新)
2	O2j1-Q2b1	N-110-E N-105-E N-120-E	クランク状	(56.0)	0.80-2.16	0.20-0.56	32-72	U字状	自然	土師器片、須恵器片	本跡→SK2・SD3
3	N2e4-P2a2	N-10'-E	直線状	(48.0)	0.42-0.88	0.15-0.40	15-30	U字状	自然	土師器片、須恵器片	SB9・SD2→本跡

(4) 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物について、特色あるものを抽出し、実測図(第30・31図)及び遺物観察表で記載する。



第30図 遺構外出土遺物実測図(1)



第31図 遺構外出土土物実測図(2)

遺構外出土土物観察表 (第30・31図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP 1	縄文土器	深鉢	-	(4.4)	-	雲母・石英	橙	普通	沈堀区画内磨削による無文帯 体部外周部は磨文施文	表土	
TP 2	縄文土器	深鉢	-	(2.5)	-	雲母・石英	橙	普通	沈堀区画内磨削による無文帯 押圧文	表土	
29	縄文土器	深鉢	-	(6.8)	-	雲母・長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口辺部外周部沈堀区画内に押圧文 体部外面は磨文施文	表土	5% PL8
30	土師器	碗	[166]	(5.7)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き	N 214	10%
31	土師器	碗	[143]	(4.1)	-	雲母・長石・赤色粒子・黒色粒子	にぶい黄	普通	ロクロナデ 体部外面下縁回転ヘラ削り、内面ヘラ磨き	N 214	40% PL7
32	土師器	高台付碗	[130]	5.3	7.0	雲母・長石	にぶい黄褐	普通	ロクロナデ 体部外面下縁ヘラ削り、内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ削り後高台貼り付け	表土	60% PL7
33	土師器	碗	[88]	(1.9)	-	雲母・赤色粒子	にぶい黄	普通	ロクロナデ	表土	5%
34	土師器	高台付碗	-	(2.7)	-	雲母・長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 体部外面下縁ヘラ削り 底部回転ヘラ削り後高台貼り付け	N 214	40% PL7
35	土師器	小皿	10.5	2.9	6.4	長石・石英	橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ削り	表土	100% PL7
36	土師器	鉢	-	(4.3)	-	雲母・石英	褐灰	普通	口縁部内外面順ナデ	表土	5%
37	須恵器	高台付杯	-	(1.7)	[7.5]	雲母・石英	灰白	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け	N 213	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
DP 1	土製品	置き産	[38.4]	(13.1)	-	雲母・長石・石英	赤褐	普通	指口部内外面ナデ 体部外面ヘラ削り内面ヘラナデ	表土	5% PL8

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴		出土位置	備考
Q 1	砥石	(14.5)	5.8	2.7	(216)	凝灰岩	砥面5面	断面長方形 一部欠損	表土	PL8

第4節 II区の遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

調査II A区北部の表土から約20cm下の平安時代の遺構確認面とはほぼ同じ高さの黄褐色土層中から、縄文時代の遺物を多く含む周溝状遺構1基が確認された。この黄褐色土層は南へ傾斜しており、当時この付近は丘陵状になっていたものと推定される。II A区の南部は、遺構確認面が2面あり、平安時代の遺構が確認された面の50～100cm下の黒褐色土層中からは、縄文土器を含む遺物包含層が2か所、黄褐色土層中からは、土坑39基、屋外炉2基、ピット群2か所が確認された。しかし、遺物が出土した土坑は少なく、時期決定が困難なものもある。そこで、土坑については、残存状況が良いものやこの時代の特徴を表していると思われるものについては解説を加え、それ以外については、当遺跡から弥生時代、古墳時代の遺物が出土していないことと、平安時代の遺構確認面からさらに下層の面で確認されていることから縄文時代の土坑と捉え、実測図と一覧表で掲載することにする。

(1) 周溝状遺構

第1号周溝状遺構 (SI 62) (第32～36図)

位置 調査II A区北部のE 5 e8区、標高17.8mの南へ緩やかに傾斜する低地上に位置している。

確認状況 楕円形のプランが確認され、堅穴住居跡として調査を進めたが、わずかに掘り込んだところで周溝が確認された。また、柱穴や炉等は確認できなかった。

重複関係 東側を第15号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長径6.4m、短径5.1mの不整楕円形で、長径方向はN-70°-Eである。周溝は、上幅50～90cm、下幅25～50cm、深さ5～15cmで、西側が幅80cmほど途切れ、全周はしていない。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。

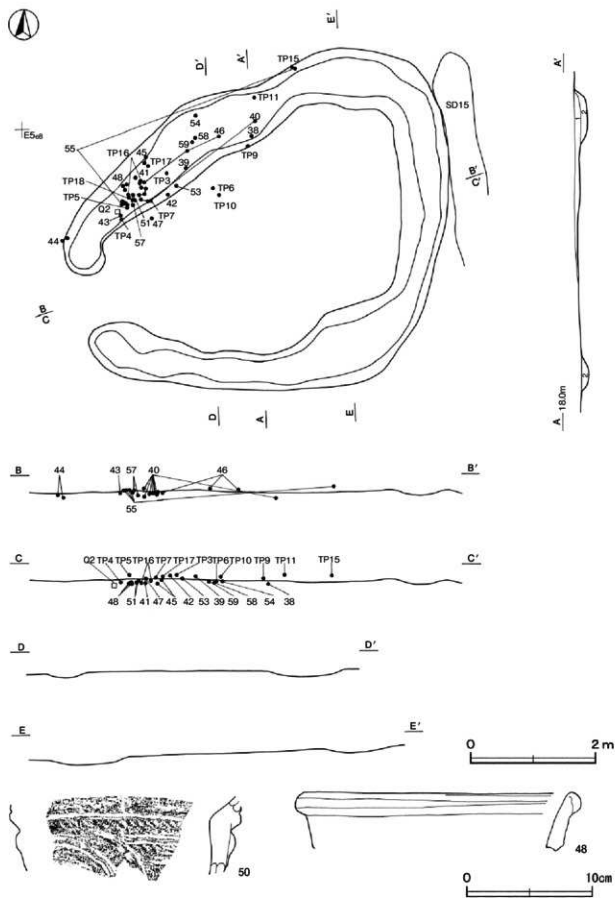
覆土 2層に分けられる。層厚が薄く堆積状況は不明である。

土層解説

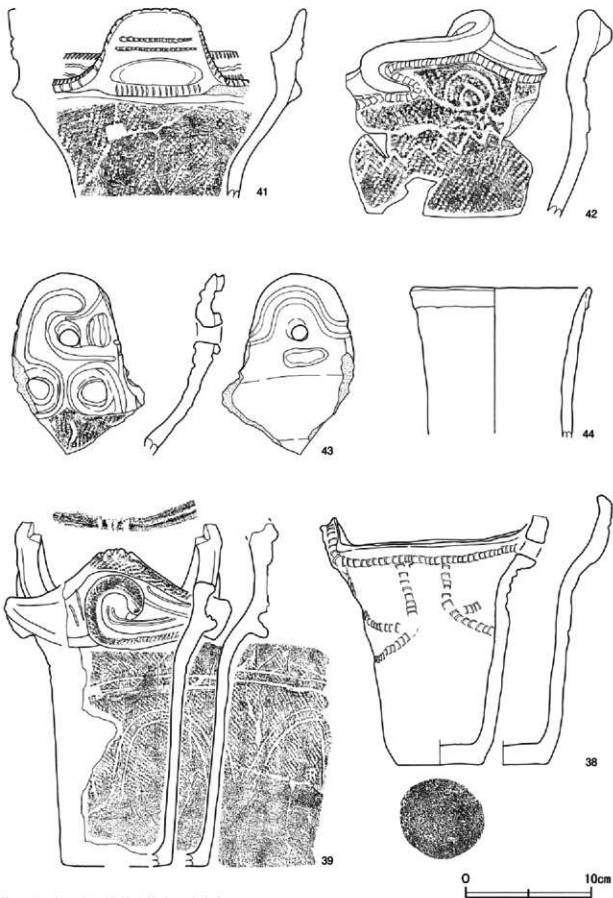
- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・黄褐色粘土粒子微量 2 濃い黄褐色 炭化粒子・白色粘土粒子・砂粒微量

遺物出土状況 縄文土器片723点(深鉢702、浅鉢21)、石器1点(剥片)が出土している。また、混入による土師器片8点、磁器片3点、細礫27点も出土している。北西部の周溝上や周溝内を中心に遺物が重なるように出土しており、投棄された様相を示している。38は周溝の覆土下層から横位で出土している。39・42・58・TP11は周溝の上面から出土しており、40・57は周溝の覆土上層から下層にかけて出土した破片が接合したものである。41・45・51・Q 2は、周溝の覆土中層から出土し、43・46・53・TP 9は、周溝の覆土上層から出土している。また、49・50・52・TP 8・TP12・TP13は、覆土中から出土している。47・TP 6・TP10は、周溝の外から出土したものである。

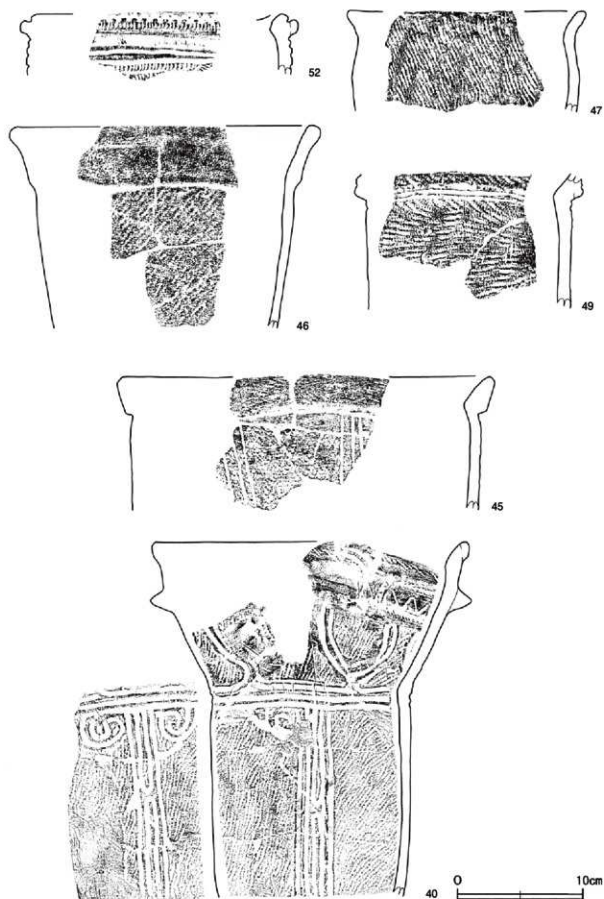
所見 炉や柱穴が確認されなかったため、形状から周溝状遺構として捉えた。時期は、出土土器から中期中葉以前と考えられる。



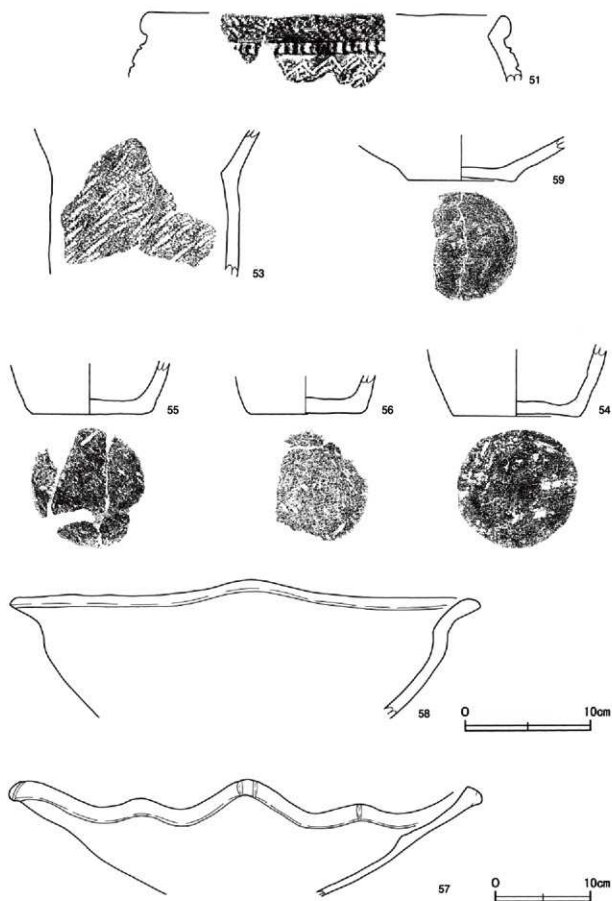
第32图 第1号周溝状遺構・出土遺物実測図



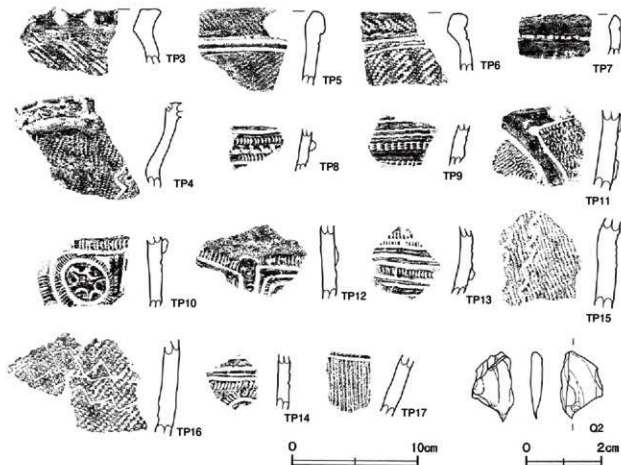
第33图 第1号周沟状遗物出土遗物实测图(1)



第34图 第1号周溝状遺構出土遺物実測図(2)



第35图 第1号周潭状遺構出土遺物実測図(3)



第36図 第1号周溝状遺溝出土遺物実測図(4)

第1号周溝状遺溝出土遺物観察表(第32～36図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
38	織文土器	深鉢	18(0)	21.3	6.8	紫母・長石・石英・赤色粘土	橙	普通	口孔を有する把手2つつ 口辺部及び胴部上半を角筒文で文様施す	周溝内下層	90% PL34
39	織文土器	深鉢	20(3)	27.2	8.8	紫母・長石・石英	明黄橙	普通	口辺部を角筒文で文様施す 胴部は2条1組の半円状の無彫飾文 肩又は下の無彫飾文	周溝上面	40% PL34
40	織文土器	深鉢	24(4)	28.2	-	紫母・長石・石英	にぶい橙	普通	口辺部を角筒文で文様施す 胴部は2条1組の半円状の無彫飾文 肩又は下の無彫飾文	周溝内上層 一下層	30% PL34
41	織文土器	深鉢	23(7)	15.1	-	紫母・長石・石英	暗褐	普通	口辺部を角筒文で文様施す 胴部は2条1組の半円状の無彫飾文 肩又は下の無彫飾文	周溝内下層	10% PL55
42	織文土器	深鉢	-	16.5	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口辺部を角筒文で文様施す 胴部は2条1組の半円状の無彫飾文 肩又は下の無彫飾文	周溝上面	10% PL56
43	織文土器	深鉢	-	15.1	-	紫母・長石・石英	赤褐	普通	口辺部を角筒文で文様施す 胴部は2条1組の半円状の無彫飾文 肩又は下の無彫飾文	周溝内上層	40% PL36
44	織文土器	深鉢	14(1)	11.9	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口辺部に隆帯貼付 無文	周溝外層	10%
45	織文土器	深鉢	29(0)	10.5	-	紫母・長石・石英・赤色粘土	にぶい橙	普通	厚肉した口唇部に結節状隆帯が沿う 胴部は3条1組とする筋節状無文	周溝内中層	20%
46	織文土器	深鉢	23(8)	16.1	-	紫母・長石・石英・赤色粘土	明黄橙	普通	口唇部を角筒文で文様施す 胴部は2条1組の半円状の無彫飾文	周溝内上層	10%
47	織文土器	深鉢	18(6)	8(0)	-	紫母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	口唇部直下にLの無彫飾文施す	周溝外層	10%
48	織文土器	深鉢	21(6)	4(6)	-	紫母・長石・石英	にぶい褐	普通	口唇部隆帯貼付 口辺部無文	周溝内中層	10%
49	織文土器	深鉢	-	10(6)	-	紫母・長石・石英	褐	普通	口唇部に2条1組の花籠が沿う隆帯貼付 肩又は長石の無彫飾文	腹土中	10%
50	織文土器	深鉢	-	6(2)	-	紫母・長石・石英・赤色粘土	にぶい褐	普通	口唇部に2条1組の花籠が沿う隆帯貼付 肩又は長石の無彫飾文	腹土中	5%
51	織文土器	深鉢	28(8)	5(3)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	厚肉した口唇部に結節状隆帯が沿う 口辺部に筋節状の隆帯が1条めぐめる	周溝内中層	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
52	縄文土器	深鉢	[19.0]	(4.8)	-	雲母・長石・石英	黒褐色	普通	口唇直下に隆帯を有 突出した隆帯に斜交文及びキザミが施される 隆帯に沿って2条1組の沈線がみられる	覆土中	10%
53	縄文土器	深鉢	-	(11.6)	-	雲母・長石・石英	にぶい褐色	普通	R.Lの単節縄文施文	周溝内上層	10%
54	縄文土器	深鉢	-	(5.7)	10.0	長石・石英	明赤褐色	普通	胴部下端無文	周溝内上層	10%
55	縄文土器	深鉢	-	(4.0)	9.0	雲母・長石・石英	にぶい褐色	普通	胴部下端無文	周溝内上層	10%
56	縄文土器	深鉢	-	(3.0)	9.0	雲母・長石・石英	にぶい褐色	普通	胴部下端無文	覆土中	10%
57	縄文土器	浅鉢	[50.0]	(11.9)	-	雲母・長石・石英	にぶい褐色	普通	口唇部に隆帯を伴 波頂部にキザミ 内面キザミ	周溝内上層 下層	10% 10%
58	縄文土器	浅鉢	[37.4]	(11.0)	-	雲母・長石・石英・赤色粘土	明赤褐色	普通	液状口縁 無文	周溝内上層	10%
59	縄文土器	浅鉢	-	(3.6)	8.4	雲母・長石・石英	橙	普通	胴部下端無文	周溝内上層	5%
TP3	縄文土器	深鉢	-	(4.3)	-	雲母・長石・石英	にぶい褐色	普通	膨厚した口唇部に指頭押止 R.Lの単節縄文施文	周溝内上層	
TP4	縄文土器	深鉢	-	(6.7)	-	雲母・長石・石英	にぶい褐色	普通	口唇部沈線及び円形刺交文施文 胴部液状沈線が施す 無文はR.Lの単節縄文	周溝内中層	PL56
TP5	縄文土器	深鉢	-	(5.9)	-	雲母・長石・石英	にぶい褐色	普通	膨厚した口唇部に2条の沈線が沿う 口唇部にR.Lの単節縄文を伴 胴部R.Lの単節縄文施文	周溝内上層	
TP6	縄文土器	深鉢	-	(4.5)	-	長石・石英	橙	普通	膨厚した口唇部に2条の沈線が沿う 口唇部にR.Lの単節縄文を伴 無文はR.Lの単節縄文	周溝内外面	PL56
TP7	縄文土器	深鉢	-	(3.0)	-	雲母・長石・石英	赤褐色	普通	口辺部に1条の結節沈線文施文	周溝内上層	
TP8	縄文土器	深鉢	-	(3.3)	-	雲母・長石・石英	橙	普通	キザミを有する隆帯を伴 隆帯下端を刺交文・沈線が沿う	覆土中	
TP9	縄文土器	深鉢	-	(3.2)	-	雲母・長石・赤色粘土	にぶい褐色	普通	結節沈線文が沿う隆帯及び液状沈線文により沈線が沿う	周溝内上層	
TP10	縄文土器	深鉢	-	(5.8)	-	雲母・長石・石英	灰褐色	普通	沈線が沿うキザミを有する隆帯で口辺部区画 区画内に沈線文・爪形文施文	周溝内外面	
TP11	縄文土器	深鉢	-	(6.4)	-	雲母・長石・石英	にぶい褐色	普通	沈線が沿う隆帯で口辺部区画 区画内刺交文	周溝内上層	PL56
TP12	縄文土器	深鉢	-	(5.1)	-	雲母・長石・石英	暗褐色	普通	沈線が沿うキザミを有する隆帯による区画文	覆土中	PL56
TP13	縄文土器	深鉢	-	(5.4)	-	雲母・長石・石英	灰褐色	普通	キザミを有する隆帯と隆帯に沿った沈線で文様抽出	覆土中	
TP14	縄文土器	深鉢	-	(4.8)	-	雲母・長石・石英	にぶい褐色	普通	2条の沈線に沿う爪形文で加飾	覆土中	
TP15	縄文土器	深鉢	-	(7.1)	-	雲母・長石・石英	灰黄褐色	普通	胴部に2条の結節刺交文 施文はLの無節縄文	周溝内上層	
TP16	縄文土器	深鉢	-	(7.7)	-	雲母・長石・石英	灰黄褐色	普通	胴部に2条1組の刺交文の沈線がみられる 施文はR.Lの単節縄文	周溝内中間	
TP17	縄文土器	深鉢	-	(4.9)	-	長石・石英	灰褐色	普通	胴部縦位の条刺交文	周溝内上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特 徴	出土位置	備考
Q 2	割片	1.8	1.1	0.3	0.76	黒曜石	割片剥離時に形成された砕片	周溝内中間	

(2) 土坑

第180号土坑 (第37図)

位置 調査ⅡA区北部のI 5 d3区で、標高16.4mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 長径3.4m、短径3.0mの楕円形で、長径方向はN-51°-Eである。深さ40cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

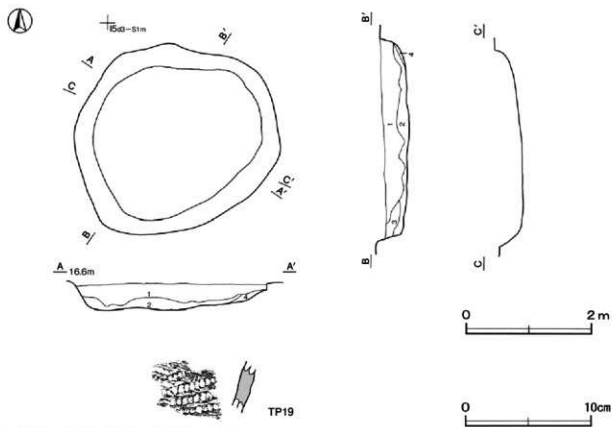
覆土 4層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|------------------|---|-----|-----------|
| 1 | 黒褐色 | 炭化粒子中量、黄褐色粘土粒子少量 | 3 | 暗褐色 | 黄褐色粘土粒子少量 |
| 2 | 暗褐色 | 黄褐色粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 4 | 暗褐色 | 黄褐色粘土粒子微量 |

遺物出土状況 縄文土器片4点(深鉢)、細礫1点が出土している。縄文土器片は覆土中層から下層にかけて出土している。TP19は覆土中層から出土したものである。

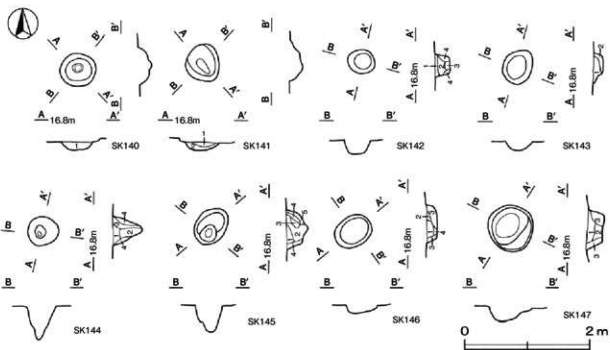
所見 時期は、出土土器から前期と考えられる。



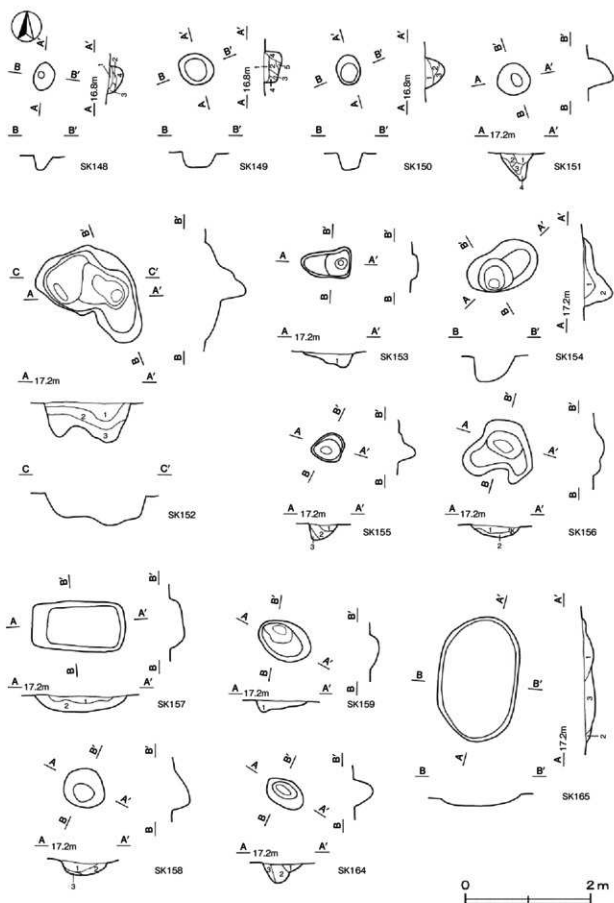
第37図 第180号土坑・出土遺物実測図

第180号土坑出土遺物観察表（第37図）

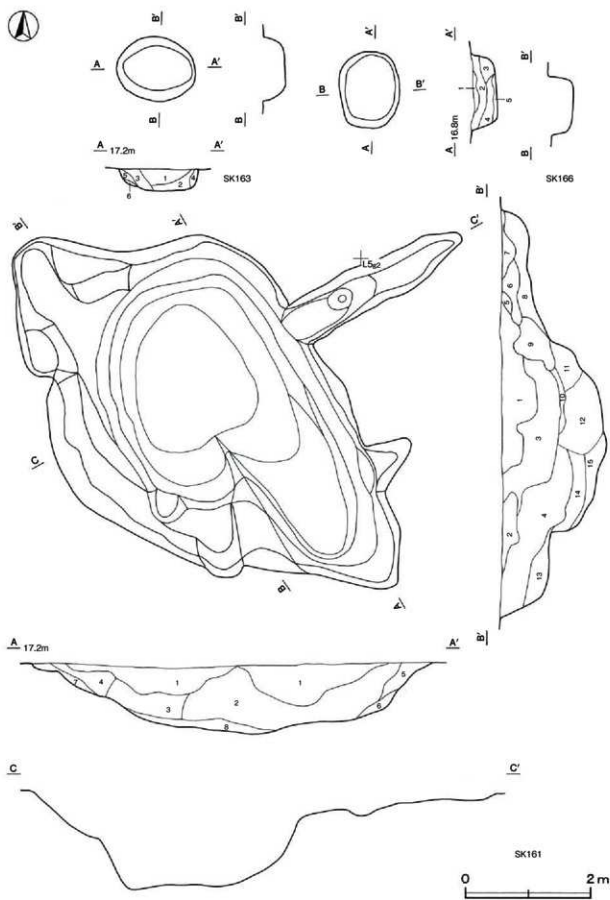
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP19	縄文土器	深鉢	-	(4.2)	-	長石・赤色砂子	に灰・黄褐色	普通	L Rの準筋縄文施文	覆土中層	PL36



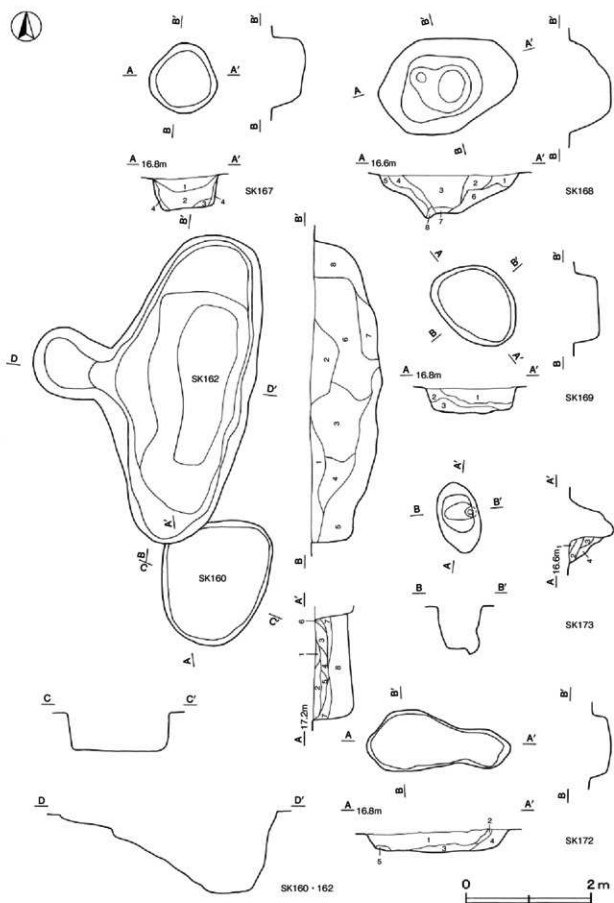
第38図 2次面（縄文時代～平安時代以前）の土坑実測図(1)



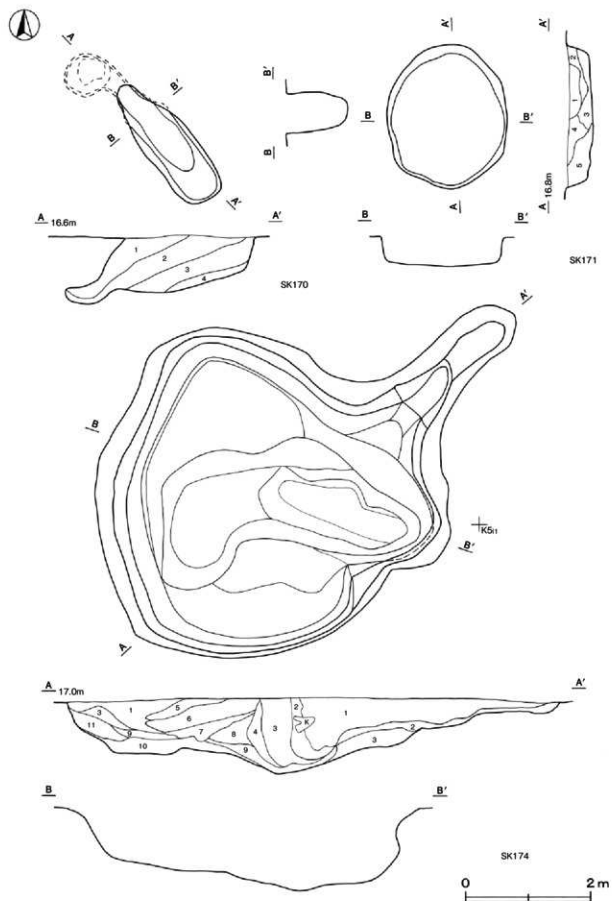
第39図 2次面（縄文時代～平安時代以前）の土坑実測図②



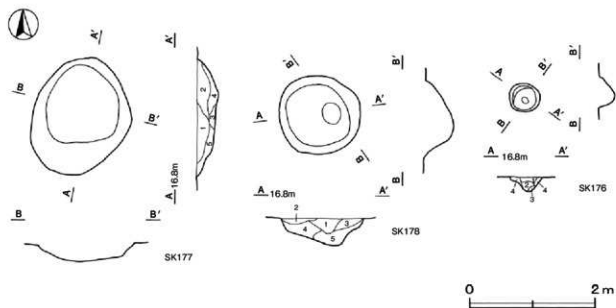
第40図 2次面（縄文時代～平安時代以前）の土坑実測図3)



第41図 2次面（縄文時代～平安時代以前）の土坑実測図4)



第42図 2次面（縄文時代～平安時代以前）の土坑実測図5)



第43図 2次面(縄文時代～平安時代以前)の土坑実測図6)

第140号土層解説

- 1 黒褐色 黄褐色粘土粒子・鉄分少量、炭化粒子微量

第141号土層解説

- 1 黒褐色 黄褐色粘土粒子・鉄分少量、炭化粒子微量
- 2 灰黄褐色 黄褐色粘土粒子中量、鉄分微量

第142号土層解説

- 1 黒褐色 黄褐色粘土粒子微量
- 2 褐色 黄褐色粘土ブロック少量、鉄分微量
- 3 褐色 黄褐色粘土粒子中量
- 4 褐色 黄褐色粘土粒子少量

第143号土層解説

- 1 黒褐色 炭化物・黄褐色粘土粒子微量
- 2 黒褐色 黄褐色粘土ブロック微量

第144号土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子・黄褐色粘土粒子・鉄分微量
- 2 黒褐色 黄褐色粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 黄褐色粘土ブロック少量
- 4 褐色 黄褐色粘土粒子中量

第145号土層解説

- 1 黒褐色 炭化物・黄褐色粘土粒子微量
- 2 黒褐色 黄褐色粘土ブロック中量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 黄褐色粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 4 褐色 黄褐色粘土粒子少量、鉄分微量
- 5 褐色 黄褐色粘土粒子中量

第146号土層解説

- 1 暗褐色 黄褐色粘土ブロック少量、炭化物微量
- 2 暗褐色 黄褐色粘土ブロック・炭化粒子微量
- 3 褐色 黄褐色粘土粒子中量
- 4 暗褐色 黄褐色粘土粒子中量

第147号土層解説

- 1 にぶい黄褐色 黄褐色粘土ブロック少量
- 2 褐色 黄褐色粘土ブロック少量
- 3 褐色 黄褐色粘土粒子少量

第148号土層解説

- 1 暗褐色 黄褐色粘土粒子微量
- 2 暗褐色 黄褐色粘土ブロック少量
- 3 暗褐色 黄褐色粘土粒子少量
- 4 褐色 黄褐色粘土粒子中量

第149号土層解説

- 1 褐色 黄褐色粘土粒子少量、鉄分微量
- 2 にぶい黄褐色 黄褐色粘土ブロック少量
- 3 にぶい黄褐色 黄褐色粘土粒子少量
- 4 にぶい黄褐色 黄褐色粘土粒子中量
- 5 褐色 黄褐色粘土粒子・鉄分微量

第150号土層解説

- 1 にぶい黄褐色 黄褐色粘土ブロック少量、炭化物微量
- 2 褐色 黄褐色粘土粒子少量
- 3 褐色 黄褐色粘土ブロック微量

第151号土層解説

- 1 にぶい黄褐色 黄褐色粘土ブロック中量
- 2 黄褐色 黄褐色粘土ブロック多量
- 3 黄褐色 黄褐色粘土ブロック中量
- 4 褐色 黄褐色粘土粒子多量

第152号土層解説

- 1 灰黄褐色 黄褐色粘土ブロック少量
- 2 にぶい黄褐色 黄褐色粘土ブロック中量
- 3 黄褐色 黄褐色粘土ブロック中量

第153号土層解説

- 1 にぶい黄褐色 黄褐色粘土ブロック少量

第154号土壌層解説

- 暗 褐色 黄褐色粘土ブロック少量
- にぶい黄褐色 黄褐色粘土粒子少量

第155号土壌層解説

- にぶい黄褐色 黄褐色粘土粒子少量、炭化物微量
- 黒 褐色 黄褐色粘土ブロック少量
- 暗 褐色 黄褐色粘土ブロック中量

第156号土壌層解説

- 黒 褐色 黄褐色粘土ブロック少量、炭化物微量
- 黄 褐色 黄褐色粘土ブロック中量

第157号土壌層解説

- 暗 褐色 黄褐色粘土ブロック少量
- 暗 褐色 黄褐色粘土ブロック中量

第158号土壌層解説

- 黄 褐色 黄褐色粘土ブロック少量
- 暗 褐色 黄褐色粘土ブロック中量
- 暗 褐色 黄褐色粘土粒子中量

第159号土壌層解説

- 黒 褐色 黄褐色粘土ブロック少量

第160号土壌層解説

- 黒 褐色 焼土ブロック、炭化物中量、黄褐色粘土粒子少量
- 黒 褐色 炭化物中量、焼土ブロック、黄褐色粘土粒子少量
- 暗 褐色 黄褐色粘土ブロック中量、焼土ブロック、炭化物少量
- 暗 褐色 黄褐色粘土粒子少量
- 暗 褐色 黄褐色粘土ブロック少量
- 暗 褐色 黄褐色粘土ブロック中量
- 黒 褐色 黄褐色粘土粒子少量
- 暗 褐色 黄褐色粘土ブロック微量

第161号土壌層解説

- 黒 褐色 黄褐色粘土ブロック、鉄分少量
- にぶい黄褐色 黄褐色粘土ブロック中量、鉄分少量
- 黒 褐色 黄褐色粘土ブロック少量、鉄分微量
- 黒 褐色 鉄分少量、黄褐色粘土粒子微量
- 暗 褐色 黄褐色粘土ブロック少量
- 明黄褐色 黄褐色粘土ブロック中量
- 暗 褐色 黄褐色粘土ブロック中量
- にぶい黄褐色 黄褐色粘土ブロック中量
- 暗 褐色 黄褐色粘土粒子中量
- 暗 褐色 黄褐色粘土ブロック中量
- 暗 褐色 黄褐色粘土粒子中量
- 黒 褐色 黄褐色粘土ブロック少量、鉄分少量
- 暗 褐色 黄褐色粘土粒子少量
- 暗 褐色 黄褐色粘土ブロック少量
- 黄 褐色 黄褐色粘土ブロック少量

第162号土壌層解説

- 暗 褐色 黄褐色粘土ブロック中量
- にぶい黄褐色 黄褐色粘土ブロック中量
- にぶい黄褐色 黄褐色粘土ブロック少量
- 暗 褐色 黄褐色粘土ブロック少量
- 暗 褐色 黄褐色粘土ブロック中量
- にぶい黄褐色 黄褐色粘土ブロック中量、鉄分、砂粒少量
- 黄 褐色 黄褐色粘土ブロック少量
- 黄 褐色 黄褐色粘土ブロック中量

第163号土壌層解説

- 灰黄褐色 黄褐色粘土ブロック、鉄分少量、炭化粒子微量
- 灰黄褐色 黄褐色粘土ブロック、鉄分少量
- 黒 褐色 黄褐色粘土粒子、鉄分少量、炭化粒子微量
- にぶい黄褐色 黄褐色粘土粒子、鉄分少量
- 黒 褐色 黄褐色粘土粒子少量、炭化粒子、鉄分微量
- にぶい黄褐色 黄褐色粘土粒子中量、鉄分少量、炭化粒子微量

第164号土壌層解説

- 黒 褐色 黄褐色粘土ブロック、鉄分少量
- 黒 褐色 黄褐色粘土ブロック中量、鉄分少量
- 黒 褐色 黄褐色粘土粒子少量、鉄分微量

第165号土壌層解説

- 暗 褐色 黄褐色粘土粒子少量、焼土粒子、炭化粒子微量
- にぶい黄褐色 黄褐色粘土粒子中量
- 暗 褐色 黄褐色粘土粒子少量

第166号土壌層解説

- 灰黄褐色 黄褐色粘土粒子、鉄分微量
- にぶい黄褐色 黄褐色粘土ブロック、鉄分少量
- 灰黄褐色 黄褐色粘土粒子少量、鉄分微量
- 暗 褐色 黄褐色粘土ブロック、鉄分微量
- にぶい黄褐色 黄褐色粘土粒子多量、鉄分微量

第167号土壌層解説

- 黒 褐色 鉄分少量、黄褐色粘土粒子微量
- 黒 褐色 黄褐色粘土粒子、鉄分微量
- 黒 褐色 黄褐色粘土ブロック、鉄分少量
- 黒 褐色 黄褐色粘土ブロック中量、炭化粒子微量

第168号土壌層解説

- にぶい黄褐色 黄褐色粘土粒子、鉄分微量
- 暗 褐色 黄褐色粘土粒子、炭化粒子、鉄分微量
- 黒 褐色 黄褐色粘土粒子少量、炭化粒子、鉄分微量
- 暗 褐色 黄褐色粘土ブロック少量、鉄分微量
- にぶい黄褐色 黄褐色粘土粒子少量、鉄分微量
- にぶい黄褐色 黄褐色粘土ブロック中量、鉄分微量
- にぶい黄褐色 黄褐色粘土粒子中量、鉄分微量
- 黒 褐色 炭化粒子中量、黄褐色粘土粒子、鉄分微量

第169号土壌層解説

- 黒 褐色 黄褐色粘土ブロック少量
- 暗 褐色 黄褐色粘土ブロック中量
- 暗 褐色 黄褐色粘土ブロック中量

第170号土壌層解説

- 黒 褐色 黄褐色粘土ブロック、炭化粒子微量
- 暗 褐色 黄褐色粘土ブロック少量
- 黒 褐色 黄褐色粘土粒子少量
- 暗 褐色 黄褐色粘土粒子中量

第171号土壌層解説

- 黒 褐色 黄褐色粘土ブロック少量、鉄分微量
- 暗 褐色 黄褐色粘土ブロック少量
- にぶい黄褐色 黄褐色粘土ブロック少量
- 暗 褐色 黄褐色粘土ブロック少量、鉄分微量
- 暗 褐色 黄褐色粘土ブロック中量

第172号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 黄褐色粘土ブロック中量、炭化粒子少量、鉄分微量
- 2 にごい黄褐色 黄褐色粘土粒子少量
- 3 褐 色 黄褐色粘土ブロック少量
- 4 暗 褐 色 黄褐色粘土ブロック中量、鉄分少量
- 5 褐 色 黄褐色粘土粒子中量

第176号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 黄褐色粘土粒子・鉄分微量
- 2 褐 色 黄褐色粘土ブロック微量
- 3 褐 色 黄褐色粘土ブロック少量
- 4 褐 色 黄褐色粘土粒子微量

第173号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 黄褐色粘土粒子微量
- 2 暗 褐 色 黄褐色粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 黒 褐 色 黄褐色粘土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗 褐 色 黄褐色粘土粒子少量

第177号土坑土層解説

- 1 明 赤 褐 色 鉄分中量、炭化粒子少量、黄褐色粘土ブロック微量
- 2 褐 色 黄褐色粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 明 赤 褐 色 黄褐色粘土ブロック・炭化粒子・鉄分少量
- 4 暗 褐 色 黄褐色粘土粒子少量
- 5 黒 褐 色 黄褐色粘土粒子少量

第174号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 黄褐色粘土ブロック微量
- 2 褐 色 黄褐色粘土ブロック少量
- 3 暗 褐 色 鉄分少量、黄褐色粘土粒子微量
- 4 褐 色 黄褐色粘土粒子微量
- 5 暗 褐 色 黄褐色粘土ブロック微量
- 6 暗 褐 色 黄褐色粘土ブロック少量
- 7 暗 褐 色 黄褐色粘土ブロック・砂粒少量
- 8 褐 色 黄褐色粘土粒子少量
- 9 にごい黄褐色 黄褐色粘土粒子微量
- 10 にごい黄褐色 黄褐色粘土粒子少量
- 11 褐 色 黄褐色粘土ブロック微量

第178号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 黄褐色粘土ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 褐 色 黄褐色粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 にごい黄褐色 黄褐色粘土ブロック微量
- 4 褐 色 黄褐色粘土粒子少量
- 5 褐 色 黄褐色粘土粒子中量、炭化粒子微量

表9 2次面(縄文時代～平安時代以前)の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考	
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(m)					新田関係(田→新)	
140	H 5 i4	-	円 形	0.6 × 0.5	20	外傾	平坦	不明	-		
141	H 5 i5	-	円 形	0.6 × 0.6	24	外傾	平坦	自然	-		
142	I 5 a3	-	円 形	0.4 × 0.4	24	外傾	平坦	人為	-		
143	I 5 a4	N-33°-E	楕円形	0.6 × 0.5	14	外傾	崖状	自然	-		
144	I 5 e4	-	円 形	0.5 × 0.5	50	外傾	平坦	人為	-		
145	I 5 e4	N-41°-E	楕円形	0.6 × 0.5	42	外傾	崖状	人為	-		
146	I 5 b4	N-50°-E	楕円形	0.6 × 0.5	13	外傾	平坦	人為	-		
147	I 5 c3	-	円 形	0.7 × 0.7	22	外傾	崖状	人為	-		
148	H 5 j4	N-0°	楕円形	0.4 × 0.3	22	外傾	崖状	自然	-		
149	I 5 b3	N-73°-W	楕円形	0.6 × 0.5	22	外傾	平坦	人為	-		
150	I 5 e3	N-0°	楕円形	0.5 × 0.4	30	外傾	平坦	人為	-		
151	L 5 c3	-	円 形	0.5 × 0.5	40	外傾	崖状	人為	-		
152	L 5 c3	N-48°-W	不定形	1.9 × 1.1	55	外傾	凸凹	人為	-		
153	L 5 d3	N-85°-E	不定形	0.7 × 0.5	18	外傾	崖状	人為	-		
154	L 5 e2	N-60°-E	楕円形	1.3 × 0.7	40	外傾	平坦	人為	-		
155	L 5 f4	N-35°-E	楕円形	0.5 × 0.4	26	外傾	崖状	人為	-		
156	L 5 g4	N-55°-E	不定形	1.1 × 1.0	18	縦斜	崖状	人為	-		
157	L 5 f5	N-90°-E	長方形	1.5 × 0.8	22	外傾	平坦	自然	-		
158	L 5 f4	-	円 形	0.6 × 0.6	28	外傾	平坦	自然	-		
159	L 5 b4	N-55°-W	楕円形	1.1 × 0.6	15	外傾	崖状	不明	-		
160	L 5 d5	N-28°-E	{楕円形}	2.1 × 1.8	62	外傾	平坦	人為	-	本跡→SK162	
161	L 5 g1	N-47°-W	不定形	8.0 × 7.4	150	外傾	崖状	人為	-		
162	L 5 e5	N-12°-E	不定形	5.0 × 3.5	114	外傾	平坦	人為	-	SK160→本跡	
163	L 4 c0	N-78°-W	楕円形	1.3 × 1.0	34	外傾	平坦	自然	-		
164	L 5 b4	N-57°-W	楕円形	0.9 × 0.4	30	外傾	崖状	人為	-		

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 新旧関係 (旧→新)
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ (cm)					
165	L 5 f4	N-9°-E	楕円形	2.0×1.3	12	外傾	平坦	人為	-	
166	K 5 c3	N-0°	楕円形	1.2×0.9	40	外傾	平坦	自然	-	
167	J 5 d3	-	円形	1.1×1.1	50	外傾	平坦	人為	-	
168	K 5 a3	N-72°-E	楕円形	2.2×1.5	66	緩斜	平坦	人為	-	
169	J 5 i4	N-38°-W	楕円形	1.5×1.1	41	外傾	平坦	自然	-	
170	K 5 c1	N-44°-W	長楕円形	3.1×0.8	91	直立	皿状	人為	縄文土器	北西壁がオーバーハング
171	K 5 e2	N-0°	楕円形	2.3×1.9	45	直立	平坦	人為	-	
172	K 5 d2	N-88°-W	不定形	2.3×1.0	35	外傾	平坦	人為	-	
173	K 5 d1	N-13°-W	楕円形	1.1×0.7	66	外傾	平坦	不明	-	
174	K 4 b0	N-53°-E	不定形	7.8×5.3	129	外傾	凸凹	人為	縄文土器	
176	I 5 b4	-	円形	0.5×0.5	25	外傾	皿状	人為	-	
177	H 5 i4	N-17°-E	楕円形	1.9×1.5	25	緩斜	皿状	人為	-	
178	I 5 b4	-	円形	1.3×1.2	45	緩斜	皿状	人為	-	
180	I 5 d3	N-51°-E	楕円形	3.4×3.0	30	外傾	平坦	自然	縄文土器	

(3) 屋外炉

第1号屋外炉 (SK175) (第44図)

位置 調査ⅡB区中央部のL4h9区で、標高16.5mの平坦な低地上に位置している。

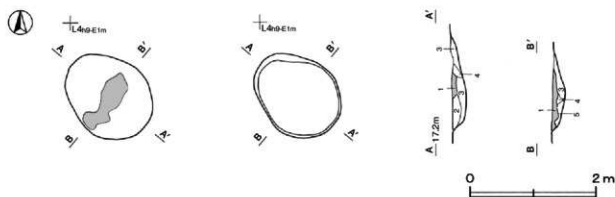
確認状況 炉床と見られる焼土が露出し、周辺に焼土粒子や炭化粒子が楕円形状に散布する範囲が確認された。

規模と形状 長径1.5m、短径1.2mの楕円形で、長径方向はN-40°-Wである。確認面に長さ100cm、幅40cmほどの赤変硬化する範囲が確認された。掘り方調査の結果、深さは20cmである。底面は皿状で、北西壁が緩やかに、その他は外傾して立ち上がっている。

覆土 5層に分けられる。第3～5層は掘り方の埋土層である。炉床下は焼土や炭化物を含む層で、人為的に埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------|--------|-----------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量、炭化粒子・黄褐色粘土粒子微量 | 3 灰黄褐色 | 炭化粒子・黄褐色粘土粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子少量、炭化粒子・黄褐色粘土粒子微量 | 4 暗褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子・黄褐色粘土粒子微量 |
| | | 5 黒褐色 | 黄褐色粘土粒子少量、焼土粒子微量 |



第44図 第1号屋外炉実測図

所見 住居の炉を想定し、周囲を精査した。その結果、周辺から床面や柱穴等が確認されなかった。同グリッド下から縄文土器片が出土しており、屋外炉の可能性が高い。時期は、縄文時代と考えられる。

第2号屋外炉（SK181）（第45図）

位置 調査ⅡA区北部のI 5 d3区で、標高164mの平坦な低地上に位置している。

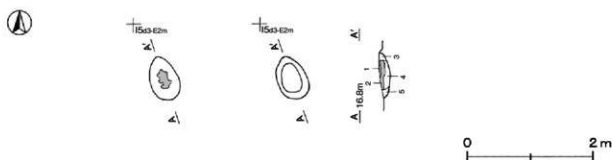
確認状況 炉床と見られる焼土が露出し、周辺に焼土粒子や炭化粒子が楕円形状に散布する範囲が確認された。
規模と形状 長径0.7m、短径0.5mの楕円形で、長径方向はN-23°-Wである。確認面に長さ36cm、幅20cmほどの赤変硬化する範囲が凸凹状に確認された。掘り方調査の結果、深さは18cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 5層に分けられる。第4・5層は掘り方の埋土層である。炉床下は焼土や炭化物を含む層で、人為的に埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|------------------------|-------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子少量 | 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子微量 | 5 黒褐色 炭化粒子少量 |
| 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量 | |

所見 住居の炉を想定し、周囲を精査した。その結果、周辺から床面や柱穴及び遺物等が確認されなかった。基本土層と同じ黄褐色土中から、縄文時代の屋外炉が確認されているため、同様の遺構と考えられる。時期は、縄文時代と推測される。



第45図 第2号屋外炉実測図

表10 2次面（縄文時代～平安時代以前）の屋外炉一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 (旧遺構番号-旧→新)
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
1	L 4 b9	N-40°-W	楕円形	1.5×1.2	20	外傾	皿状	人為	-	SK175
2	I 5 d3	N-23°-W	楕円形	0.7×0.5	18	外傾	皿状	人為	-	SK181

(4) ビット群

第5号ビット群（第46図）

調査ⅡA区南部のI 5 b4・I 5 b5・I 5 c5区で、標高165mほどの平坦な低地上に位置している。ビット群

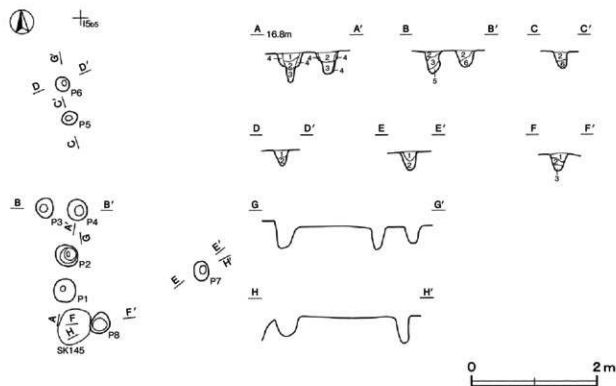
の範囲は東西3.0m、南北4.0mほどである。ピットの配列は不規則であり、竪穴住居跡や掘立柱建物跡を想定することは困難である。時期は、出土土器がないため明確ではないが、平安時代の遺構確認面の下層にあり、縄文時代の遺構が確認された黄褐色土中で検出されていることから、縄文時代から平安時代以前に掘り込まれた可能性が考えられる。以下、各柱穴の規模を表にまとめる。

第5号ピット群ピット計測表

番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P 1	39	35	46	P 2	40	35	35	P 3	32	28	35
P 4	32	32	37	P 5	38	21	28	P 6	34	22	36
P 7	30	23	31	P 8	35	32	29				

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | 黄褐色粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | 黄褐色粘土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 黄褐色粘土ブロック少量 | 5 黒褐色 | 黄褐色粘土粒子中量 |
| 3 暗褐色 | 黄褐色粘土ブロック微量 | 6 暗褐色 | 黄褐色粘土粒子少量 |



第46図 第5号ピット群実測図

第6号ピット群 (第47図)

調査ⅡB区中央部のL4g8・L4h8・L4h9区で、標高16.5mほどの平坦な低地上に位置している。ピット群の範囲は東西5.0m、南北4.5mほどである。第1号屋外跡の南側に、半円を描くようにピットが配置されているが、北側にピットが確認されていないため、竪穴住居跡と明確に判断することはできない。当遺構は、平安時代の遺構確認面の下層にあり、縄文時代と考えられる遺構が確認された黄褐色土中で検出されていること

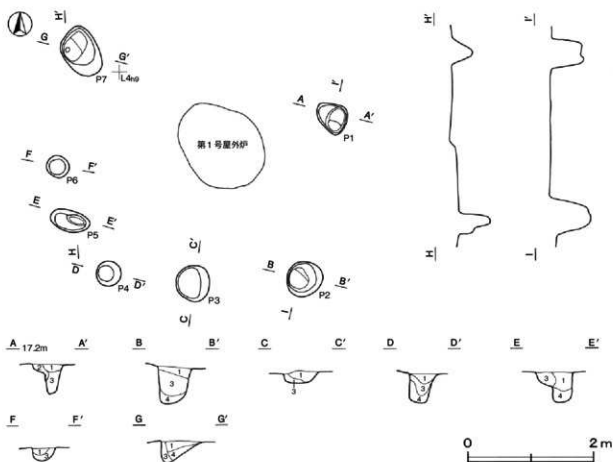
から、時期は、縄文時代から平安時代以前に掘り込まれた可能性が考えられる。以下、各柱穴の規模を表にまとめる。

第6号ピット群ピット計測表

番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P 1	52	46	48	P 2	60	56	57	P 3	59	57	30
P 4	42	40	47	P 5	65	35	49	P 6	38	35	30
P 7	78	58	34								

土層解説

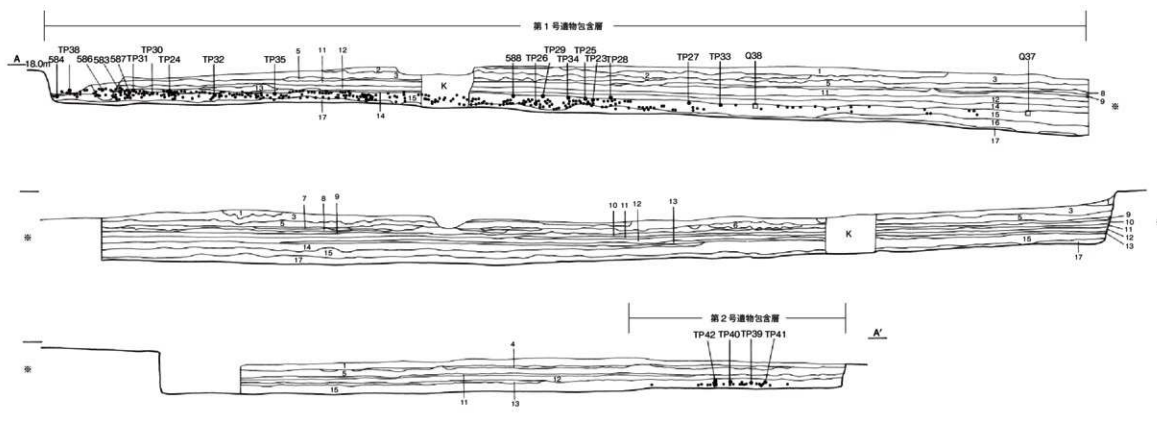
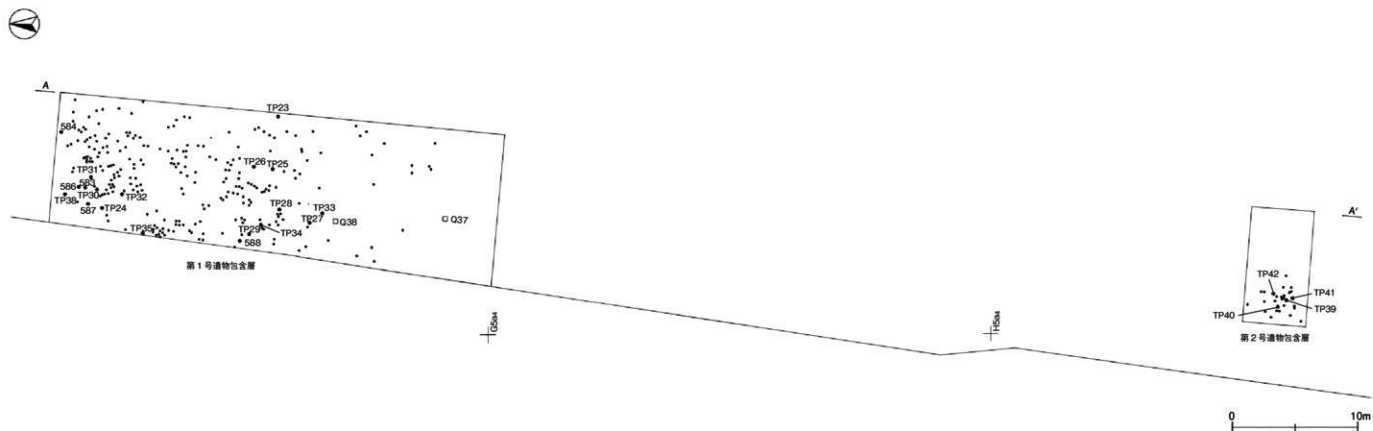
- 1 黒褐色 黄褐色粘土ブロック少量
 2 黒褐色 黄褐色粘土粒子少量、焼土粒子微量
 3 灰黄褐色 黄褐色粘土粒子中量
 4 暗褐色 黄褐色粘土粒子少量



第47図 第6号ピット群実測図

(5) 遺物包含層

調査ⅡA区で第2次面に広がる黄褐色土層を確認するため、第1次面を掘り下げている際に、縄文時代の遺物が広範囲に散在する場所が2か所確認された。周囲を精査したが、遺構は確認できなかったため、遺物包含層として調査を行った。遺物は、平安時代の遺構確認面から40～100cmの深さで、基本土層の



第48图 第1·2号遺物包含層実測图

第9・10層から数多く出土している。なお、第1・2号遺物包含層は、60mほど離れた位置で確認されているが、両者を通した土層を観察することができたので、当時の地形を明らかにする手がかりになることから、範囲外を含めた土層図を掲載することにする。

第1号遺物包含層（第48～50回）

確認状況 調査ⅡA区北部の西側調査区域で、基点としてF 5b6グリッド杭とG 5a5グリッド杭を結ぶ線上から東へ12mほどの範囲で、規模は、東西長12m、南北長35mである。平安時代の遺構確認面下40～100cmで、標高16.4～17.0mの北から南へ緩やかに傾斜する土層中で確認されている。

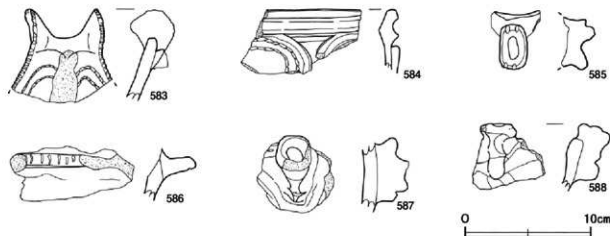
土層 平安時代の遺構確認面から下は、17層に分けられる。傾斜にそって水平に堆積する自然堆積と考えられ、遺物は第14・15層内からそれぞれ出土している。なお、土層解説は、第1・2号遺物包含層とも共通である。

土層解説

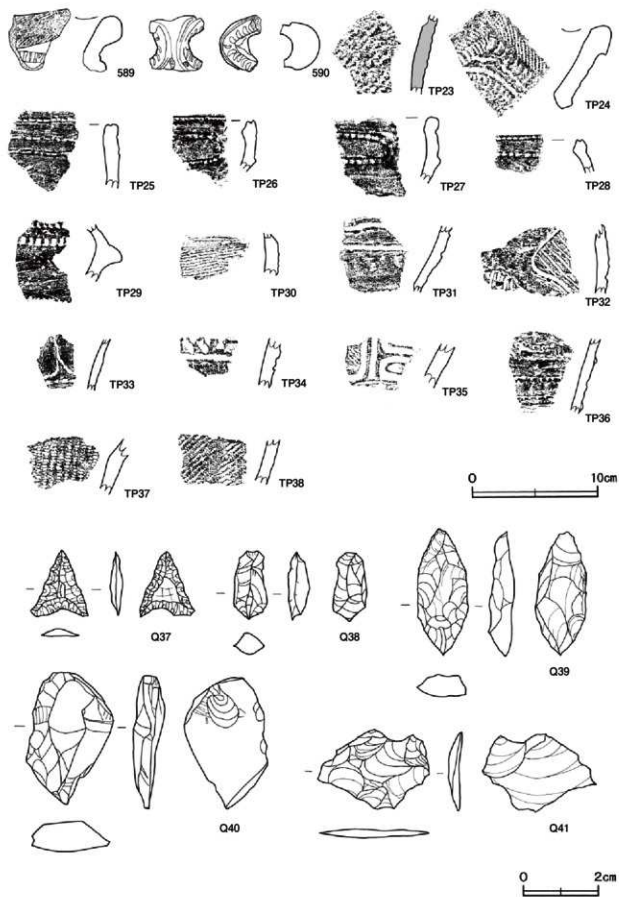
1 灰黄褐色	焼土粒子・炭化粒子・鉄分微量（基本土層第2層）	9 灰黄褐色	青灰色粘土ブロック中量、鉄分少量（基本土層第6層）
2 灰黄褐色	白色粘土粒子・鉄分少量	10 灰黄褐色	青灰色粘土ブロック多量、鉄分中量
3 灰黄褐色	青灰色粘土ブロック中量、鉄分少量（基本土層第3層）	11 褐色	青灰色粘土ブロック多量、白色粘土ブロック少量（基本土層第7層）
4 灰黄褐色	青灰色粘土ブロック少量、鉄分微量	12 黒褐色	黒色粘土粒子多量、鉄分少量（基本土層第8層）
5 灰黄褐色	青灰色粘土ブロック多量、白色粘土ブロック・鉄分少量（基本土層第4層）	13 黒褐色	黒色粘土粒子多量、鉄分中量
6 褐色	青灰色粘土粒子・鉄分中量	14 黒褐色	黒色粘土粒子中量、鉄分少量（基本土層第9層）
7 濃い黄褐色	青灰色粘土ブロック中量、鉄分少量	15 黒褐色	黒色粘土粒子中量、鉄分微量（基本土層第10層）
8 明黄褐色	鉄分多量、青灰色粘土ブロック少量（基本土層第5層）	16 黒褐色	黒色粘土粒子多量、鉄分微量（基本土層第11層）
		17 黄褐色	黄褐色粘土粒子多量（基本土層第12層）

遺物出土状況 縄文土器片423点、石器6点（鏃1、剥片5）が出土している。北側からの傾斜に沿って堆積している黒褐色土中から遺物が出土している。土器片はいずれも細片であり、器種の見極めが明確にできないものが多い。包含層北部では第14・15層中に遺物が含まれているが、北部から南側では第15層が主体となる。出土遺物の主体は中期中葉の土器片で、TP23のような前期の土器片もわずかに混在しているが、前期と中期の土器片の出土位置の違いを層位によって捉えることはできない。

所見 遺物が出土した第15層下の第17層の黄褐色土は、縄文土器が多量に出土した標高17.8mに位置する第1号周溝状遺構が確認された黄褐色土と同じ堆積層と考えられる。第1号周溝状遺構は本包含層の北側に位置しており、当時の地形は北側が丘陵状に高まり、包含層が確認された南側に傾斜していたものと推定される。その傾斜地に向かって、泥や粘土とともに遺物が流れ込んで堆積し、包含層が形成されたものと考えられる。



第49回 第1号遺物包含層出土遺物実測図(1)



第50图 第1号遺物包含層出土遺物実測図(2)

第1号遺物包含層出土遺物観察表 (第49・50図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
383	縄文土器	深鉢	-	(7.3)	-	赤褐色・石黄・赤褐色・石黄	にぶい橙	普通	表裏に「屈折目」(口唇部に水平甲子)と木の結状沈線と散在文様提出。隆帯の一部欠損	14層	10% PL56
384	縄文土器	深鉢	-	(4.8)	-	赤褐色・石黄・石黄	にぶい橙	普通	口唇部に隆帯貼付。直下に屈折の隆帯および2次の屈折状沈線が沿う隆帯で口唇部の文様提出	15層	5% PL36
385	縄文土器	深鉢	-	(3.8)	-	雲母・石黄	にぶい赤	普通	中央部に刺突文を施した楕円形状隆帯。上・下部に甲子	包含層 F5c7区	5%
386	縄文土器	深鉢	-	(4.1)	-	雲母・長石・石黄	にぶい黄	普通	刺突文を施した隆帯貼付	14層	5%
387	縄文土器	深鉢	-	(5.9)	-	赤褐色・長石・石黄	にぶい橙	普通	中央部に刺突文を施す干円形の隆帯により把手を作出	15層	5%
388	縄文土器	深鉢	-	(5.3)	-	赤褐色・長石・石黄	にぶい赤	普通	渦巻状の隆帯貼り付けにより把手を作出	15層	5%
389	縄文土器	深鉢	-	(4.5)	-	雲母・石黄	浅黄橙	普通	口唇部に隆帯貼付。直下に結節沈線が沿う隆帯提出	包含層 F5c7区	5%
390	縄文土器	深鉢	-	(3.8)	-	赤褐色・長石・石黄	にぶい黄	普通	刺突文を施した隆帯により把手を作出。把手下に沈線・刺突文	包含層 F5c7区	5%
TP23	縄文土器	深鉢	-	(6.1)	-	石黄	橙	普通	無節縄文施文	15層	
TP24	縄文土器	深鉢	-	(6.8)	-	赤褐色・長石・石黄	明赤橙	普通	口唇部にL字の単節縄文を施した隆帯貼付。下位に沈線文・結節沈線文を施し、波状部の文様提出	14層	PL16
TP25	縄文土器	深鉢	-	(5.0)	-	赤褐色・長石・石黄	にぶい橙	普通	口唇部及び口唇部直下に結節沈線文施文	15層	
TP26	縄文土器	深鉢	-	(4.0)	-	赤褐色・長石・石黄	にぶい橙	普通	口唇部及び口唇部直下に結節沈線文施文	15層	
TP27	縄文土器	深鉢	-	(5.2)	-	赤褐色・長石・石黄	にぶい橙	普通	肥厚した口唇部と隆帯間に結節沈線文施文	15層	PL16
TP28	縄文土器	深鉢	-	(2.6)	-	赤褐色・長石・石黄	にぶい橙	普通	口唇部及び口唇部直下に結節沈線文施文	15層	
TP29	縄文土器	深鉢	-	(4.6)	-	赤褐色・長石・石黄	にぶい赤	普通	突出した隆帯に2条の結節沈線文が沿う	15層	
TP30	縄文土器	深鉢	-	(3.4)	-	赤褐色・長石・石黄・赤褐色・石黄	橙	普通	Lの無節縄文施文	14層	
TP31	縄文土器	深鉢	-	(5.2)	-	赤褐色・長石・石黄	にぶい赤	普通	2条の結節沈線文施文	14層	
TP32	縄文土器	深鉢	-	(5.5)	-	赤褐色・長石・石黄	にぶい赤	普通	曲線状と直線状の沈線により文様提出	15層	PL16
TP33	縄文土器	深鉢	-	(4.1)	-	赤褐色・長石・石黄	にぶい橙	普通	結節沈線文により文様提出	15層	
TP34	縄文土器	深鉢	-	(3.8)	-	赤褐色・長石・石黄	にぶい橙	普通	刺突文施文。直下に縦位の沈線・縦位の条刺文施文	15層	
TP35	縄文土器	深鉢	-	(3.6)	-	赤褐色・長石・石黄	にぶい橙	普通	沈線及びLの単節縄文により文様提出	15層	PL16
TP36	縄文土器	深鉢	-	(5.9)	-	赤褐色・長石・石黄	明橙	普通	隆帯により支線区画。区画内に結節沈線文施文	包含層 F5c7区	
TP37	縄文土器	深鉢	-	(4.5)	-	雲母・長石	灰褐	普通	R.Lの単節縄文施文	包含層 F5c7区	
TP38	縄文土器	深鉢	-	(3.1)	-	赤褐色・長石・石黄	にぶい赤	普通	R.Lの単節縄文施文	14層	PL16

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q 37	石鏝	1.7	1.5	0.2	0.5	馬珉	両面押し剥離調整	15層	PL16
Q 38	剥片	1.8	0.9	0.5	0.7	黒曜石	剥片剥離時に形成された剥片	15層	
Q 39	剥片	3.3	1.3	0.6	3.1	チャート	傾斜に微細な剥離調整。尖頭器未製品*	包含層 F5c7区	PL16
Q 40	剥片	3.4	2.3	0.8	6.5	頁岩	二次加工を有する剥片	包含層 F5c7区	PL16
Q 41	剥片	2.1	2.9	0.2	1.5	頁岩	横長剥片	包含層 F5c7区	

第2号遺物包含層 (第48・51図)

確認状況 調査ⅡA区南部の西側調査区域で、H5f4・H5f5・H5g4・H5g5区に広がっている。規模は東西長9m、南北長5mほどの範囲である。標高16.6mの平安時代の遺構確認面下50cmほどの土層から確認されている。

土層 平安時代の遺構確認面から下は5層に分けられる。第1号包含層から延びており、ほぼ水平に堆積する自然堆積と考えられ、遺物は第15層内から出土している。

遺物出土状況 縄文土器片52点(深鉢)が出土している。出土土器の主体は、TP39～TP41の後期の粗製土器片やTP42・TP43の後期の土器片である。中期の土器片もわずかに混在して出土しているが、中期と後期の土器片の出土位置の違いを層位によって捉えることはできない。

所見 土器片が出土した第15層の下、第17層の黄褐色土中からは前期の土器が出土した土坑が確認されており、包含層は中期以降に形成されたものと考えられる。



第51図 第2号遺物包含層出土遺物実測図

第2号遺物包含層出土遺物観察表 (第51図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP39	縄文土器	深鉢	-	(5.8)	-	雲母・長石・石英・赤色粒子・黒色粒子	にぶい濁	普通	押出した口唇部に縄文原体押圧 直下に条線文	15層	PL56
TP40	縄文土器	深鉢	-	(7.2)	-	雲母・黒色粒子	濁	普通	押出した口唇部に縄文原体押圧 直下に条線文	15層	PL56
TP41	縄文土器	深鉢	-	(4.2)	-	雲母・長石・赤色粒子	にぶい濁	普通	条線文施文 縄文原体押圧	15層	PL56
TP42	縄文土器	深鉢	-	(4.8)	-	長石・石英	灰濁	普通	沈痾により山形を描出 縁絞部に貼付	15層	
TP43	縄文土器	深鉢	-	(7.0)	-	長石・石英	にぶい黄濁	普通	2条の平行沈痾施文 上部は原肩及び沈痾により加飾 施文は直上の条線施文	15層	PL56

2 平安時代の遺構と遺物

調査Ⅱ区の一次面から、平安時代の竪穴住居跡63軒、銅製品の工房跡1軒、土坑15基が確認された。以下、確認された遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第11号住居跡 (第52・53図)

位置 調査ⅡB区北部のJ 5g3区で、標高175mの平坦な低地上に位置している。

重複関係 第74号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸27m、短軸2.5mの方形で、主軸方向はN-4°-Wである。確認された壁高は5cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦である。

竪 北壁中央部やや東寄りに付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで75cm、袖部幅67cmほどである。袖部は白色粘土と暗褐色土により構築されている。右袖部は粘土と焼土及び炭化粒子を含んだ黒褐色土で埋め戻した面の上に構築され、補強材として土師器壳片を使用している。火床部は床面と同じ高さの地山面をわずかに掘りくぼめて使用しており、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ35cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

竪土層解説

1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量	6 にぶい黄濁 青灰色粘土ブロック・焼土粒子微量
2 黒褐色 焼土ブロック少量、炭化物・白色粘土粒子微量	7 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量
3 暗褐色 焼土ブロック・白色粘土粒子微量	8 暗褐色 白色粘土粒子中量
4 暗褐色 焼土粒子微量	9 暗赤褐色 焼土粒子中量
5 暗褐色 焼土ブロック少量、青灰色粘土ブロック・炭化粒子微量	10 黒褐色 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
	11 黒褐色 焼土粒子・青灰色粘土粒子少量、炭化粒子微量

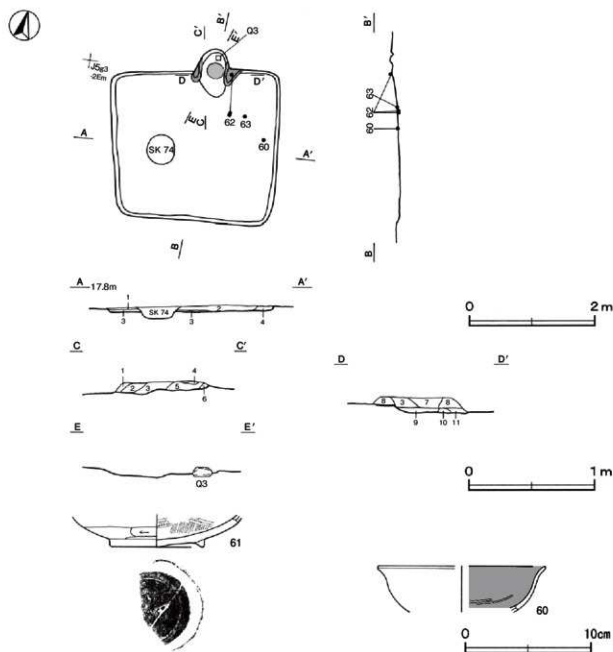
覆土 4層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示す、自然堆積と考えられる。

土層解説

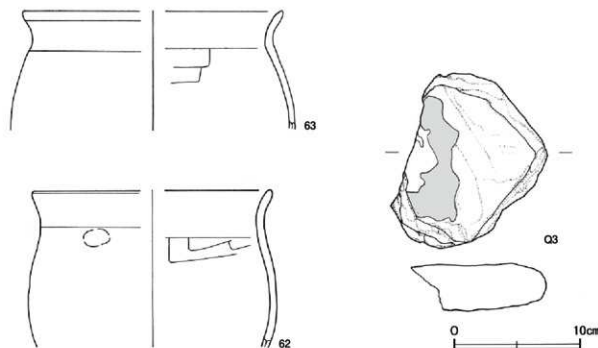
- | | | | |
|----------|-----------------------|----------|--------------------|
| 1 褐 灰 色 | 青灰色粘土ブロック少量、炭化粒子・鉄分微量 | 3 褐 灰 色 | 青灰色粘土粒子・鉄分微量 |
| 2 灰 黄 褐色 | 白色粘土粒子・鉄分微量 | 4 灰 黄 褐色 | 白色粘土粒子少量、焼土粒子・鉄分微量 |

遺物出土状況 土師器片68点(椀類16, 甕類52)、石製品1点(支脚)のほか、流れ込んだ石鉄1点も出土している。遺物は中央部から北東コーナー付近を中心に出土している。60は東壁中央部付近の覆土下層、61は覆土中からそれぞれ出土している。62は、軸部の補強材として埋め込まれていた破片と右軸部付近の床面から出土した破片が接合したものである。Q3は支脚として使用されたものと考えられ、竈の煙道部に倒れた状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から11世紀前半以降と考えられる。



第52図 第11号住居跡・出土遺物実測図



第53図 第11号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡出土遺物観察表 (第52・53図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
60	土師器	椀	[132]	(3.7)	-	茶母・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き	覆土下層	20%	
61	土師器	高台付椀	-	(2.6)	7.2	茶母・長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り 体高台張り付付	覆土中	20%	
62	土師器	甕	[188]	(12.5)	-	茶母・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部内面ヘラナデ	体部	覆土中	10%
63	土師器	甕	[206]	(9.5)	-	茶母・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部内面ヘラナデ	体部	覆土下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q3	支脚	140	123	3.8	320	雲母片岩	底・側面成形 火熱痕	竈内	

第12号住居跡 (第54図)

位置 調査ⅡB区北部のJ5g1区で、標高17.5mの平坦な低地上に位置している。

重複関係 第13号住居に西壁を掘り込まれている。

規模と形状 床面が露出した状態で確認されたため、竈と柱穴の位置から推定すると、長軸3.3m、短軸3.2mの方形もしくは長方形で、主軸方向はN-0°と考えられる。

床 ほほ平坦である。

竈 北壁中央部に付設されていたと推定される。規模は、層厚が薄いため明確ではないが、確認された範囲は焚口部から煙道部まで70cmである。袖部は確認できなかった。火床部は床面と同じ高さの地山面を掘りくぼめて使用しており、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ40cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっていくものと推定される。

竈土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子少量 3 黒褐色 青灰色粘土ブロック少量、焼土粒子微量
 2 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子・青灰色粘土粒子微量 4 黒褐色 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子微量

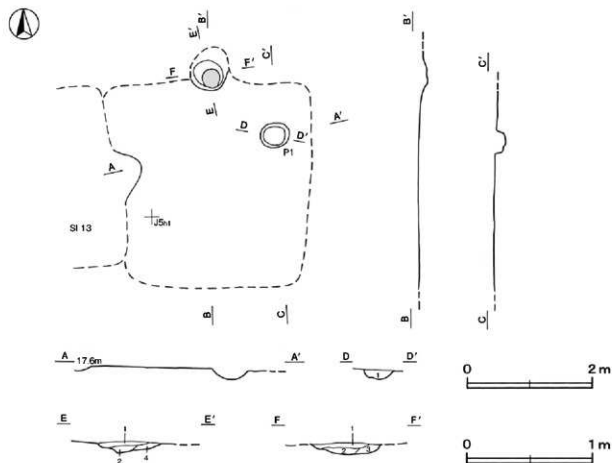
ピット 北東コーナー付近に位置し、深さ20cmほどで、配置から主柱穴と考えられる。

ピット土層解説

1 層 色 褐色土ブロック・炭化物中量、青灰色粘土ブロック
少量

遺物出土状況 土師器片10点(椀類3、甕類7)が、床面やP1内から出土している。いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器が少なく明確ではないが、出土土器及び遺構の様相から、9世紀後葉以降と考えられる。



第54図 第12号住居跡実測図

第13号住居跡 (第55図)

位置 調査ⅡB区北部のJ4g0区で、標高17.5mの平坦な低地上に位置している。

重複関係 第12号住居跡の西壁を掘り込んでいる。

規模と形状 床面が露出した状態で確認されたため、竈と柱穴の位置から推定すると、長軸3.0m、短軸2.9mほどの方形もしくは長方形で、主軸方向はN-90°-Eと考えられる。

床 ほほ平坦である。

竈 東壁中央部に付設されていたと推定される。規模は、層厚が薄いため明確ではないが、確認された範囲は焚口部から煙道部まで76cmである。袖部は確認できなかった。火床部は床面と同じ高さの地山面を、わずかに

掘りくぼめて使用しており、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ40cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっていくものと推定される。

竈土層解説

- | | |
|----------------------|------------------------------|
| 1 濃い黄褐色 焼土ブロック・炭化物少量 | 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 焼土ブロック・炭化物中量 | 5 灰黄褐色 焼土粒子少量、白色粘土粒子微量 |
| 3 暗褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量 | 6 暗褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子・白色粘土粒子微量 |

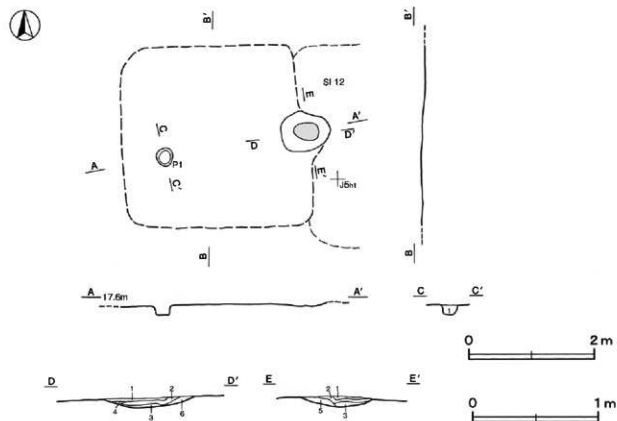
ピット 南西コーナー部に位置し、深さ15cmほどで、配置から主柱穴と考えられる。

ピット土層解説

- 1 暗褐色 青灰色粘土粒子中量、鉄分微量

遺物出土状況 土師器片5点（椀類3、変類2）が出土している。いずれも細片で図示できない。

所見 時期は、出土土器が少なく明確ではないが、重複関係や、出土土器及び遺構の様相から、10世紀後半以降と考えられる。



第55図 第13号住居跡実測図

第14号住居跡 (第56図)

位置 調査ⅡB区北部のK4b0区で、標高17.5mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 床面が削平された状態で竈のみが確認されたため、規模及び形状については不明である。主軸方向はN-6°-Wと推定される。

竈 北壁に付設されていたと推定される。層厚が薄く明確ではないが、確認された範囲は焚口部から煙道部まで110cmである。火床部は床面と同じ高さの地山面を掘りくぼめて使用しており、火床面は火熱を受けて赤変

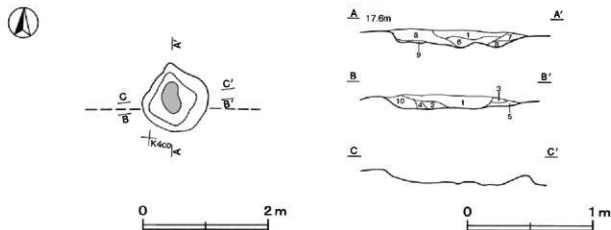
硬化している。煙道部は壁外へ75cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

電土層解説

- | | |
|-------------------------|----------------------------|
| 1 濃い黄褐色 焼土ブロック少量 | 6 濃い黄褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 濃い黄褐色 焼土ブロック中量 | 7 暗灰黄褐色 炭化物中量、焼土粒子少量 |
| 3 濃い黄褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | 8 灰黄褐色 焼土ブロック中量 |
| 4 灰黄褐色 焼土ブロック・炭化物中量 | 9 暗灰黄褐色 青灰色粘土ブロック中量、焼土粒子微量 |
| 5 灰黄褐色 焼土粒子・炭化物中量 | 10 灰黄褐色 焼土粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片15点（椀類9、甕類6）が出土している。いずれも細片で図示できない。

所見 時期は、出土土器が少なく明確ではないが、出土土器及び遺構の様相から9世紀後葉以降と考えられる。



第56図 第14号住居跡実測図

第15号住居跡（第57図）

位置 調査ⅡB区北部のK4c8区で、標高17.5mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 床面と竈の火床面が露出した状態で確認されたため、わずかに残る覆土と火床面の位置から規模と形状を推定した。確認された範囲は長軸4.6m、短軸3.7mで長方形もしくは方形と推定され、主軸方向はN-36°-Wと考えられる。壁高は6～11cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほは平坦である。

竈 北壁のほぼ中央部に付設されていたと推定される。火床面のみが確認されており、火熱を受けて赤変硬化している。

ピット 北東コーナー部に位置し、深さ16cmで焼土や炭化物を含み、竈と関連するピットの可能性も考えられるが、性格は不明である。

ピット土層解説

- | | |
|--------------------------|------------------|
| 1 暗褐色 炭化物中量、青灰色粘土粒子少量 | 3 暗灰黄色 青灰色粘土粒子多量 |
| 2 暗褐色 青灰色粘土粒子中量、焼土ブロック少量 | |

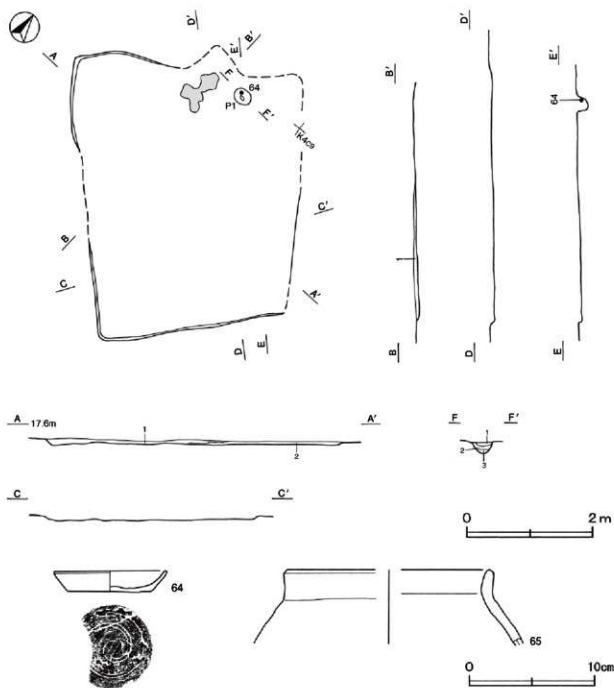
覆土 2層に分けられる。層厚が薄く堆積状況は不明である。

土層解説

- | | |
|-------------------------------|----------------|
| 1 黒褐色 青灰色粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 2 暗灰黄色 青灰色粘土中量 |
|-------------------------------|----------------|

遺物出土状況 土師器片5点（小皿2、甕類3）が出土している。64はP1の覆土上層、65は北コーナー部の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から11世紀前半以降と考えられる。



第57図 第15号住居跡・出土遺物実測図

第15号住居跡出土遺物観察表(第57図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
64	土師器	小皿	8.8	1.7	6.6	雲母・赤色砂子	明赤褐色	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	P1 覆土上層	70%
65	土師器	甕	[160]	(60)	-	長石・石英	にふ黄褐色	普通	体部内外面ナデ	覆土中	5%

第16号住居跡 (第58図)

位置 調査ⅡB区北部のK4d0区で、標高174mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 床面が削平された状態で竈のみが確認されたため、規模及び形状については不明である。主軸方

向はN-6°-Wと推定される。

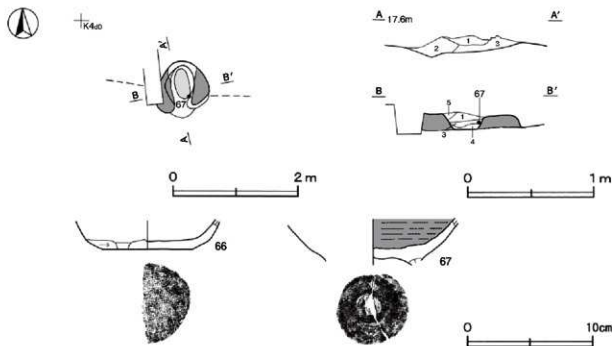
竈 北壁に付設されていたと推定される。確認された規模は、焚口部から煙道部まで95cm、袖幅は85cmである。火床部は床面と同じ高さの地山面を掘りくぼめて使用しており、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ50cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっていくものと推定される。

竈土層解説

- | | |
|---------------------------------------|---------------------------|
| 1 灰黄褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子・白色粘土粒子・黄褐色粘土粒子微量 | 4 灰黄褐色 焼土粒子・白色粘土粒子少量 |
| 2 暗褐色 焼土粒子・白色粘土粒子微量 | 5 灰黄褐色 焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量 |
| 3 灰黄褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片24点（椀類12、小皿4、甕類8）が出土している。また、混入した瓦片1点、陶器片2点も出土している。67は竈の右袖部の内側から逆位で出土している。

所見 時期は、出土土器が細片のため判断が困難であるが、出土土器及び遺構の様相から9世紀後葉以降と考えられる。



第58図 第16号住居跡・出土遺物実測図

第16号住居跡出土遺物観察表（第58図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
66	土師器	坏	-	(2.3)	7.0	粘土・石英・炭化粒子	にぶい橙	普通	体部外面下端手持ちへず削り 方面のへず削り 内面厚減	竈土中	20%
67	土師器	高台付椀	-	(3.7)	-	炭化・長石・石英	にぶい橙	普通	内面下端へず削り 内面下端へず削り 底部回転へず切り 後高削り行け	竈内	30%

第17号住居跡（第59～61図）

位置 調査ⅡB区北部のK49区で、標高17.5mほどの平坦な低地上に位置している。

重複関係 第18号住居、第61・65号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.8m、短軸3.2mの長方形で、主軸方向はN-110°-Eである。壁高は12～20cmで、外傾し

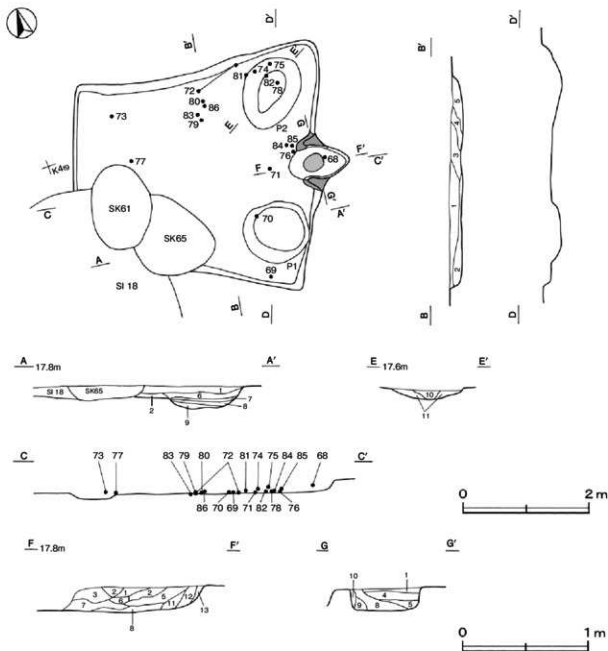
で立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

竈 東壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで95cm、袖部幅75cmである。火床部は床面とはほぼ同じ高さの地山面を使用しており、火床面及び内壁は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ50cm掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|-------------------------|----------|-------------------------|
| 1 暗 褐色 | 焼土ブロック少量、炭化粒子・青灰色粘土粒子微量 | 5 にぶい黄褐色 | 焼土粒子多量、炭化粒子少量 |
| 2 灰 黄 褐色 | 青灰色粘土粒子少量 | 6 にぶい黄褐色 | 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 灰 黄 褐色 | 焼土粒子・青灰色粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 7 灰 黄 褐色 | 青灰色粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 4 暗 褐色 | 焼土粒子・青灰色粘土ブロック少量、炭化粒子微量 | 8 にぶい黄褐色 | 焼土ブロック・青灰色粘土粒子少量、炭化粒子微量 |



第59図 第17号住居跡実測図

- | | | | |
|----------|-------------------------|---------|--------------------|
| 9 暗灰黄色 | 焼土ブロック・青灰色粘土粒子中量、炭化粒子微量 | 12 灰黄褐色 | 青灰色粘土ブロック少量、焼土粒子微量 |
| 10 暗灰黄色 | 青灰色粘土粒子中量、焼土ブロック少量 | 13 灰黄褐色 | 青灰色粘土粒子多量 |
| 11 にい黄褐色 | 青灰色粘土ブロック少量、焼土粒子微量 | | |

ビット 2か所。深さ15cmほどで配置から主柱穴と考えられる。

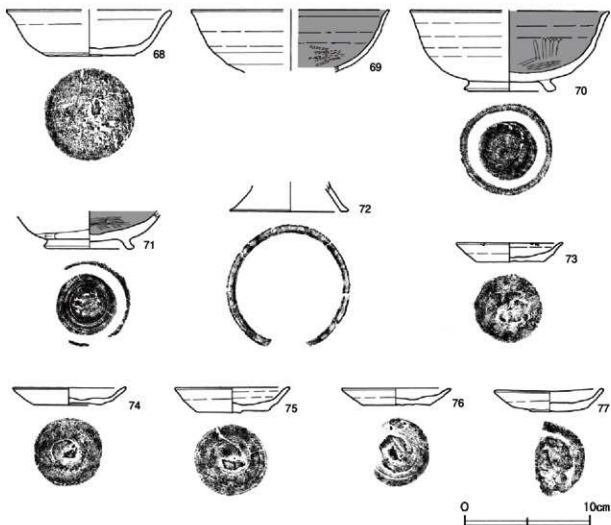
覆土 6層に分けられる。各層に焼土・炭化物を含む人為堆積と考えられる。第7～9層はP1、第10・11層はP2の覆土である。

土層解説

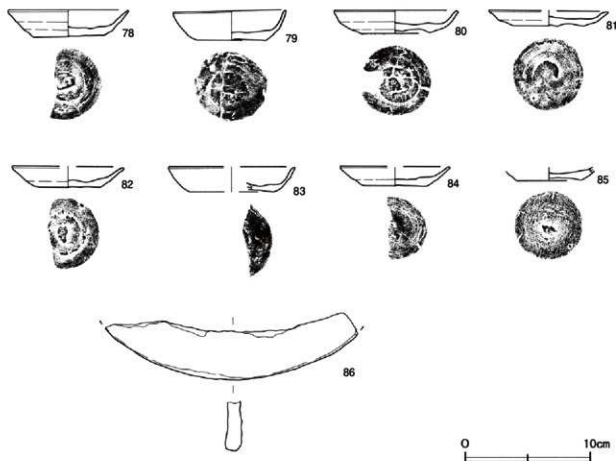
- | | | | |
|-------|--------------------|---------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | 青灰色粘土ブロック・炭化材少量 |
| 2 暗褐色 | 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子微量 | 8 褐色 | 青灰色粘土ブロック少量 |
| 3 褐色 | 青灰色粘土粒子微量 | 9 暗灰黄色 | 焼土粒子少量、青灰色粘土粒子微量 |
| 4 暗褐色 | 焼土ブロック・青灰色粘土ブロック少量 | 10 暗灰黄色 | 焼土粒子少量、炭化粒子・青灰色粘土粒子微量 |
| 5 暗褐色 | 炭化物中量、青灰色粘土粒子少量 | 11 褐色 | 青灰色粘土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 6 黒褐色 | 青灰色粘土ブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師器片513点（椀類300、小皿187、甕類24、羽釜2）、粘土塊1点が出土している。遺物はほぼ全域から出土している。特に北壁中央部から北東コーナー付近では、小皿が覆土下層から床面にかけて正位や逆位で多く出土しており、投棄された様相を示している。68は竈内から逆位で出土している。69は南東コーナー部の覆土下層、70はP1上面の覆土下層、71は焚口部手前の床面、72は北壁際中央部の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。



第60図 第17号住居跡出土遺物実測図(1)



第61図 第17号住居跡出土遺物実測図2)

第17号住居跡出土遺物観察表 (第60・61図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
68	土師器	坏	[13.1]	3.6	7.0	炭石・石英・石英・赤色粒子・黒色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	壺内	60% PL38
69	土師器	高台付碗	[15.6]	(4.9)	-	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き	覆土下層	20%
70	土師器	高台付碗	[15.8]	6.4	7.8	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 高面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台磨き付付	覆土下層	50% PL40
71	土師器	高台付碗	-	(3.0)	6.6	雲母・長石	橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台磨き付付	床面	40%
72	土師器	高台付碗	-	(2.3)	9.5	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	高台部内外面ナデ	床面	5%
73	土師器	小皿	8.3	1.5	5.2	長石・石英	にぶい橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	覆土下層	90% PL45
74	土師器	小皿	8.9	1.4	5.5	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	覆土下層	70% PL45
75	土師器	小皿	9.0	2.0	5.5	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	覆土下層	65% PL45
76	土師器	小皿	8.7	1.5	5.4	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	覆土下層	65%
77	土師器	小皿	8.6	1.8	5.5	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	覆土下層	60% PL45
78	土師器	小皿	9.6	2.1	5.5	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	覆土下層	60% PL45
79	土師器	小皿	8.9	2.4	5.5	長石・赤色粒子	にぶい黄橙	不良	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	床面	70% PL45
80	土師器	小皿	9.8	1.8	5.4	長石・赤色粒子	浅黄橙	不良	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	床面	80%
81	土師器	小皿	[9.4]	1.2	5.6	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	覆土下層	60%
82	土師器	小皿	[9.0]	1.7	5.2	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	覆土下層	60%
83	土師器	小皿	[10.0]	2.0	[6.8]	長石・赤色粒子	にぶい黄橙	不良	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	床面	30%
84	土師器	小皿	[8.2]	1.5	[5.0]	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	覆土下層	40%
85	土師器	小皿	-	(1.0)	5.3	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	覆土下層	30%
86	土師器	羽釜	-	1.3	-	長石・石英	にぶい赤黄	普通	外面ナデ	覆土下層	5%

第18号住居跡 (第62・63図)

位置 調査ⅡB区北部のK48区で、標高17.5mほどの平坦な低地上に位置している。

重複関係 第17号住居跡を掘り込み、第61・65号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸27m、短軸2.3mの長方形で、主軸方向はN-100°-Eである。壁高は15～17cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

竈 北東コーナー付近に付設されていたと推定される。土坑に掘り込まれているため、火床面、軸部は残存していない。

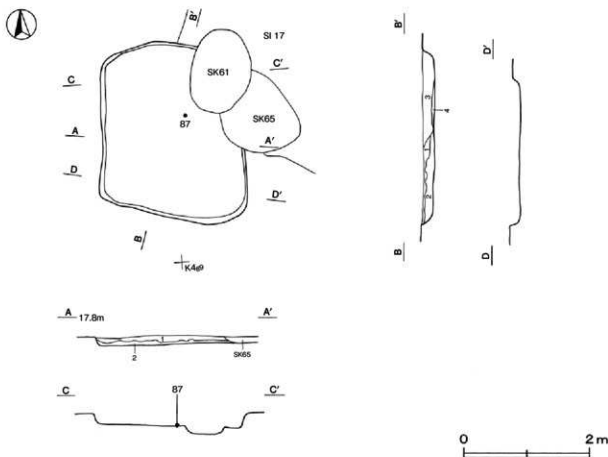
覆土 4層に分けられる。不自然な堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|---------------------|------------------------|
| 1 暗褐色 青灰色粘土粒子少量 | 3 暗褐色 焼土ブロック・青灰色粘土粒子少量 |
| 2 濃い黄褐色 青灰色粘土ブロック中量 | 4 暗褐色 焼土粒子・青灰色粘土粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片45点(椀類7, 小皿18, 甕類20), 須恵器片1点(坏), 細礫1点, 粘土塊2点が出土している。87は中央部の床面, 88は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器が少なく明確ではないが, 重複関係と出土土器から10世紀後葉から11世紀前葉と考えられる。



第62図 第18号住居跡実測図



第63図 第18号住居跡出土遺物実測図

第18号住居跡出土遺物観察表 (第63図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
87	土師器	高台付碗	-	(1.6)	6.0	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	内面へう巻き 台張り付付	底部回転へう切り後高	床面	10%
88	土師器	小皿	(9.7)	1.9	(5.9)	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロタロナデ	底部回転へう切り	覆土中	50%

第19号住居跡 (第64図)

位置 調査ⅡB区北部のK4F8区で、標高17.5mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 調査区域外に延びているため、確認された規模は、南北軸3.4m、東西軸1.6mほどである。平面形は方形又は長方形で、主軸方向はN-5°-Eと推定される。壁高は10~20cmで、外傾して立ち上がっている。床はほぼ平坦である。

竈 確認された火床部から推定すると、北壁中央部に付設されていたと考えられる。確認された規模は、焚口部から煙道部まで80cmほどで、袖部は確認することができなかった。火床部は床面とほぼ同じ高さの地山面を使用しており、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ60cmほど掘り込まれており、火床部から緩やかに立ち上がっていると推定される。

竈土層解説

- | | |
|-----------------------|-------------------|
| 1 暗褐色 焼土粒子・青灰色粘土粒子微量 | 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子中量 |
| 2 暗褐色 焼土粒子少量、白色粘土粒子微量 | |

ビット 深さ25cmで、配置から支柱穴と考えられる。

ビット土層解説

- | | |
|----------------|--------------------------|
| 1 褐色 青灰色粘土粒子少量 | 2 暗褐色 青灰色粘土ブロック少量、焼土粒子微量 |
|----------------|--------------------------|

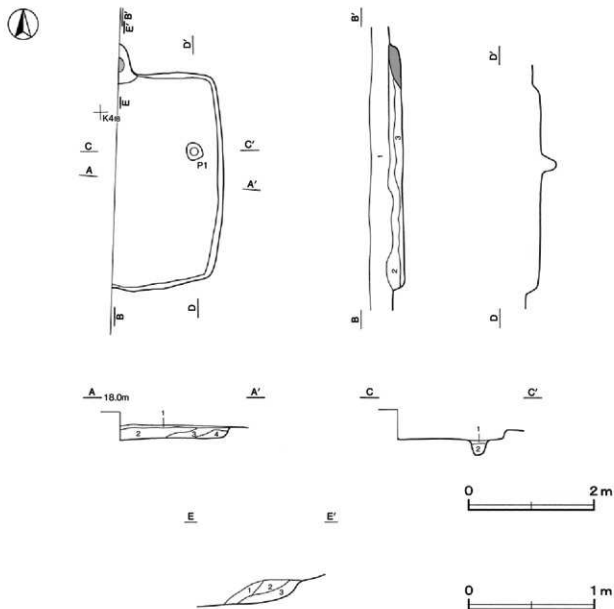
覆土 3層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。第1層は表土層である。

土層解説

- | | |
|--------------------------|-------------------|
| 1 暗褐色 青灰色粘土ブロック少量、焼土粒子微量 | 3 暗褐色 青灰色粘土ブロック微量 |
| 2 暗褐色 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子微量 | 4 暗褐色 青灰色粘土粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片26点 (碗類17、甕類9)、粘土ブロック5点が出土している。いずれも細片で図示できない。

所見 時期は、出土土器が細片のため不明確であるが、出土土器及び遺構の様相から9世紀後葉と考えられる。



第64図 第19号住居跡実測図

第20号住居跡 (第65～69図)

位置 調査ⅡB区北部のK4g8区で、標高17.5mほどの平坦な低地上に位置している。

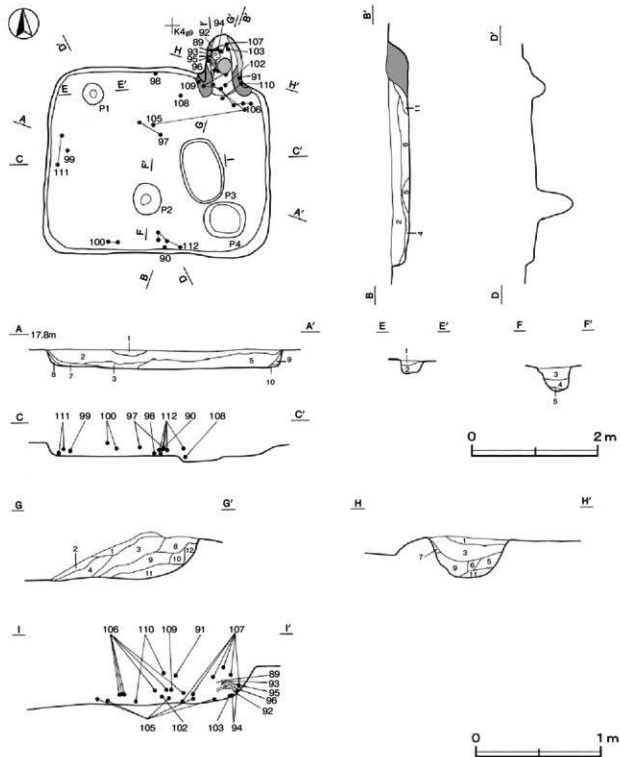
規模と形状 長軸3.6m、短軸3.0mの長方形で、主軸方向は $N-5^{\circ}-E$ である。壁高は20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

竈 北東コーナー部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで90cm、袖部幅90cmである。火床部は地山面をわずかに掘りくぼめて使用しており、火床面及び内壁は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ57cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------|-----------|---------------------------|
| 1 黒褐色 | 青灰色粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 灰黄褐色 | 焼土ブロック中量、青灰色粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 褐色 | 青灰色粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子・青灰色粘土粒子少量 | 8 にじみ黄褐色 | 焼土ブロック中量、青灰色粘土粒子微量 |
| 4 黒褐色 | 青灰色粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 にじみ黄褐色 | 焼土ブロック・青灰色粘土粒子少量 |
| 5 暗褐色 | 焼土ブロック中量、青灰色粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 10 にじみ黄褐色 | 焼土ブロック中量、青灰色粘土粒子少量 |
| | | 11 にじみ黄褐色 | 焼土ブロック・青灰色粘土ブロック少量 |
| | | 12 暗赤褐色 | 焼土粒子多量 |



第65図 第20号住居跡実測図

ピット 4か所。P1・P2は深さ20cm・58cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P3・P4は深さ10cmほどで、性格は不明である。

ピット土層解説 (P1・P2 共通)

- | | |
|-----------------------------|--------------------------|
| 1 褐色 青灰色粘土ブロック・焼土粒子少量 | 4 暗褐色 青灰色粘土ブロック少量、焼土粒子微量 |
| 2 褐色 青灰色粘土ブロック少量、焼土粒子微量 | 5 暗褐色 焼土粒子微量 |
| 3 褐色 青灰色粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化物微量 | |

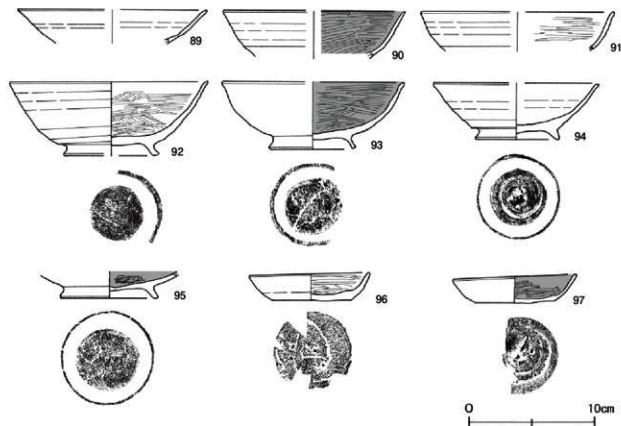
覆土 11層に分けられる。焼土粒子、炭化粒子を含み、不自然な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

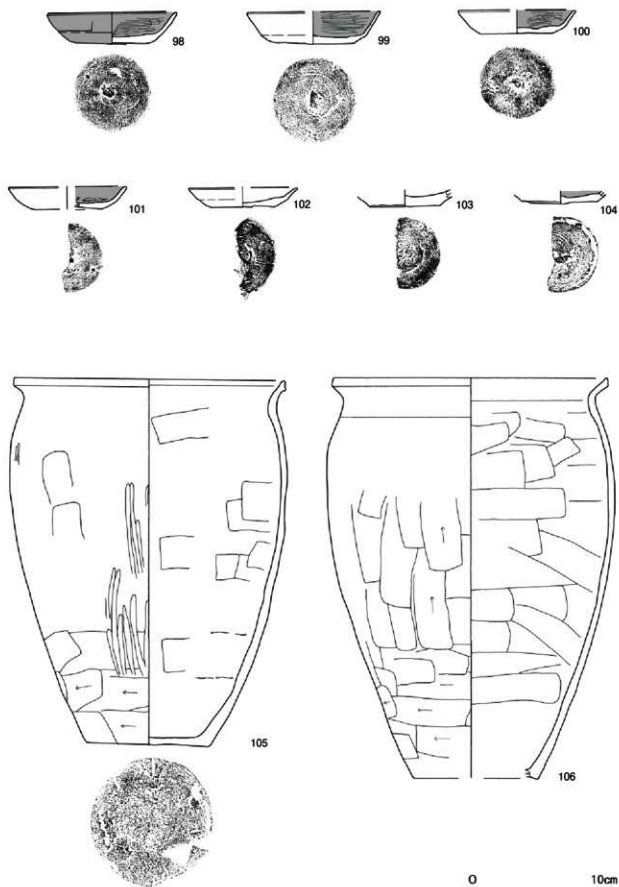
- | | |
|-----------------------------|--------------------------------|
| 1 黒褐色 青灰色粘土粒子少量 | 7 濃い黄褐色 炭化物中量、焼土粒子・青灰色粘土粒子少量 |
| 2 にぶい黄褐色 青灰色粘土粒子少量 | 8 黒褐色 青灰色粘土粒子少量 |
| 3 暗褐色 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 黒褐色 炭化粒子中量、焼土粒子・青灰色粘土粒子少量 |
| 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子微量 | 10 黒褐色 青灰色粘土粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 5 褐色 青灰色粘土ブロック、焼土粒子・炭化粒子少量 | |
| 6 暗褐色 青灰色粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 黒褐色 青灰色粘土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片447点(碗類161, 小皿48, 堿類231, 飯7), 鉄製品2点(不明), 細繩1点, 粘土塊4点が出土している。竈内、焚口部付近を中心に遺物が出土している。火床面奥からは92を最下部として96・95・93・89が順に重なった状態で出土しており、火熱を受けた痕跡があることから支脚として使用されていたと考えられる。竈内の土器は西壁際に寄っており、105・106は口縁部、体部を西に向けて倒れていることから、南東方向からの力を受けてつぶされたものと考えられる。90・112は南壁際中央部、98は北壁際中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。

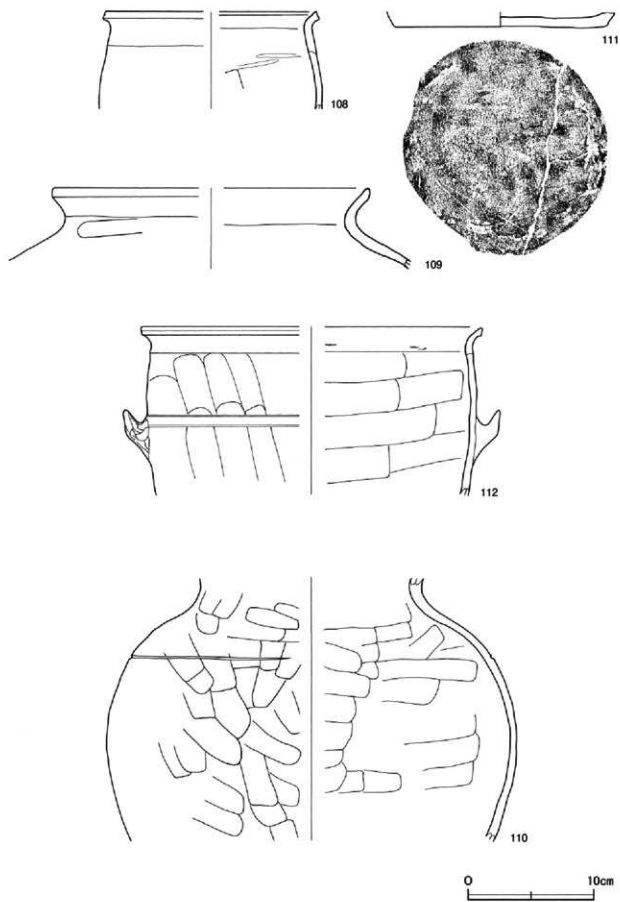
所見 時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。



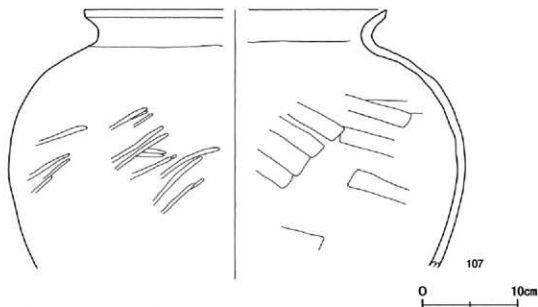
第66図 第20号住居跡出土遺物実測図1)



第67図 第20号住居跡出土遺物実測図(2)



第68図 第20号住居跡出土遺物実測図(3)



第69図 第20号住居跡出土遺物実測図(4)

第20号住居跡出土遺物観察表(第66～69図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
89	土師器	碗	[150]	(2.7)	-	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ	壺内	30%
90	土師器	碗	[14.2]	(3.8)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き	覆土下層	20%
91	土師器	碗	[15.2]	(3.1)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き	壺内	10%
92	土師器	高台付碗	15.7	5.9	7.2	雲母・長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台取り付け	壺内	90% PL40
93	土師器	高台付碗	[14.5]	5.4	6.8	雲母・長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台取り付け 体部外面磨減	壺内	70% PL40
94	土師器	高台付碗	[13.1]	4.5	6.5	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り後高台取り付け	壺内	40%
95	土師器	高台付碗	-	(2.1)	7.6	長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台取り付け	壺内	20%
96	土師器	小皿	9.5	2.3	5.9	雲母・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り	壺内	80% PL45
97	土師器	小皿	9.7	2.3	6.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り	覆土下層	90% PL45
98	土師器	小皿	10.3	2.5	6.3	雲母・長石	黒	良好	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り	覆土下層	90% PL45
99	土師器	小皿	[10.5]	2.6	6.4	雲母・長石	にぶい橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り	覆土下層	50%
100	土師器	小皿	[9.3]	1.9	5.7	長石・石英	にぶい橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り	覆土下層	30%
101	土師器	小皿	[9.4]	1.8	[5.4]	雲母・長石	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り	覆土中	40%
102	土師器	小皿	[8.8]	1.9	[5.2]	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	壺内	30%
103	土師器	小皿	-	(1.3)	5.6	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	壺内	30%
104	土師器	小皿	-	(0.9)	6.0	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	覆土中	30%
105	土師器	甕	21.4	29.2	9.8	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ磨り後ヘラ磨き 内面ヘラナデ 輪植痕	壺内・覆土下層	50% PL34
106	土師器	甕	21.6	31.8	[9.9]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ磨り 内面ヘラナデ	壺内・覆土下層	70% PL34
107	土師器	甕	[32.0]	(27.5)	-	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	体部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ	壺内	20%
108	土師器	甕	[16.8]	(7.7)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面横ナデ 内面ヘラナデ 輪植痕	床面	20%
109	土師器	甕	[25.0]	(6.4)	-	雲母・長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面横ナデ 体部外面上端ヘラナデ	壺内・覆土下層	5%
110	土師器	甕	-	(20.9)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ 体部内外面ヘラナデ 体部外面沈痕	壺内	20%
111	土師器	甕	-	(1.2)	17.0	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部ヘラナデ	覆土下層	10%
112	土師器	甕	[27.1]	(13.4)	-	長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内外面横ナデ 体部内外面ヘラナデ 体部外面上端2条の行交差 把手	壺内	10% PL36

第21号住居跡 (第70～72図)

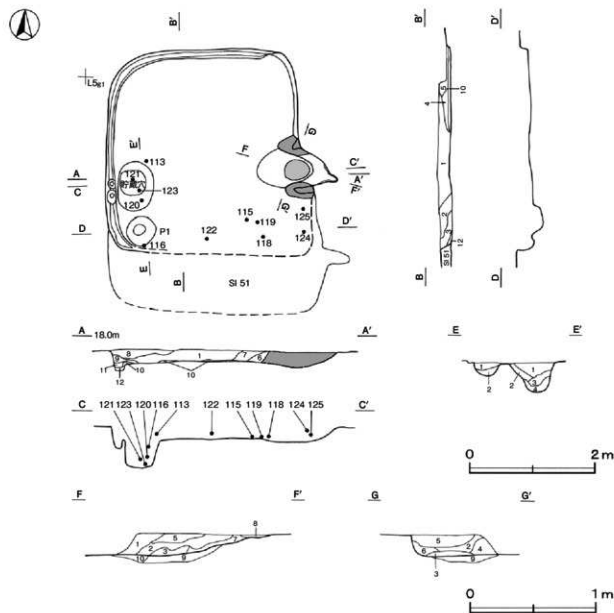
位置 調査ⅡB区中央部のL5g1区で、標高17.8mほどの平坦な低地上に位置している。

重複関係 第51号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.2m、短軸3.0mの方形で、主軸方向はN-90°-Eである。壁高は13cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。壁溝が南西コーナー部から北東コーナー部にかけて周回している。断面形はU字状である。

竈 東壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで130cm、袖部幅100cmである。火床部は床面と同じ高さの地山面を掘りくぼめて使用されており、火床面及び確認された煙道部先端まで火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ45cm掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。



第70図 第21号住居跡実測図

覆土層解説

- | | | | |
|----------|--------------------------|--------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子・白色粘土粒子少量 | 6 灰黄褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子・白色粘土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子・白色粘土粒子微量 | 7 黒褐色 | 焼土ブロック・青灰色粘土ブロック・炭化粒子少量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子少量、白色粘土粒子微量 | 8 黒褐色 | 白色粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 にぶい黄褐色 | 焼土ブロック中量 | 9 暗褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子・白色粘土粒子微量 |
| 5 黒褐色 | 炭化物中量、焼土ブロック少量 | 10 赤褐色 | 焼土粒子多量 |

ピット 深さ22cmで、配置から主柱穴と考えられる。

ピット土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|--------------------|
| 1 暗褐色 | 青灰色粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 2 暗褐色 | 青灰色粘土ブロック少量、炭化粒子微量 |
|-------|-------------------------|-------|--------------------|

貯蔵穴 西壁際中央部やや南寄りに位置している。長径80cm、短径58cmの楕円形で、深さは45cmである。

底面は皿状で、外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子微量 | 4 黒褐色 | 青灰色粘土粒子中量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 青灰色粘土ブロック・焼土粒子・炭化物微量 | | |
| 3 暗褐色 | 青灰色粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

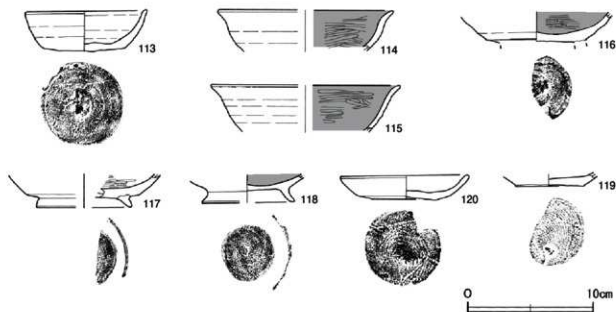
覆土 12層に分けられる。焼土・炭化物を含む不自然な堆積状況を示すことから、人為堆積と考えられる。

土層解説

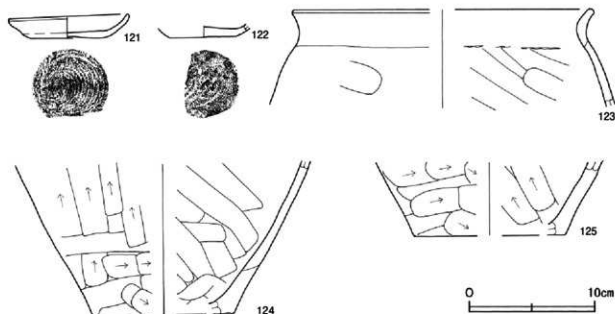
- | | | | |
|----------|-------------------------|-----------|-------------------------|
| 1 褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子少量 | 7 褐色 | 焼土ブロック少量、炭化粒子・青灰色粘土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子微量 | 8 褐色 | 焼土粒子・炭化物微量 |
| 3 にぶい黄褐色 | 青灰色粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 にぶい黄褐色 | 青灰色粘土粒子微量 |
| 4 にぶい黄褐色 | 青灰色粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 10 にぶい黄褐色 | 青灰色粘土粒子中量、焼土粒子微量 |
| 5 暗褐色 | 焼土ブロック・青灰色粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 11 にぶい黄褐色 | 青灰色粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 6 褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子・青灰色粘土粒子少量 | 12 暗褐色 | 青灰色粘土粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片182点（碗類107、小皿4、甕類71）、須恵器片3点（坏2、甕1）のほかに、混入した磁器片2点（皿）、鉄滓1点、粘土ブロック5点、細礫6点も出土している。113は貯蔵穴北側の覆土下層から斜位で、120・121・123は貯蔵穴の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀後葉から11世紀前葉と考えられる。



第71図 第21号住居跡出土遺物実測図(1)



第72図 第21号住居跡出土遺物実測図(2)

第21号住居跡出土遺物観察表(第71・72図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
113	土師器	環	9.6	3.4	6.6	雲母・長石・赤色砂子	明赤褐	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	覆土下層	100% PL38	
114	土師器	椀	[140]	(3.3)	-	雲母・長石・石英	橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き	覆土中	5%	
115	土師器	椀	[148]	(3.7)	-	雲母・長石・赤色砂子	橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き	床面	10%	
116	土師器	高台付椀	-	(2.3)	-	雲母・長石・石英・赤色砂子	にぶい赤褐	普通	内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台貼り付け 高台部分粗	貯蔵穴覆土上層	30%	
117	土師器	高台付椀	-	(2.7)	[7.8]	雲母・長石	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	覆土中	10%	
118	土師器	高台付椀	-	(2.3)	[7.2]	長石・石英	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	床面	20%	
119	土師器	小皿	-	(1.2)	3.4	雲母・赤色砂子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	床面	20%	
120	土師器	小皿	10.1	2.0	5.8	雲母・長石・石英・赤色砂子	にぶい橙	普通	ロクロナデ 底部回転糸切り	貯蔵穴覆土上層	90% PL45	
121	土師器	小皿	9.5	1.9	5.8	長石・赤色砂子	橙	普通	ロクロナデ 底部回転糸切り	貯蔵穴覆土上層	70% PL45	
122	土師器	小皿	-	(1.0)	5.2	長石・赤色砂子	橙	普通	底部回転ヘラ切り	覆土下層	10%	
123	土師器	甕	[236]	(7.8)	-	雲母・長石・石英・赤色砂子	明赤褐	普通	口縁部内外面ナデ ナデ 内面刷毛	貯蔵穴覆土上層	5%	
124	土師器	甕	-	(12.1)	[11.2]	長石・赤色砂子	橙	普通	体部外部下端ヘラ削り ナデ 刷毛	体部内面ヘラナデ	覆土中層	10%
125	土師器	甕	-	(5.8)	[12.0]	長石・石英・赤色砂子	明赤褐	普通	体部内外面下端ヘラ削り	覆土下層	5%	

第23号住居跡(第73・74図)

位置 調査ⅡB区中央部のK4h0区で、標高17.5mほどの平坦な低地上に位置している。

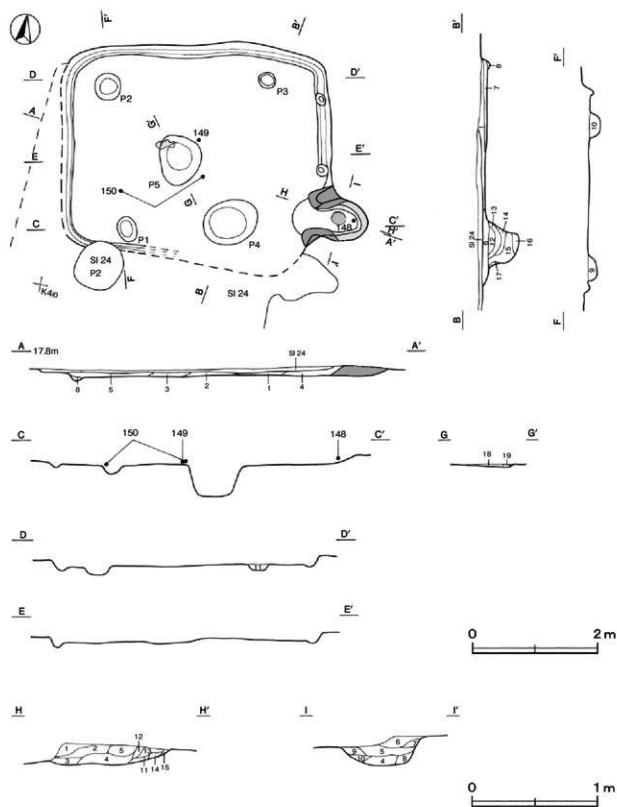
重複関係 第24号住居に掘り込まれている。

規模と形状 確認された範囲は長軸4.3m、短軸3.3mの長方形で、主軸方向はN-87°-Eである。壁高は10cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦である。壁溝が全周しており、断面形はU字状である。また、東壁際の壁溝内には、深さ10cmほどのピット状の掘り込みが確認された。

竈 東壁中央部から南寄りにつ設されている。規模は、焚口部から煙道部まで120cm、袖部幅94cmである。袖部は地山の粘土を掘り残して構築している。火床部は床面と同じ高さの地山面をわずかに掘りくぼめて使用

しており、火床面及び、内壁は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ68cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。



第73図 第23号住居跡実測図

覆土層解説

1	黒褐色	焼土粒子中量、炭化粒子・白色粘土粒子少量	7	暗褐色	焼土粒子・白色粘土ブロック微量
2	暗褐色	焼土ブロック中量、白色粘土粒子少量、炭化粒子微量	8	暗褐色	焼土ブロック、白色粘土粒子少量
3	黒褐色	白色粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	9	黒褐色	焼土ブロック中量、白色粘土粒子微量
4	暗褐色	焼土ブロック・白色粘土ブロック中量、炭化物少量	10	暗褐色	焼土粒子中量、炭化粒子微量
5	暗赤褐色	焼土ブロック中量、白色粘土粒子少量、炭化粒子微量	11	黒褐色	焼土粒子少量、白色粘土粒子微量
6	暗褐色	炭化粒子・白色粘土粒子少量、炭化物微量	12	黒褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、青灰色粘土粒子微量
			13	黒褐色	焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子少量
			14	極暗褐色	焼土粒子・青灰色粘土粒子少量、炭化粒子微量
			15	黒褐色	焼土粒子少量、炭化粒子・青灰色粘土粒子微量

ピット 5か所。P1～P3は深さ15cmほどで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P4は深さ50cmで、覆土に焼土、炭化物を含んでおり掘り方から柱穴とは考えられず性格は不明である。P5は深さ5cmで、覆土に焼土、炭化物を含み、北西部に赤変硬化した部分が確認され、置き竈等の使用も考えられるが性格は不明である。

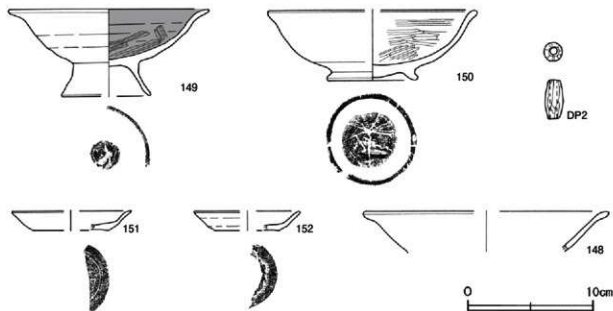
覆土 8層が確認された。層厚が薄く堆積状況は不明である。第9～19層はピットの土層である。

土層解説

1	暗褐色	焼土ブロック・炭化物・青灰色粘土粒子微量	12	暗褐色	青灰色粘土ブロック・焼土粒子少量、炭化物微量
2	暗灰黄色	炭化物・焼土粒子中量	13	暗褐色	焼土粒子・青灰色粘土粒子少量、炭化粒子微量
3	暗灰黄色	炭化物・焼土粒子少量	14	暗褐色	焼土ブロック中量、青灰色粘土ブロック・炭化物少量
4	暗灰黄色	焼土粒子中量、炭化粒子少量	15	暗褐色	焼土ブロック・炭化物少量、青灰色粘土ブロック微量
5	暗灰黄色	焼土粒子中量	16	黒褐色	焼土ブロック中量、青灰色粘土粒子少量、炭化粒子微量
6	暗褐色	焼土ブロック中量、炭化物少量	17	黒褐色	焼土粒子・炭化粒子微量
7	暗褐色	青灰色粘土ブロック中量	18	暗褐色	青灰色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
8	黒褐色	焼土粒子・青灰色粘土粒子少量	19	暗赤褐色	焼土粒子多量（粘土の赤変硬化層）
9	暗褐色	白色粘土粒子少量、炭化物微量			
10	灰黄褐色	白色粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量			
11	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子中量			

遺物出土状況 土師器片111点（碗類75、小皿2、甕類34）、須恵器片2点（甕）、管状土錘1点、不明鉄製品1点、銅型片3点、銅滓附着物4点、細礫3点が出土している。148は竈内から出土している。149はP5の北側から逆位で、150は南側から、それぞれ覆土下層から出土している。

所見 焼土や炭化物を含むP5の形状や、銅型片、銅滓附着物の出土など、近接する第1号工房跡と共通している。しかし、上面を第24号住居に掘り込まれており、遺物も流れ込んだ可能性が考えられるため、同様の施設であるかどうかは明確でない。時期は、出土土器から10世紀後葉から11世紀前葉と考えられる。



第74図 第23号住居跡出土遺物実測図

第23号住居跡出土遺物観察表(第74図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
148	土師器	椀	[19.0]	(3.2)	-	雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面横ナデ	竈内	10%
149	土師器	高台付椀	15.8	6.9	[6.9]	茶目・長石・赤色粒子	にぶい黄緑	普通	ロクロナデ 内面へラ磨き へラ切り後高台取付付け	底部回転 覆土下層	70% PL40
150	土師器	高台付椀	[16.4]	5.6	7.0	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄	普通	ロクロナデ 内面へラ磨き へラ切り後高台取付付け	底部回転 覆土下層	30%
151	土師器	小皿	[9.4]	1.6	[6.0]	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ 底部回転へラ切り	覆土中	20%
152	土師器	小皿	[8.4]	1.6	[5.0]	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ 底部回転へラ切り	覆土中	20%

番号	器種	長さ	最大径	孔径	高さ	材質	特徴	出土位置	備考
DP2	管状土師	3.2	1.4	0.6	5.6	土製	ナデ 一方からの穿孔	覆土中	PL54

第24号住居跡(第75・76図)

位置 調査ⅡB区中央部のK4h0区で、標高17.5mの平坦な低地上に位置している。

重複関係 第23号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 床面がほとんど露出した状態で確認されたため、残存する竈、ピット、貼床から範囲を推定した。確認された範囲は、長軸4.2m、短軸4.0mの方形で、主軸方向はN-90°-Eと推定される。

床 ほぼ平坦である。青灰色粘土で厚さ4cmの貼床である。

竈 東壁中央部やや南寄りに付設されていたと推定される。規模は、焚口から煙道部まで120cm、袖幅82cmほどである。火床部は床面と同じ高さの地山面を使用しており、火床面及び内壁は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ100cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|---------------------------------|----------------------------|
| 1 暗褐色 焼土粒子・青灰色粘土粒子少量 | 4 灰黄褐色 焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子微量 |
| 2 暗褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量、青灰色粘土粒子微量 | 5 暗灰黄色 焼土ブロック・青灰色粘土ブロック少量 |
| 3 暗褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子・青灰色粘土粒子微量 | |

ピット 2か所。P1は深さ15cmであり、規模と配置から主柱穴と考えられる。P2は深さ40cmで、焼土、炭化物を含む性格は不明である。

ピット土層解説

- | | |
|--------------------------------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 青灰色粘土粒子少量 | 3 暗褐色 焼土ブロック・白色粘土ブロック・炭化物微量 |
| 2 暗褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、白色粘土ブロック微量 | |

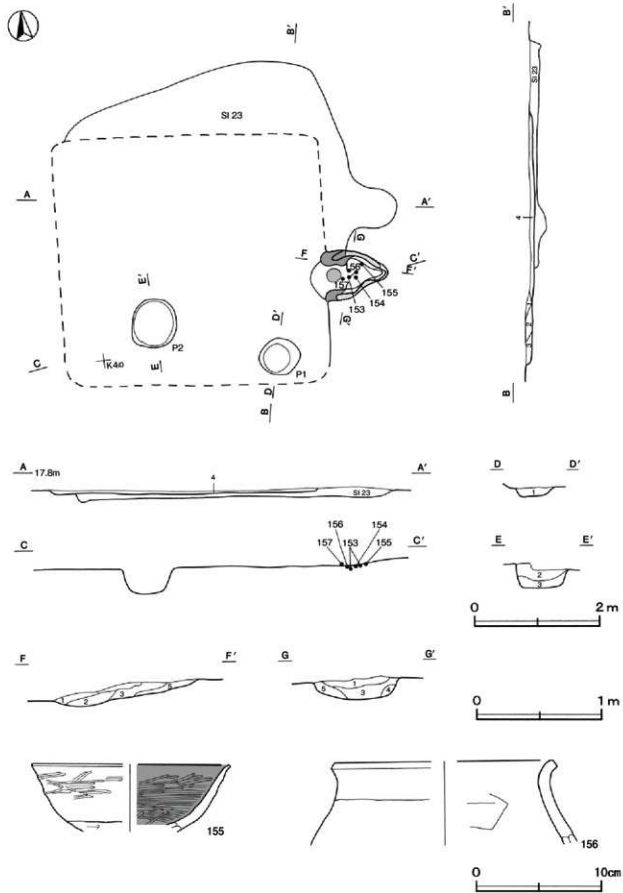
覆土 4層に分けられる。層厚が薄く堆積状況は不明である。第4層は貼床の構築土である。

土層解説

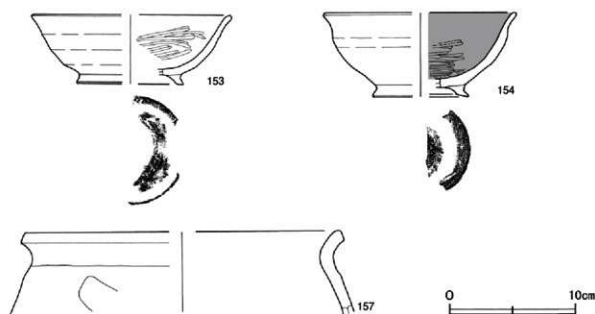
- | | |
|--------------------|-----------------------|
| 1 暗灰黄色 青灰色粘土粒子少量 | 3 暗灰黄色 焼土粒子・青灰色粘土粒子少量 |
| 2 暗灰黄色 青灰色粘土ブロック少量 | 4 灰黄色 青灰色粘土粒子多量 |

遺物出土状況 土師器片28点(椀類21、甕類7)、細片であるが銅片が付着した土師器片5点、鉄洋1点、細線2点が出土している。削平されているため遺物は少ない。153～157は竈内からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器と重複関係から11世紀前半以降と考えられる。



第75图 第24号住居跡・出土遺物実測図



第76図 第24号住居跡出土遺物実測図

第24号住居跡出土遺物観察表 (第75・76図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
153	土師器	高台付碗	[15.7]	5.5	[7.9]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き ヘラ切り後高台取り付け	底面回転	壺内 40% PL40
154	土師器	高台付碗	[15.3]	6.7	[7.6]	長石・石英	橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き ヘラ切り後高台取り付け	底面回転	壺内 30%
155	土師器	高台付碗	[15.6]	5.3	-	長石・赤色粒子	にぶい・橙	普通	ロクロナデ	内外面ヘラ磨き	壺内 30%
156	土師器	甕	[17.0]	(6.7)	-	雲母・長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ	体部内面ヘラナデ	壺内 5%
157	土師器	甕	[24.2]	(6.7)	-	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ	体部外面ヘラナデ	壺内 20%

第25号住居跡 (第77図)

位置 調査ⅡB区中央部のK5j1区で、標高17.6mほどの平坦な低地上に位置している。

重複関係 第45号住居に掘り込まれている。また、北東部は擾乱を受けている。

規模と形状 重複と擾乱のため、確認された範囲は長軸3.4m、短軸2.7mである。平面形は方形または長方形と推定され、主軸方向はN-97°-Eである。

床 ほぼ平坦である。

ピット 深さ15cmで、性格は不明である。

ピット土層解説

- 1 褐色 青灰色粘土粒子微量 2 褐色 炭化粒子・青灰色粘土粒子少量

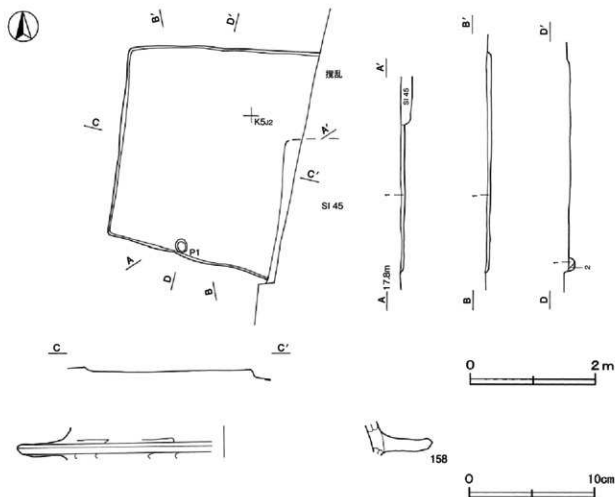
覆土 単一層で、層厚が薄く、堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 褐色 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片5点(椀類1、甕類1、羽釜3)が出土している。I58は覆土中から出土している。

所見 時期は出土土器が少なく明確ではないが、重複関係と出土土器から10世紀後半と考えられる。



第77図 第25号住居跡・出土遺物実測図

第25号住居跡出土遺物観察表 (第77図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
158	土陶器	羽釜	-	(25)	-	長石・石英	明赤褐色	普通	体部(露部)外面ヘラナデ	覆土中	5%

第26号住居跡 (第78図)

位置 調査ⅡB区中央部のK4区で、標高17.5mほどの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 ほは床面が露出した状態で確認された。確認された範囲は、長軸3.7m、短軸2.5mである。平面形は長方形で、主軸方向は $N-90^{\circ}-E$ と推定される。

床 ほは平坦である。

竈 東壁中央部に付設されている。削平されているため明確ではないが、確認された規模は、焚口部から煙道部まで40cmである。火床部は地山面をわずかに掘りくぼめて使用しており、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ50cm掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっているものと推定される。

竈土層解説

- | | | | | | |
|---|------|-----------------------|---|-----|-----------------------|
| 1 | 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子少量 | 3 | 黒褐色 | 焼土粒子少量、炭化粒子・青灰色粘土粒子微量 |
| 2 | 黒褐色 | 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 | 暗褐色 | 焼土ブロック少量、青灰色粘土粒子微量 |

ピット 4か所。P1～P4は深さ15～26cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。

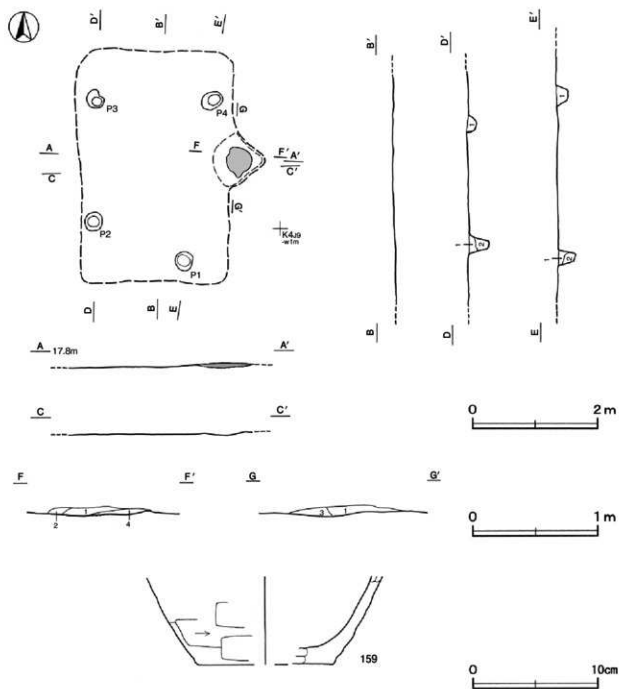
ピット土層解説 (P1～P4共通)

1 褐色 焼土粒子・青灰色粘土粒子微量

2 灰褐色 焼土粒子少量、炭化粒子・青灰色粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片16点(椀類9、甕類7)が出土している。竈内を中心に出土しているが、いずれも細片である。159は竈の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器が少なく明確ではないが、出土土器及び遺構の様相から10世紀後半以降と考えられる。



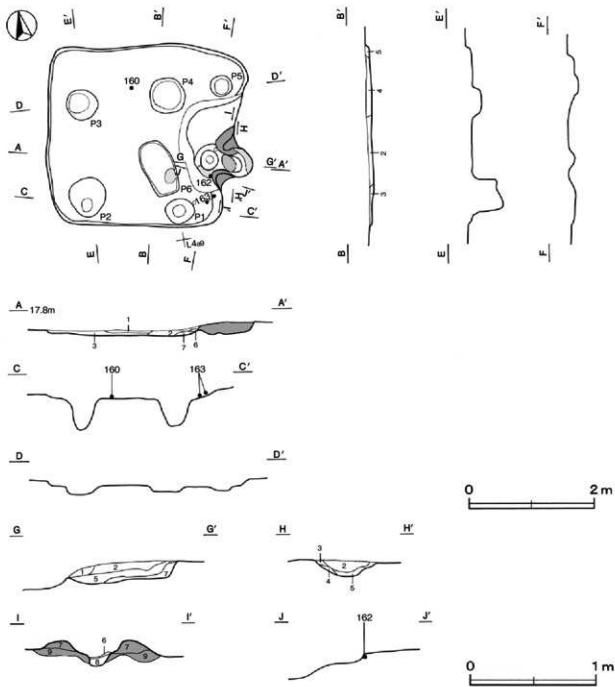
第78図 第26号住居跡・出土遺物実測図

第26号住居跡出土遺物観察表(第78図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
159	土師器	甕	-	(6.9)	[10.5]	長石・石英	にぶい黒	普通	体部外面下端へう割り	覆土中	5%

第27号住居跡(第79・80図)

位置 調査ⅡB区中央部のK4j8区で、標高17.5mの平坦な低地上に位置している。



第79図 第27号住居跡実測図

規模と形状 長軸3.2m、短軸2.9mの長方形で、主軸方向はN-105°-Eである。壁高は10cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。東壁中央部付近から竈右袖部付近にかけて高さ10cmほどの高まりが確認されている。

竈 東壁中央部やや南寄りに付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで94cm、袖部幅95cmである。袖部は、地山である青灰色粘土を掘り残して基部とし、その上部に黒褐色土と粘土を貼り付けて構築している。火床部は床面と同じ高さの地山面を使用しており、火床面及び内壁は火熱を受けて赤変硬化している。火床部手前に赤変硬化しているくぼみが確認され、火床部を奥へ移動させた後、灰の掻き出し口として使用した可能性が考えられる。煙道部は壁外へ38cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|-----------------------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量 | 5 暗褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量 |
| 2 褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子微量 | 6 暗褐色 焼土粒子中量、炭化粒子微量 |
| 3 褐色 焼土ブロック・青灰色粘土粒子少量 | 7 黒褐色 青灰色粘土ブロック・焼土粒子少量 |
| 4 暗褐色 焼土粒子・青灰色粘土粒子少量 | 8 暗褐色 焼土粒子中量、炭化粒子・青灰色粘土粒子少量 |
| | 9 灰色 青灰色粘土粒子多量 |

ピット 6か所。P 1～P 4は深さ15～45cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 5・P 6は深さ5～10cmで性格は不明である。

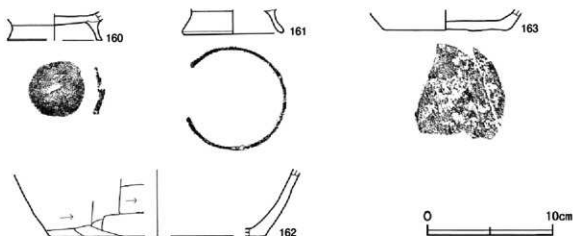
覆土 7層に分けられる。各層に焼土を多く含む不自然な堆積状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|---------------------------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 焼土粒子・青灰色粘土粒子微量 | 5 暗褐色 青灰色粘土ブロック少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 焼土ブロック・青灰色粘土粒子少量 | 6 におい黄褐色 焼土粒子・青灰色粘土粒子微量 |
| 3 灰黄褐色 青灰色粘土粒子中量 | 7 におい黄褐色 青灰色粘土ブロック中量、焼土粒子微量 |
| 4 におい黄褐色 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片59点（椀類19、甕類40）、須臾器片1点（甕）、平瓦片1点が出土している。遺物は南東コーナー付近を中心に出土している。160は北壁の中央部付近、163は南東コーナー部壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。162は竈の袖部から出土しており、補強材として使用されていたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から10世紀前半と考えられる。



第80図 第27号住居跡出土遺物実測図

第27号住居跡出土遺物観察表(第80図)

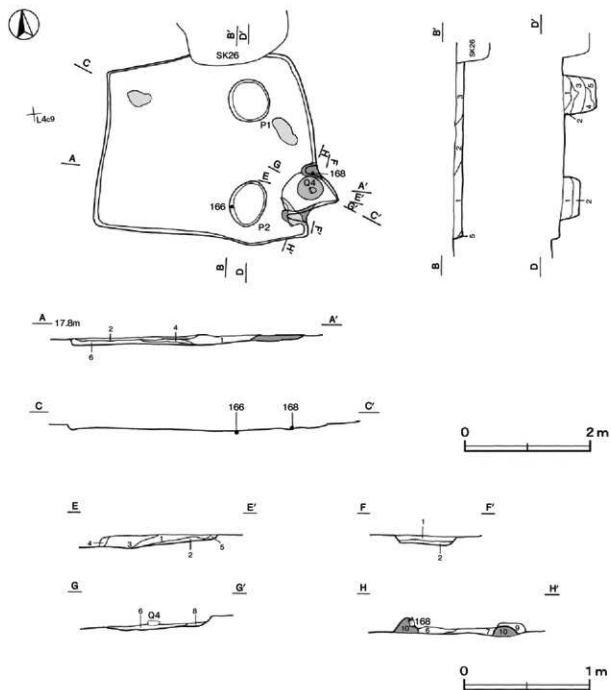
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
160	土師器	高台付椀	-	(2.2)	[7.5]	長石・石英	におい橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	覆土下層	10%
161	土師器	高台付椀	-	(1.9)	7.8	長石・赤色粒子	におい橙	普通	高台部内外面ナデ	覆土中	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
162	土師器	甕	-	(5.3)	[16.7]	長石・赤色粒子	にぶい陶	普通	体部外面下端へう割り	甕袖部	5%
163	土師器	甕	-	(1.7)	[9.8]	石質・赤色粒子	にぶい陶	普通	体部外面下端へう割り	甕土下層	5%

第26号住居跡 (第81～83図)

位置 調査ⅡB区中央部のL4c9区で、標高17.6mの平坦な低地上に位置している。

重複関係 北部を第26号土坑に掘り込まれている。



第81図 第26号住居跡実測図

規模と形状 長軸3.3m、短軸3.0mの長方形で、主軸方向はN-105°-Eである。壁高は10cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

竈 南東コーナー部寄りに付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで90cm、袖部幅100cmである。袖部は、地山である青灰色粘土、焼土及び炭化粒子が混じった灰黄色土で構築されており、左袖部は高台付椀を埋め込んで補強している。火床部は床面と同じ高さの地山面を使用しており、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ50cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|-----------------------------|--------------------------------|
| 1 にぶい黄褐色 青灰色粘土中量、焼土ブロック少量 | 7 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子少量 |
| 2 にぶい黄褐色 焼土ブロック中量、青灰色粘土粒子少量 | 8 暗褐色 焼土粒子少量、青灰色粘土粒子微量 |
| 3 褐色 焼土ブロック中量、青灰色粘土粒子少量 | 9 にぶい赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子・青灰色粘土粒子微量 |
| 4 褐色 焼土粒子・青灰色粘土粒子少量 | 10 暗灰黄色 青灰色粘土中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 5 にぶい黄褐色 焼土ブロック中量 | |
| 6 にぶい赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子微量 | |

ビット 2カ所。P1・P2は深さ35cm～55cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。

ビット土層解説 (P1・P2共通)

- | | |
|------------------------------|----------------------|
| 1 暗褐色 焼土ブロック中量、炭化物・青灰色粘土粒子少量 | 4 黒褐色 焼土粒子・青灰色粘土粒子微量 |
| 2 黒褐色 焼土ブロック少量、青灰色粘土粒子微量 | 5 黄褐色 黄褐色粘土粒子少量 |
| 3 黒褐色 焼土粒子少量、青灰色粘土粒子微量 | |

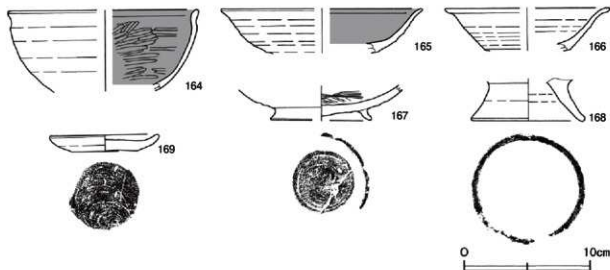
覆土 6層に分けられる。層厚が薄く明確ではないが、各層に焼土粒子、炭化粒子を含み、不自然な堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

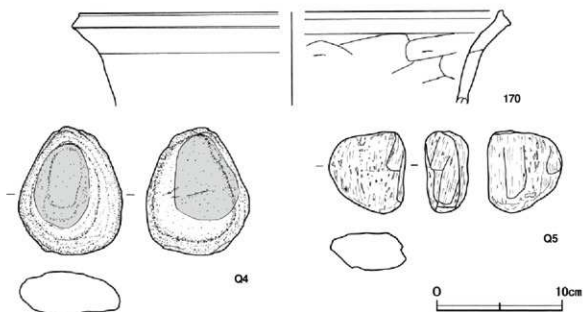
- | | |
|-------------------------------|------------------------------|
| 1 褐色 焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子微量 | 4 暗灰黄色 炭化粒子少量、焼土粒子・青灰色粘土粒子微量 |
| 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子微量 | 5 暗灰黄色 青灰色粘土ブロック少量、焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量、青灰色粘土粒子微量 | 6 暗灰黄色 青灰色粘土ブロック少量、焼土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片143点(椀類61、小皿14、甕類68)、須恵器片7点(甕)、石製品1点(支脚)、軽石1点、粘土ブロック2点が出土している。166・169はP2の覆土上層から出土している。168は竈の左袖部から横位で出土し、補強材として使用されていたものである。Q4は火床部から出土し、火熱を受けていることから支脚として使用されていたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から11世紀前半以降と考えられる。



第82図 第28号住居跡出土遺物実測図(1)



第83図 第28号住居跡出土遺物実測図②

第28号住居跡出土遺物観察表 (第82・83図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
164	土師器	碗	[150]	(6.5)	-	長石	橙	普通	ロクロナデ 内面へう磨き	覆土中	10%
165	土師器	碗	[160]	(3.5)	-	雲母・長石	灰黄褐	普通	ロクロナデ	覆土中	10%
166	土師器	碗	[130]	3.5	-	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ	2層土上層	10%
167	土師器	高台付碗	-	(2.8)	[8.6]	雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内面へう磨き 底部回転へう切り 縁高台張り付け	覆土中	20%
168	土師器	高台付碗	-	(3.4)	8.8	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	高台部内外面ナデ	竜輪部	20%
169	土師器	小皿	8.6	1.3	5.2	雲母・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土中	70%
170	土師器	葉	[337]	(7.4)	-	長石・赤色粒子	にぶい赤黄	普通	口縁部内外面横ナデ 縁磨肌	覆土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q4	支脚	102	8.3	3.4	391	雲母片岩	台形状に成形 火熱痕	壺内	
Q5	浮子*	6.5	6.1	3.5	36.8	軽石	顔り肌	覆土中	

第29号住居跡 (第84・85図)

位置 調査ⅡB区中央部のL5c2区で、標高17.7mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 層厚が薄く床面がほとんど露出した状態で確認されたため、残存する土層と竈、ピットの位置から規模を判断した。また、西部は攪乱を受けているため、確認された規模は、南北軸3.1m、東西軸1.9mである。平面形は長方形又は方形と推定され、主軸方向は $N-90^{\circ}-E$ である。壁高は5cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

竈 確認された火床部から推定すると、東壁中央部やや北寄りに付設されていたと考えられる。確認された規模は、焚口部から煙道部まで80cmほどである。火床部は床面とほぼ同じ高さの面を使用しており、火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、青灰色粘土粒子微量 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子微量
2 赤褐色 焼土粒子多量

ピット 深さ25cmで、配置から主柱穴と考えられる。

ピット土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子微量 2 灰黄褐色 青灰色粘土粒子中量

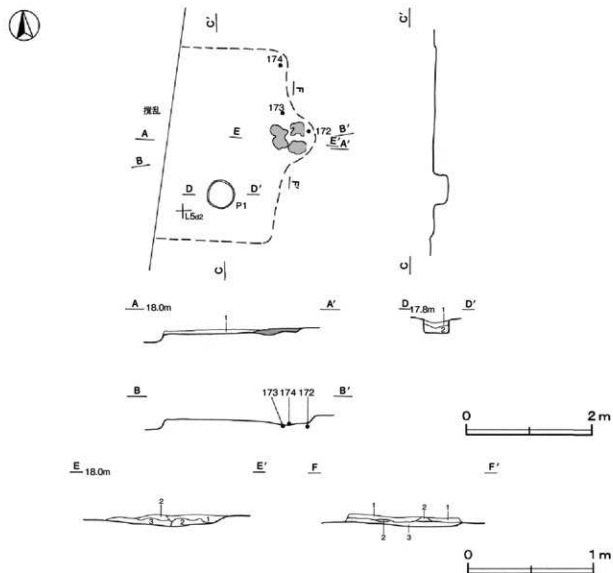
覆土 単一層で、層厚が薄く、堆積状況は不明である。

土層解説

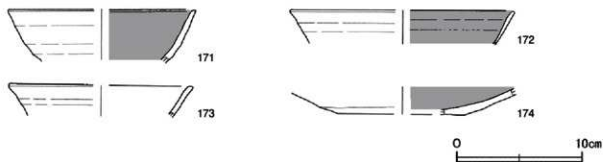
- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、青灰色粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片43点（椀類24、小皿1、甕類18）が出土している。172は竈内、173は竈の左袖部付近、174は北東コーナー部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀前半と考えられる。



第84図 第29号住居跡実測図



第85図 第29号住居跡出土遺物実測図

第29号住居跡出土遺物観察表(第85図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
171	土師器	椀	[15.0]	(4.1)	-	長石・赤色粒子	にひい黄褐色	普通	ロクロナデ	覆土中	10%
172	土師器	椀	[17.8]	(2.7)	-	雲母・赤色粒子	にひい黄褐色	普通	ロクロナデ 内面へう磨き	竈内	10%
173	土師器	椀	[14.6]	(2.5)	-	雲母・赤色粒子	にひい黄褐色	普通	ロクロナデ	覆土下層	10%
174	土師器	皿	-	(2.2)	[9.8]	雲母・長石	浅黄	普通	ロクロナデ	覆土下層	10%

第30号住居跡(第86図)

位置 調査ⅡB区中央部のL4e8区で、標高17.7mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 長軸3.8m、短軸3.3mの長方形で、主軸方向はN-90°-Eである。壁高は12cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

竈 東壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで90cm、袖部幅115cmである。火床部は床面と同じ高さの地山面をわずかに掘りくぼめて使用しており、火床面は火熱を受けて赤変し、内壁は赤変硬化している。煙道部は壁外へ50cmほど掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|-------------------------------|-------------------------|
| 1 暗褐色 焼土ブロック・青灰色粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 5 灰黄褐色 焼土粒子中量、青灰色粘土粒子少量 |
| 2 黒褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子・青灰色粘土粒子微量 | 6 灰黄褐色 青灰色粘土粒子中量、焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 青灰色粘土粒子少量、焼土ブロック微量 | 7 褐灰色 青灰色粘土粒子中量、焼土粒子少量 |
| 4 褐灰色 焼土粒子・青灰色粘土粒子少量 | 8 暗赤褐色 焼土ブロック中量 |
| | 9 黒褐色 焼土ブロック少量 |

ビット 3か所。P1~P3は深さ33~40cmであり、規模と配置から支柱穴と考えられる。

ビット土層解説

- | | |
|------------------|--------------------|
| 1 褐色 焼土粒子微量 | 3 灰黄褐色 青白色粘土ブロック中量 |
| 2 灰黄褐色 青灰色粘土粒子中量 | |

覆土 7層に分けられる。各層に焼土や炭化粒子を含む不自然な堆積状況から、人為堆積と考えられる。

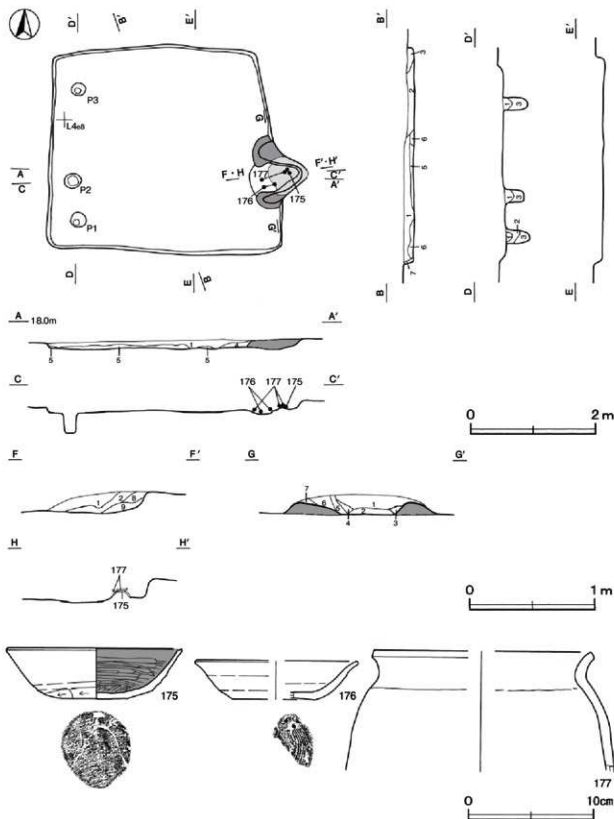
土層解説

- | | |
|-----------------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、青灰色粘土粒子微量 | 5 褐色 焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子微量 |
| 2 暗褐色 青灰色粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 黄灰色 青灰色粘土粒子中量 |
| 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子微量 | 7 暗褐色 青灰色粘土粒子少量 |
| 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子中量、青灰色粘土粒子少量 | |

遺物出土状況 土師器片104点(椀類61、甕類43)、須恵器片1点(甕)、灰釉陶器片1点(甕)、粘土ブロック7点が出土している。遺物はほぼ全域から出土しているが、ほとんど細片である。175は竈内から逆位で出土し、その上に177の破片を重ねた状態で出土しており、火熱を受けていることから支脚として使用されたと考えら

れる。

所見 時期は、出土土器から10世紀前半と考えられる。



第86図 第30号住居跡・出土遺物実測図

第30号住居跡出土遺物観察表(第86図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
175	土師器	坏	139	4.0	3.2	灰褐色・黒色粘土・赤土・赤色粘土	にぶい黄褐色	普通	ロクロナデ 底面回転ナデ 内面へ方筒を、底面側より内側へ方筒のへず削ぎ	壺内	90% PL38
176	土師器	坏	[130]	[3.1]	[6.4]	灰石・黒色粘土	にぶい赤褐色	普通	ロクロナデ 底面回転糸切り	壺内	30%
177	土師器	甕	[172]	(9.5)	-	赤褐色・灰石・赤土・赤色粘土	橙	普通	口縁部内外面横ナデ	壺内	20%

第31号住居跡(第87・88図)

位置 調査ⅡB区中央部のL5d4区で、標高17.6mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 長軸3.5m、短軸2.9mの長方形で、主軸方向はN-13°-Wである。壁高は25～29cmで外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで90cm、袖部幅100cmである。火床部は床面と同じ高さの地山面をわずかに掘りくぼめた面を使用しており、火床面及び内壁は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ58cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|-------------------------|----------|---------------------------|
| 1 褐色 | 焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 6 褐色 | 焼土粒子・炭化粒子中量、青灰色粘土粒子少量 |
| 2 にぶい黄褐色 | 焼土粒子・青灰色粘土粒子微量 | 7 にぶい黄褐色 | 焼土粒子中量、青灰色粘土粒子中量、炭化粒子少量 |
| 3 褐色 | 焼土ブロック中量 | | |
| 4 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子中量 | 8 褐色 | 焼土ブロック多量、炭化粒子少量、青灰色粘土粒子微量 |
| 5 にぶい黄褐色 | 焼土ブロック・青灰色粘土粒子少量、炭化粒子微量 | | |

ビット 3か所。P1・P2は深さ20cm・25cmで、竈前面に位置し、灰や焼土、炭化粒子を多く含んでいるため灰などを廃棄したビットの可能性が考えられる。P3は深さ17cmで、焼土や炭化粒子を含んでいるが、性格は不明である。

ビット土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------|-------|---------------------|
| 1 褐色 | 青灰色粘土粒子中量 | 6 灰黄色 | 青灰色粘土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、青灰色粘土粒子微量 | 7 褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子微量 |
| 3 褐色 | 青灰色粘土粒子少量 | 8 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子少量 |
| 4 褐色 | 焼土ブロック・焼土粒子少量 | | |
| 5 暗褐色 | 焼土ブロック・炭化物中量、青灰色粘土ブロック少量 | | |

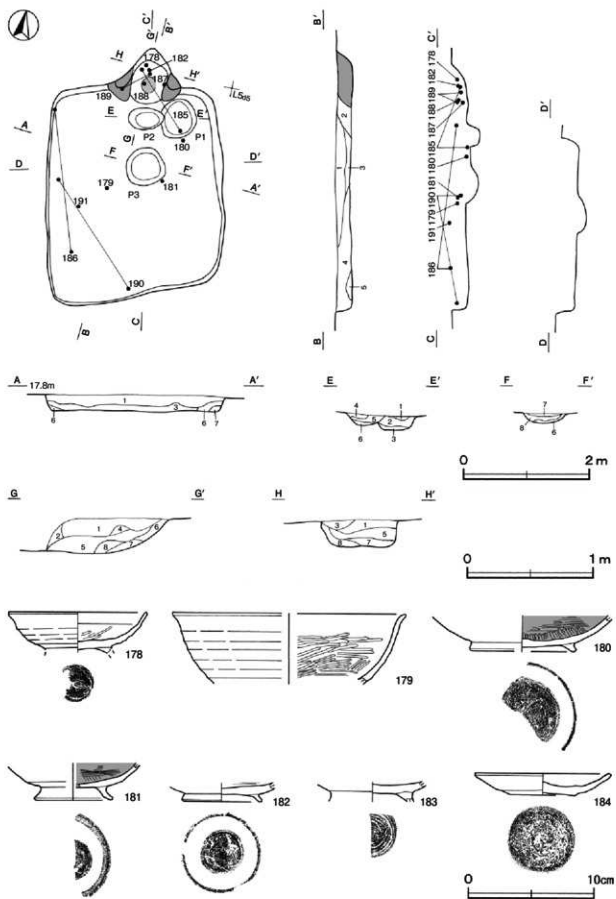
覆土 7層に分けられる。各層に焼土、炭化物を含む人為堆積と考えられる。

土層解説

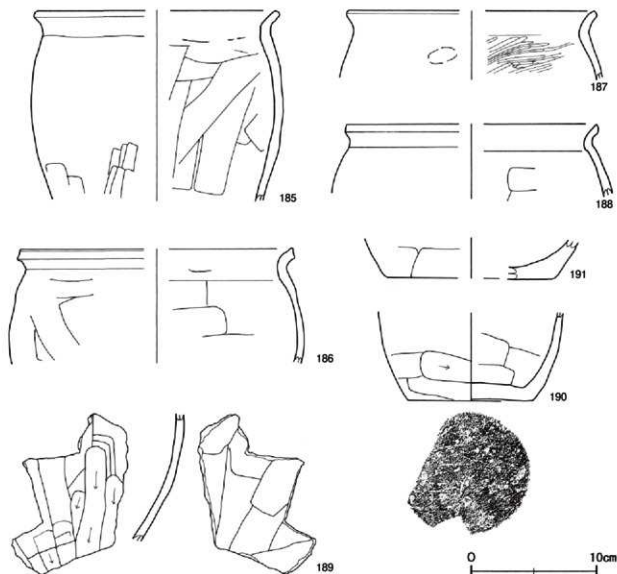
- | | | | |
|----------|------------------------|----------|----------------------|
| 1 褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量 | 5 灰黄褐色 | 白色粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、白色粘土粒子微量 | 6 褐色 | 白色粘土粒子中量 |
| 3 にぶい黄褐色 | 白色粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 7 にぶい黄褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量 |
| 4 暗褐色 | 白色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片234点(輪類88、小皿8、甕類138)、須恵器片3点(坏1、甕2)、鉄製品6点(不明)、粘土塊2点、細礫1点が出土している。遺物は覆土上層から下層にかけて出土しており、住居が埋没する過程で流れ込んだ様相を示している。178・182・187・188は壺内、180は北東コーナー部の床面からそれぞれ出土している。また、185と189は壺内から出土しており、袖部の補強材とした土器片及び、床面から出土した破片がそれぞれ接合したものである。179・181は中央部の覆土中層、184は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から11世紀前半以降と考えられる。



第87图 第31号住居跡・出土遺物実測図



第88図 第31号住居跡出土遺物実測図

第31号住居跡出土遺物観察表 (第87・88図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
178	土師器	高台付碗	11.0	(3.4)	-	雲母・長石	にぶい褐	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き ヘラ切り後高台貼り付け	底部回転 壺内	45% PL40
179	土師器	高台付碗	[18.6]	(5.6)	-	雲母・長石	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き	覆土中層	20%
180	土師器	高台付碗	-	(2.9)	[8.4]	雲母・石英	橙	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り 後高台貼り付け	床面	10%
181	土師器	高台付碗	-	(3.0)	[6.0]	石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り 後高台貼り付け	覆土中層	20%
182	土師器	高台付碗	-	(1.5)	6.2	雲母・長石	にぶい褐	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り 後高台貼り付け	壺内	20%
183	土師器	高台付碗	-	(1.7)	-	雲母・赤色粒子	灰褐	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	覆土中	10%
184	土師器	小皿	10.5	1.7	5.2	雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	覆土中	80% PL45
185	土師器	甕	[19.0]	(15.2)	-	雲母・長石・ 石英	橙	普通	口縁部内外面横ナデ 体部内外面ヘラ ナデ	壺内・床面	10%
186	土師器	甕	[21.5]	(9.1)	-	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ 体部内外面ヘラ ナデ 輪痕痕	覆土上層	10%
187	土師器	甕	[20.0]	(5.5)	-	雲母・石英	明赤褐	普通	体部内面ヘラ磨き 外面指頭痕	壺内	5%
188	土師器	甕	[20.0]	(5.8)	-	長石・石英	にぶい褐	普通	口縁部内外面横ナデ 体部内面ヘラナデ	壺内	5%
189	土師器	甕	-	(10.1)	-	長石・石英・ 赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ磨り 内面ヘラナデ	壺内	5%
190	土師器	甕	-	(7.0)	10.0	雲母・石英	明赤褐	普通	体部外面下端ヘラ磨り 内面ヘラナデ	覆土中一 下層	10%
191	土師器	甕	-	(2.3)	[13.1]	雲母・長石・ 石英	黒褐	普通	体部外面下端ヘラナデ	覆土上層	5%

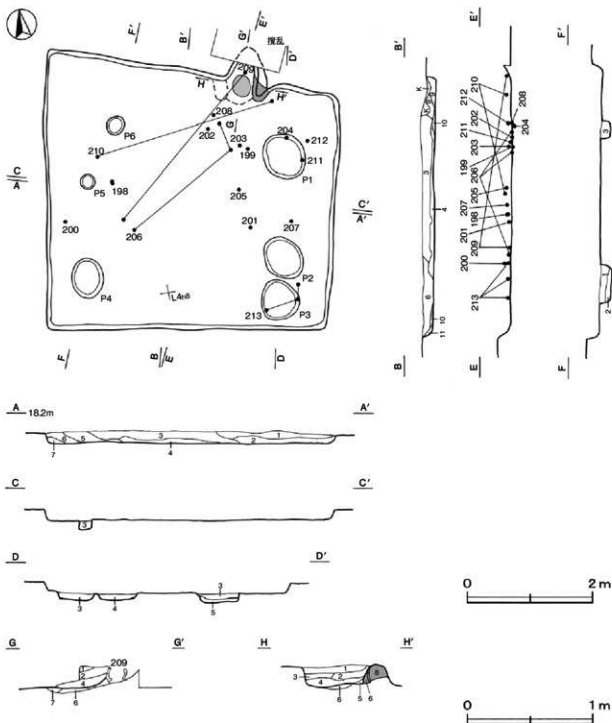
第33号住居跡 (第89～92図)

位置 調査ⅡB区中央部のL4g8区で、標高17.9mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 長軸4.6m、短軸4.1mの長方形で、主軸方向はN-20°-Eである。壁高は14～18cmで外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦である。

竈 東壁中央部の確認面に焼土が確認されたため、竈の作り替えを想定して調査を進めたが、火床部や煙道部



第89図 第33号住居跡実測図

が確認されず、竈として捉えられなかった。北壁中央部やや東寄りに付設されている。規模は、煙道部先端が攪乱を受けており、確認されたのは、焚口部から煙道部まで95cmほどで、左袖部は壊されており確認できなかった。右袖部は、地山の粘土を掘り残して基部とし、その上に粘土と焼土、炭化粒子を含んだ青灰色粘土主体の土を積み重ねて構築され、補強材として土師器甕片を使用している。火床部は床面と同じ高さの地山面をわずかに掘りくぼめて使用しており、火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- | | |
|---------------------------------|--------------------------------|
| 1 褐 色 焼土粒子中量、青灰色粘土ブロック・炭化粒子微量 | 4 暗 褐 色 焼土粒子少量、青灰色粘土粒子微量 |
| 2 暗 褐 色 焼土粒子多量、炭化粒子少量、青灰色粘土粒子微量 | 5 暗 褐 色 焼土ブロック中量 |
| 3 灰 黄 褐色 焼土粒子・青灰色粘土粒子微量 | 6 暗 赤 褐色 焼土粒子多量（粘土の赤変硬化層） |
| | 7 灰 褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量 |
| | 8 灰 黄 褐色 青灰色粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |

ピット 6か所。P1・P3・P4は、深さ15～20cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P2・P5・P6は深さ15～20cmで、補助柱穴の可能性が考えられる。

ピット土層解説 (P1～P6共通)

- | | |
|-----------------------------------|----------------------------------|
| 1 暗 褐 色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量、青灰色粘土粒子微量 | 4 にいり黄褐色 焼土粒子少量、青灰色粘土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 にいり黄褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、青灰色粘土粒子微量 | 5 灰 黄 褐色 青灰色粘土ブロック中量、焼土粒子微量 |
| 3 暗 褐 色 焼土粒子・青白色粘土粒子少量、炭化粒子微量 | |

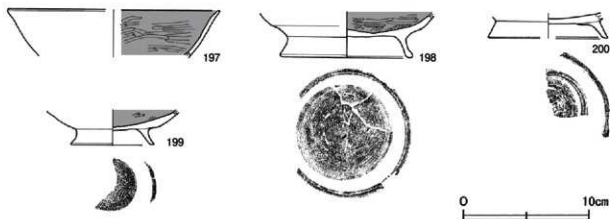
覆土 11層に分けられる。各層に焼土、炭化物を含み、ブロック状の堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

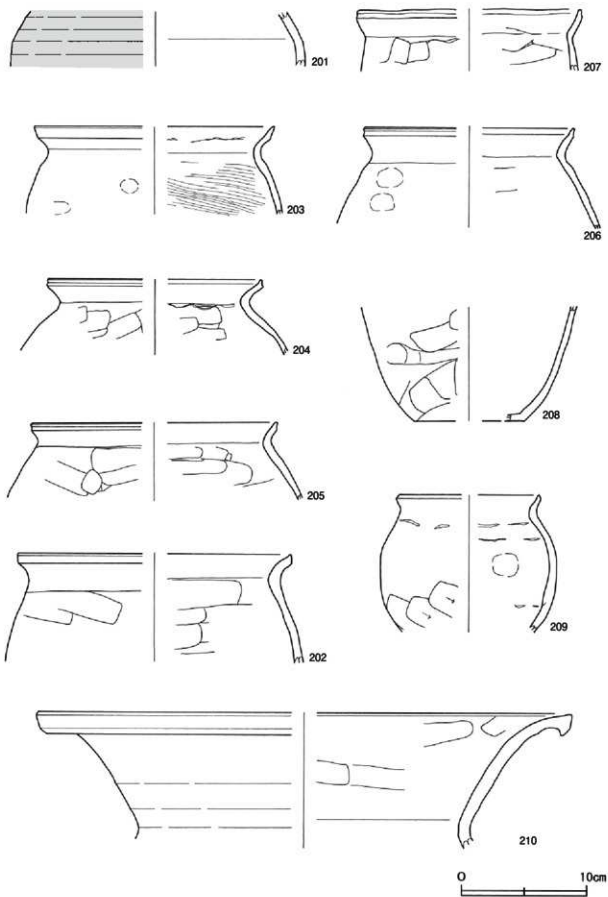
- | | |
|---------------------------------|----------------------------------|
| 1 暗 褐 色 焼土ブロック・炭化粒子・青灰色粘土粒子少量 | 6 黒 褐色 青灰色粘土ブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗 褐 色 焼土ブロック・炭化物・青灰色粘土粒子少量 | 7 黒 褐色 灰色粘土ブロック・焼土粒子微量 |
| 3 黒 褐色 焼土ブロック・青灰色粘土ブロック少量、炭化物微量 | 8 黒 褐色 焼土粒子・青灰色粘土粒子微量 |
| 4 黒 褐色 焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子少量 | 9 黒 褐色 青灰色粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 5 暗 褐 色 青灰色粘土ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 10 黒 褐色 青灰色粘土粒子少量 |
| | 11 黒 褐色 青灰色粘土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片433点（碗類88、甕類345）、須恵器片19点（甕）、灰陶器片1点（甕）、鉄製品2点（釘、不明）、粘土ブロック8点が出土している。遺物はほぼ全域から散在して出土している。198・200は西壁中央部付近の覆土下層、204はP1内、199・202は竈手前、206は中央部南西寄りの床面からそれぞれ出土している。209は竈火床部の奥に逆位で据えられた状態で出土し、支脚として使用されたものと考えられる。210は竈右袖付近の破片と西壁中央部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。211・212は北東コーナー部、213はP3周辺の覆土下層からそれぞれ出土している。

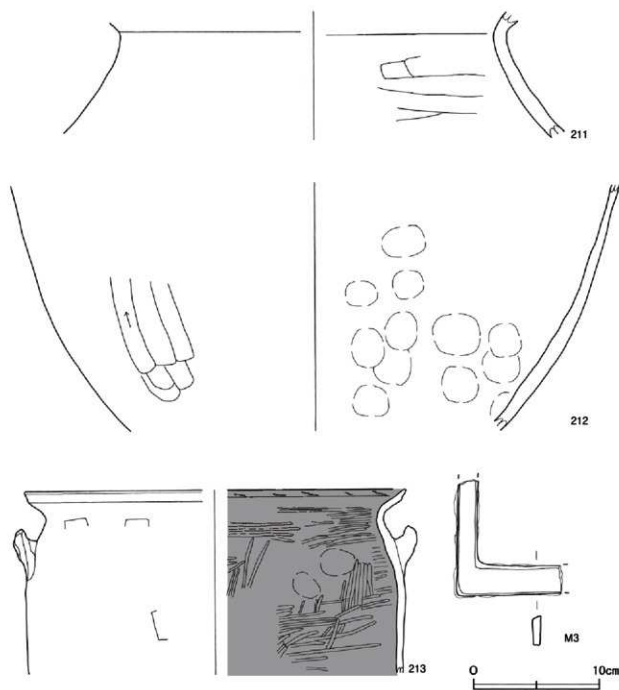
所見 時期は、出土土器から10世紀前半と考えられる。



第90図 第33号住居跡出土遺物実測図(1)



第91図 第33号住居跡出土遺物実測図2)



第92図 第33号住居跡出土遺物実測図3)

第33号住居跡出土遺物観察表(第90～92図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
197	土師器	高台付甗	[16.8]	(3.8)	-	雲母・長石	にぶい橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き	覆土中	5%
198	土師器	高台付甗	-	(3.7)	10.5	雲母・長石	淡橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台張り付け	覆土下層	20%
199	土師器	高台付甗	-	(2.8)	[6.4]	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台張り付け	床面	30%
200	土師器	高台付甗	-	(2.0)	[9.3]	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台張り付け	覆土下層	10%
201	灰釉陶器	瓶類	-	(4.3)	-	緻密	灰	良好	ロクロナデ 外面輪削 内面無輪	覆土下層	5%
202	土師器	甗	[21.5]	(8.6)	-	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	口縁部内外面順ナデ 体部内外面ナデ輪削	床面	10%
203	土師器	甗	[19.0]	(7.0)	-	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部内外面順ナデ 内面輪削 体部外面指痕	覆土下層	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
304	土師器	甕	[170]	(6.0)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部内外面ヘラナデ 内面輪積痕	P 1内	5%
305	土師器	甕	[195]	(6.2)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部内外面ヘラナデ	覆土中層	5%
306	土師器	甕	[167]	(8.0)	-	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面指痕 内面輪積痕	床面	5%
307	土師器	甕	[178]	(4.9)	-	長石・赤色粒子	橙	普通	体部内外面ヘラナデ 体部外面輪積痕	覆土下層	5%
308	土師器	甕	-	(9.2)	[8.8]	雲母・石英	明赤褐	普通	体部外面下端へラナデ 指痕 内面輪積痕	床面	5%
309	土師器	小形甕	[112]	(10.9)	-	雲母・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内外面輪積痕 体部外面下端へラナデ 指痕	甕内	30% PL36
210	須恵器	甕	[426]	(10.8)	-	石英	灰白	良好	ロクロナデ 内面ヘラナデ	覆土中層	5%
211	須恵器	甕	-	(9.9)	-	長石・石英	灰	良好	ロクロナデ 内面ヘラナデ	覆土下層	5%
212	須恵器	甕	-	(19.6)	-	長石・石英	灰	良好	体部外面ヘラナデ 内面当て具痕	覆土下層	10%
213	土師器	瓶	[300]	(14.7)	-	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラナデ 後把手貼付 内面ヘラナデ 指痕	覆土下層	10% PL36

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
M 3	不明	(9.2)	(8.5)	0.7	(114)	鉄	ほぼ直角に屈曲 断面長方形	覆土中	

第34号住居跡 (第93・94図)

位置 調査ⅡB区南部のM 4 e8区で、標高17.9mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 長軸4.5m、短軸4.2mの方形で、主軸方向はN - 9° - Eである。壁高は12cmほどで外傾して立ち上っている。

床 はほぼ平坦である。

竈 北壁中央部やや東寄りに付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで83cm、袖幅120cmである。火床部は床面と同じ高さの地山面にわずかに掘りくぼめて使用しており、火床面から煙道部にかけて火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ40cm掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上っている。

竈土層解説

- 1 陶 色 焼土粒子・青灰色粘土粒子少量、炭化粒子少量 3 陶 色 焼土粒子少量、炭化粒子・青灰色粘土粒子微量
 2 陶 色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量 4 陶 色 焼土粒子少量、青灰色粘土粒子微量

ピット 深さ26cmで、南東コーナー部に位置し主柱穴と考えられる。

ピット土層解説

- 1 陶 褐色 焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子微量 2 陶 褐色 青灰色粘土ブロック少量

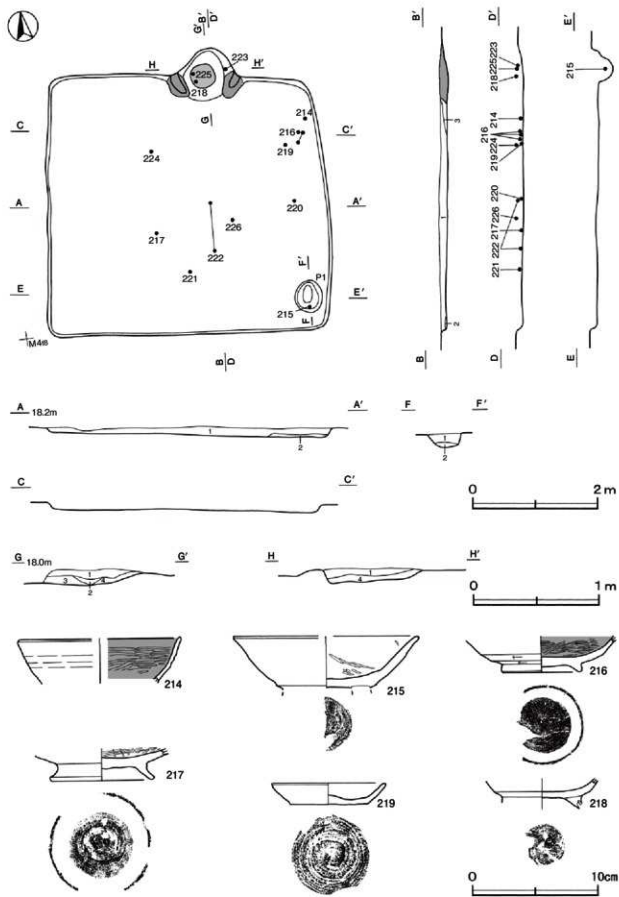
覆土 3層に分けられる。層厚が薄く明確ではないが、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 陶 色 青灰色粘土粒子・鉄分少量 3 陶 灰色 焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子少量
 2 黄 灰色 青灰色粘土粒子少量

遺物出土状況 土師器片176点 (椀類38、小皿9、甕類128、羽釜1)、灰軸陶器片4点 (碗)、細礫1点が出土している。遺物はほぼ全域から散在して出土している。215はP 1の覆土中層から出土している。216・219は北東コーナー部、217は中央部、220は東壁際中央部の床面からそれぞれ出土している。218・223・225は竈内から出土している。

所見 時期は、出土土器から11世紀前半以降と考えられる。



第93图 第34号住居跡・出土遺物実測図



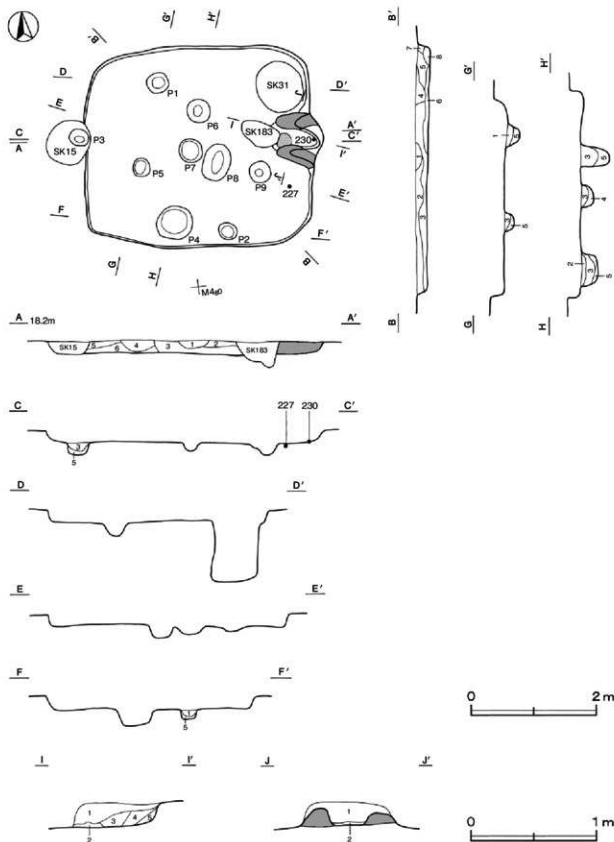
第94図 第34号住居跡出土遺物実測図

第34号住居跡出土遺物観察表 (第93・94図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
214	土師器	高台付碗	[13.0]	(3.6)	-	雲母・長石	橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き	覆土下層	10%
215	土師器	高台付碗	[14.7]	(4.1)	-	雲母・長石	明赤陶	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き	P11内中層	40%
216	土師器	高台付碗	-	(2.9)	6.4	雲母・長石・赤色粒子	橙	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り 表高台磨り付け	床面	20%
217	土師器	高台付碗	-	(2.6)	8.0	長石・石英	にぶ・赤陶	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り	床面	20%
218	土師器	高台付碗	-	(2.5)	-	長石・石英	にぶ・黄陶	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り	壺内	20%
219	土師器	小皿	9.0	1.7	6.2	長石・赤色粒子	にぶ・黄陶	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	床面	80% PL46
220	土師器	甕	[23.1]	(15.1)	-	雲母・長石・石英	明赤陶	普通	体部外面ヘラ磨り 内面ヘラナデ 輪 横取	床面	5%
221	土師器	甕	[20.4]	(8.4)	-	長石・石英・赤色粒子	明赤陶	普通	体部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ	覆土下層	5%
222	土師器	甕	[18.7]	(7.9)	-	長石・石英	橙	普通	体部外面ヘラ磨り 内面ヘラナデ	覆土下層	5%
223	土師器	甕	[20.4]	(5.8)	-	長石・石英	明赤陶	普通	体部外面ナデ 内面ナデ 指頭取	壺内	5%
224	土師器	甕	[17.5]	(7.6)	-	長石・石英	褐灰	普通	口縁部内外面横ナデ 体部内面ヘラナ デ 輪横取	覆土中層	5%
225	土師器	甕	[16.6]	(3.7)	-	長石・石英・赤色粒子	明赤陶	普通	口縁部外面ナデ 内面横ナデ	壺内	5%
226	土師器	甕	-	(4.0)	7.8	長石・石英・赤色粒子	にぶ・赤陶	普通	体部外面下端ヘラ磨り	覆土中層	5%

第35号住居跡 (第95～97図)

位置 調査ⅡB区南部のM4和区で、標高17.9mの平坦な低地上に位置している。



第95図 第35号住居跡実測図

重複関係 第15・31・183号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.6m、短軸3.2mの長方形で、主軸方向はN-100°-Eである。壁高は18～21cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほは平坦である。

竈 東壁中央部に付設されている。火床部手前を土坑に掘り込まれているため、確認された規模は、火床部から煙道部まで70cm、袖部幅は80cmである。袖部は地山の青灰色粘土を掘り残して構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さの地山面を使用し、火床面及び内壁は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部の壁外への掘り込みは20cmで、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|----------------------------|---------------------------|
| 1 灰黄褐色 焼土粒子少量、白色粘土粒子微量 | 4 暗褐色 焼土ブロック中量、白色粘土ブロック微量 |
| 2 にいり褐色 焼土粒子多量 | 5 暗褐色 焼土ブロック・白色粘土粒子微量 |
| 3 黒褐色 焼土粒子・白色粘土粒子少量、炭化粒子微量 | |

ピット 9か所。P1・P2は深さ20cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P3は、第15号土坑の底面から確認され、床面からの深さは20cmで、西壁中央部に位置し、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

P4～P9は、深さ8～40cmほどで、位置や配置が不規則で柱穴とは考えられず、性格は不明である。

ピット土層解説 (P1～P7共通)

- | | |
|--------------------------|-----------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量 | 4 暗褐色 白色粘土粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 白色粘土粒子少量、鉄分微量 | 5 灰黄褐色 白色粘土粒子中量、鉄分微量 |
| 3 暗褐色 炭化粒子・白色粘土粒子微量 | |

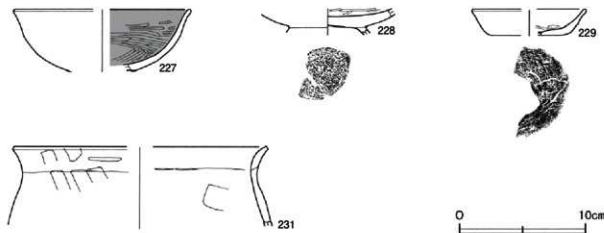
覆土 8層に分けられる。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

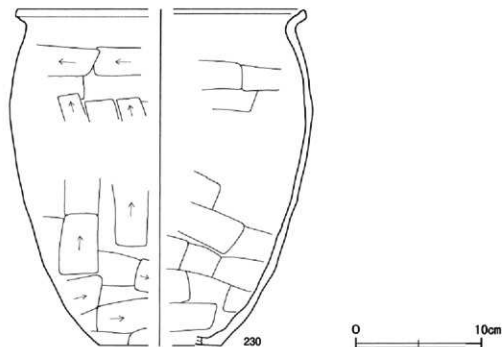
- | | |
|----------------------------|--------------------------|
| 1 暗褐色 炭化粒子・白色粘土粒子微量 | 5 暗褐色 白色粘土粒子中量 |
| 2 黒褐色 焼土粒子・白色粘土粒子微量 | 6 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量 |
| 3 暗褐色 焼土粒子・白色粘土ブロック・炭化粒子微量 | 7 にいり褐色 白色粘土粒子少量 |
| 4 暗褐色 白色粘土粒子少量、焼土粒子微量 | 8 褐色 白色粘土粒子少量、鉄分微量 |

遺物出土状況 土師器片111点(椀類30、小皿11、甕類70)が出土している。混入した陶器片1点(碗)、磁器片2点(高台付碗、碗)、土製品2点(不明)、粘土ブロック7点、細砂3点も出土している。227は竈右袖部付近の床面、229は南西部の覆土下層、230は竈内からそれぞれ出土している。231は竈内とP9覆土上層から出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から10世紀後葉から11世紀前葉と考えられる。



第96図 第35号住居跡出土遺物実測図(1)



第97図 第35号住居跡出土遺物実測図(2)

第35号住居跡出土遺物観察表(第96・97図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
227	土師器	高台付甗	[14.0]	4.9	-	雲母・石英	にぶい褐色	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き	床面	20%
228	土師器	高台付甗	-	(2.1)	-	雲母・長石	にぶい褐色	普通	体部内面ヘラ磨き 底面回転ヘラ切り 高台裏面付打	竈敷土中	10%
229	土師器	小皿	[9.1]	2.1	[6.0]	雲母	明赤褐色	普通	体部内面ヘラ磨き 底面回転ヘラ切り	覆土下層	30%
230	土師器	甗	[22.8]	26.7	[9.6]	雲母・石英	赤褐色	普通	体部外面ヘラ磨り 内面ヘラナデ	竈内	20% PL.35
231	土師器	甗	[20.2]	(6.3)	-	長石・石英	にぶい褐色	普通	体部内外面ヘラナデ 外面輪轆痕	竈敷土中・ 下9内	5%

第36号住居跡(第98・99図)

位置 調査ⅡB区南部のM4g9区で、標高180mの平坦な低地上に位置している。

重複関係 第11・16・182号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.2m、短軸2.7mの長方形で、主軸方向はN-105°-Eである。壁高は9～12cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦である。

竈 東壁中央部から南寄りに付設されている。焚口部から煙道部まで125cm、袖部幅は65cmほどである。火床部は土坑に掘り込まれているため確認できなかった。焚口部は灰の掻き出しのために床面から10cmほど掘りくぼめられている。煙道部は壁外へ60cmほど掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|------------------------------|----------------------------|
| 1 暗褐色 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 6 灰黄褐色 焼土粒子・白色粘土粒子少量 |
| 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量 | 7 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子・白色粘土粒子微量 |
| 3 暗褐色 焼土ブロック中量・炭化粒子・白色粘土粒子少量 | 8 黒褐色 焼土ブロック・白色粘土粒子少量 |
| 4 黒褐色 焼土粒子・白色粘土粒子少量 | 9 黒褐色 白色粘土粒子少量・焼土粒子微量 |
| 5 赤褐色 焼土ブロック中量・白色粘土粒子少量 | |

ピット 4か所。P1・P2は深さ20cm・28cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P3は深さ15cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P4は深さ20cmで、性格は不明である。

ピット土層解説 (P1～P4共通)

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 1 暗褐色 焼土粒子・白色粘土粒子微量 | 4 褐色 白色粘土粒子・鉄少量 |
| 2 濃い黄褐色 白色粘土粒子・鉄微量 | 5 灰黄褐色 白色粘土ブロック少量、鉄微量 |
| 3 暗褐色 白色粘土粒子少量、焼土粒子微量 | |

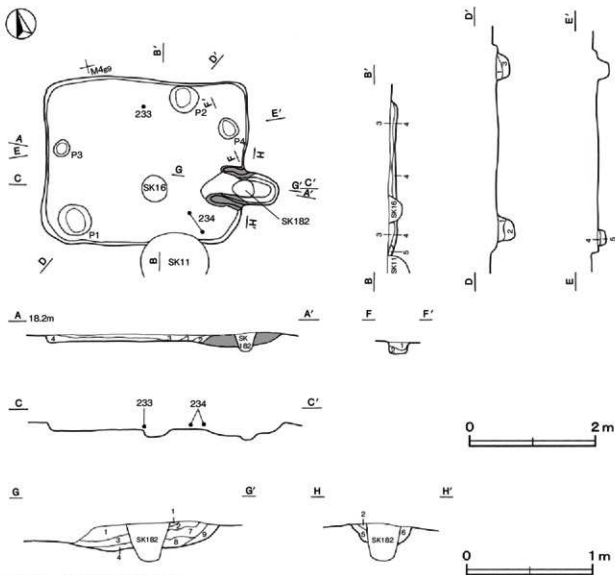
覆土 5層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

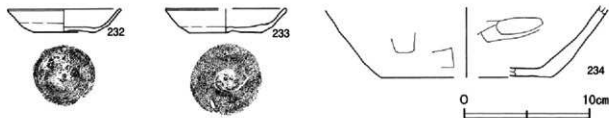
- | | |
|---------------------------|----------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量 | 4 褐色 白色粘土粒子中量 |
| 2 黒褐色 焼土粒子中量、炭化物・白色粘土粒子微量 | 5 黒褐色 白色粘土粒子微量 |
| 3 暗褐色 焼土粒子・白色粘土粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片52点(椀類6、小皿9、甕31、瓶5、羽釜1)、混入した陶器片1点(碗)、鉄製品1点(不明)、粘土ブロック3点、細礫1点も出土している。233は北壁際の中央部付近、234は南東コーナー部付近の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器や遺構の様相から10世紀後葉から11世紀前葉と考えられる。



第98図 第36号住居跡実測図



第99図 第36号住居跡出土遺物実測図

第36号住居跡出土遺物観察表(第99図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
232	土師器	小皿	8.8	1.8	4.7	長石・赤色粒子	に濃い橙	普通	ロクロナデ	底部回転ヘラ切り	覆土中	100% PL46
233	土師器	小皿	9.6	1.9	5.8	長石・赤色粒子	に濃い橙	普通	ロクロナデ	底部回転ヘラ切り	覆土下層	60% PL46
234	土師器	羹	-	(5.8)	[13.5]	雲母・石英	明赤褐	普通	体内内外面ヘラナデ	覆土下層	5%	

第37号住居跡(第100・101図)

位置 調査ⅡB区南部のM4c8区で、標高17.9mの平坦な低地上に位置している。

重複関係 第10号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.4m、短軸3.2mの方形で、主軸方向はN-9°-Eである。壁高は24~28cmで外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

竈 北壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで75cm、袖幅は95cmである。右袖部は基部として地山の粘土を掘り残し、その上に、灰黄褐色粘土を主体とする土を積み重ねて構築され、補強材として土師器薄片を埋め込んでいる。火床部は床面とはほぼ同じ高さの面を使用し、火床面及び内壁は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ35cm掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

1 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量	6 灰褐色	炭化物・白色粘土粒子少量
2 暗褐色	焼土ブロック・白色粘土粒子少量、炭化粒子微量	7 暗赤褐色	焼土ブロック中量、白色粘土粒子微量
3 暗褐色	白色粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	8 明赤褐色	焼土粒子多量(赤変硬化層)
4 暗褐色	焼土粒子少量、白色粘土粒子微量	9 褐色	白色粘土ブロック少量、焼土粒子微量
5 暗褐色	焼土ブロック・白色粘土ブロック・炭化粒子少量	10 灰黄褐色	白色粘土ブロック少量

ピット 4か所。P1~P3は深さ15cmで、配置からP1・P3は主柱穴と考えられる。P2はP1に伴う補助柱穴と考えられる。P4は深さ25cmで性格は不明である。

ピット土層解説(P1~P4共通)

1 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、白色粘土粒子微量	4 黒褐色	炭化粒子少量、焼土粒子・白色粘土粒子微量
2 黒褐色	焼土粒子中量、炭化粒子少量、白色粘土粒子微量	5 黒褐色	白色粘土粒子少量、焼土粒子微量
3 暗褐色	炭化物少量、焼土粒子・白色粘土粒子微量		

覆土 9層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示すが、各層に焼土ブロック、炭化物、粘土ブロックを多く含むため、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	炭化物・焼土粒子・白色粘土粒子少量	3 暗褐色	焼土ブロック・白色粘土ブロック・炭化粒子少量
2 黒褐色	白色粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子少量	4 黒褐色	炭化物中量、焼土ブロック・白色粘土粒子少量

5 暗褐色 炭化粒子少量、焼土粒子・白色粘土粒子微量

8 暗褐色 白色粘土ブロック少量、炭化粒子・鉄分微量

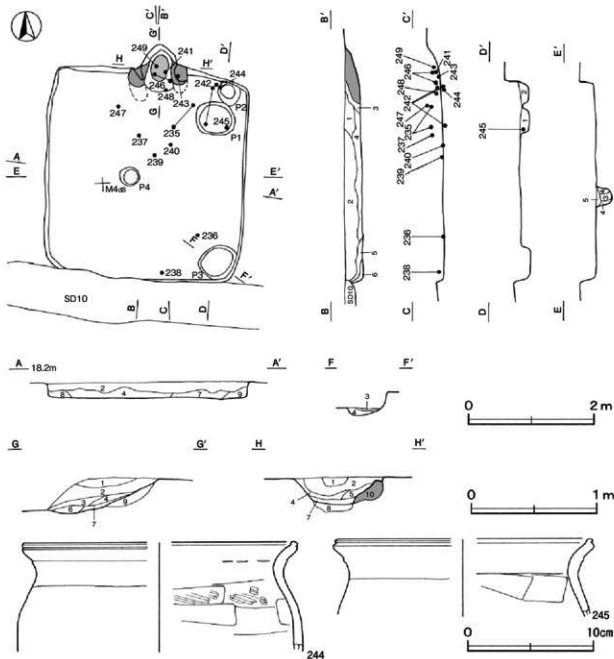
6 暗赤褐色 鉄分中量、炭化粒子・白色粘土粒子微量

9 黒褐色 炭化物中量、焼土ブロック・白色粘土粒子少量

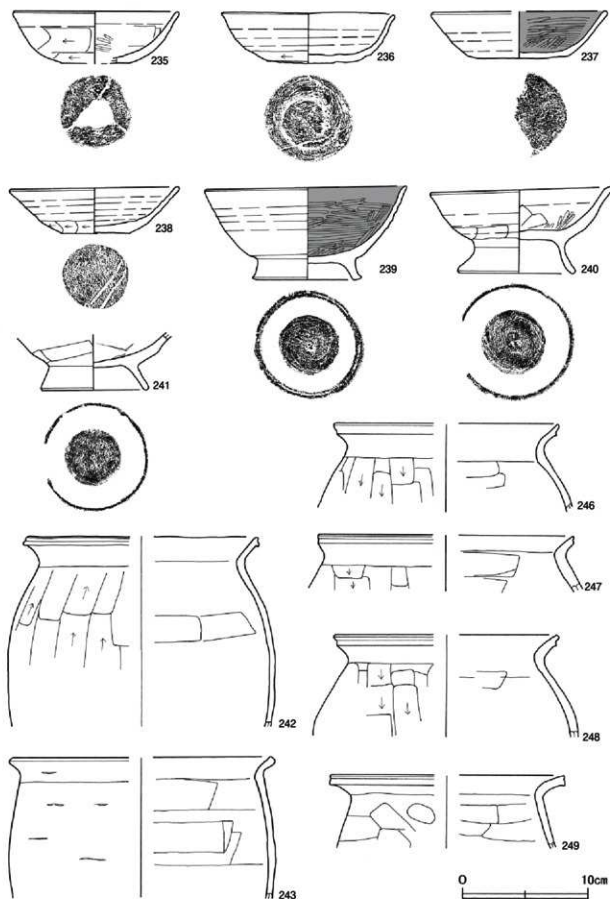
7 暗褐色 鉄分中量、白色粘土ブロック・炭化物少量

遺物出土状況 土師器片147点（碗類65、甕類82）、灰軸陶器片1点（瓶）、礫1点が出土している。遺物は、竈付近を中心としてほぼ全域から出土している。235はP1西側、237は中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。236は南東コーナー部の床面、238は南壁際中央部の覆土下層からそれぞれ正位で出土し、中央部からは、239が覆土下層から正位で、240が床面から斜位で出土している。241は竈内火床部付近から正位で出土し、支脚として使用されていた可能性が考えられる。243は竈の右袖に逆位で埋め込まれ、補強材として使用されていたものである。242・245はP1内、246・248・249は竈内から出土している。また、P3内からは炭化した角材が出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀前半と考えられる。



第100図 第37号住居跡・出土遺物実測図



第101图 第37号住居跡出土遺物実測図

第37号住居跡出土遺物観察表(第100・101図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
235	土師器	坏	13.0	4.2	3.5	長石・石英・赤色粘土	橙	普通	ロクロナデ 両面ヘラ削り 内面ヘラナデ後ヘラ磨き 底部回転ヘラ削り	覆土中層	80% PL38
236	土師器	坏	13.6	4.0	6.9	赤土・長石・石英	橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ削り後回転ヘラ削り	床面	85% PL38
237	土師器	坏	[138]	3.7	[7.5]	長石・石英	橙	普通	ロクロナデ 体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ削り 底部下方のヘラ削り	覆土中層	30%
238	須恵器	坏	13.3	3.6	5.3	長石・石英・赤色粘土	橙	不良	ロクロナデ 体部下端手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ削り後一方のヘラ削り	覆土下層	95% PL39
239	土師器	高台付碗	15.8	7.5	8.0	長石・石英・赤色粘土	にぶい橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ削り後高台削り付け	覆土下層	90% PL40
240	土師器	高台付碗	14.3	6.8	8.8	赤土・長石・石英	橙	普通	ロクロナデ 両面ヘラ磨き 底部回転ヘラ削り後高台削り付け	床面	90% PL40
241	土師器	高台付碗	-	(4.5)	8.6	長石・石英・赤色粘土	橙	普通	体部外面ヘラナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ削り後高台削り付け	壺内	20%
242	土師器	甕	[183]	(15.0)	-	長石・石英	橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	P1内	15%
243	土師器	甕	[204]	(11.2)	-	長石・石英・赤色粘土	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面輪積直ヘラナデ	内面 甕行袖	20%
244	土師器	甕	[218]	(8.7)	-	長石・石英・赤色粘土	橙	普通	体部内面ヘラナデ 輪積直	P2上皿	5%
245	土師器	甕	[201]	(6.2)	-	長石・石英・赤色粘土	橙	普通	口縁部横ナデ 体部内面ヘラナデ	壺内	10%
246	土師器	甕	[176]	(7.0)	-	長石・石英・赤色粘土	橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土下層	10%
247	土師器	甕	[202]	(4.4)	-	長石・石英・赤色粘土	橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土上層	5%
248	土師器	甕	[176]	(8.1)	-	長石・石英・赤色粘土	橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	壺内	5%
249	土師器	甕	[185]	(5.8)	-	赤土・長石・石英	橙	普通	体部内外面ヘラナデ 指頭直	壺内	5%

第38号住居跡(第102図)

位置 調査ⅡB区南部のL419区で、標高17.8mの平坦な低地上に位置している。

重複関係 南西部を第39号住居、第28号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.0m、短軸2.9mの方形で、主軸方向はN-23°-Eである。壁高は8cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほは平坦である。

竈 北壁中央部から西寄りに付設されている。焚口部から煙道部まで60cmほどで、袖部は確認されなかった。火床部は床面と同じ高さの地山面を掘りくぼめて使用しており、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ50cmほど掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。

甕土層解説

- 1 黒褐色 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量、青灰色粘土粒子微量

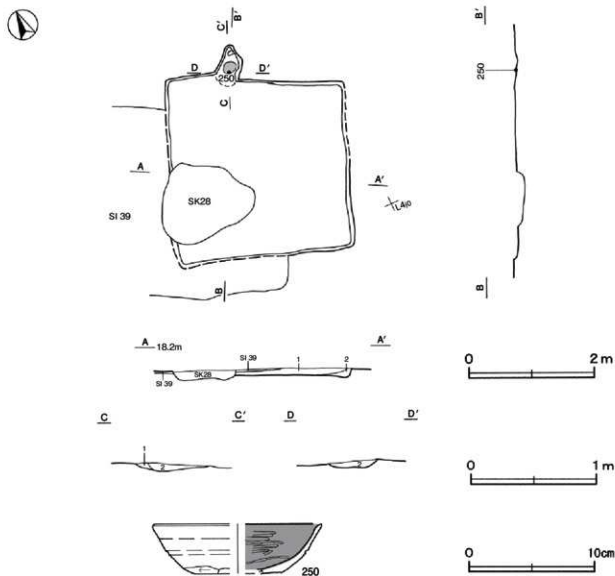
覆土 2層に分けられる。層厚が薄く堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 褐色 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 青灰色粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片17点(碗類10、甕類7)、須恵器片1点(坏)が出土している。また、混入した陶器片5点(碗)も出土している。250は壺内の火床部から出土している。

所見 時期は、出土土器が少なく明確ではないが、重複関係及び出土土器の様相から9世紀後葉と考えられる。



第102図 第38号住居跡実測図・出土物実測

第38号住居跡出土物観察表(第102図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
250	土師器	坏	[133]	4.0	[6.7]	茶目・砂石・ 黒灰粒子	橙	普通	ロクロナデ 体部内面ヘラ磨き	竈火床部	5%

第39号住居跡(第103・104図)

位置 調査ⅡB区南部のL419区で、標高17.8mほどの平坦な低地上に位置している。

重複関係 第38号住居跡を掘り込み、西部を第27号土坑、中央部を第28号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 ほは床面が露出した状態で確認されたため、わずかに残存する竈と床面から規模を判断した。確認された範囲は、一辺30mほどである。平面形は方形または長方形と推定され、主軸方向はN-24'-Eである。壁高は5cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほは平坦である。

竈 北壁中央部から東寄りに付設されていたと推定される。規模は不明であるが、確認された火床部は床面とほぼ同じ高さの地山面を使用しており、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- | | |
|-----------------------------|--------------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量、青灰色粘土粒子微量 | 4 暗赤褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子・青灰色粘土粒子微量 |
| 2 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子・青灰色粘土粒子微量 | |
| 3 黒褐色 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | |

覆土 単一層で、層厚が薄く堆積状況は不明である。

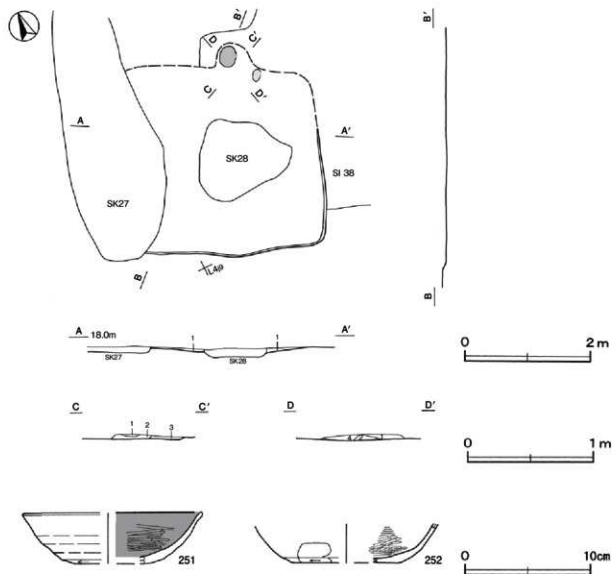
土層解説

- 1 褐色 焼土粒子・青灰色粘土粒子微量

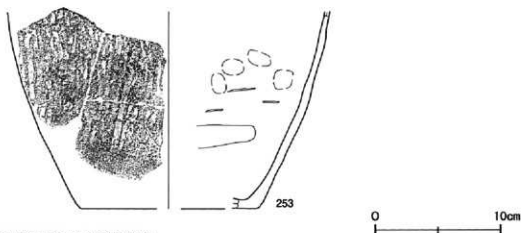
遺物出土状況 土師器片32点(柄類8, 甕類24)が出土している。また、混入した磁器片1点(碗)も出土している。

251・253は覆土中、252は竈の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器が少なく明確ではないが、重複関係及び出土土器から10世紀前半と考えられる。



第103図 第39号住居跡・出土遺物実測図



第104図 第39号住居跡出土遺物実測図

第39号住居跡出土遺物観察表 (第103・104図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
251	土師器	碗	[138]	4.0	[5.8]	雲母・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き	覆土中	10%
252	土師器	環	-	(3.1)	[8.6]	雲母・長石・赤色粒子	明褐色	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き	覆土中	5%
253	須恵器	釜	-	(15.6)	[13.8]	雲母・長石・赤色粒子	褐色	不良	体部外面縦位の叩き痕 内面ヘラナデ 当	覆土中	5%

第40号住居跡 (第105・106図)

位置 調査ⅡB区南部のL5a3区で、標高17.4mの平坦な低地上に位置している。

重複関係 南西部を第63号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 ほぼ床面が露出した状態で確認されたため、残存する竈と床面から規模を判断した。確認された範囲は、一辺3.7mほどである。平面形は方形または長方形と推定され、主軸方向はN-83°-Eである。壁高は4cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

竈 東壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで140cm、袖部幅は116cmである。右袖部には、補強材として土師器破片が埋め込まれている。火床部は床面とほぼ同じ高さの地山面を掘りくぼめて使用しており、火床面及び内壁は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ100cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。また、煙道部先端からは土師器環が出土しており、煙出しに利用していた可能性も考えられる。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|----------------------|-----------|--------------------------|
| 1 暗灰黄色 | 焼土粒子・青灰色粘土粒子少量 | 10 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 暗灰黄色 | 焼土ブロック・青灰色粘土ブロック少量 | 11 にぶい黄褐色 | 白色粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 灰オリーブ色 | 青灰色粘土ブロック微量 | 12 灰黄褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子・白色粘土粒子微量 |
| 4 オリーブ灰色 | 焼土ブロック中量、青灰色粘土ブロック少量 | 13 灰黄褐色 | 白色粘土粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 5 暗灰黄色 | 焼土ブロック中量、青灰色粘土粒子微量 | 14 赤褐色 | 焼土ブロック・青灰色粘土粒子中量 |
| 6 黒褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子少量 (灰層) | 15 暗褐色 | 焼土粒子中量 |
| 7 暗灰黄色 | 青灰色粘土粒子中量、焼土粒子微量 | 16 暗褐色 | 焼土ブロック・白色粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 8 暗灰黄色 | 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子微量 | 17 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子・白色粘土粒子微量 |
| 9 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック多量 (内壁崩落) | | |

ビット 深さ40cmで、配置から主柱穴と考えられる。

ビット土層解説

- | | |
|--------------------------|-----------------|
| 1 黒 褐色 炭化物・焼土粒子・白色粘土粒子少量 | 3 暗 褐色 白色粘土粒子少量 |
| 2 灰 黄 褐色 白色粘土粒子中量 | |

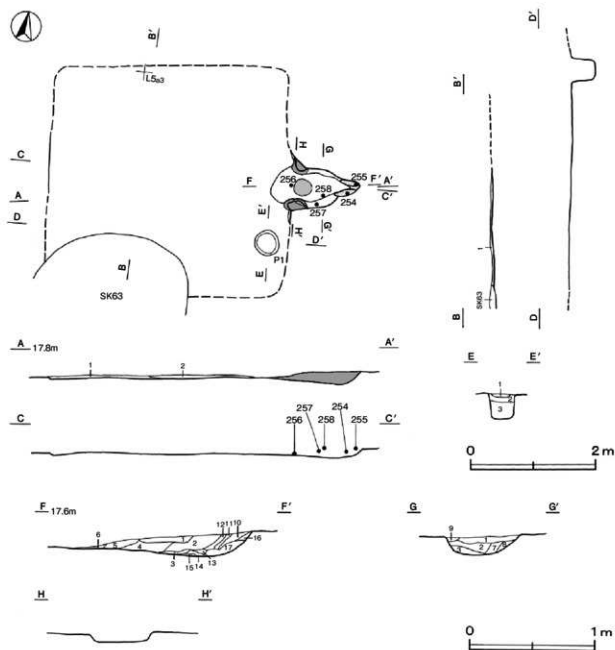
覆土 2層に分けられる。層厚が薄く堆積状況は不明である。

土層解説

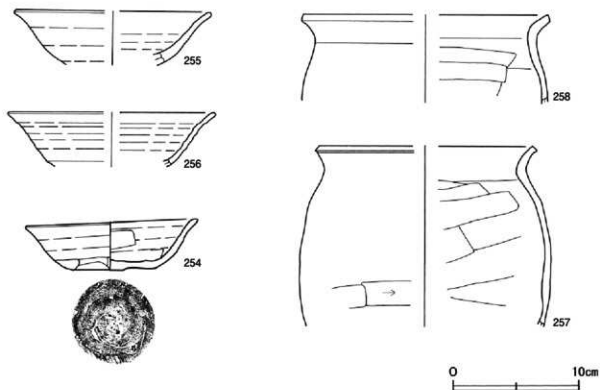
- | | |
|-----------------------|-------------------------|
| 1 黒 褐色 焼土粒子・青灰色粘土粒子微量 | 2 黒 褐色 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子微量 |
|-----------------------|-------------------------|

遺物出土状況 土師器片101点（碗類38、小皿4、甕類59）、石製品3点（支脚）、中礫4、粘土ブロック1点
 が出土している。削平されているため、ほとんどの遺物は、竈内から出土したものである。254・255は竈の煙
 道部先端、256は火床部付近からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。



第105図 第40号住居跡実測図



第106図 第40号住居跡出土遺物実測図

第40号住居跡出土遺物観察表 (第106図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
254	土師器	坏	134	4.2	6.5	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	竈内	80% PL38
255	土師器	椀	[154]	(4.3)	-	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ	竈内	30%
256	土師器	椀	[164]	(4.3)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ	竈内	20%
257	土師器	甕	[175]	(14.4)	-	雲母・石英	赤褐	普通	口縁部椀ナデ 体部下端ヘラ振り内面ヘラナデ	竈内	5%
258	土師器	甕	[193]	(7.0)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部椀ナデ 体部内面ヘラナデ	竈内	5%

第41号住居跡 (第107図)

位置 調査ⅡB区南部のM5Ⅰ区で、標高17.9mほどの平坦な低地上に位置している。

重複関係 北東コーナーから南西コーナーにかけて第6号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.6m、短軸2.4mの方形で、主軸方向はN-93°-Eである。壁高は7~24cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦である。

竈 東壁中央部やや南寄りに付設されている。第6号溝に掘り込まれているため、焚口部から火床部は確認できなかった。確認された煙道部の壁外への掘り込みは40cmほどで、煙道部の内壁は赤変硬化しており、火床部から緩やかに立ち上がっていたと推定される。

ピット 深さ36cmで、配置から主柱穴と考えられる。

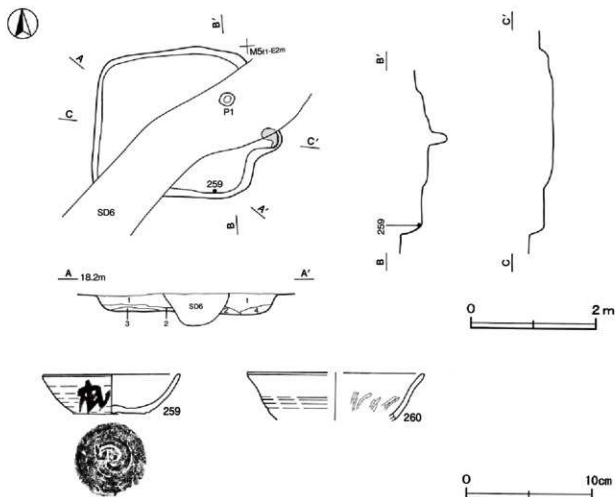
覆土 4層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------|--------|---------------|
| 1 暗褐色 | 白色粘土粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 灰黄褐色 | 白色粘土粒子・焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 炭化粒子・白色粘土粒子少量 | 4 暗褐色 | 炭化粒子・白色粘土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片25点（碗類12, 甕類13）が出土している。259は南東コーナー壁際の覆土下層, 260は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から10世紀後半と考えられる。



第107図 第41号住居跡・出土遺物実測図

第41号住居跡出土遺物観察表 (第107図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
259	土師器	坏	108	31	5.6	茶母・長石・白色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	覆土下層	50% PL8-35 遺着 []
260	土師器	碗	[14.0]	(3.8)	-	茶母・長石・炭化粒子	にぶい褐	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き	覆土中	20%

第42号住居跡 (第108～110図)

位置 調査ⅡB区南部のM5e1区で, 標高179mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 長軸3.5m, 短軸3.3mの方形で, 主軸方向はN-100°-Eである。壁高は24～31cmで, 外傾し

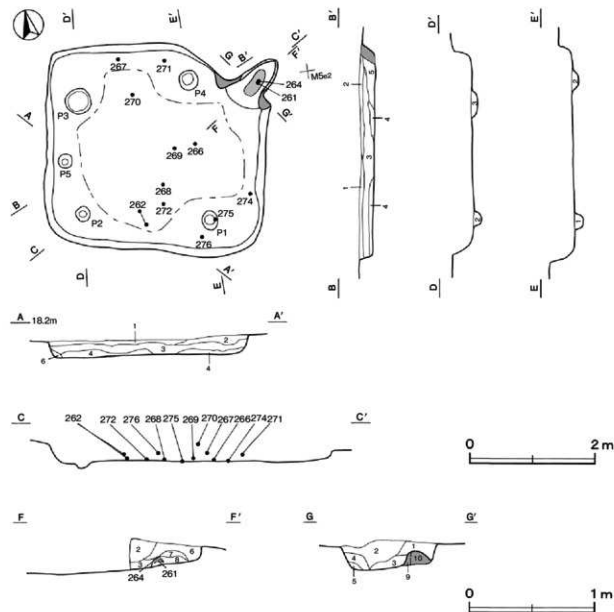
で立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北東コーナー部に付設されている。焚口部から煙道部まで96cm、袖部幅は96cmである。袖部は、黄褐色の粘土質の地山を掘り残して構築している。火床部は床面とほぼ同じ高さの面を使用しており、火床面及び内壁は火熱を受け赤変硬化している。煙道部は壁外へ68cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 1 褐 色 焼土粒子微量 | 7 暗赤褐色 焼土ブロック・青灰色粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 にぶい黄褐色 焼土ブロック少量、青灰色粘土粒子微量 | 8 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子微量 |
| 3 灰黄褐色 焼土ブロック・青灰色粘土ブロック少量 | 9 暗赤褐色 焼土ブロック多量（内壁赤変硬化層） |
| 4 灰黄褐色 焼土ブロック・青灰色粘土ブロック中量 | 10 にぶい黄褐色 青灰色粘土粒子多量 |
| 5 灰 褐色 焼土ブロック中量、青灰色粘土粒子微量 | |
| 6 黒 褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子・青灰色粘土粒子微量 | |



第108図 第42号住居跡実測図

ピット 5か所。P1～P4は深さ15cmほどで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ10cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

ピット土層解説 (P1～P4共通)

- | | |
|----------------------------|---------------------|
| 1 灰黄褐色 白色粘土粒子少量 | 3 暗褐色 焼土粒子・白色粘土粒子微量 |
| 2 暗褐色 焼土粒子少量、炭化粒子・白色粘土粒子微量 | |

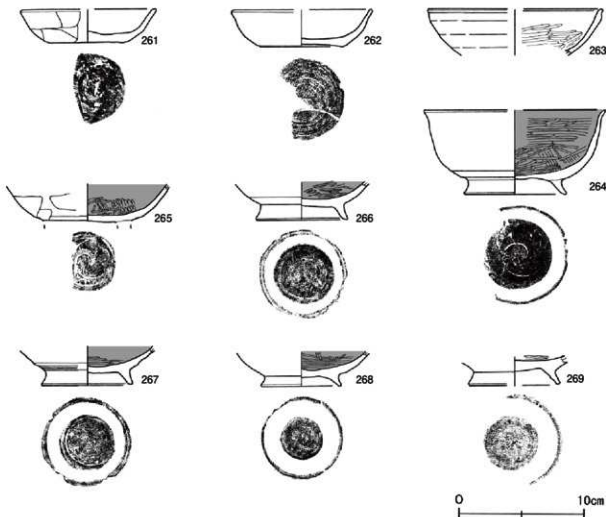
覆土 6層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

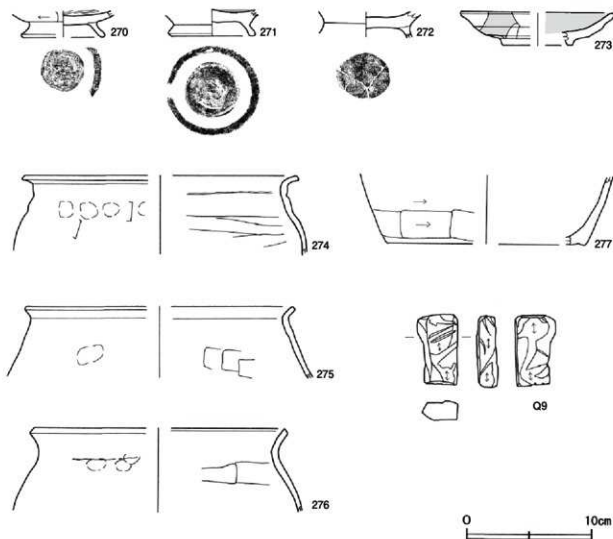
- | | |
|----------------------------------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 褐色 焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子微量 |
| 2 にぶい青褐色 青灰色粘土粒子微量 | 5 暗褐色 炭化粒子少量、焼土粒子・青灰色粘土粒子微量 |
| 3 褐色 青灰色粘土粒子・シルト粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 褐色 青灰色粘土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片194点(椀類85、甕類109)、須恵器片2点(甕)、灰輪陶器片3点(高台付皿)不明鉄製品1点、細羅3点、粘土ブロック4点が出土している。遺物は、ほぼ全域に散在して覆土上層から下層にかけて出土している。竈の火床部から、261の上に264が逆位で被さって出土しており、火熱を受けた痕跡があることから支脚として使用されていたと考えられる。262は南壁中央部の覆土中層と下層から出土した破片が接合したものである。263・265・277は竈の覆土中、266・268・269は中央部の覆土下層、270は中央部の覆土上層、274は南東コーナー壁際の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。



第109図 第42号住居跡出土遺物実測図(1)



第110図 第42号住居跡出土遺物実測図(2)

第42号住居跡出土遺物観察表 (第109・110図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
261	土師器	坏	[108]	2.7	5.6	雲母・赤色粒子	浅黄橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	壺内	60% PL46
262	土師器	坏	[112]	2.9	7.0	雲母・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	中層~下層	50% PL46
263	土師器	碗	[140]	(3.7)	-	雲母・石英	橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き	覆土中	10%
264	土師器	高台付碗	[143]	6.7	7.8	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ 体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り 後高台取り付け	壺内	40% PL40
265	土師器	高台付碗	-	(3.0)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り 後高台取り付け 高台穴欠	覆土中	20%
266	土師器	高台付碗	-	(3.1)	7.2	雲母・長石	橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り 後高台取り付け	床面	10%
267	土師器	高台付碗	-	(3.0)	7.2	雲母・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り 後高台取り付け	覆土中層	20%
268	土師器	高台付碗	-	(2.8)	6.2	雲母・長石	にぶい橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り 後高台取り付け	床面	20%
269	土師器	高台付碗	-	(2.3)	[7.0]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り 後高台取り付け	覆土下層	20%
270	土師器	高台付碗	-	(2.1)	[6.4]	雲母・長石	にぶい赤褐	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り 後高台取り付け	覆土上層	40%
271	土師器	高台付碗	-	(2.0)	7.0	雲母・長石	にぶい黄橙	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り 後高台取り付け	覆土中層	20%
272	土師器	高台付碗	-	(2.0)	-	長石・赤色粒子	にぶい黄	普通	内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り 後高台取り付け	床面	20%
273	灰釉陶器	甕	[12.0]	2.7	[3.5]	緻密	浅黄	良好	ロクロナデ 体部内面全面輪口縁部外面磨有蓋	覆土中	10%
274	土師器	甕	[22.0]	(6.2)	-	雲母・石英・赤色粒子	赤褐	普通	体部外面指頭痕 内面ヘラナデ	床面	5%
275	須恵器	甕	[21.0]	(5.8)	-	にぶい橙	不良	体部外面指頭痕 内面ヘラナデ	PI 上面	5%	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
276	土師器	甕	20(5)	(6.7)	-	雲母・石英	にぶい褐色	普通	口辺部横すだね ヘラナデ	体部外面部頭肌 内面	覆土中層	5%
277	土師器	甕	-	(5.4)	(15.8)	長石・石英・ 赤色粘土	橙	普通	体部外面下端ヘラ削り		壺内	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q 9	磁石	5.6	3.2	1.5	41.5	凝灰岩	紙面3面	壺内	

第43号住居跡（第111～113図）

位置 調査ⅡB区南部のM5a2区で、標高17.7mの平坦な低地上に位置している。

重複関係 北西コーナー部を第29号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.2m、短軸2.8mの長方形で、主軸方向はN-9°-Eである。壁高は37～45cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前面が踏み固められている。壁溝が北東コーナー部から南壁中央部を周回し、断面形はU字状である。

竈 北壁中央部やや東寄りに付設されている。焚口部から煙道部まで120cm、袖部幅は98cmである。袖部は地山の粘土を掘り残して基部とし、白色粘土とシルトを主体とする土を積み重ねて構築され、補強材として土師器版片を使用している。火床部は床面とほぼ同じ高さの面を使用しており、火床面及び内壁は火熱を受けて赤変硬化している。また、火床部には雲母片岩で基部を作り、その上部に土を盛り、更なるその上に坏、甕、椀を逆立て重ねて支脚として使用された痕跡が認められる。竈土層の20～25層は雲母片岩の上に盛られた土の層である。煙道部は壁外へ80cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

1 黒褐色 焼土粒子・白色粘土粒子微量	13 暗褐色 焼土粒子少量、白色粘土粒子微量
2 暗褐色 焼土ブロック、炭化粒子少量	14 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子・白色粘土粒子少量
3 暗褐色 焼土粒子少量、炭化粒子微量	15 にぶい黄褐色 白色粘土粒子少量
4 黒褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量	16 にぶい黄褐色 白色粘土粒子中量
5 暗褐色 白色粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	17 暗褐色 炭化粒子・白色粘土粒子微量
6 暗褐色 焼土粒子・白色粘土粒子微量	18 にぶい黄褐色 白色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
7 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、白色粘土粒子微量	19 暗褐色 青灰色粘土粒子中量、焼土粒子微量
8 赤褐色 焼土粒子多量	20 にぶい赤褐色 焼土粒子少量
9 暗褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子・白色粘土粒子微量	21 暗赤褐色 焼土粒子中量
10 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量、白色粘土ブロック少量、炭化粒子微量	22 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・シルト微量
11 にぶい赤褐色 白色粘土粒子中量、焼土ブロック少量	23 にぶい黄褐色 焼土粒子少量、炭化粒子微量
12 にぶい黄褐色 白色粘土粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量	24 黒褐色 炭化粒子少量、焼土粒子微量
	25 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子・白色粘土粒子少量

ピット 5か所。P1～P4は深さ15～25cmで、規模と配置から柱穴と考えられる。P5は深さ30cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

ピット土層解説（P1～P5共通）

1 にぶい黄褐色 青灰色粘土ブロック少量	3 褐色 青灰色粘土粒子少量
2 黒褐色 青灰色粘土粒子微量	4 灰黄褐色 青灰色粘土ブロック少量

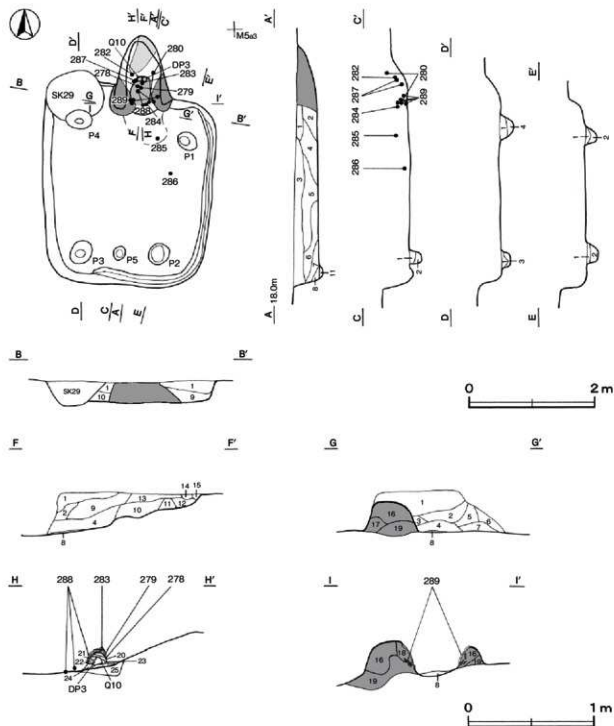
覆土 11層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

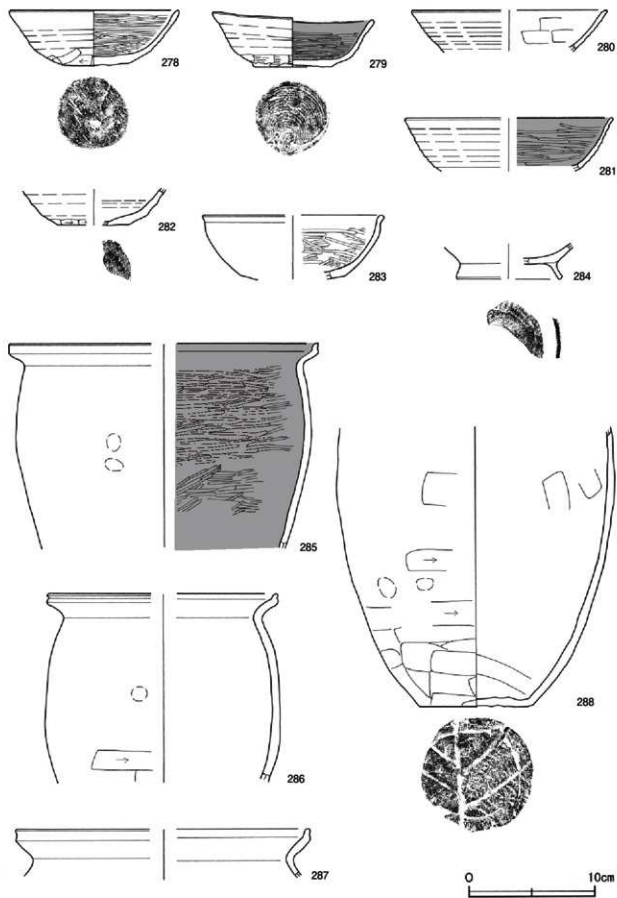
1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量	7 黒褐色 白色粘土粒子微量
2 褐色 焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量	8 黒褐色 白色粘土粒子微量
3 暗褐色 白色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 にぶい黄褐色 白色粘土ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
4 黒褐色 白色粘土ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量	10 褐色 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子微量
5 暗褐色 白色粘土粒子少量、炭化粒子微量	11 黒褐色 白色粘土粒子少量
6 灰黄褐色 白色粘土粒子少量、焼土粒子微量	

遺物出土状況 土師器片201点(埴類69, 甗類39), 須恵器片1点(坏), 灰軸陶器片1点(皿), 土製品1点(支脚), 石製品1点(支脚), 細鉄1点が出土している。竈の火床部からは, Q10の上にDP3を置き, それを土で固めて, 278・288・279・283をそれぞれ逆位に被せられた状態で出土し, 支脚として使用していたものと考えられる。289は両袖部の構築材として使用されていた破片が接合したものである。280～282・284・287は竈内, 285は竈前面の覆土中層, 286は中央部東寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。

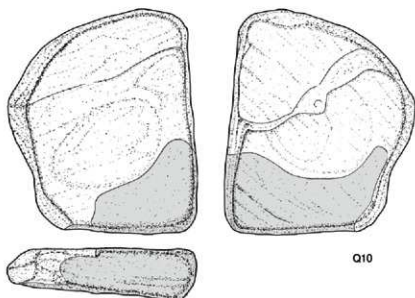
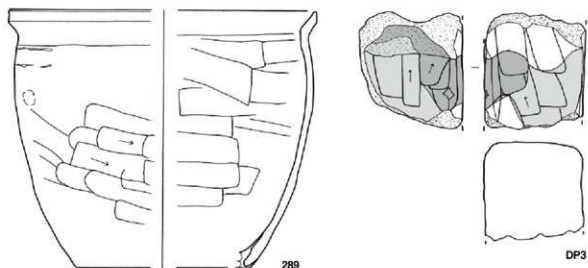
所見 時期は, 出土土器から10世紀前半と考えられる。



第111図 第43号住居跡実測図



第112图 第43号住居跡出土遺物実測図(1)



0 10cm

第113図 第43号住居跡出土遺物実測図(2)

第43号住居跡出土遺物観察表 (第112・113図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
278	土師器	坏	133	4.4	3.6	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 下部手母玉へラ削り 内面へラ磨き 底部二方向のへラ削り	壺内	100% PL38
279	土師器	坏	135	4.4	6.4	雲母・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ 内面へラ磨き 底部回転	壺内	70% PL38
280	土師器	坏	[15.4]	(3.3)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 内面へラナデ	壺内	20%
281	土師器	椀	[16.4]	(4.2)	-	雲母・石英	にぶい濁	普通	ロクロナデ 内面へラ磨き	壺内	20%
282	須恵器	坏	-	(2.9)	[5.8]	長石・石英	灰黄	普通	ロクロナデ 底部一方向のへラ削り	甕塚土中	20%
283	土師器	椀	[14.4]	(5.1)	-	雲母・赤色粒子	にぶい黄濁	普通	内面へラ磨き	壺内	10%
284	土師器	高台付椀	-	(2.8)	[7.8]	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転へラ切り後高台貼り付け	壺内	10%
285	土師器	甕	[24.3]	(16.3)	-	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面指原痕 内面へラ磨き	甕土中層	15%
286	土師器	甕	[18.0]	(15.0)	-	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面下端へラ削り 指原痕	甕土下層	10%
287	土師器	甕	[23.1]	(3.9)	-	長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ	壺内	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
288	土師器	甕	(222)	90	90	長石・赤色粘土	橙	普通	体部外面へラ削り ナデ	指頭痕 内面へラ	竈内	40%
289	土師器	瓶	[242]	20.5	[13.5]	長石・赤黄・赤色粘土	にぶい緑	普通	体部外面へラ削り ナデ	輪種痕 内面へラ	竈輪部	20% PL36

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	備考	出土位置	備考
DP3	支脚	(9.3)	7.9	(8.2)	(589)	土製	削り痕 断面正方形	火熱痕 煤付着	竈内	PL54

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	備考	出土位置	備考
Q 10	支脚	17.9	15.3	4.1	1490	雲母片岩	四角柱状に成形	火熱痕	竈内	PL54

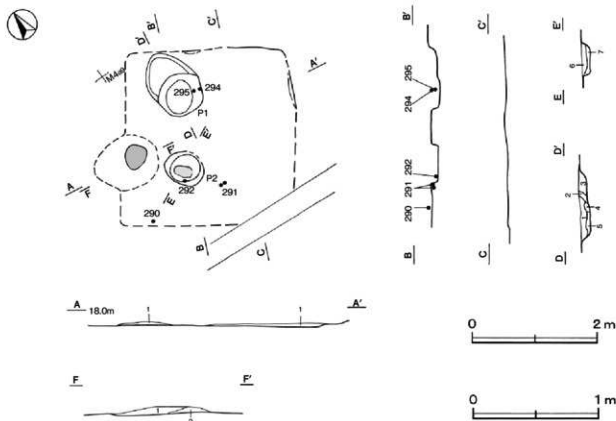
第44号住居跡 (第114・115図)

位置 調査ⅡB区南部のM 4 a9区で、標高178mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 ほは床面が露出した状態で確認されたため、残存する竈の火床部と壁から規模を判断した。確認された範囲は、東西軸27m、南北軸29mである。平面形は方形又は長方形と推定され、主軸方向はN-54°-Wである。壁高は5cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほは平坦である。

竈 北西壁中央部やや西寄りに付設されている。火床部がほは露出した状態で確認されたため、規模は不明である。火床部は床面とほぼ同じ高さの面をわずかに掘りくぼめて使用しており、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。



第114図 第44号住居跡実測図

甕土層解説

1 暗褐色 焼土ブロック少量、白色粘土粒子微量

2 暗褐色 焼土ブロック中量、白色粘土粒子微量

ピット 2か所。P1・P2はそれぞれ深さ15cmほどで、性格は不明である。また、P1内には北側に5cmほどの高まりが見られる。

ピット土層解説

1 灰黄褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子・青灰色粘土粒子少量

5 灰黄褐色 焼土粒子中量、灰白色粘土粒子・青灰色粘土粒子少量、炭化粒子微量

2 灰黄褐色 青灰色粘土粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量

6 黒褐色 焼土粒子少量、炭化粒子・青灰色粘土粒子微量

3 暗褐色 焼土粒子多量、炭化粒子・青灰色粘土粒子少量

7 暗褐色 焼土ブロック多量、青灰色粘土粒子少量、炭化粒子微量

4 灰黄褐色 灰白色粘土粒子多量、焼土粒子・青灰色粘土粒子微量

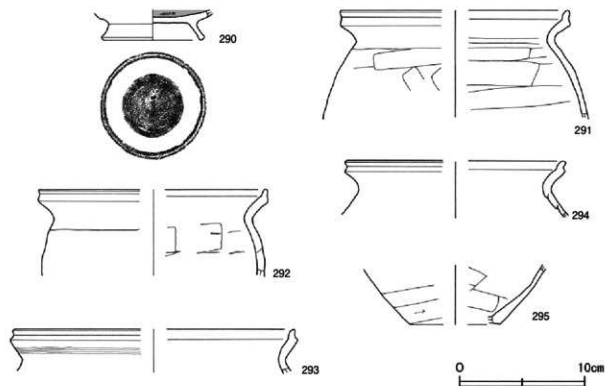
覆土 単一層で、層厚が薄く堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗褐色 焼土粒子少量、白色粘土粒子・黄色粘土粒子・鉄分微量

遺物出土状況 土師器片153点(碗類29, 甕類123, 甕1点)が出土している。混入した陶器片1点(皿)も出土している。削平されているため、火床部やピット内からの出土が多い。291は中央部やや南寄り。292・293はP2内、294はP1上面、295はP1内からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第115図 第44号住居跡出土遺物実測図

第44号住居跡出土遺物観察表(第115図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
290	土師器	高台付碗	-	(24)	7.6	長石・赤色粒子	橙	普通	体部内面へラ磨き 底部回転へラ切り 縁高台張り付け	覆土下層	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
291	土師器	甕	[180]	(8.6)	-	雲母・石英	橙	普通	口縁部横ナデ 体部内外面ヘラナデ	床面	5%
292	土師器	甕	[180]	(6.8)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ 体部内面ヘラナデ 輪積肌	P2内	5%
293	土師器	甕	[224]	(3.5)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ	床面・壁内	5%
294	土師器	甕	[171]	(4.5)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部横ナデ 内面ヘラナデ 輪積み肌	床面	5%
295	土師器	甕	-	(4.7)	[7.1]	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面下端ヘラ削り 内面ヘラナデ	P1内	5%

第45号住居跡 (第116図)

位置 調査ⅡB区中央部のK5j2区で、標高17.5mほどの平坦な低地上に位置している。

重複関係 第25号住居跡を掘り込み、東部を第43号土坑に掘り込まれている。また、中央部は攪乱を受けている。

規模と形状 重複と攪乱のため、確認された範囲は、長軸2.6m、短軸2.5mである。平面形は方形または長方形と推定され、主軸方向はN-90°-Eである。壁高は最大16cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほは平坦である。

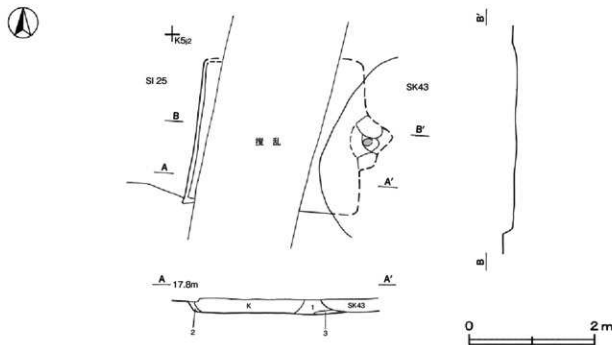
竈 土坑に掘り込まれているが、東壁は中央部に付設されていたと推定される。確認された規模は、焚口部から煙道部まで58cm、袖部幅は80cmである。火床部は床面とほぼ同じ高さの地山面を使用し、火床面は火熱を受けて赤変している。

覆土 3層に分けられる。層厚が薄く堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子・青灰色粘土粒子微量
3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子微量
2 黒褐色 青灰色粘土粒子少量

遺物出土状況 土師器片5点(輪類2、甕類3)が出土している。いずれも細片で図示できない。



第116図 第45号住居跡実測図

所見 時期は、出土土器が少なく明確ではないが、出土土器及び遺構の様相から判断して、10世紀後葉から11世紀前葉と考えられる。

第46号住居跡（第117～119図）

位置 調査ⅡB区中央部L5区3で、標高17.5mほどの平坦な低地上に位置している。

重複関係 北東コーナー部を第50号土坑、南西コーナー部を第51号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.4m、短軸2.9mの長方形で、主軸方向はN-97°-Eである。壁高は50cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほは平坦である。

竈 東壁中央部やや南寄りに付設されている。焚口部から煙道部まで90cm、袖部幅は110cmである。火床部は床面とほぼ同じ高さの地山面を掘りくぼめて使用し、火床面は火熱を受け赤変硬化している。煙道部は壁外へ45cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1	にぶい黄褐色	焼土粒子・青灰色粘土粒子少量、炭化粒子微量	8	褐色	青灰色粘土ブロック少量
2	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子微量	9	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子微量
3	にぶい赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子微量	10	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子中量
4	暗褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量	11	褐色	焼土粒子少量、白色粘土粒子微量
5	にぶい赤褐色	焼土粒子・炭化粒子微量	12	にぶい赤褐色	白色粘土ブロック・焼土粒子微量
6	暗褐色	炭化粒子多量、焼土粒子中量	13	にぶい赤褐色	焼土粒子少量、白色粘土粒子微量
7	黒褐色	炭化粒子多量、焼土粒子少量	14	暗褐色	焼土粒子・白色粘土粒子微量

ピット 4か所。P1～P3は深さ15～20cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P4は深さ20cmほどで、覆土に灰や炭化物を含んでおり、置き竈の破片も出土していることから、それに関連する施設の可能性も想定される。

ピット土層解説（P1～P4共通）

1	黒褐色	焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量	4	黒褐色	炭化粒子多量、白色粘土粒子少量、焼土ブロック微量
2	暗褐色	焼土粒子・白色粘土粒子微量			
3	灰黄褐色	灰多量、焼土粒子中量、炭化粒子少量、白色粘土粒子微量			

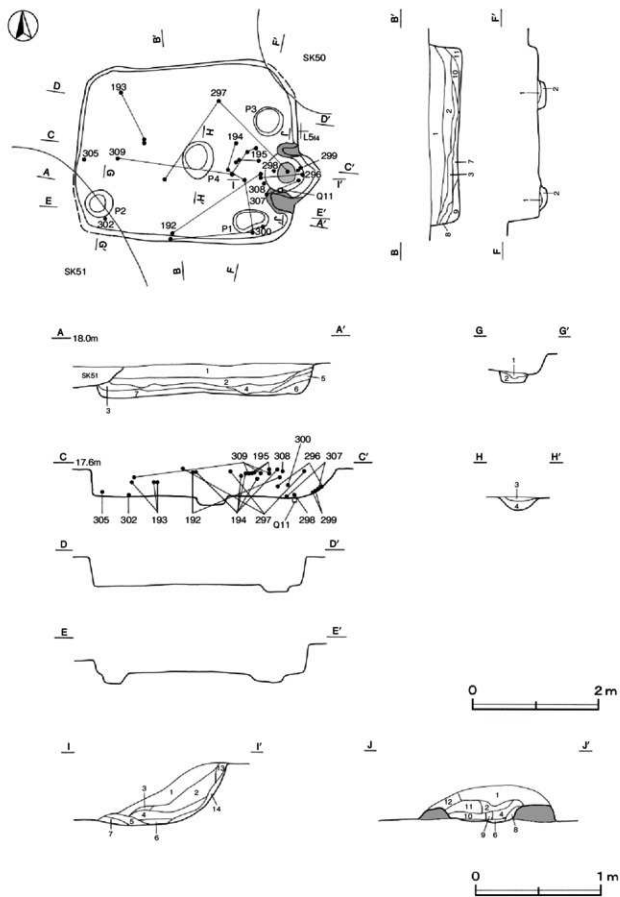
覆土 11層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示しているが、遺物の出土状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

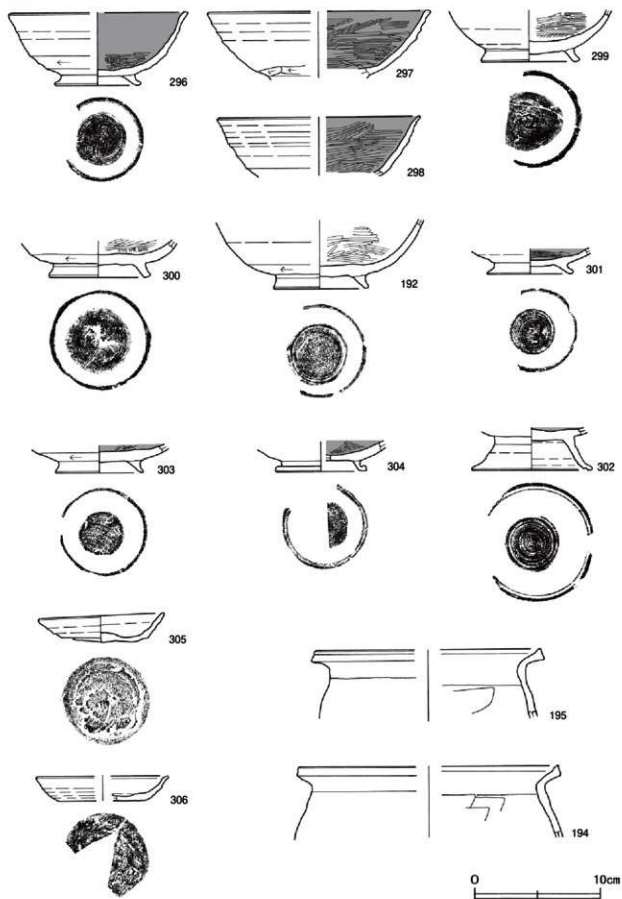
1	暗褐色	青灰色粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	6	暗褐色	青灰色粘土粒子中量
2	暗褐色	焼土粒子・青灰色粘土粒子少量、炭化粒子微量	7	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子微量
3	にぶい黄褐色	青灰色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化物微量	8	暗褐色	焼土粒子少量、炭化粒子・青灰色粘土粒子微量
4	にぶい黄褐色	青灰色粘土粒子中量、焼土粒子少量	9	暗褐色	青灰色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化物微量
5	暗褐色	青灰色粘土粒子少量、焼土粒子微量	10	暗褐色	青灰色粘土粒子中量、焼土粒子微量
			11	暗褐色	青灰色粘土粒子少量

遺物出土状況 土師器片556点（碗類243、小皿4、甕類309）、須臾器片6点（甕）、土製品3点（置き竈）、石製品1点（支脚）が出土している。また、混入した土師質土器片1点（鍋）、陶器片2点（碗、高台付皿）、細礫14点、粘土塊4点も出土している。遺物は、覆土上層から床面にかけて出土し、離れた位置から出土している破片が接合している。また、竈前の覆土上層から中層にかけて焼土塊、炭化物の広がりが確認され、その下からも遺物が出土している。296は竈内と焚口部付近の覆土中層から出土した破片が接合したものである。298・299・301・307は竈内、302は南西コーナー部の覆土下層、305は西壁際中央部の覆土下層、306は床面、DP4は覆土中からそれぞれ出土している。Q11は竈内から出土し、火熱痕が見られることから支脚として使用されていたものと考えられる。

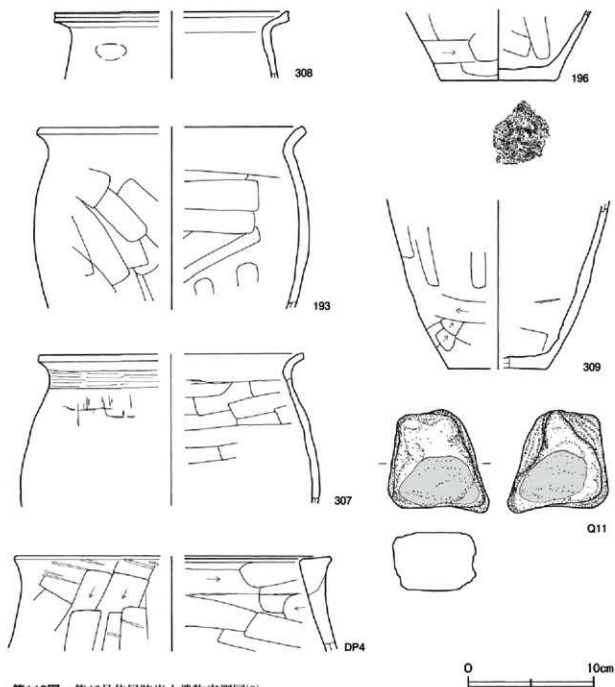
所見 時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。



第117图 第46号住居跡実測图



第118图 第46号住居跡出土遺物実測図(1)



第119図 第46号住居跡出土遺物実測図(2)

第46号住居跡出土遺物観察表 (第118・119図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
296	土師器	高台付椀	[14.0]	5.8	6.6	長石・石英	にぶい橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き ヘラ切り後高台貼り付け	竈内・裏 土上層	30% PL43
192	土師器	高台付椀	-	(5.3)	7.0	雲母・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き ヘラ切り後高台貼り付け	竈内上層	30%
297	土師器	高台付椀	[17.6]	(5.3)	-	雲母・石英	明赤陶	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き	竈内・裏 土上層	30%
298	土師器	高台付椀	[16.0]	(4.7)	-	雲母・長石・石英・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き	竈内	20%
299	土師器	高台付椀	-	(4.1)	7.5	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい赤黒	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き ヘラ切り後高台貼り付け	竈内	40%
300	土師器	高台付椀	-	(2.9)	7.2	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き ヘラ切り後高台貼り付け	竈内	30%
301	土師器	高台付椀	-	(2.0)	6.6	長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き ヘラ切り後高台貼り付け	竈覆土中	35%
302	土師器	高台付椀	-	(3.4)	9.2	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り 後高台貼り付け	床面	50%
303	土師器	高台付椀	-	(2.2)	6.8	長石・赤色粒子	橙	普通	内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	竈覆土中	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
304	土師器	高台付碗	-	(2.4)	7.1	長石・赤色粘土	橙	普通	内面へうろつき 台取り付付	底部回転へうろ切り 後高	覆土中	10%
305	土師器	小皿	9.8	2.2	6.7	雲母・長石・ 赤色粘土	橙	普通	ロクロナデ	底部回転へうろ切り	覆土下層	100% PL46
306	土師器	小皿	[102]	2.0	7.0	雲母・長石・ 赤色粘土	橙	普通	ロクロナデ		覆土中・ 基面	40%
193	土師器	甕	[21.4]	(14.5)	-	雲母・石英	にぶい濁	普通	体部外面へうろ割り	内面へうろナデ	覆土中層	20%
307	土師器	甕	[209]	(120)	-	雲母・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ	体部外面輪積痕 内面へうろナデ	壺内	10%
194	土師器	甕	[206]	(5.7)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	体部内面へうろナデ		覆土上層	10%
195	土師器	甕	[177]	(5.4)	-	雲母・長石・ 石英	橙	普通	口縁部横ナデ	体部内面へうろナデ	覆土上層	10%
308	土師器	甕	[184]	(5.3)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ	体部外面筋頭痕	覆土上層	10%
309	土師器	甕	-	(13.5)	[7.8]	長石・石英	にぶい赤濁	普通	体部外面下端へうろ割り	内面へうろナデ	覆土上層	10%
196	土師器	甕	-	(5.6)	[9.0]	長石・石英・ 赤色粘土	にぶい濁	普通	体部外面下端へうろ割り	内面へうろナデ	覆土中	10%

番号	器種	口径	器高	底径	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
EP4	置き磁	[25.0]	(7.5)	-	(187.1)	土製	体部内・外面へうろ割り	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q 11	支脚	8.2	8.0	4.7	443	雲母片岩	台形状に成形 火焼痕	壺内	

第47号住居跡 (第120・121図)

位置 調査ⅡB区南部のL5 h3区で、標高17.6mの平坦な低地上に位置している。

重複関係 中央部を第57・69・70号土坑、南西コーナー部を第62号土坑、焚口部西側を第68・71号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.7m、短軸2.6mの長方形で、主軸方向はN-89°-Eである。壁高は12～15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦である。

竈 東壁中央部の南寄りに付設されている。焚口部から煙道部まで100cm、袖部幅は60cmである。火床部は床面とほぼ同じ高さの面を使用しており、火床面及び内壁は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ88cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

電土層解説

1 黄 色	焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子微量	6 にぶい赤濁色	焼土ブロック・砂粒少量、炭化物微量
2 にぶい赤濁色	焼土粒子・炭化粒子微量	7 暗 褐色	炭化粒子・白色粘土粒子微量
3 暗 赤濁色	焼土ブロック・砂粒少量、炭化粒子微量	8 暗 褐色	焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量
4 暗 褐色	砂粒少量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 灰黄濁色	焼土粒子・砂粒少量
5 暗 赤濁色	焼土粒子中量、砂粒少量、炭化粒子微量	10 暗 褐色	焼土粒子中量、炭化粒子・砂粒少量

ピット 5か所。P1～P4は深さ12～16cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ14cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

ピット土層解説 (P1～P5共通)

1 にぶい赤濁色	白色粘土粒子少量	3 灰黄濁色	白色粘土粒子微量
2 黒 濁 色	炭化粒子・白色粘土粒子微量	4 濁 色	白灰色粘土ブロック少量

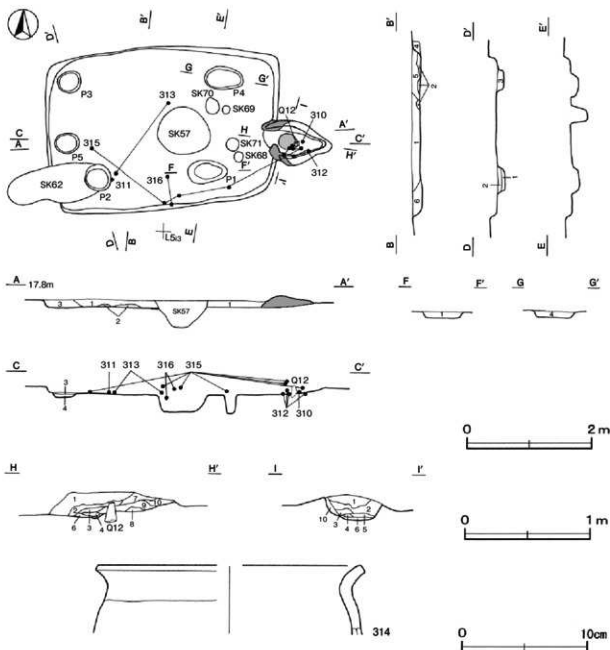
覆土 6層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示すが、含有物の堆積状況や遺物の出土状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

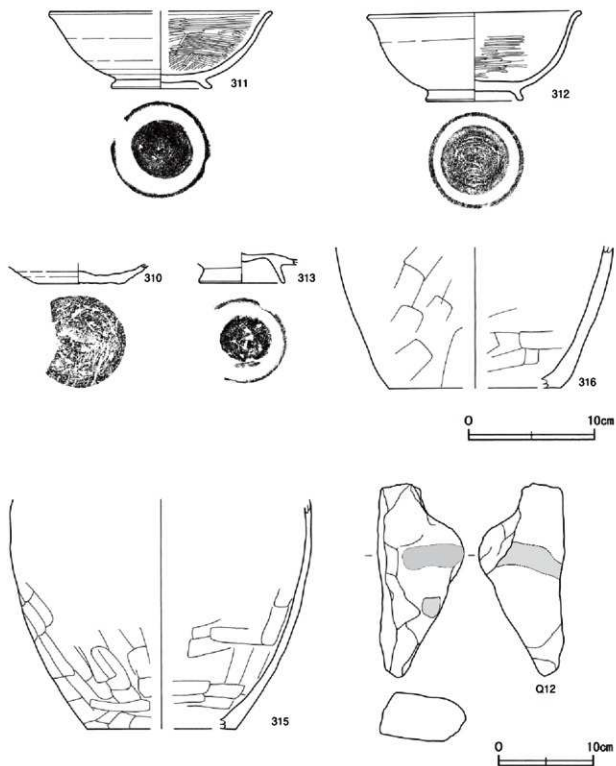
- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 暗 褐色 焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量 | 4 に濃い黄褐色 白色粘土粒子中量 |
| 2 に濃い黄褐色 白色粘土ブロック少量 | 5 褐色 焼土粒子・白色粘土粒子微量 |
| 3 に濃い黄褐色 焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子少量 | 6 に濃い黄褐色 焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片177点(碗類78, 羹類99), 須恵器片2点(瓶, 甕), 不明鉄製品1点, 石製品1点(支脚), 細環3点が出土している。遺物は、ほぼ全城から散在して出土している。覆土下層から床面にかけて出土した破片がそれぞれ接合しており、投棄された様相を示している。310, 312は竈内, 311は南西コーナー付近の床面からそれぞれ出土している。315は竈内や南壁際の覆土下層, 西壁際中央部付近の覆土下層から出土した破片が接合したものである。316は南壁際中央部付近の覆土下層と床面から出土した破片がそれぞれ接合したものである。Q12は支脚として使用されていたものである。

所見 時期は、出土土器から10世紀後葉から11世紀前葉と考えられる。



第120図 第47号住居跡・出土遺物実測図



第121図 第47号住居跡出土遺物実測図

第47号住居跡出土遺物観察表 (第120・121図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
310	土師器	碗	-	(1.6)	7.4	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	竈内	20%
311	土師器	高台付碗	(17.5)	6.2	7.7	雲母・長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き ヘラ切り後高台貼り付け	底部回転 床面	60% PL41
312	土師器	高台付碗	16.7	7.2	7.4	雲母・長石	にぶい橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き ヘラ切り後高台貼り付け	底部回転 竈内	65% PL41

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
313	土師器	高台付碗	-	(24)	6.6	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘウ切り後高台貼り付け	床面・下層	10%
314	土師器	甕	[210]	(53)	-	茶母・長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ	覆土中	5%
315	土師器	甕	-	(240)	[156]	長石・石英	灰濁	普通	体部外面ヘウ割り 内面ヘウナデ	甕内・下層	5%
316	土師器	甕	-	(112)	[136]	雲母・石英	暗濁	普通	体部外面下端ヘウ割り 内面ヘウナデ	床面・下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q 12	支脚	20.5	9.3	5.3	1190	ハンレイ岩	底部平坦に成形 火熱痕	甕内	PL54

第48号住居跡 (第122～125図)

位置 調査ⅡB区南部のM5c3区で、標高17.5mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 長軸3.1m、短軸2.9mの方形で、主軸方向はN-100°-Eである。壁高は28～45cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 東壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで106cm、袖部幅は98cmである。袖部は確認できなかった。火床部は床面とほぼ同じ高さの地山面を使用しており、火床面はあまり赤変していない。また、火床部の両側に石製の支脚が二個体据えられた状態で出土しており、二掛け竈であったと想定される。煙道部は壁外へ80cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1 暗 濁 色	焼土粒子・白色粘土粒子・黄褐色粘土粒子・鉄分微量	10 暗 濁 色	炭化物・焼土粒子微量
2 濁 色	白色粘土粒子中量、鉄分微量	11 赤 濁 色	焼土粒子多量
3 暗 濁 色	白色粘土粒子少量、焼土粒子・鉄分微量	12 暗 濁 色	焼土粒子・白色粘土粒子少量、黄褐色粘土粒子微量
4 黒 濁 色	焼土ブロック少量	13 暗 濁 色	焼土ブロック少量、炭化粒子・黄褐色粘土粒子微量
5 暗 濁 色	青灰色粘土ブロック・炭化物・焼土粒子・白色粘土粒子微量	14 暗 濁 色	焼土粒子・黄褐色粘土粒子・鉄分微量
6 黒 濁 色	焼土ブロック・炭化粒子少量	15 暗 濁 色	白色粘土粒子・砂粒微量
7 暗 濁 色	焼土粒子少量、黄褐色粘土微量	16 黒 濁 色	焼土粒子中量、炭化粒子・砂粒少量
8 黒 濁 色	黄褐色粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	17 暗 濁 色	白色粘土粒子・砂粒中量、焼土粒子少量
9 暗 濁 色	焼土粒子微量		

ピット 4か所。P1～P4はそれぞれ深さ20～40cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。

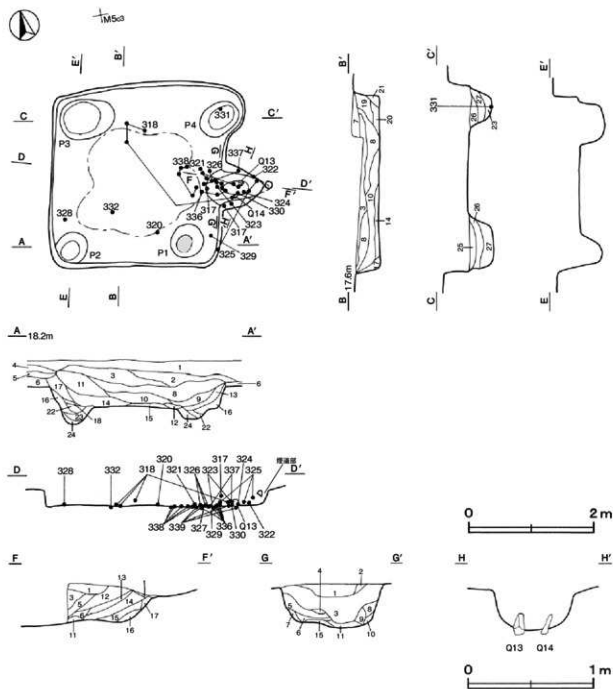
覆土 14層に分けられる。ブロック状の堆積状況を示す、人為堆積と考えられる。第1～7層は表土層で、第6層を掘り込んで本住居が構築されたと考えられる。第22～27層はピットの土層である。

土層解説

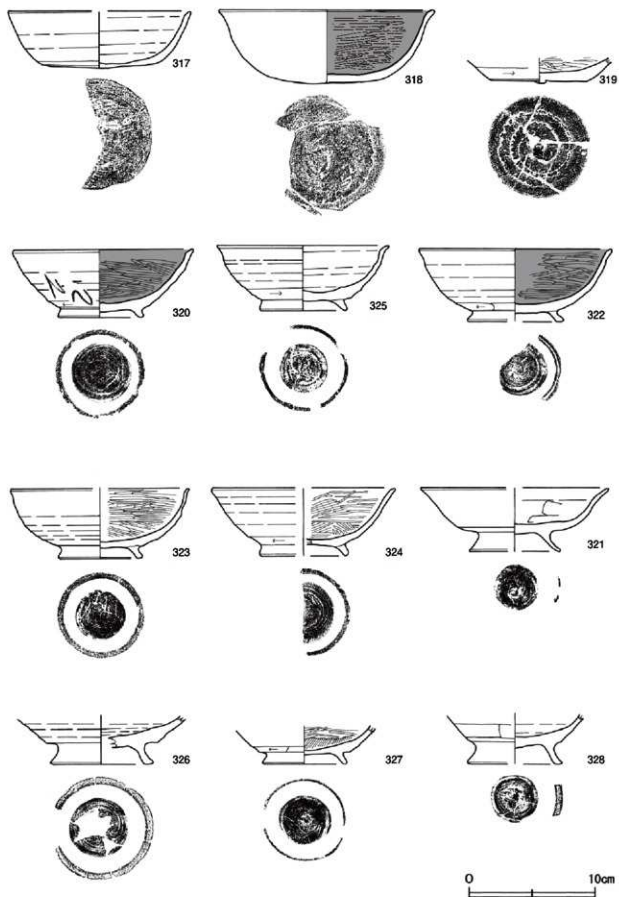
1 暗 濁 色	焼土粒子・炭化粒子微量	14 黒 濁 色	灰白色粘土粒子微量
2 濁 色	青灰色粘土粒子微量	15 黒 濁 色	灰白色粘土粒子微量(粘性弱い)
3 にぶい黄褐色	焼土粒子・炭化粒子・青灰色粒子微量	16 黒 濁 色	焼土粒子・炭化粒子少量
4 灰 黄 濁 色	焼土粒子少量	17 灰 黄 濁 色	灰白色粘土ブロック中量
5 灰 黄 濁 色	灰白色粘土粒子中量	18 濁 灰 色	灰白色粘土粒子中量
6 暗灰黄褐色	灰白色粘土粒子多量	19 暗 濁 色	焼土粒子・炭化粒子・灰白色粘土粒子微量
7 濁 色	青灰色粘土粒子微量	20 にぶい黄褐色	灰白色粘土粒子微量
8 にぶい黄褐色	灰白色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	21 にぶい黄褐色	灰白色粘土粒子中量
9 黒 濁 色	灰白色粘土粒子微量	22 暗 濁 色	灰白色粘土粒子少量、焼土粒子微量
10 黒 濁 色	焼土粒子中量、炭化粒子少量、灰白色粘土粒子微量	23 暗 濁 色	灰白色粘土粒子微量
11 灰 黄 濁 色	灰白色粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	24 暗 濁 色	焼土粒子・灰白色粘土粒子微量
12 にぶい黄褐色	炭化粒子・灰白色粘土粒子微量	25 暗 濁 色	炭化粒子微量
13 灰 黄 濁 色	焼土粒子・炭化粒子・灰白色粘土粒子微量	26 にぶい黄褐色	灰白色粘土粒子少量、炭化粒子微量
		27 濁 色	灰白色粘土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片270点（椀類160、小皿4、甕類106）、石製品2点（支脚）、細礫4点が出土している。遺物は、竈内、焚口部前の床面、南壁際を中心に出土している。また、竈内、焚口部からは遺物が重なって出土しており、住居廃絶時に投棄された様相を示している。322～325・336・337は竈内からそれぞれ出土している。318は竈内とP3の東寄りの位置から出土した破片が接合したものである。「穴之」と墨書された320は、P1西側の床面から正位の状態でも出土している。334はP1の覆土中から出土している。

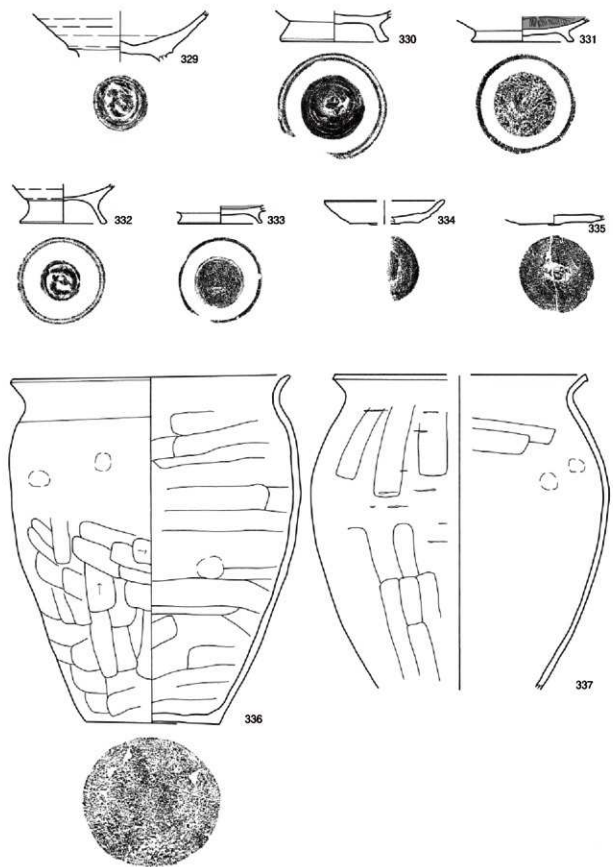
所見 時期は、出土土器から10世紀後葉から11世紀前葉と考えられる。



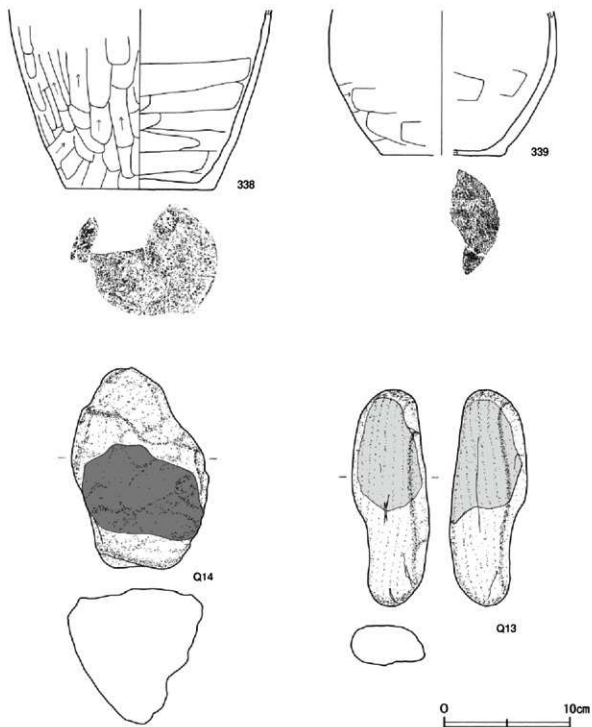
第122図 第48号住居跡実測図



第123图 第48号住居跡出土遺物実測図(1)



第124図 第48号住居跡出土遺物実測図(2)



第125図 第48号住居跡出土遺物実測図(2)

第48号住居跡出土遺物観察表 (第123～125図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
317	土師器	坏	[14.4]	4.6	8.0	雲母・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	壺内	50% PL38
318	土師器	碗	17.0	5.8	9.4	雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り	覆土下層	50%
319	土師器	碗	-	(2.1)	8.2	雲母・赤色粒子	灰褐	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り	覆土中	30%
320	土師器	高台付碗	14.0	5.5	6.4	長石・石英	橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	床面	55% PL41・55 墨書「六之」
321	土師器	高台付碗	[14.8]	5.0	[7.2]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部内面ヘラナデ 底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	覆土下層	60% PL41

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
322	土師器	高台付椀	15.0	5.8	[7.4]	雲母・長石	にぶい黄褐色	普通	ロクロナデ 内面へう磨き 底部回転へう切り後高台貼り付け	壺内	50% PL41
323	土師器	高台付椀	[14.0]	5.6	6.2	長石・赤色粒子	灰赤	普通	ロクロナデ 内面へう磨き 底部回転へう切り後高台貼り付け	壺内	70% PL41
324	土師器	高台付椀	[14.4]	5.6	[6.6]	雲母・長石	にぶい黄褐色	普通	ロクロナデ 内面へう磨き 底部回転へう切り後高台貼り付け	壺内	40% PL41
325	土師器	高台付椀	13.5	5.3	6.8	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 底部回転へう切り後高台貼り付け	壺内	75% PL41
326	土師器	高台付椀	-	(39)	8.2	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	ロクロナデ 底部回転へう切り後高台貼り付け	壺内	20%
327	土師器	高台付椀	-	(30)	6.4	長石・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	内面へう磨き 底部回転へう切り後高台貼り付け	壺内	30%
328	土師器	高台付椀	-	(41)	[7.6]	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 底部回転へう切り後高台貼り付け	床面	20%
329	土師器	高台付椀	-	(41)	-	長石・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	ロクロナデ 底部回転へう切り後高台貼り付け	床面	50%
330	土師器	高台付椀	-	(26)	8.5	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転へう切り後高台貼り付け	壺内	20%
331	土師器	高台付椀	-	(20)	7.8	長石・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	体部内面へう磨き 底部回転へう切り後高台貼り付け	P4 底面	20%
332	土師器	高台付椀	-	(32)	6.5	雲母・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	底部回転へう切り後高台貼り付け	床面	40%
333	土師器	高台付椀	-	(14)	6.6	長石・赤色粒子	灰褐色	普通	体部内面へう磨き 底部回転へう切り後高台貼り付け	覆土中	20%
334	土師器	小皿	[9.3]	1.9	[5.5]	長石・赤色粒子	橙	普通	底部回転へう切り	P1 覆土中	30% PL46
335	土師器	小皿	-	(0.7)	6.0	雲母・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	底部回転へう切り	P4 覆土中	20%
336	土師器	甕	22.0	28.0	10.6	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	体部外面へう磨き 内面ヘラナデ 指痕	壺内	40% PL35
337	土師器	甕	[20.0]	(25.0)	-	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	体部外面へう磨き 輪積痕 内面ヘラナデ 指痕	壺内	20%
338	土師器	甕	-	(14.3)	11.6	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	体部外面へう磨き 内面ヘラナデ	床面	20%
339	土師器	小形甕	-	(11.5)	[9.2]	長石・石英	橙	普通	体部外面へう磨き 内面ヘラナデ	壺内	15%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q 13	支脚	17.3	6.2	3.2	481	雲母片岩	円柱状に成形 火熱痕	壺内	PL54
Q 14	支脚	16.0	11.0	10.8	1990	ヘンマ岩	底部平坦に成形 窪付着	壺内	

第49号住居跡 (第126図)

位置 調査ⅡB区中央部のL5 b3区で、標高17.6mの平坦な低地上に位置している。

重複関係 北西コーナー部を第63号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北部はほとんど床面が露出した状態で確認されたため、残存する竈と壁から規模と形状を推定した。確認された範囲は、東西軸4.3m、南北軸3.0mほどである。平面形は長方形または方形と推定され、主軸方向はN-95°-Eと考えられる。壁高は20～40cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほは平坦である。

竈 東壁中央部から南寄り付設されている。焚口部から煙道部まで104cm、軸部幅は84cmと推定される。火床部は床面とほぼ同じ高さの面をわずかに掘りこぼめて使用しており、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ60cmほど掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 黄褐色 焼土ブロック少量、シルト粒子微量
- 2 灰赤褐色 焼土粒子中量、青灰色粘土粒子・シルト粒子少量
- 3 黄褐色 焼土粒子・青灰色粘土粒子・シルト粒子少量
- 4 灰黄褐色 青灰色粘土粒子中量、焼土粒子少量

覆土 3層に分けられる。層厚が薄く明確ではないが、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

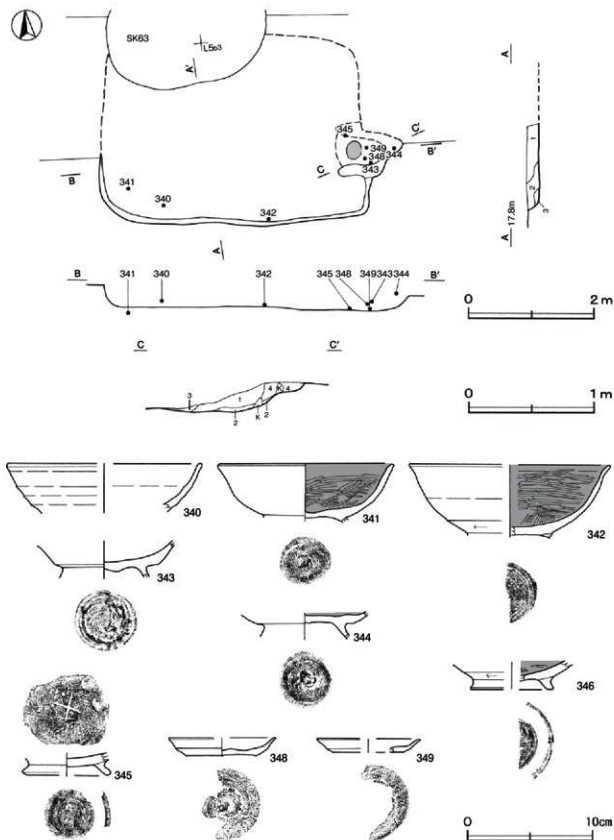
土層解説

- 1 黒褐色 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子微量
- 3 にぶい黄褐色 青灰色粘土粒子・鉄分微量

遺物出土状況 土師器片107点(輪郭72、小皿12、甕類23)、不明鉄製品1点、粘土ブロック2点が、壺内や南壁際を中心に出土している。341は南西コーナー部、342は南壁際中央部の床面からそれぞれ出土している。

343～345・348・349は竈内からそれぞれ出土している。345は内底面にヘラ記号が刻まれている。

所見 時期は、出土土器から11世紀前半以降と考えられる。



第126図 第49号住居跡・出土遺物実測図

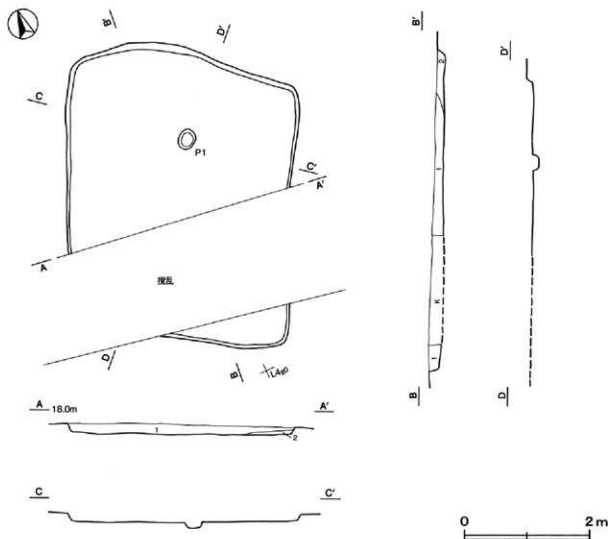
第49号住居跡出土遺物観察表 (第126図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
340	土師器	椀	[15.4]	(3.9)	-	雲母・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	ロクロナデ	覆土下層	10%
341	土師器	高台付椀	13.8	(4.8)	-	雲母・長石	橙	普通	ロクロナデ 内面へラ磨き 底部回転へラ切り後高台貼り付け	床面	85% PL41
342	土師器	高台付椀	[15.8]	(5.8)	-	石英・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 体部内面へラ磨き 底部回転へラ切り後高台貼り付け	床面	45% PL41
343	土師器	高台付椀	-	(3.0)	-	長石・赤色粒子	赤褐色	普通	ロクロナデ 底部回転へラ切り後高台貼り付け	壺内	10%
344	土師器	高台付椀	-	(2.2)	-	雲母・長石	にぶい橙	普通	底部回転へラ切り後高台貼り付け	壺内	10%
345	土師器	高台付椀	-	(1.8)	[6.6]	雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内面へラ磨き 底部回転へラ切り後高台貼り付け	壺内	10% → 20%*
346	土師器	高台付椀	-	(2.3)	[6.4]	雲母・赤色粒子	にぶい靑	普通	体部内面へラ磨き 底部回転へラ切り後高台貼り付け	覆土中	10%
348	土師器	小皿	[8.6]	1.4	5.6	長石・石英	灰褐色	普通	ロクロナデ 底部回転へラ切り	壺内	40%
349	土師器	小皿	[8.2]	1.1	[5.6]	長石・石英	にぶい橙	普通	ロクロナデ	壺内	30%

第50号住居跡 (第127図)

位置 調査ⅡB区中央部のL49区で、標高17.8mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 住居跡の南部は攪乱を受けているため、床や壁から形状を推定した。確認された範囲は、南北軸



第127図 第50号住居跡実測図

4.6m, 東西軸3.7mほどである。平面形は長方形または方形と推定され、主軸方向はN-125°-Eと考えられる。壁高は12cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

ピット 中央部から北寄りに位置している。深さ15cmほどで、支柱穴の可能性が考えられるが、配置から性格は不明である。

覆土 2層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

1 にふい黄褐色 焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子・砂粒微量 2 灰黄褐色 白色粘土粒子中量

遺物出土状況 土師器片21点(椀類14, 甕類7)が出土している。いずれも細片で図示できない。

所見 時期は、出土土器が少なく明確ではないが、遺構の様相や出土土器から10世紀後半と考えられる。

第51号住居跡 (第128図)

位置 調査ⅡB区中央部のL5g1区で、標高17.8mほどの平坦な低地上に位置している。

重複関係 第21号住居に掘り込まれている。

規模と形状 北側を掘り込まれているため、確認できた範囲は長軸3.4m, 短軸0.9mである。平面形は長方形または方形と推定され、主軸方向はN-95°-Eである。壁高は17cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

竈 東壁中央部のやや南寄りに付設されていたと推定される。規模は、焚口部から煙道部まで73cm, 袖幅67cmである。火床部は床面と同じ高さの地山面を使用しており、火床面及び内壁は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ42cm掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

覆土層解説

1 暗灰黄色 焼土ブロック中量, 青灰色粘土粒子少量, 炭化粒子微量
2 暗灰黄色 焼土ブロック中量, 炭化粒子・青灰色粘土粒子少量
3 暗褐色 焼土ブロック少量, 炭化粒子・青灰色粘土粒子微量
4 黒褐色 焼土ブロック中量, 炭化粒子・青灰色粘土粒子少量
5 褐色 焼土粒子少量, 青灰色粘土粒子微量
6 褐色 焼土粒子・青灰色粘土粒子微量
7 にふい黄褐色 焼土粒子少量

ピット 深さ10cmで、南東コーナー部に位置し、性格は不明である。

ピット土層解説

1 暗褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子・青灰色粘土粒子少量 2 暗褐色 青灰色粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

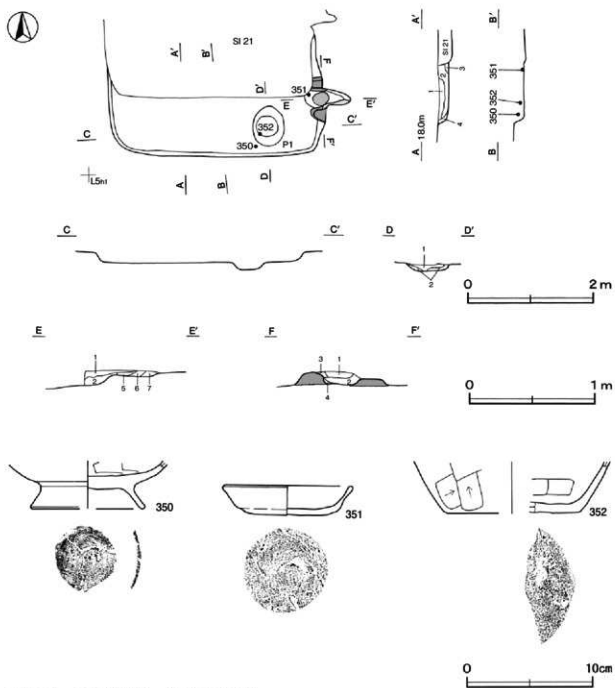
覆土 4層に分けられる。不自然な堆積状況を示すことから、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 にふい黄褐色 焼土粒子・青灰色粘土粒子微量 3 にふい黄褐色 青灰色粘土粒子少量, 焼土粒子微量
2 にふい黄褐色 青灰色粘土ブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 4 褐色 青灰色粘土粒子少量

遺物出土状況 土師器片42点(椀類26, 小皿5, 甕類11), 粘土ブロック2点, 細礫4点が出土している。350・352はP1付近の覆土下層, 351は焚口部からそれぞれ出土している。

所見 時期は、重複関係と出土土器から10世紀後半と考えられる。



第128図 第51号住居跡・出土遺物実測図

第51号住居跡出土遺物観察表 (第128図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
350	土師器	高台付椀	-	(3.8)	[8.6]	長石・赤色粒子	にぶい椀	普通	ロクロナデ 底面回転ヘラ切り後高台 取り付け	覆土下層	30%
351	土師器	小皿	10.1	2.5	7.0	長石・赤色粒子	椀	普通	ロクロナデ 底面回転糸切り	焚口部	85% PL46
352	土師器	葉	-	(4.1)	[10.4]	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい椀	普通	体部外面下端へラ削り 内面ヘラナデ	覆土下層	10%

第52号住居跡 (第129～131図)

位置 調査ⅡB区中央部のL5g4区で、標高17.4mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 長軸3.5m、短軸2.5mの長方形で、主軸方向はN-93°Eである。壁高は22～27cmで、外傾して立ち上がっている。

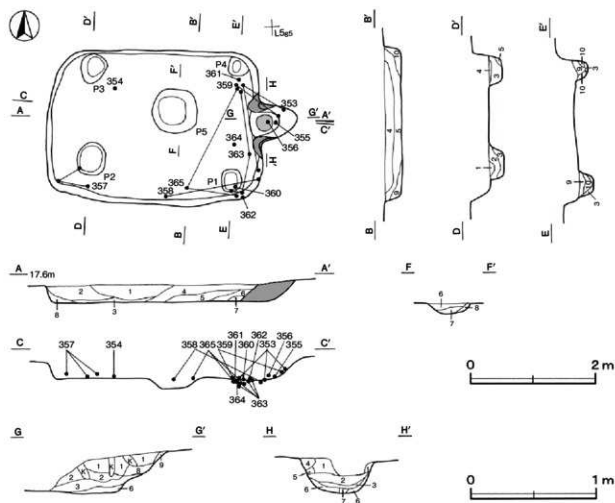
床 ほぼ平坦である。

竈 東壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで77cm、袖部幅は98cmである。火床部は床面とほぼ同じ高さの面を掘りくぼめて使用しており、火床面は火熱を受け赤変している。また、内壁に赤変硬化している部分が確認できる。煙道部は壁外へ62cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。第5層は天井部の崩落土と考えられる。

竈土層解説

- | | |
|---------------------------------|----------------------------|
| 1 にぶい黄褐色 白色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 焼土粒子・白色粘土粒子少量 |
| 2 にぶい黄褐色 焼土ブロック・白色粘土ブロック・炭化粒子少量 | 7 黒褐色 炭化粒子多量、焼土粒子少量 |
| 3 灰黄褐色 炭化粒子多量、焼土粒子少量、白色粘土粒子微量 | 8 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、白色粘土粒子微量 |
| 4 暗褐色 焼土ブロック・白色粘土ブロック少量 | 9 にぶい赤褐色 焼土ブロック多量 |
| 5 にぶい黄褐色 白色粘土粒子多量 | |

ピット 5か所。P1～P4は深さ20～28cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ20cmで中央部から北東寄りに位置し、配置から柱穴とは考えられず、性格は不明である。



第129図 第52号住居跡実測図

ピット土層解説 (P1～P5 共通)

- | | |
|-----------------------|--------------------------------|
| 1 黒褐色 炭化粒子・青灰色粘土粒子微量 | 6 にぶい黄褐色 砂粒中量、青灰色粘土ブロック少量 |
| 2 黒褐色 青灰色粘土ブロック少量 | 7 にぶい黄褐色 砂粒中量、青灰色粘土粒子少量 |
| 3 褐色 青灰色粘土粒子・砂粒少量 | 8 にぶい黄褐色 砂粒中量、青灰色粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 白色粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 9 にぶい黄褐色 焼土粒子・青灰色粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 砂粒微量 | 10 暗褐色 焼土粒子少量、青灰色粘土粒子微量 |

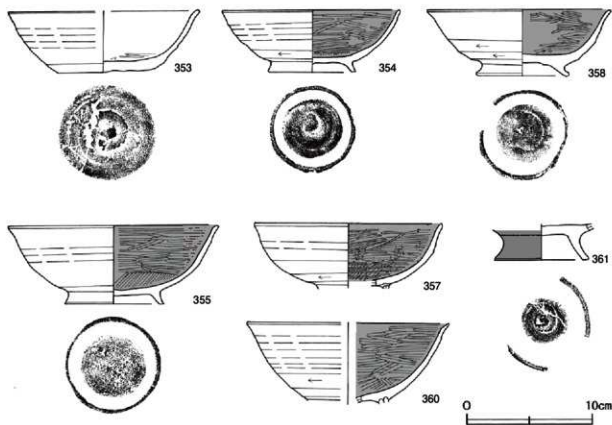
覆土 10層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

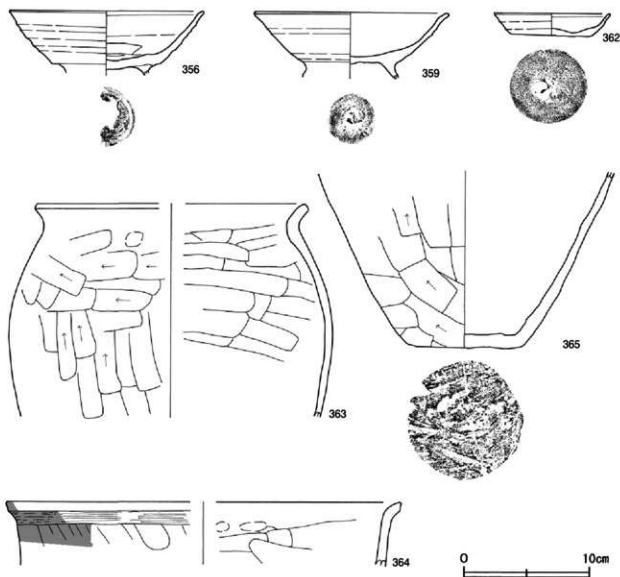
- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1 褐色 青灰色粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 炭化粒子少量、焼土粒子・青灰色粘土粒子微量 |
| 2 褐色 青灰色粘土粒子中量、焼土粒子微量 | 7 暗褐色 炭化粒子中量、焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 青灰色粘土粒子少量 | 8 にぶい黄褐色 青灰色粘土粒子中量 |
| 4 にぶい黄褐色 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子微量 | 9 褐色 青灰色粘土粒子少量 |
| 5 褐色 焼土粒子・青灰色粘土粒子微量 | 10 にぶい黄褐色 青灰色粘土粒子中量、焼土粒子微量 |

遺物出土状況 土器器片265点(碗類120, 小皿4, 甕類141), 須恵器片1点(甕), 礫2点, 粘土ブロック6点が出土している。遺物は、竈内や北東コーナー部を中心にほぼ全域から散在して出土している。353は竈内、北東コーナー部、南東コーナー部の床面から出土した破片が接合したものである。354は中央部から北西寄りの覆土下層、355・356は竈内から出土している。358は南壁際中央部の覆土下層と南東コーナー部床面、359は竈内と北東コーナー部床面から出土した破片がそれぞれ接合したものである。362は南東コーナー部の床面、363は北東コーナー付近と南東コーナー付近の覆土下層から床面にかけて出土した破片がそれぞれ接合したものである。

所見 時期は、出土土器から10世紀後葉から11世紀前葉と考えられる。



第130図 第52号住居跡出土遺物実測図(1)



第131図 第52号住居跡出土土物実測図(2)

第52号住居跡出土土物観察表(第130・131図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
353	土師器	坏	[150]	4.9	7.7	雲母・赤色粒子	にぶい黄緑	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り	室内・床面	40%
354	土師器	高台付椀	14.0	5.1	6.8	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄緑	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台張り付け	覆土下層	60% PL.42
355	土師器	高台付椀	16.5	6.3	7.6	長石・赤色粒子	浅黄	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台張り付け	室内	60% PL.42
356	土師器	高台付椀	15.3	(5.3)	-	石英・赤色粒子・黒色粒子	にぶい赤黒	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台張り付け	室内	60% PL.42
357	土師器	高台付椀	14.8	(5.2)	-	長石・赤色粒子	にぶい黄緑	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台張り付け	覆土下層	60% PL.42
358	土師器	高台付椀	14.4	5.4	7.0	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台張り付け	下層・床面	40% PL.42
359	土師器	高台付椀	[152]	(5.4)	-	雲母・赤色粒子	にぶい黄緑	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台張り付け	室内・床面	50%
360	土師器	高台付椀	[16.0]	(6.4)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台張り付け	床面	30%
361	土師器	高台付椀	-	(2.8)	7.3	雲母・長石	にぶい橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台張り付け	床面	10%
362	土師器	小皿	9.3	1.9	6.2	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	床面	95% PL.46
363	土師器	甕	[212]	(17.0)	-	長石・石英	橙	普通	器外面ヘラ磨き 指頭痕 内面ヘラナデ	下層・床面	5% PL.36
364	土師器	甕	[312]	(5.1)	-	長石・赤色粒子	にぶい黄緑	普通	上縁部ナデ 器内面ヘラナデ	床面	10%
365	土師器	甕	-	(14.0)	9.1	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄緑	普通	器内外面下縁ヘラ磨き	下層・床面	30%

竈土層解説

- | | |
|---------------------------------|------------------------|
| 1 にぶい黄褐色 白色粘土粒子中量、焼土粒子微量 | 7 暗 褐色 焼土ブロック少量 |
| 2 にぶい黄褐色 白色粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 暗 褐色 焼土粒子中量、白色粘土粒子少量 |
| 3 暗 褐色 焼土粒子少量、白色粘土粒子微量 | 9 黒 褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量 |
| 4 暗 褐色 焼土ブロック少量、白色粘土粒子微量 | 10 暗 赤褐色 焼土粒子多量 |
| 5 にぶい黄褐色 白色粘土ブロック・焼土粒子微量 | |
| 6 暗 褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量、白色粘土粒子微量 | |

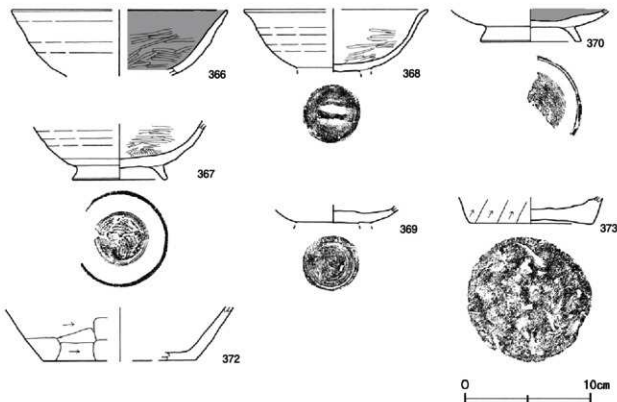
ピット 2か所。P1・P2は深さそれぞれ20cmほどで、規模と配置から主柱穴と考えられる。特にP2は北東コーナー部壁際で確認されているが、遺物や配置から本住居に伴うピットと判断した。

覆土 9層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。第1層は表土層、第2層は地山層であり、本住居は、この層を掘り込んで構築されていると考えられる。

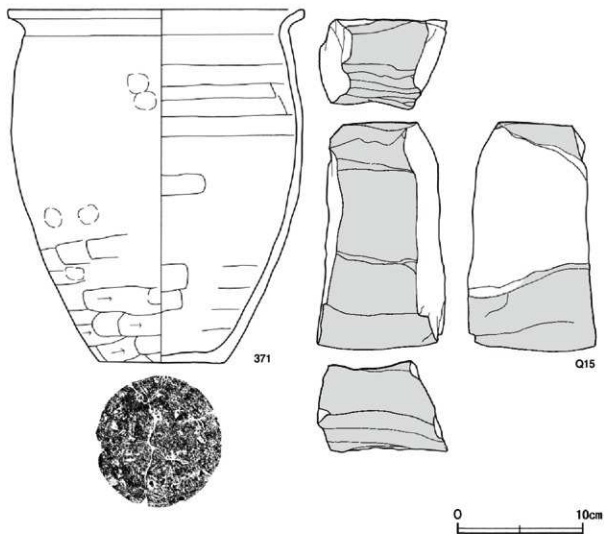
土層解説

- | | |
|----------------------------------|--------------------------------|
| 1 褐色 焼土粒子少量 | 5 暗 褐色 青灰色粘土粒子中量、焼土粒子微量 |
| 2 にぶい黄褐色 青灰色粘土粒子中量 | 6 にぶい黄褐色 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子微量 |
| 3 にぶい黄褐色 焼土粒子・青灰色粘土ブロック少量、炭化粒子微量 | 7 にぶい黄褐色 焼土粒子・炭化粒子中量、青灰色粘土粒子微量 |
| 4 にぶい黄褐色 焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子少量 | 8 褐色 青灰色粘土粒子少量 |
| | 9 褐色 青灰色粘土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片203点（輪類66、小皿1、甕類136）、須恵器片1点（甕）、石製品1点（支脚）、細網16点が出土している。遺物は、竈前や南東コーナー部を中心に全域から散在して出土している。366は北東コーナー部の覆土下層、367は南西コーナー部の覆土中層から出土している。368は竈内と南東コーナーの高まりの部分から出土した破片が接合したものである。また、370は竈内から出土している。371は竈内と南東コーナー、北西コーナー部の覆土下層から床面にかけて出土した破片がそれぞれ接合したものである。Q15は火床面から立位状態で出土し、火熱を受けた痕跡があることから支脚として使用されていたものと考えられる。所見 時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。



第139図 第53号住居跡出土遺物実測図(1)



第134図 第53号住居跡出土遺物実測図(2)

第53号住居跡出土遺物観察表(第133・134図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
366	土師器	椀	[168]	(5.3)	-	雲母・長石	橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き	竈土下層	20%
367	土師器	高台付椀	-	(4.5)	7.4	雲母・赤色粒子	にぶい・橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台取り付け	竈土中層	30%
368	土師器	高台付椀	[14.4]	(5.0)	-	雲母・長石・石葉・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台取り付け	竈内・竈土下層	30%
369	土師器	高台付椀	-	(1.4)	-	雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	底部回転ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台取り付け 高台部欠損	P2竈土下層	10%
370	土師器	高台付椀	-	(2.6)	[7.8]	長石・赤色粒子	にぶい・黄	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台取り付け	竈内	10%
371	土師器	甕	23.3	28.2	10.1	長石・石英	にぶい・褐	普通	体部外面下端ヘラ削り 指頭痕 内面ヘラナデ	竈内・竈土下層・床面	80% PL.35
372	土師器	甕	-	(4.3)	[12.0]	長石・石英	にぶい・褐	普通	体部外面下端ヘラ削り	竈土中層	5%
373	土師器	甕	-	(2.1)	9.7	雲母・長石・石英	橙	普通	体部外面下端ヘラ削り	竈内	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q 15	支脚	18.2	10.2	7.1	1980	ハンレイ岩	角柱状に成形 火熱収	竈内	PL54

第54号住居跡 (第135～137図)

位置 調査ⅡB区中央部のL5g3区で、標高17.5mほどの平坦な低地上に位置している。

重複関係 竈及び南東コーナー部以外を第51号土坑に掘り込まれている。

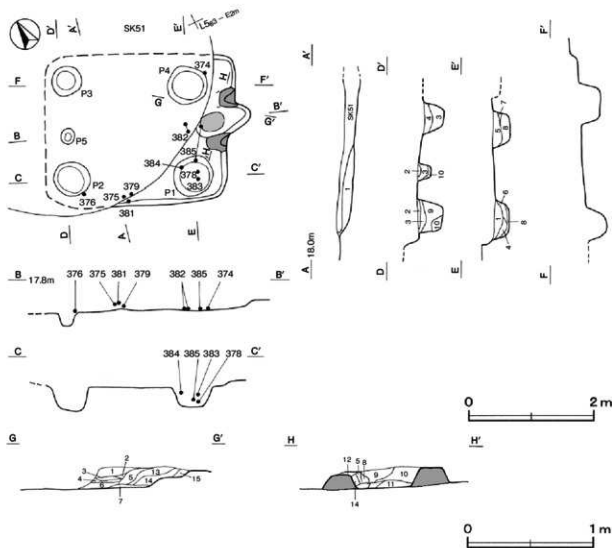
規模と形状 大部分が土坑に掘り込まれているが、確認されたピットの位置から規模と形状を推定すると、東西軸2.9m、南北軸2.5mほどの長方形で、主軸方向はN-113°-Eである。確認された壁高は13cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

竈 東壁中央部やや北寄りに付設されていたと推定される。焚口部から煙道部まで90cm、袖部幅は85cmである。火床部は床面とほぼ同じ高さの地山面を使用し、火床面は火熱を受け赤変している。煙道部は壁外へ40cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

遺土層解説

- | | |
|--------------------------|--------------------------------|
| 1 暗褐色 焼土粒子・白色粘土粒子微量 | 6 暗褐色 焼土ブロック少量、白色粘土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 灰黄褐色 白色粘土粒子少量、焼土ブロック微量 | 7 暗褐色 白色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 赤褐色 焼土ブロック中量 | 8 灰黄褐色 焼土ブロック・白色粘土粒子少量 |
| 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量 | |
| 5 暗赤褐色 焼土粒子中量、白色粘土粒子微量 | |



第135図 第54号住居跡実測図

- | | |
|-------------------------------------|------------------------------|
| 9 暗 褐色 焼土ブロック中量、白色粘土ブロック・炭化粒子
微量 | 12 黒 褐色 焼土粒子少量、白色粘土粒子微量 |
| 10 暗 褐色 焼土粒子少量、白色粘土粒子微量 | 13 暗 褐色 焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量 |
| 11 暗 褐色 焼土粒子中量、炭化粒子・白色粘土粒子微量 | 14 暗 褐色 焼土粒子少量、炭化粒子・白色粘土粒子微量 |
| | 15 暗 褐色 焼土粒子・白色粘土粒子微量 |

ピット 5か所。P1～P4は深さ32～40cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ20cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

ピット土層解説 (P1～P5共通)

- | | |
|-------------------------------|-----------------------------|
| 1 黒 褐色 焼土粒子・白色粘土粒子・砂粒少量、炭化物微量 | 6 暗 褐色 白色粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック微量 |
| 2 にぶい黄褐色 焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子少量 | 7 暗 褐色 白色粘土ブロック少量、炭化物微量 |
| 3 灰 黄 褐色 白色粘土粒子少量 | 8 暗 褐色 白色粘土粒子微量 |
| 4 暗 褐色 白色粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子微量 | 9 黒 褐色 白色粘土粒子微量 |
| 5 暗 褐色 白色粘土粒子少量、炭化物・焼土粒子微量 | 10 にぶい黄褐色 白色粘土粒子少量 |

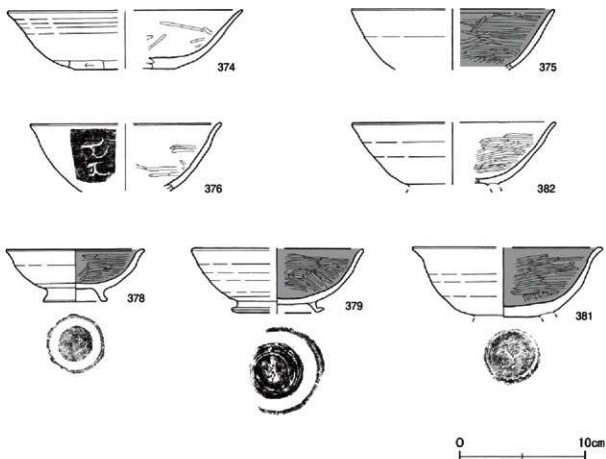
覆土 単一層で、残存する層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

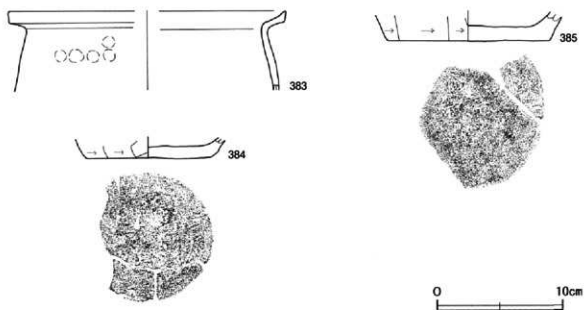
- 1 暗 褐色 青灰色粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片163点(碗類86、甕類77)、不明鉄製品1点、細礫1点が出土している。遺物は、南壁際やP1内を中心に出土している。374は北東コーナー部、375・379・381は南壁際中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。刻書された文字がある376は南西コーナー部、382は焚口部手前のそれぞれ床面から、出土している。378・383はそれぞれP1の覆土下層及び覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。



第136図 第54号住居跡出土遺物実測図(1)



第137図 第54号住居跡出土遺物実測図(2)

第54号住居跡出土遺物観察表(第136・137図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
374	土師器	環	[18.5]	4.7	[8.1]	雲母・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き	覆土下層	30%
375	土師器	椀	[16.0]	(4.9)	-	長石・赤色粒子	椀	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き	覆土下層	20%
376	土師器	椀	[15.1]	(5.4)	-	雲母・長石・赤色粒子	明赤褐	普通	内面ヘラ磨き	床面	10% PL55 []
378	土師器	高台付椀	10.8	4.1	4.9	長石・石英	にぶい椀	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き ヘラ切り後高台貼り付け	底面回転 P.1覆土 下層	80% PL42
379	土師器	高台付椀	[13.4]	5.4	[7.3]	雲母・赤色粒子	にぶい椀	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き ヘラ切り後高台貼り付け	底面回転	覆土下層 50% PL42
381	土師器	高台付椀	[14.9]	(5.5)	-	雲母・赤色粒子	椀	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き ヘラ切り後高台貼り付け	底面回転	覆土下層 60% PL42
382	土師器	高台付椀	[16.0]	(5.0)	-	雲母・石英	にぶい椀	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き	床面	30%
383	土師器	甕	[21.9]	(6.3)	-	長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部内外面ナデ 外面指掘	P1覆土 下層	5%
384	土師器	甕	-	(1.7)	10.0	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部外面下端ヘラ削り	P1覆土 下層	5%
385	土師器	甕	-	(2.4)	[12.8]	雲母・長石・石英	にぶい椀	普通	体部外面下端ヘラ削り	覆土下層	5%

第55号住居跡(第138図)

位置 調査ⅡB区北部のJ5f2区で、標高17.5mの平坦な低地上に位置している。

確認状況 竈の火床面が露出した状態で確認されたため、わずかに残る覆土と火床面の位置から形状を推定した。また、北部が攪乱を受けている。

規模と形状 確認された範囲は東西軸3.2m、南北軸2.2mほどで、平面形は長方形もしくはは方形と推定され、主軸方向はN-94°-Eと考えられる。確認された壁高は3cmほどある。

床 ほは平坦である。

竈 北壁のほは中央部に付設されていたと推定される。火床面のみが確認されており、火熱を受けて赤変硬化している。

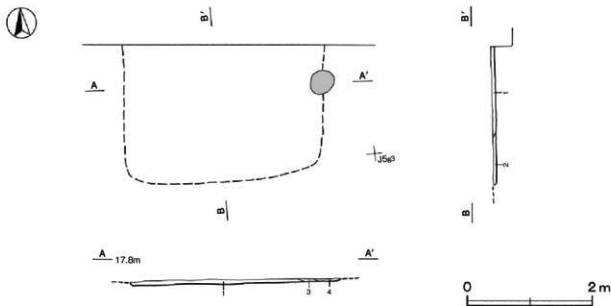
覆土 2層に分けられる。層厚が薄いため堆積状況は不明である。第3・4層は残存する竈の土層である。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|----------------------|
| 1 灰黄褐色 | 青灰色粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 灰黄褐色 | 白色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 灰黄褐色 | 白色粘土粒子中量 | 4 黒褐色 | 焼土粒子多量、炭化粒子少量（赤変酸化層） |

遺物出土状況 土師器片1点（堯類）は火床面から出土しているが、細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器が少なく明確ではないが、出土土器及び遺構の様相から、10世紀後半以降と考えられる。



第138図 第55号住居跡実測図

第56号住居跡（第139・140図）

位置 調査ⅡB区中央部のL5 d33区で、標高17.5mほどの平坦な低地上に位置している。

重複関係 北壁中央部を第77号土坑、西壁中央部を第79号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.0m、短軸2.8mの方形で、主軸方向はN-87°-Eである。壁高は15～20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦である。

竈 東壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで164cmで、袖部は確認できなかった。火床部は床面とはほぼ同じ高さの地山面を掘りくぼめて使用し、火床面は火熱を受け赤変している。また、火床面の両壁内側に石製支脚が二個体据えられた状態で出土しており、二掛け竈であったと想定される。煙道部は壁外へ120cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がり、端部から直立している。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|-------------------------|--------|----------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子中量 | 8 暗褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子・白色粘土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | 焼土ブロック・白色粘土ブロック・炭化物少量 | 9 褐色 | 焼土ブロック・白色粘土粒子少量 |
| 3 暗褐色 | 焼土ブロック・白色粘土ブロック中量、炭化物少量 | 10 褐色 | 焼土粒子・白色粘土粒子少量 |
| 4 暗褐色 | 焼土ブロック中量 | 11 褐色 | 白色粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 5 にぶい黄褐色 | 焼土粒子・白色粘土粒子微量 | 12 黄褐色 | 焼土ブロック・白色粘土ブロック少量 |
| 6 暗褐色 | 焼土粒子微量 | 13 暗褐色 | 焼土粒子・白色粘土粒子少量 |
| 7 暗褐色 | 焼土粒子少量 | 14 暗褐色 | 白色粘土ブロック中量、焼土ブロック少量 |

ピット 2か所。P 1 は深さ20cm で規模と配置から主柱穴と考えられる。P 2 は深さ28cm で、中央部西寄り
りに位置し、性格は不明である。

ピット土層解説 (P 1・P 2 共通)

- | | |
|-------------------------|----------------------|
| 1 灰黄褐色 白色粘土ブロック・焼土粒子少量 | 3 暗褐色 炭化粒子・青灰色粘土粒子少量 |
| 2 暗褐色 白色粘土ブロック中量、炭化粒子少量 | |

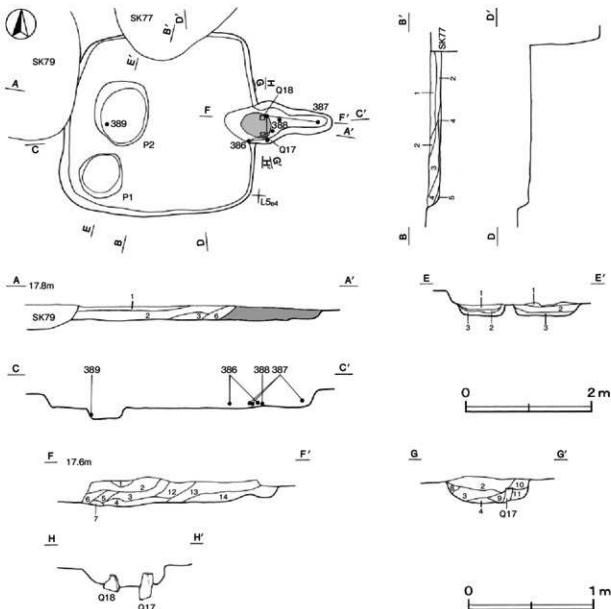
覆土 6層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

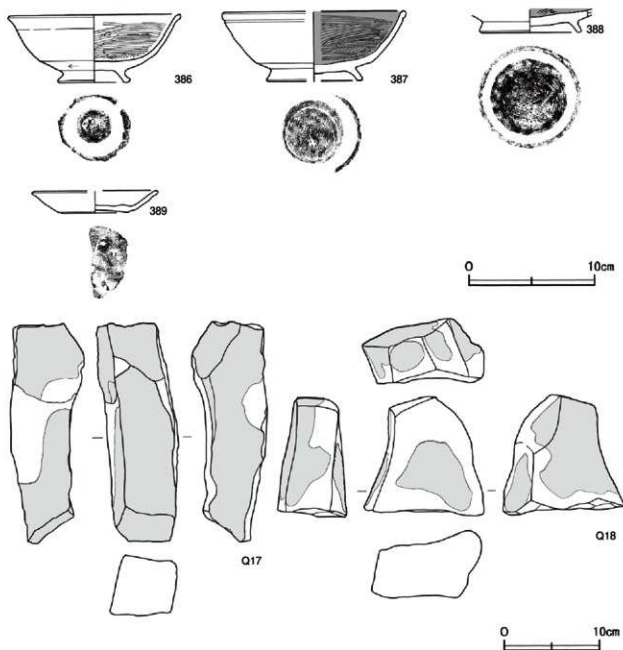
- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 灰黄褐色 焼土粒子・白色粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 4 灰黄褐色 白色粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 灰黄褐色 白色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 灰黄褐色 白色粘土粒子少量 |
| 3 黒褐色 白色粘土粒子中量、炭化物・焼土粒子微量 | 6 灰黄褐色 白色粘土粒子少量、焼土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片215点 (輪類109, 小皿1, 甕類105), 石製品2点 (支脚), 細礫4点, 不明土製品1
点が出土している。遺物は竈内を中心に出土しており, 南東コーナー部から炭化材も出土している。386 ~
388は竈内, 389はP 2の覆土下層から出土している。

所見 時期は, 出土土器から10世紀後葉から11世紀前葉と考えられる。



第139図 第56号住居跡火竈図



第140図 第56号住居跡出土遺物実測図

第56号住居跡出土遺物観察表 (第140図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
386	土師器	高台付碗	13.6	5.4	5.6	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き ヘラ切り後高台取り付付	底部回転	壺内 60% PL42
387	土師器	高台付碗	[14.2]	5.5	[7.4]	雲母・長石	にふい橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き ヘラ切り後高台取り付付	底部回転	壺内 50% PL42
388	土師器	高台付碗	-	(1.9)	7.8	雲母・長石	黒陶	普通	内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台取り付付	壺内	10%
389	土師器	小皿	[9.3]	1.7	[5.6]	雲母・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ	底部回転ヘラ切り	P2壺土下層 5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q 17	支脚	232	8.6	6.4	2060	ハンレイ岩	角柱状に成形 火焼痕	壺内	PL54
Q 18	支脚	12.6	12.9	7.0	1430	ハンレイ岩	台形状に成形 火焼痕	壺内	PL54

第57号住居跡 (第141・142図)

位置 調査ⅡA区中央部のF5d7区で、標高17.5mほどの平坦な低地上に位置している。

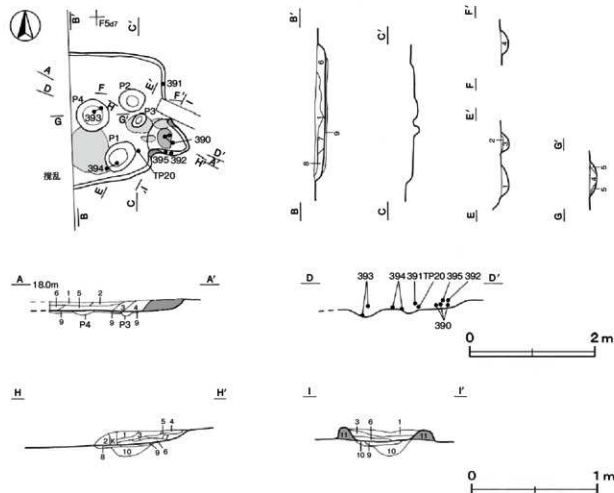
規模と形状 西部は擾乱を受けているため、確認された範囲は、南北軸22 m、東西軸1.5 mほどである。平面形は方形もしくは長方形と推定され、主軸方向はN-105°-Eである。壁高は6~10cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦な貼床で、黄褐色土を厚さ4 cmほど埋め土し構築している。焚口部手前及び中央部南寄りに炭化物を含む焼土ブロックの広がりが確認された。

竈 東壁中央部から南寄りに付設されている。焚口部から煙道部まで80cm、袖部幅は68cmである。袖部は地山の粘土層を掘り残して構築されている。火床部は中央部を20cmほど掘りくぼめ、褐色土で床面とはほぼ同じ高さまで埋め戻した面を使用しており、火床面は火熱を受け赤変硬化している。煙道部は東壁から南東方向へ斜めに44cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|--|--|
| 1 に深い黄褐色 砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子少量、白色粘土粒
子微量 | 4 暗褐色 焼土ブロック中量、砂粒少量、炭化粒子・白色粘
土粒子微量 |
| 2 灰黄褐色 焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量、白色粘土ブ
ロック微量 | 5 に深い黄褐色 砂粒中量、炭化物少量、焼土ブロック・白色粘土
粒子微量 |
| 3 に深い黄褐色 焼土ブロック・白色粘土ブロック・炭化粒子・砂
粒少量 | 6 に深い黄褐色 炭化粒子・砂粒少量、焼土粒子・白色粘土粒子・
青灰色粘土粒子微量 |



第141図 第57号住居跡実測図

- | | | | |
|---------|-------------------------|----------|----------------------|
| 7 濃い黄褐色 | 炭化粒子・白色粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子微量 | 9 暗赤褐色 | 焼土粒子多量 |
| 8 黒褐色 | 炭化粒子多量、焼土粒子・砂粒微量 | 10 褐色 | 炭化粒子・白色粘土粒子少量、焼土粒子微量 |
| | | 11 濃い黄褐色 | 白色粘土粒子多量 |

ピット 4か所。P 1・P 2 は深さ15cmほどで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 3・P 4 は深さ18cm～20cmで性格不明である

ピット土層解説 (P1～P4共通)

- | | | | |
|--------|-------------------------|---------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 | 炭化粒子中量、焼土粒子少量 | 4 濃い黄褐色 | 焼土ブロック・白色粘土ブロック・砂粒少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 砂粒中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 5 灰黄褐色 | 焼土粒子・白色粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量 |
| 3 灰黄褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量、白色粘土粒子微量 | | |

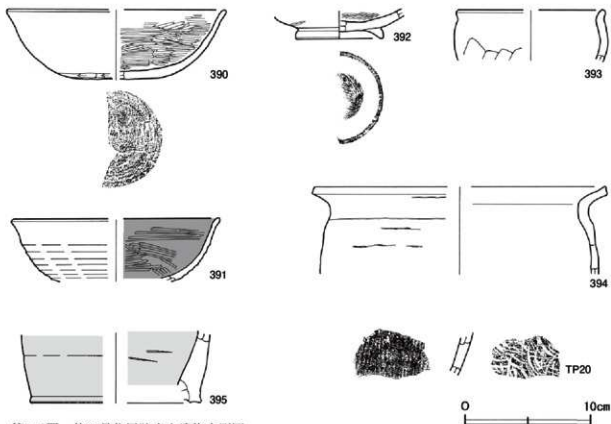
覆土 9層に分けられる。不自然な堆積状況を示す人為堆積と考えられる。第9層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | | | |
|---------|---------------------------|---------|------------------|
| 1 褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量 | 6 濃い黄褐色 | 白色粘土ブロック・炭化粒子少量 |
| 2 濃い黄褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量 | 7 暗褐色 | 砂粒少量、炭化粒子微量 |
| 3 褐色 | 炭化粒子少量、焼土粒子・砂粒微量 | 8 濃い黄褐色 | 砂粒少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、砂粒微量 | 9 濃い黄褐色 | 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 灰黄褐色 | 焼土ブロック・砂粒少量、炭化粒子・白色粘土粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片102点(輪類27, 甕74, 瓶1), 須恵器片5点(甕), 灰釉陶器片1点(瓶類)が出土している。遺物は竈内を中心に散在して出土している。390・392・395は竈内, 391は北東コーナー部壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。393はP 4の覆土上層から下層にかけて出土した破片が, 394はP 1の覆土上層から床面にかけて出土した破片がそれぞれ接合したものである。TP20は南東コーナー部の床面から出土している。

所見 時期は, 出土土器から10世紀後半と考えられる。



第142図 第57号住居跡出土遺物実測図

第57号住居跡出土遺物観察表 (第142図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
390	土師器	椀	[170]	5.5	7.2	雲母・石英	橙	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り	壺内	30%
391	土師器	椀	[162]	(5.0)	-	雲母・石英	にぶい濁	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き	壺土下層	15%
392	土師器	高台付椀	-	(2.3)	6.6	石英・赤色粒子	橙	普通	体部内外面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り 底面付張り	壺内	20%
393	土師器	鉢	[115]	(4.0)	-	雲母・石英	にぶい赤濁	普通	体部外面ヘラナデ	壺土下層	5%
394	土師器	甕	[229]	(6.8)	-	長石・石英	にぶい濁	普通	口縁部ナデ 体部外面輪轆夜	床面・P1上層	5%
395	灰釉陶器	瓶	-	(5.6)	[133]	緻密	灰白	良好	体部外面下層回転ヘラ削り たれ付者	壺内	5%
TP20	灰釉陶器	甕	-	(3.4)	-	石英・赤色粒子	灰	良好	体部外面版位の平打磨き 内面当て具敷	床面	

第58号住居跡 (第143・144図)

位置 調査ⅡA区中央部のF5e7区で、標高17.6mほどの平坦な低地上に位置している。

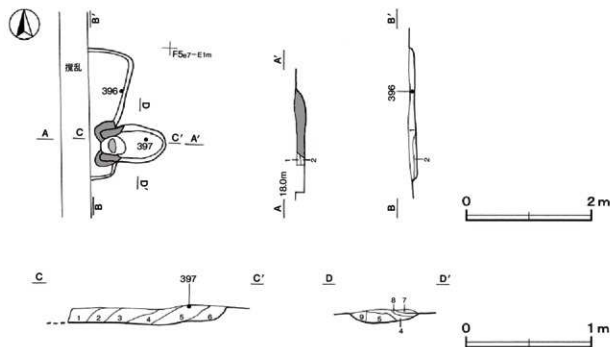
規模と形状 西部は擾乱を受けているため、確認された範囲は、南北軸21 m、東西軸0.7 mほどである。平面形は方形もしくは長方形と推定され、主軸方向はN-90°-Eである。壁高は12cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

竈 東壁南寄りに付設されている。焚口部から煙道部まで100 cm、袖部幅は70 cmほどである。火床部は床面とほぼ同じ高さの地山面を使用しており、火床面は火熱を受け赤変している。煙道部は壁外へ80 cmほど掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

甕土層解説

- 1 にぶい黄褐色 炭化粒子・白色粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子微 2 暗褐色 焼土粒子・白色粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量



第143図 第58号住居跡実測図

- | | |
|-----------------------------------|-------------------------------|
| 3 暗褐色 砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子少量 | 6 黒褐色 砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量 |
| 4 黒褐色 砂粒中量、焼土ブロック・炭化粒子少量、白色粘土粒子微量 | 7 濃い黄褐色 焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子少量 |
| 5 暗褐色 砂粒中量、焼土ブロック・白色粘土粒子少量 | 8 濃い黄褐色 焼土粒子・炭化粒子中量、白色粘土粒子微量 |
| | 9 明褐色 焼土粒子中量、炭化粒子・白色粘土粒子少量 |

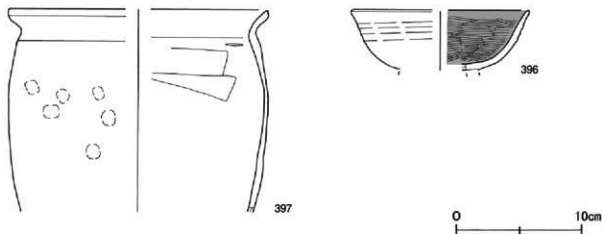
覆土 2層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-----------------------------|---------------------------|
| 1 灰黄褐色 砂粒中量、白色粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 2 黒褐色 砂粒中量、炭化粒子・黄褐色粘土粒子少量 |
|-----------------------------|---------------------------|

遺物出土状況 土師器片22点(椀類3、甕類19)が竈内を中心に出土している。396は東壁際の床面、397は竈内から口縁部を南にしてつぶれた状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。



第144図 第58号住居跡出土遺物実測図

第58号住居跡出土遺物観察表(第144図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
396	土師器	高台付椀	[14.0]	(48)	-	灰黄・長石・赤黄・石灰	橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き	床面	30%
397	土師器	甕	[20.6]	(16.1)	-	灰黄・長石・赤黄・石灰	濃い黄褐色	普通	口縁部種ナデ 体部外面部頭頂 内面ヘラナデ 輪轆取	竈内	20%

第59号住居跡(第145～147図)

位置 調査ⅡA区中央部のF5F区で、標高17.7mほどの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 西部は掘乱を受けているため、確認された範囲は、南北軸3.1m、東西軸1.4mほどある。平面形は方形もしくは長方形と推定され、主軸方向はN-90°-Eである。壁高は10cmほどで、外傾して立ち上がっている。

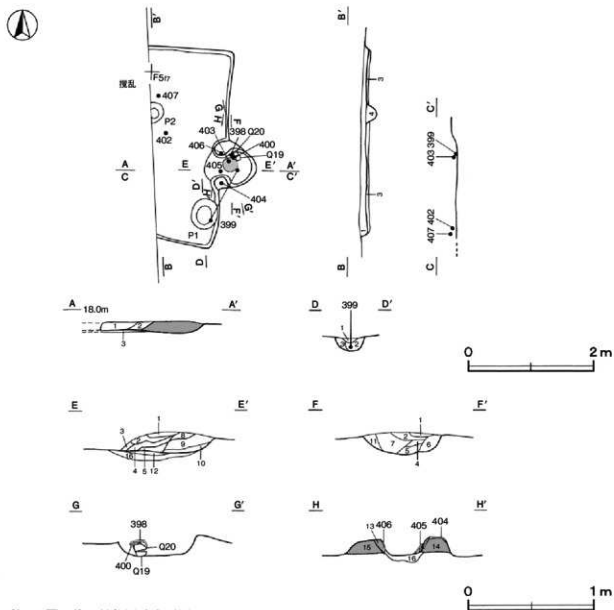
床 ほぼ平坦な粘土で、暗褐色土を厚さ4cmほど埋め土して構築している。

竈 東壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで80cm、袖部幅は85cmほどである。袖部は地山の粘土層を掘り残して基部とし、その上に砂質粘土を積み重ねて構築されている。左袖部には補強材として土師器甕片が埋め込まれ、右袖部には土師器甕の底部片を逆位にし、体部片で支えるように積み重ねられている。火床

部は掘り方を粘土、焼土粒子、炭化粒子を混ぜた土で埋め戻して構築され、床面とはほぼ同じ高さの面を使用している。火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ52cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|---------------------------|-----------|----------------------------|
| 1 灰黄褐色 | 砂粒中量、焼土粒子・白色粘土粒子少量 | 8 灰黄褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量 |
| 2 にぶい黄褐色 | 砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量 | 9 暗褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子・白色粘土粒子少量 |
| 3 にぶい黄褐色 | 砂粒多量、焼土粒子中量、白色粘土粒子微量 | 10 灰黄褐色 | 白色粘土粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 灰黄褐色 | 砂粒中量、炭化粒子・白色粘土粒子微量 | 11 明褐色 | 焼土ブロック中量 |
| 5 にぶい黄褐色 | 砂粒中量、焼土粒子・白色粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 12 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化物中量、白色粘土粒子少量 |
| 6 灰黄褐色 | 砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子少量、白色粘土粒子微量 | 13 明赤褐色 | 焼土ブロック中量、砂粒少量 |
| 7 暗褐色 | 焼土ブロック・炭化物中量 | 14 にぶい黄褐色 | 砂粒・白色粘土ブロック多量、焼土ブロック中量 |
| | | 15 明褐色 | 砂粒・白色粘土粒子中量 |
| | | 16 オリーブ灰色 | 砂粒・白色粘土粒子多量、炭化物中量、焼土ブロック少量 |



第145図 第59号住居跡実測図

ピット 2か所。P 1は深さ20cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 2は深さ15cmで、性格不明である。

ピット土層解説 (P1のみ)

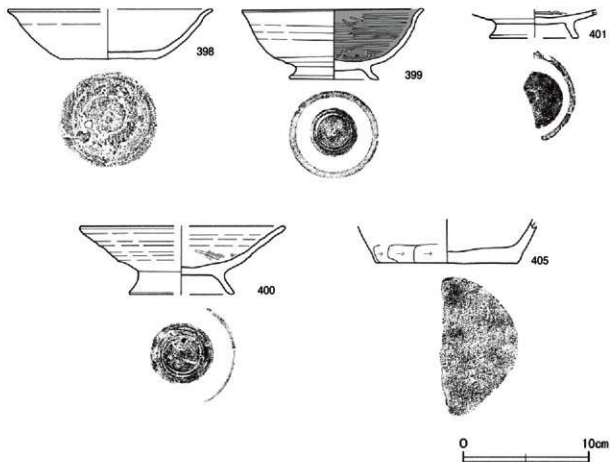
- 1 灰黄褐色 砂粒多量、炭化粒子・白色粘土粒子少量、焼土粒 3 黒褐色 砂粒中量、炭化物・白色粘土粒子微量
 子微量
 2 にぶい黄褐色 砂粒多量、炭化物・白色粘土粒子微量

覆土 3層に分けられる。水平な堆積状況を示す自然堆積と考えられる。第3層は貼床の構築土、第4層はP 2の覆土層である。

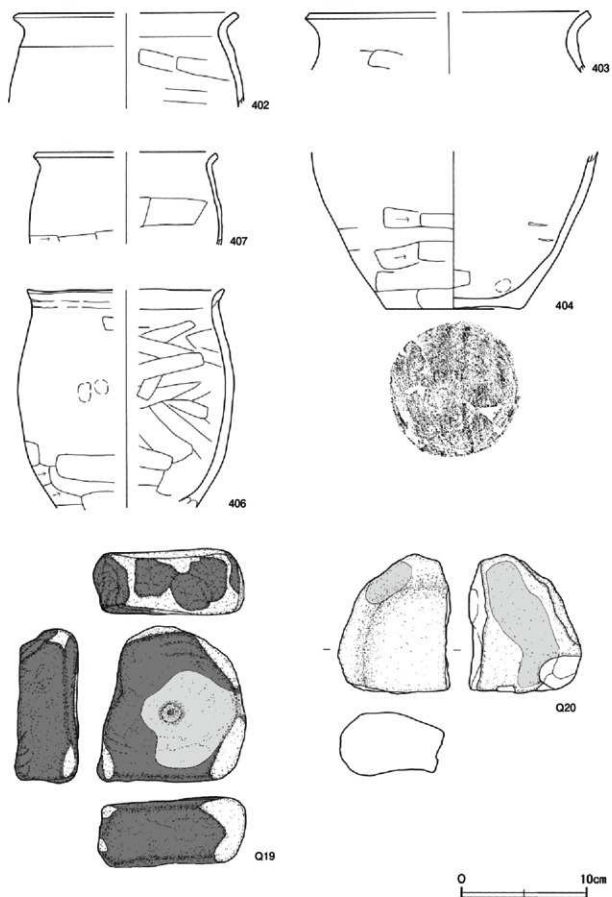
土層解説

- 1 にぶい黄褐色 砂粒中量、白色粘土粒子少量、炭化粒子微量 3 黒褐色 白色粘土粒子中量、焼土粒子少量
 2 にぶい黄褐色 砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子少 4 灰黄褐色 砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片180点(碗類75、甕類105)、石製品2点(支脚)、礫2点、粘土ブロック5点が出土している。遺物は竈内やP 1内を中心に全域から出土している。399は竈内とP 1の覆土下層から出土した破片が接合したものである。402は中央部の覆土下層から出土したものである。火床面の奥からは、Q 19の上にQ 20が重なり、更にその上に400・398がそれぞれ逆位で積み重ねられた形で出土しており、支脚として使用していたものと考えられる。404は竈右袖部の補強材、406は竈左袖部の補強材として使用されていたものである。所見 時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。



第146図 第59号住居跡出土遺物実測図(1)



第147图 第59号住居跡出土遺物実測図(2)

第59号住居跡出土遺物観察表(第146・147図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
298	土師器	坏	[16.0]	3.9	7.5	長石・石英	にぶい橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	壺内	60% PL39
299	土師器	高台付椀	14.2	5.7	7.0	長石・石英・赤色砂子	にぶい黄緑	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台削り付け	壺内・P1下層	80% PL43
400	土師器	高台付椀	[16.0]	5.5	[8.2]	雲母・石英	明赤陶	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台削り付け	壺内	45% PL43
401	土師器	高台付椀	-	(2.2)	[7.0]	長石・赤色砂子	橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台削り付け	覆土中	20%
402	土師器	甕	[16.9]	(7.6)	-	雲母・長石・石英・赤色砂子	にぶい橙	普通	口縁部種ナデ 体部内面ヘラナデ	覆土下層	10%
403	土師器	甕	[22.0]	(4.9)	-	雲母・石英	にぶい赤陶	普通	口縁部種ナデ 体部内外面ヘラナデ	壺内	5%
404	土師器	甕	-	(12.5)	10.8	長石・石英	にぶい黄緑	普通	体部外面下端ヘラ削り 内面ヘラナデ 輪郭削 指張削	壺軸部	30%
405	土師器	甕	-	(3.6)	[11.2]	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面下端ヘラ削り	壺内	5%
406	土師器	小形甕	[15.4]	(17.3)	-	長石・石英	にぶい黄	普通	口縁部種削り 体部外面指張削 体部外面下端ヘラ削り 内面ヘラナデ	壺軸部	35% PL36
407	土師器	小形甕	[14.2]	(7.3)	-	長石・石英	にぶい黄	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	下層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q 19	支脚	12.4	11.9	5.3	1190	花崗岩	台形状に成形 煤付着 窪み部有り	壺内	PL54
Q 20	支脚	11.1	8.9	5.0	620	玄武岩	底面平坦に成形	壺内	

第60号住居跡(第148・149図)

位置 調査ⅡA区中央部のF5h6区で、標高17.6mほどの平坦な低地上に位置している。

重複関係 南西コーナー部を第85号土坑に掘り込まれている。なお、本跡の下には第75号住居跡が確認されている。

規模と形状 長軸3.3m、短軸3.2mの方形で、主軸方向はN-90°-Eである。壁高は6~12cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦である。

竈 東壁中央部やや南寄りに付設されている。焚口部から煙道部まで85cm、袖部幅は103cmである。火床部は床面とほぼ同じ高さの地山面を掘りくぼめて使用し、火床面は赤変していないかった。煙道部は壁外へ30cmほど掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1	にぶい黄褐色	砂粒多量、炭化粒子少量、焼土粒子・白色粘土粒子微量	5	灰黄褐色	砂粒中量、炭化粒子少量、焼土粒子・白色粘土粒子・青灰色粘土粒子微量
2	灰黄褐色	砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子少量	6	褐色	砂粒中量、炭化粒子少量、焼土粒子・白色粘土粒子微量
3	暗褐色	砂粒多量、炭化粒子・白色粘土粒子微量	7	にぶい黄褐色	砂粒中量、焼土ブロック・炭化粒子少量、白色粘土粒子微量
4	黒褐色	砂粒多量、炭化物・焼土粒子少量			

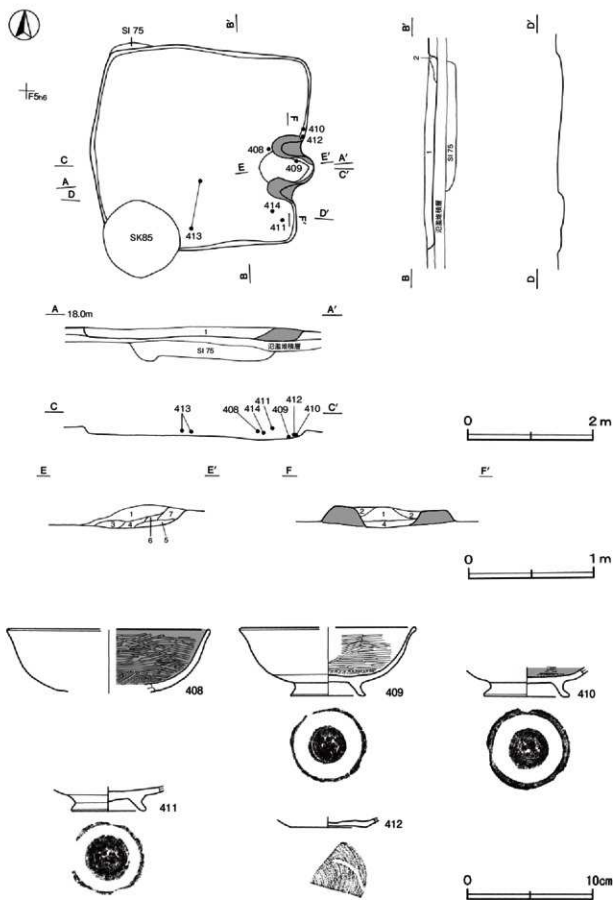
覆土 2層に分けられる。水平な堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

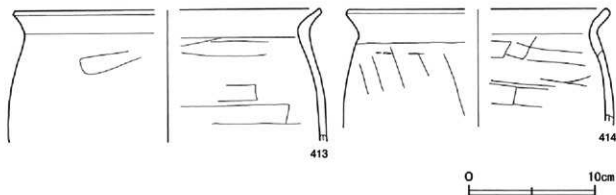
1	にぶい黄褐色	白色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	2	暗褐色	白色粘土粒子少量
---	--------	----------------------	---	-----	----------

遺物出土状況 土師器片144点(輪郭53, 実形91)、細礫1点が出土している。遺物は散在して出土している。409は壺内から逆位で、410・412は東壁中央部の壁際からそれぞれ出土している。413は中央部と南壁際の覆土下層から出土した破片が接合したものである。414は南東コーナー部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀後葉から11世紀前葉と考えられる。



第148图 第60号住居跡・出土遺物実測図



第149図 第60号住居跡出土遺物実測図

第60号住居跡出土遺物観察表 (第148・149図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
408	土師器	碗	[158]	(50)	-	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面へラ磨き	覆土下層	20%	
409	土師器	高台付碗	[138]	5.4	5.8	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	内面へラ磨き 右張り付け	底部回転へラ切り後高台張り付け	竈内	30%
410	土師器	高台付碗	-	(23)	6.6	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	内面へラ磨き 右張り付け	床面	20%	
411	土師器	高台付碗	-	(20)	5.6	雲母・長石	橙	普通	底部回転へラ切り後高台張り付け	覆土上層	10%	
412	土師器	小皿	-	(08)	[6.0]	長石・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り	床面	20%	
413	土師器	甕	[242]	(105)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	体部内外面へラナデ	覆土下層	10%	
414	土師器	甕	[204]	(93)	-	長石・石英・赤色粒子	明赤陶	普通	体部内外面へラナデ	外面輪積直	覆土下層	10%

第61号住居跡 (第150図)

位置 調査ⅡA区中央部のF5j8区で、標高17.6mほどの平坦な低地上に位置している。

重複関係 中央部を第110号土坑、第16号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.4m、短軸3.2mの方形で、主軸方向はN-88°-Eである。壁高は6cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

竈 東壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで80cm、袖部幅は78cmである。火床部は床面とほぼ同じ高さの地山面を使用しており、火床面は確認されなかった。煙道部は壁外へ60cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子・青灰色粘土
2 暗褐色 焼土粒子・白色粘土粒子少量
粒子微量

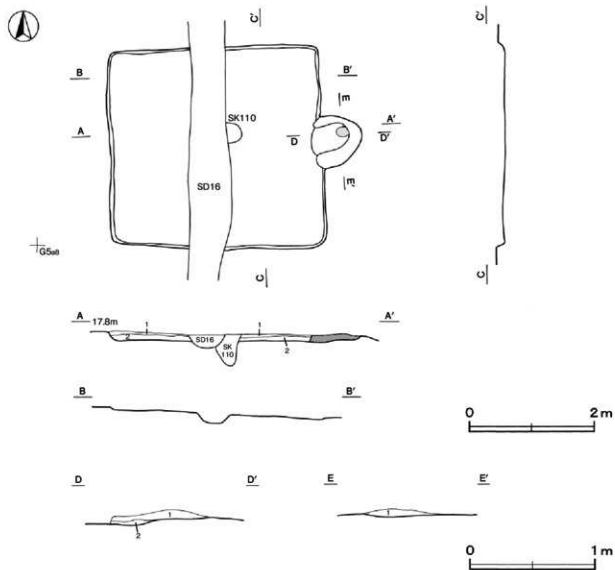
覆土 2層に分けられる。水平な堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子・青灰色粘土粒子微量
2 にぶい黄褐色 砂粒少量、白色粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片27点(碗類3、甕類24)が竈内を中心に出土しているが、いずれも細片で図示できない。

所見 時期は、出土土器が少なく明確ではないが、出土土器及び遺構の様相から、10世紀後葉から11世紀前葉と考えられる。



第150図 第61号住居跡実測図

第63号住居跡（第151図）

位置 調査ⅡA区中央部のG5b7区で、標高17.6mほどの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 長軸27m、短軸2.5mの方形で、主軸方向はN-93°-Eである。壁高は7～15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほは平坦である。

竈 東壁中央部の南寄りに付設されている。焚口部から煙道部まで100cmほどで、袖部は確認されなかった。火床部は床面とほぼ同じ高さの地山面を使用しており、火床面は赤変しておらず、火床面から焚口部にかけて炭化粒子の広がりが確認された。煙道部は壁外へ76cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | | | |
|---|------|---------------------------|---|--------|---------------------------|
| 1 | 黒 褐色 | 砂粒中量、炭化粒子少量、焼土粒子・白色粘土粒子微量 | 3 | にひ・黄褐色 | 砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子少量、白色粘土粒子微量 |
| 2 | 黒 褐色 | 炭化粒子中量、砂粒少量、焼土粒子・白色粘土粒子微量 | | | |

ピット 深さ20cmで、西壁中央部に位置し、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

ピット土層解説

- 1 灰黄褐色 砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子少量
2 灰黄褐色 焼土粒子・白色粘土粒子・砂粒少量

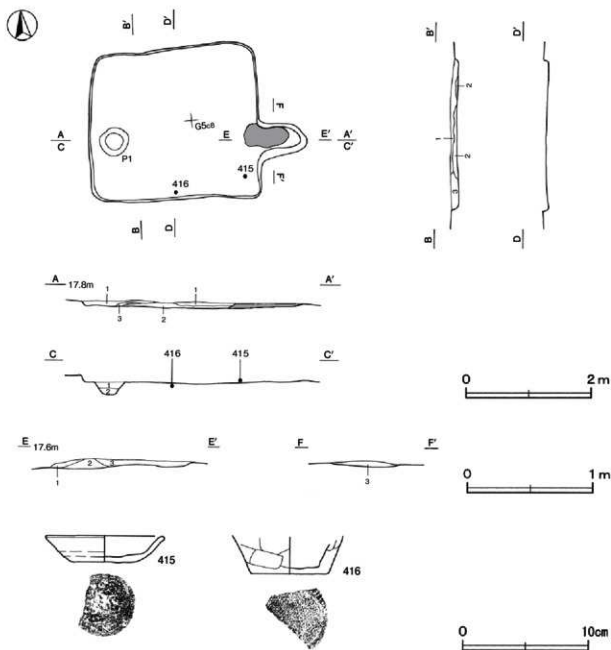
覆土 3層に分けられる。不自然な堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 灰黄褐色 砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量
2 灰黄褐色 白色粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量
3 褐色 砂粒中量、炭化粒子・白色粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片88点(椀類31, 小皿2, 甕類55), 細碟2点が、散在して出土している。ほとんどが細片である。415は南東コーナー部の覆土下層, 416は南壁際中央部の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀後葉から11世紀前葉と考えられる。



第151図 第63号住居跡・出土遺物実測図

第63号住居跡出土遺物観察表 (第151図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
415	土師器	小皿	9.1	2.1	4.8	長石・赤色粒子	灰褐	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	覆土下層	65% PL47
416	土師器	小形壺	-	(3.0)	[6.0]	長石・石英	明赤褐	普通	体部外面下端ヘラ削り	床面	5%

第64号住居跡 (第152図)

位置 調査ⅡA区中央部のF5j7区で、標高17.6mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 床面が削平されており、竈のみが確認されたため、規模及び形状については不明である。主軸方向はN-90°-Eと推定される。

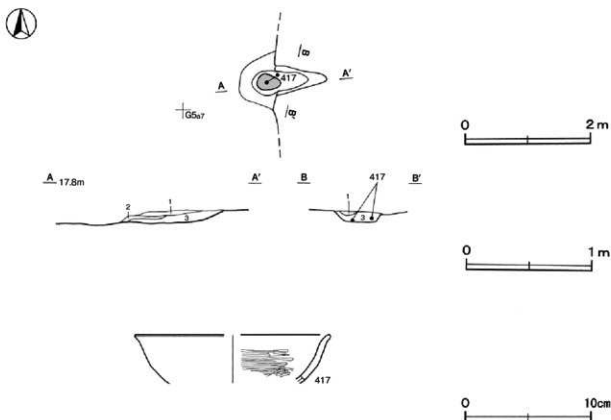
竈 東壁に付設されていたと推定される。確認された規模は、焚口部から煙道部まで140cmで、袖部は確認されなかった。火床部は床面と同じ高さの地山面を掘りくぼめて使用しており、火床面は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ80cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 にびい黄褐色 白色粘土粒子中量、砂粒少量、焼土粒子微量 3 にびい黄褐色 白色粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 にびい黄褐色 白色粘土粒子少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片13点(椀類5、甕類8)が竈内から出土している。417は竈内から出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器が細片のため明確ではないが、出土土器の様相から10世紀後葉から11世紀前葉と推定される。



第152図 第64号住居跡・出土遺物実測図

第64号住居跡出土遺物観察表 (第152図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
417	土師器	椀	[153]	(3.8)	-	長石・赤色砂子	にびい黄褐色	普通	体部内面ヘラ磨き	竈内	20%

第65号住居跡 (第153・154図)

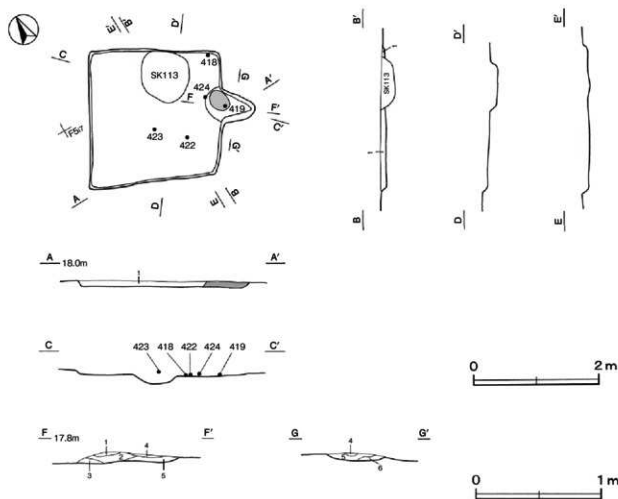
位置 調査ⅡA区中央部のF577区で、標高17.5mほどの平坦な低地上に位置している。

重複関係 北東壁際中央部を第113号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸21m、短軸2.0mの方形で、主軸方向はN-118°-Eである。壁高は10cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

竈 南東壁中央部やや北寄りに付設されている。焚口部から煙道部まで80cm、袖部は確認されなかった。火床部は床面とほぼ同じ高さの地山面を使用し、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ48cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。



第153図 第65号住居跡実測図

覆土層解説

- | | |
|---------------------|----------------------|
| 1 暗褐色 焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 4 にぶい黄褐色 焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量 | 5 暗褐色 炭化粒子多量、焼土粒子少量 |
| 3 にぶい黄褐色 炭化粒子微量 | 6 にぶい黄褐色 白色粘土粒子少量 |

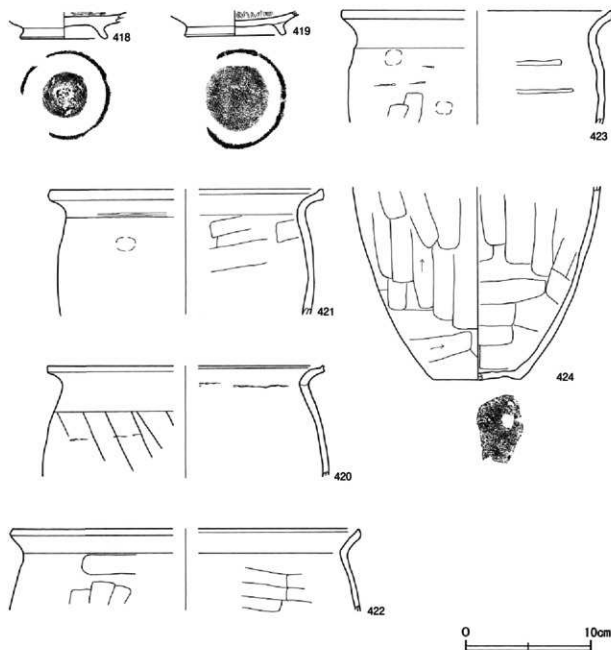
覆土 単一層であり、水平な堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 にぶい黄褐色 白色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片97点（碗類27、甕類70）が散在して出土している。418は東コーナー部壁際の床面、419は竈内、422は中央部から南東寄りの床面、423は中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から11世紀前半以降と考えられる。



第154図 第65号住居跡出土遺物実測図

第65号住居跡出土遺物観察表 (第154図)

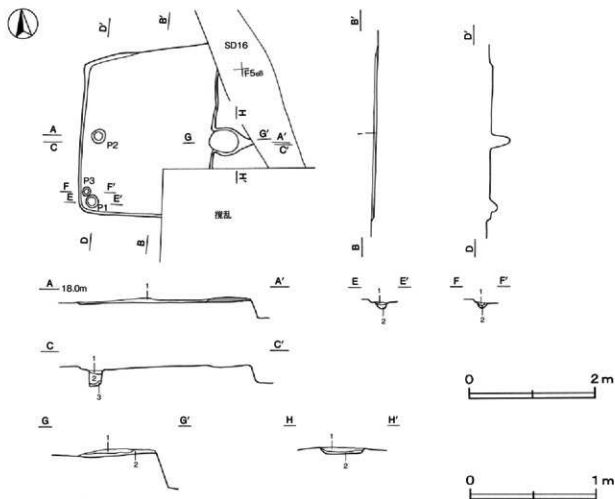
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
418	土師器	高台付碗	-	(21)	6.8	長石・赤色粘土	にぶい橙	普通	体部内面へラナデ 底面回転へラ切り	床面	20%
419	土師器	高台付碗	-	(19)	7.8	長石・石英・赤色粘土	にぶい橙	普通	体部内面へラナデ 底面回転へラ切り	竈内	20%
420	土師器	甕	[218]	(89)	-	赤色粘土	橙	普通	口縁部ナデ 内外面輪痕	覆土中	10%
421	土師器	甕	[216]	(100)	-	赤土・長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部ナデ 体部外面折痕 内面へラナデ	覆土中	10%
422	土師器	甕	[276]	(65)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部ナデ 体部内外面へラナデ	床面	5%
423	土師器	甕	[214]	(90)	-	長石・石英・赤色粘土	にぶい橙	普通	口縁部ナデ 輪痕 折痕	覆土下層	5%
424	土師器	甕	-	(153)	[70]	長石・石英・赤色粘土	明赤陶	普通	体部外面下端へラ削り 内面へラナデ	覆土下層	25%

第66号住居跡 (第155・156図)

位置 調査ⅡA区中央部のF5e7区で、標高17.6mほどの平坦な低地上に位置している。

重複関係 竈煙道部及び北東コーナー部を第16号溝に掘り込まれている。南東コーナー部は攪乱を受けている。

規模と形状 南北軸2.6m、東西軸2.1mの長方形で、主軸方向はN-93'-Eである。壁高は5cmで、外傾し



第155図 第66号住居跡実測図

で立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

竈 東壁中央部に付設されている。確認された範囲は、焚口部から煙道部まで70cmほどと推定され、袖部は確認されなかった。火床部は床面とはほぼ同じ高さの地山面をわずかに掘りくぼめて使用しており、火床面は赤変していなかった。煙道部は壁外へ60cmほど掘り込まれているのが確認され、火床部から緩やかに立ち上がっていくものと推定される。

竈土層解説

- 1 灰黄褐色 焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量
- 2 灰黄褐色 砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量

ピット 3か所。P1は深さ15cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P2は深さ30cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P3は深さ10cmで、P1の北側に配置しており補助柱穴の可能性が考えられる。

ピット土層解説 (P1～P3共通)

- 1 濃い黄褐色 砂粒中量、白色粘土粒子少量、炭化物微量
- 2 灰黄褐色 砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量
- 3 褐色 砂粒中量、炭化粒子・白色粘土粒子少量

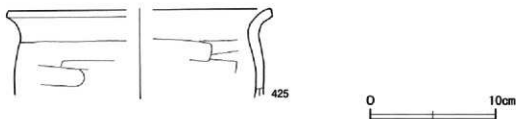
覆土 単一層で、層厚が薄く堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 灰黄褐色 白色粘土粒子少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片8点(壺類)が出土しているが、いずれも細片であり、図示できるものが少ない。425は竈の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器が細片のため明確ではないが、出土土器の様相から11世紀前半以降と考えられる。



第156図 第66号住居跡出土遺物実測図

第66号住居跡出土遺物観察表 (第156図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
425	土師器	壺	[21.0]	(7.0)	-	長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ 体内内外面ヘラナデ	竈内	5%

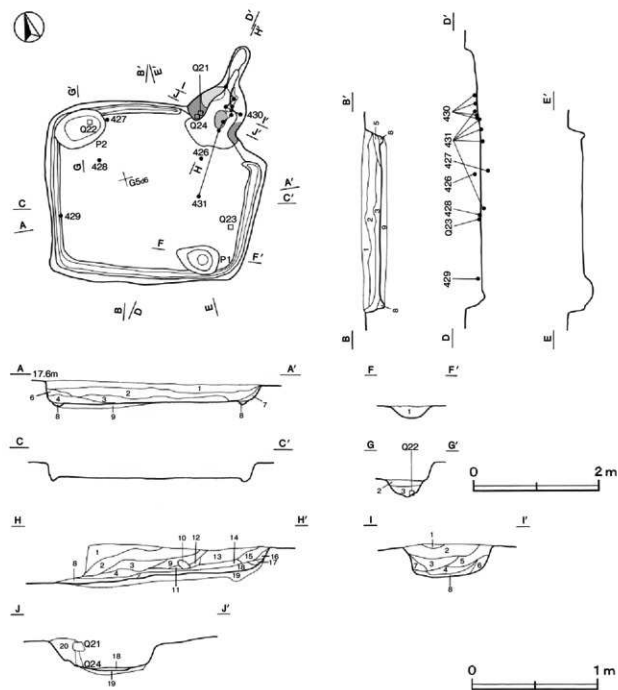
第67号住居跡 (第157～159図)

位置 調査ⅡA区中央部のG5d6区で、標高17.5mほどの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 長軸3.6m、短軸2.9mの長方形で、主軸方向はN-20°-Eである。壁高は16～27cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦な貼床で、黄褐色土で厚さ10cmほどの埋め土をして構築している。壁溝が全周しており、断面形はU字状である。

竈 東壁コーナー部に付設されている。焚口部から煙道部まで160cm、袖幅は60cmである。右袖部は地山の粘土層を掘り残して構築され、左袖部は補強材として積み重ねられた石が埋め込まれている。火床部は床面とほぼ同じ高さの地山面を使用しており、火床面は火熱を受けて赤変し、内壁も赤変硬化している。焚口部手前に炭化粒子の広がりが確認されている。煙道部は東コーナー部から北東方向へやや斜めに140cmほど掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。第5・6・11層は天井部の崩落土と考えられる。



第157図 第67号住居跡実測図

竈土層解説

- | | |
|-------------------------------|---------------------------------|
| 1 暗 褐色 焼土粒子・白色粘土粒子微量 | 12 暗 褐色 砂粒少量、炭化粒子・青灰色粘土粒子微量 |
| 2 暗 褐色 焼土粒子・白色粘土粒子少量 | 13 暗 褐色 白色粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量 |
| 3 にぶい黄褐色 焼土粒子・白色粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 14 黒 褐色 炭化粒子・砂粒少量、焼土粒子・白色粘土粒子微量 |
| 4 暗 褐色 焼土粒子中量、白色粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 15 黒 褐色 白色粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量 |
| 5 暗 褐色 白色粘土ブロック中量、焼土粒子少量 | 16 灰黄褐色 白色粘土粒子・砂粒少量 |
| 6 灰黄褐色 白色粘土粒子多量 | 17 黒 褐色 炭化物・砂粒少量、白色粘土粒子微量 |
| 7 にぶい黄褐色 焼土粒子・白色粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 18 黒 褐色 炭化粒子多量、焼土粒子中量 |
| 8 にぶい黄褐色 炭化粒子多量、焼土粒子・白色粘土粒子少量 | 19 灰黄褐色 焼土粒子・白色粘土粒子・砂粒少量 |
| 9 暗 褐色 焼土粒子・砂粒少量、青灰色粘土粒子微量 | 20 灰黄褐色 白色粘土粒子中量、炭化粒子・砂粒少量 |
| 10 黄 褐色 砂粒微量 | |
| 11 にぶい黄褐色 白色粘土粒子中量、砂粒微量 | |

ピット 2カ所。P1・P2は深さ20～25cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。

ピット土層解説 (P1・P2共通)

- | | |
|----------------------------------|-----------------------------|
| 1 にぶい黄褐色 黄褐色粘土粒子少量、焼土粒子・白色粘土粒子微量 | 2 にぶい黄褐色 砂粒中量、炭化粒子・白色粘土粒子少量 |
| | 3 にぶい黄褐色 白色粘土粒子・砂粒少量 |

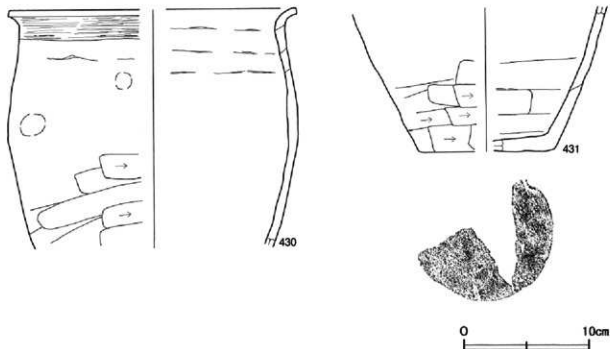
覆土 9層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。第9層は貼土の構築土である。

土層解説

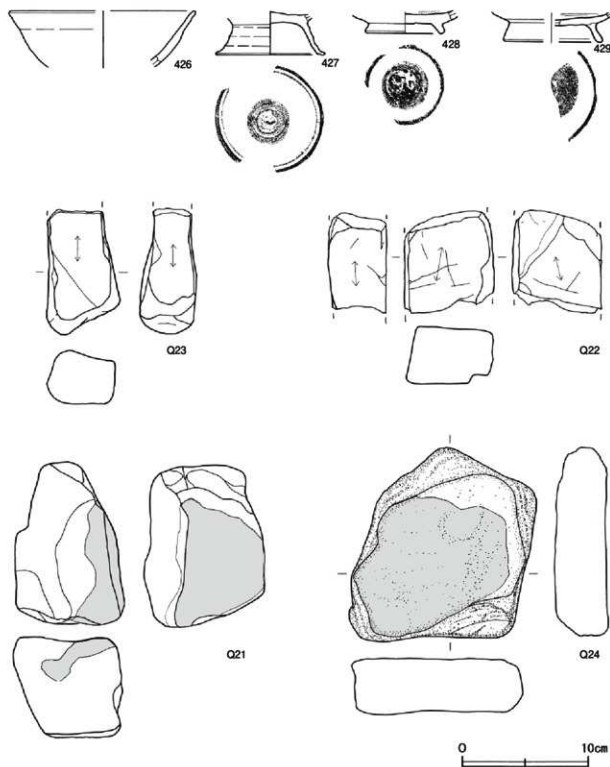
- | | |
|-------------------------------|--------------------------|
| 1 にぶい黄褐色 白色粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 にぶい黄褐色 白色粘土粒子少量 |
| 2 にぶい黄褐色 白色粘土粒子中量 | 7 灰黄褐色 白色粘土粒子中量 |
| 3 灰黄褐色 白色粘土ブロック少量、焼土粒子微量 | 8 褐色 白色粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 4 灰黄褐色 白色粘土粒子中量、炭化粒子微量 | 9 にぶい黄褐色 白色粘土ブロック中量、砂粒少量 |
| 5 灰黄褐色 白色粘土ブロック少量 | |

遺物出土状況 土師器片146点(碗類55, 小皿1, 甕類90), 須恵器片3点(坏1, 甕2), 石器2点(砥石), 石製品2点(竈袖部補強材)が出土している。遺物は散在して出土しているが、細片が多く接合できるものが少ない。427・428は北西コーナー部の床面, 429は西壁際の覆土下層, 430は竈内からそれぞれ出土している。左袖部からは、Q24の上にQ21が積み重ねられた状態で出土しており、補強材として使用されていたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。



第158図 第67号住居跡出土遺物実測図(1)



第159図 第67号住居跡出土遺物実測図(2)

第67号住居跡出土遺物観察表 (第158・159図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
426	土師器	椀	[14.6]	(4.4)	-	長石・赤色粒子	明赤褐	普通	ロクロナデ 内面厚減	覆土下層	10%
427	土師器	高台付椀	-	(3.4)	8.3	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	床面	30%
428	土師器	高台付椀	-	(1.6)	5.7	雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	床面	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考		
429	土師器	高台付椀	-	(23)	[7.3]	長石	橙	普通	内面へう磨き 白飯り上げ	底部回転へう切り 高台飯り上げ	覆土下層	10%	
430	土師器	甕	[22.8]	(19.0)	-	茶母・長石・ 石末	にぶい橙	普通	口縁部 残部	外面へう磨き 外面へう磨き	体内外面へう磨き 体内外面へう磨き	甕内	30% PL.36
431	土師器	甕	-	(11.4)	[10.8]	茶母・石末・ 炭化粒子	橙	普通	口縁部 残部	外面へう磨き 外面へう磨き	体内外面へう磨き 体内外面へう磨き	甕内・床面	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴		出土位置	備考
Q 21	竈鉢強材	13.0	8.8	8.0	1300	閃緑岩	底面平坦に成形	火熱痕	甕内	PL54
Q 22	砥石	(8.2)	(7.1)	4.6	(416)	砂岩	砥面3面		P2 底面	
Q 23	砥石	(10.0)	5.8	4.3	(347)	雲母片岩	砥面2面		覆土下層	
Q 24	竈鉢強材	15.4	14.9	4.5	1580	雲母片岩	台形状に成形	火熱痕	甕内	

第68号住居跡 (第160～163図)

位置 調査ⅡA区中央部のF5区で、標高17.8mほどの平坦な低地上に位置している。

重複関係 第71住居跡を掘り込み、竈煙道部の北側及び左袖部付近を第97号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 西部が調査区域外に延びているため、確認された範囲は、南北軸3.2m、東西軸1.6mほどである。平面形は方形または長方形と推定され、主軸方向はN-90°-Eである。壁高は15～30cmで外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦である。

竈 東壁中央部から南東コーナー寄りに付設されている。焚口部から煙道部まで160cm、袖部幅は110cmである。左袖部は地山粘土層を掘り残して基部とし、その上部に砂粒と砂質粘土を混ぜた土を積み重ねている。右袖部は地山の粘土層を掘り残して構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さの地山面を掘りくぼめて使用し、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外へ100cmほど掘り込まれ、火床部から外傾し、端部は緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|----------------------------|-----------|----------------------|
| 1 暗 褐色 | 焼土ブロック・砂粒中量、炭化物少量 | 7 にぶい黄褐色 | 砂粒多量、焼土ブロック中量 |
| 2 にぶい褐色 | 白色粘土粒子・砂粒中量、焼土ブロック少量 | 8 にぶい黄褐色 | 砂粒多量、焼土粒子少量 |
| 3 にぶい褐色 | 砂粒中量、焼土ブロック・白色粘土粒子少量 | 9 にぶい黄褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子・砂粒少量 |
| 4 暗 褐色 | 焼土ブロック・砂粒中量、白色粘土ブロック・炭化物少量 | 10 暗 褐色 | 焼土ブロック・白色粘土ブロック・砂粒少量 |
| 5 にぶい黄褐色 | 砂粒多量、焼土粒子・白色粘土粒子少量 | 11 にぶい黄褐色 | 砂粒中量、白色粘土ブロック・焼土粒子少量 |
| 6 にぶい黄褐色 | 砂粒多量、焼土ブロック少量 | 12 暗 褐色 | 焼土粒子多量、炭化粒子微量(赤変硬化層) |
| | | 13 黄 褐色 | 砂粒多量、白色粘土ブロック少量 |

ピット 3か所。P1は深さ48cmで、掘り方の形状から柱穴と考えられる。P2・P3は深さ15～20cmで、皿状に掘りくぼめられているため柱穴とは考えられず、性格不明である。

ピット土層解説 (P1～P3共通)

- 1 黒 褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量
- 2 にぶい黄褐色 砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量

覆土 3層に分けられる。焼土ブロックや炭化物を含む人為堆積と考えられる。第1・2層は表土の層である。

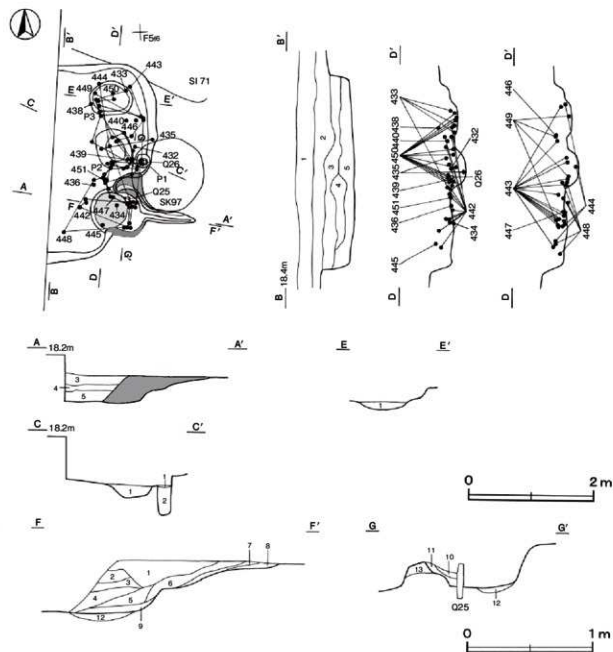
土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------|--------|----------------------------|
| 1 暗 褐色 | 焼土粒子少量 | 4 暗 褐色 | 白色粘土粒子・砂粒中量、焼土ブロック少量 |
| 2 暗 褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量 | 5 暗 褐色 | 焼土ブロック・砂粒中量、白色粘土ブロック・炭化物少量 |
| 3 暗 褐色 | 砂粒中量、焼土粒子・白色粘土粒子少量 | | |

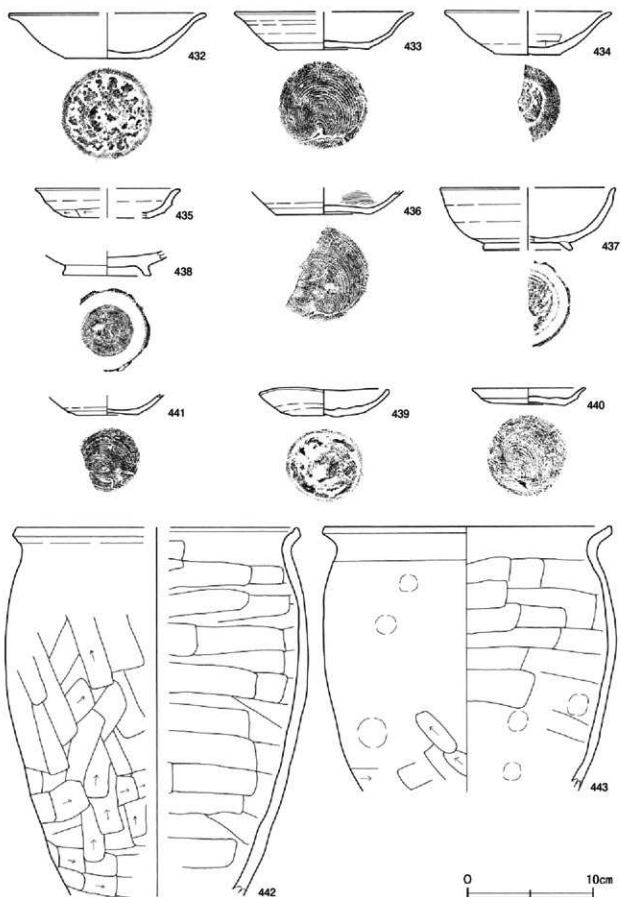
遺物出土状況 土師器片336点(碗類70、小皿6、甕類260)、須恵器片3点(環2、壺1)、石製品2点(支脚)、

不透明土製品3点、粘土ブロック2点、細礫3点が出土している。遺物は、竈内やピット内を中心に散在して出土している。竈から北東コーナー部にかけて遺物がまとも重なるとともに、離れた位置から出土した破片が接合できたものも多く、投棄された様相を呈している。432は竈左袖付近の床面から出土している。433はP1付近の覆土下層とP3内から出土した破片が接合したものである。434は竈内から出土している。435は東壁際の覆土下層とP2内から出土した破片が接合したものである。437は覆土中、438は北東コーナー部の覆土上層、439はP2の覆土上層、440は東壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。442～444は竈内及びP1～P3内を中心に、竈から北東コーナー部にかけての覆土上層から下層にかけて出土した破片がそれぞれ接合したものである。447は焚口部から出土している。450はP2の覆土上層とP2付近の床面及びP3内から出土した破片が接合したものである。

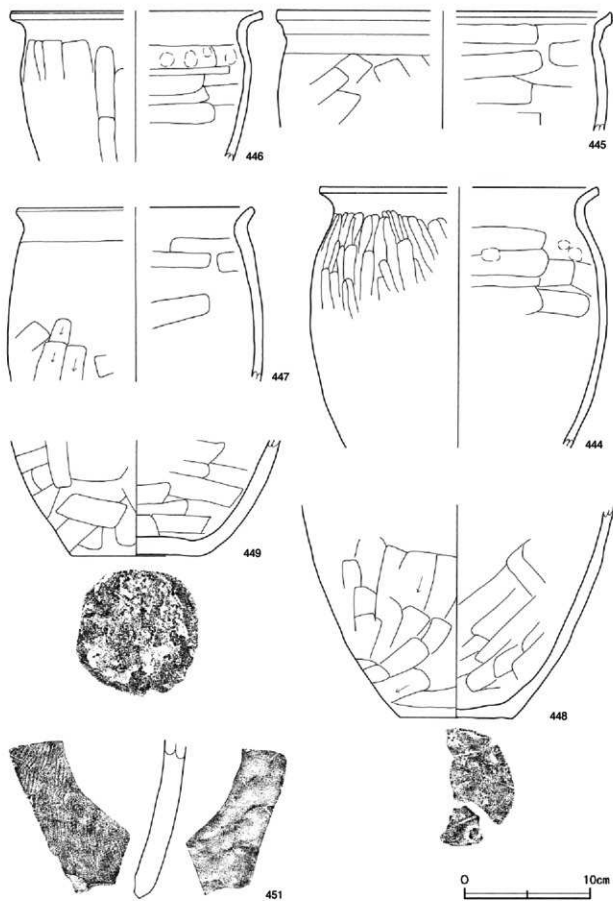
所見 時期は、出土土器から11世紀前半以降と考えられる。



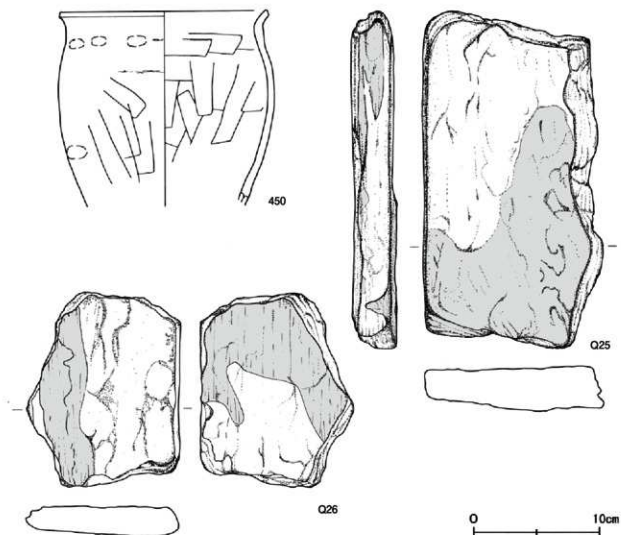
第160図 第68号住居跡実測図



第161图 第68号住居跡出土遺物実測図(1)



第162図 第68号住居跡出土遺物実測図(2)



第163図 第68号住居跡出土遺物実測図(3)

第68号住居跡出土遺物観察表(第161～163図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
432	土師器	坏	[155]	3.6	6.7	雲母・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	床面	50% PL.39
433	土師器	坏	[140]	3.0	7.0	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土下層・P3内	40% PL.39
434	土師器	坏	[133]	3.5	[5.0]	雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	壺内	30%
435	土師器	坏	[114]	2.4	[6.0]	雲母・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ	覆土下層・P2内	30%
436	土師器	坏	— (19)	7.4	—	雲母・長石	にぶい橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転糸切り	床面	40%
437	土師器	高台付碗	[13.6]	(5.0)	[6.6]	雲母・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 内面磨減 底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	覆土中	30%
438	土師器	高台付碗	— (20)	[6.7]	—	雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台張り付け	覆土上層	20%
439	土師器	小皿	10.1	2.4	6.2	雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	P2上層	97% PL.46
440	土師器	小皿	8.9	1.4	5.7	長石・石英	橙	普通	ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土下層	80% PL.46
441	土師器	小皿	— (19)	4.8	—	雲母・長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ 底部回転糸切り	壺内	60%
442	土師器	甕	[22.2]	(29.3)	—	長石・石英	橙	普通	体部外面ヘラ磨り 内面ヘラナデ	覆土下層・P2内	30% PL.35
443	土師器	甕	22.6	(21.2)	—	長石・石英	橙	普通	体部外面下端ヘラ磨り 内面ヘラナデ指頭痕	覆土上層・P2内	40% PL.37
444	土師器	甕	[22.0]	(20.8)	—	長石・石英	にぶい橙	普通	体部内外面ヘラナデ 指頭痕	壺内・P2内	20% PL.37
445	土師器	甕	[26.4]	(9.4)	—	長石・石英	赤褐	普通	体部内外面ヘラナデ	覆土上層	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
446	土師器	甕	[198]	(120)	-	長石・石英・赤色粘土	橙	普通	体部内外面ヘラナデ 内面指頭痕	覆土中層	10%
447	土師器	甕	[184]	(138)	-	長石・石英・赤色粘土	橙	普通	口縁部種ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ	焚き口部	5%
448	土師器	甕	-	(169)	90	長石・石英・赤色粘土	にぶい黒	普通	体部外面下端ヘラナデ 内面ヘラナデ	覆土上層	30%
449	土師器	甕	-	(92)	103	長石・石英	にぶい赤	普通	体部内外面ヘラナデ	覆土中層	20%
450	土師器	小形甕	164	(155)	-	雲母・長石・石英・赤色粘土	にぶい黄	普通	体部内外面ヘラナデ 外面輪縁痕	覆土上層	70% PL36
451	須恵器	甕	-	(110)	-	長石・赤色粘土	灰	良好	体部外面斜位の平行押き 内面砥石痕	覆土下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q 25	支脚	267	142	3.5	2410	雲母片岩	四角形状に成形 火熱痕	甕内	
Q 26	支脚*	155	123	2.5	749	雲母片岩	底・側面成形 火熱痕	覆土下層	

第69号住居跡 (第164図)

位置 調査ⅡA区中央部のH514区で、標高17.2mほどの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 長軸3.6m、短軸2.4mの長方形で、主軸方向はN-96°-Eである。壁高は5cmほどで外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

竈 東壁中央部やや南寄りに付設されている。焚口部から煙道部まで132cmで、袖部は確認されなかった。火床部は掘り方に黄褐色土を床面とほぼ同じ高さまで埋め戻して使用しており、火床面はあまり赤変していない。煙道部は壁外へ120cmほど掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1	黒色	砂粒多量、焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子少量	5	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子・砂粒少量
2	黒褐色	炭化粒子・砂粒中量、焼土粒子微量	6	灰黄褐色	白色粘土ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
3	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子中量	7	にぶい黄褐色	白色粘土ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
4	黒褐色	炭化粒子中量、砂粒少量、焼土粒子微量	8	黒褐色	炭化粒子中量、焼土粒子・砂粒少量
			9	にぶい黄褐色	焼土ブロック・白色粘土ブロック・炭化粒子少量

ピット 4か所。P1・P2は深さ15cm・20cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P3・P4はそれぞれ深さ16cmで、覆土に焼土粒子を含んでいるが、配置から性格は不明である。

ピット土層解説 (P1-P4共通)

1	灰黄褐色	砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子微量	4	暗赤褐色	焼土粒子・砂粒多量
2	にぶい黄褐色	砂粒多量、焼土ブロック微量	5	赤褐色	焼土粒子・白色粘土粒子中量、炭化物微量
3	黒褐色	焼土ブロック・炭化粒子微量	6	にぶい黄褐色	焼土ブロック・砂粒中量、炭化粒子微量

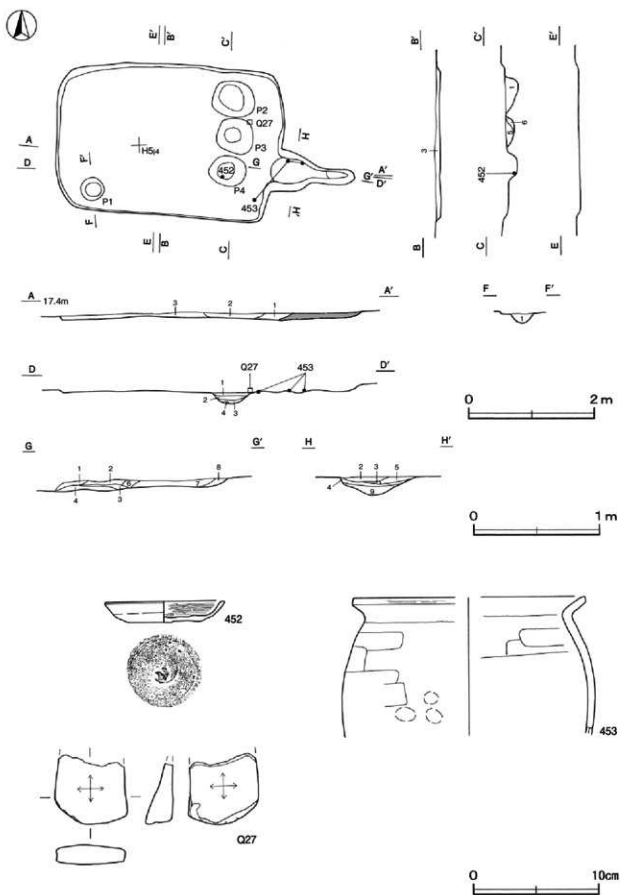
覆土 3層に分けられる。層厚が薄く堆積状況は不明である。

土層解説

1	黒褐色	炭化粒子・砂粒中量	3	灰黄褐色	砂粒多量、焼土粒子微量
2	黒褐色	砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子少量			

遺物出土状況 土師器片105点(碗類16、小皿5、甕83、瓶1)、石器1点(砥石)、不明鉄製品1点が出土している。遺物は東部を中心に出土しており、細片が多い。452はP4の底面から出土している。453は竈内と南東コーナー部の床面から出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から10世紀後葉から11世紀前葉と考えられる。



第164图 第99号住居跡・出土遺物実測図

第69号住居跡出土遺物観察表 (第164図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
452	土師器	小皿	9.4	1.7	5.8	長石・石英・炭化粒子	にぶい褐色	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	P4底面	100% PL46
453	土師器	甕	[183]	(11.0)	-	長石・石英	橙	普通	体内内外面ヘラナデ 外面指頭痕	竈内・床面	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q27	砥石	(5.6)	5.7	2.2	(65)	凝灰岩	紙面2面	床面	

第70号住居跡 (第165・166図)

位置 調査ⅡA区南部のH5h5区で、標高172mほどの平坦な低地上に位置している。

重複関係 第1号堀に南部を掘り込まれている。

規模と形状 確認された範囲は東西軸2.8m、南北軸2.4mほどで、平面形は方形もしくは長方形と推定され、主軸方向はN-100°-Eである。壁高は10～14cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

竈 東壁中央やや南寄りに付設されている。焚口部から煙道部まで110cm、袖部幅は120cmほどである。袖部は地山粘土層を掘り残して基部とし、その上に粘土ブロックを積み重ね構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さの地山面を使用しており、火床面はわずかに赤変し、内壁は亦変硬化している。焚口部手前に3cmほどの掘り込みが確認され、覆土に焼土ブロック、炭化粒子を含んでおり、灰の掻き出しの際に掘りくぼめられたものと考えられる。煙道部は壁外へ50cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| 1 暗褐色 白色粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 灰黄褐色 砂粒多量、焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 灰黄褐色 砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 炭化粒子多量、焼土ブロック中量 |
| 3 黒褐色 砂粒多量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 黒褐色 炭化粒子多量 |
| 4 にぶい黄褐色 焼土ブロック・砂粒少量、炭化粒子微量 | 9 にぶい赤褐色 焼土粒子中量、白色粘土粒子少量 |
| 5 灰黄褐色 砂粒中量、焼土粒子少量、青灰色粘土粒子微量 | 10 灰黄褐色 青灰色粘土ブロック中量、白色粘土粒子少量 |

ピット 2か所。P1は深さ23cmで、規模と配置から主柱穴、P2は深さ18cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

ピット土層解説 (P1・P2共通)

- 1 にぶい黄褐色 炭化粒子・砂粒少量、青灰色粘土ブロック・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 青灰色粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

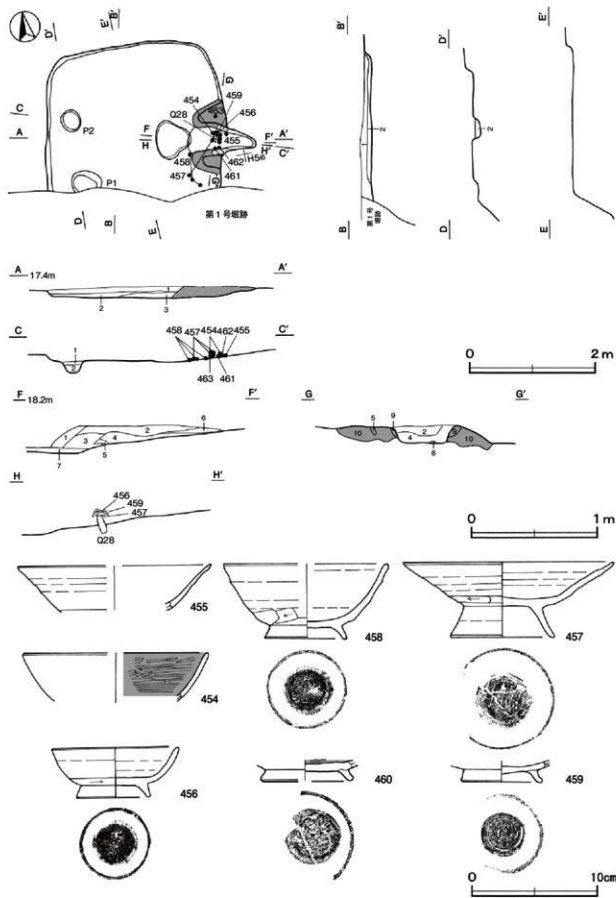
覆土 3層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示す、自然堆積と考えられる。

土層解説

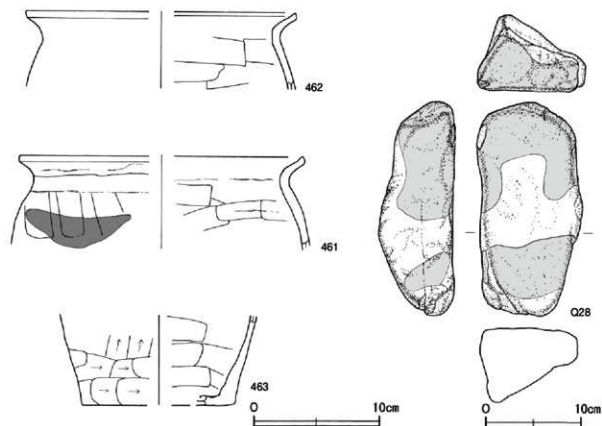
- | | |
|---------------------|------------------------|
| 1 黒褐色 炭化粒子・白色粘土粒子少量 | 3 黒褐色 砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 にぶい黄褐色 白色粘土粒子中量 | |

遺物出土状況 土師器片144点(碗類90、甕類54)、石製品1点(支脚)、細礫2点、粘土ブロック3点が出土している。458は竈右袖付近の床面から出土した破片が接合したものである。461・462は焚口部付近の覆土下層からそれぞれ出土している。竈の火床面からは、Q28の上にて457・459・456の順にそれぞれ逆位に重ねられて出土しており、支脚として使用したのと考えられる。

所見 時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。



第165图 第70号住居跡・出土遺物実測图



第166図 第70号住居跡出土遺物実測図

第70号住居跡出土遺物観察表 (第165・166図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
454	土師器	椀	[14.6]	(3.9)	-	長石・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	体部内面ヘラ磨き	竈内・覆土中層	20%
455	土師器	椀	[15.4]	(3.6)	-	雲母・長石・石英・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ	竈内	20%
456	土師器	高台付椀	9.8	4.0	5.6	雲母・石英・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り後高台張り付け	竈内	70% PL43
457	土師器	高台付椀	16.6	6.0	8.0	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り後高台張り付け	竈内	60% PL43
458	土師器	高台付椀	[13.0]	6.0	6.3	雲母・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り後高台張り付け	竈内・床面	50% PL43
459	土師器	高台付椀	-	(1.7)	6.2	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き 高台張り付け	竈内	20%
460	土師器	高台付椀	-	(1.6)	[6.7]	雲母・赤色粒子	明赤褐色	普通	体部内面ヘラ磨き 高台張り付け	覆土中	10%
461	土師器	甕	[22.5]	(7.4)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	体部内面ヘラナデ	覆土下層	5%
462	土師器	甕	[21.4]	(6.1)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	体部内面ヘラナデ	覆土下層	5%
463	土師器	甕	-	(7.2)	[12.0]	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面下端ヘラ割り 内面ヘラナデ	覆土下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q 28	支脚	22.5	11.3	8.0	2750	ハンレイ岩	上面平坦に成形 火熱痕	竈内	PL54

第71号住居跡 (第167～169図)

位置 調査ⅡA区中央部のF5e6区で、標高17.8mほどの平坦な低地上に位置している。

重複関係 南壁中央部を第68号住居、中央部やや北寄りを第96号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南西コーナー部が調査区域外に延びており、確認された規模は東西軸2.9m、南北軸2.6mで長方

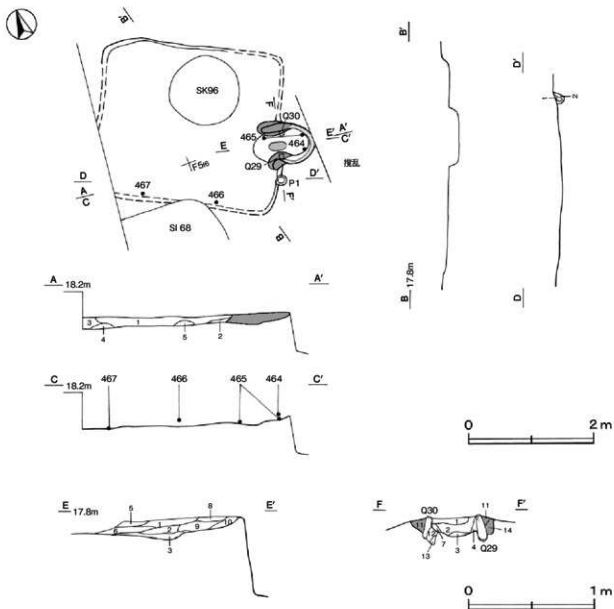
形と推定される。主軸方向はN-115°-Eである。壁高は5cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

竈 東壁中央部やや南寄りに付設されている。煙道部が攪乱を受けているため、確認された規模は、焚口部から煙道部まで100cmと推定され、袖部幅は80cmほどである。両袖部に補強材として雲母片岩を埋め込み、焼土・炭化粒子を含む黄褐色土で固めて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さの地山面を掘りくぼめて使用しており、火床面及び内壁は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ60cmほど掘り込まれているのが確認され、火床部から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|-----------------------------------|----------------------------------|
| 1 黄褐色 白色粘土粒子・砂粒中量 | 5 オリーブ褐色 白色粘土ブロック・砂粒少量、焼土粒子微量 |
| 2 黄褐色 白色粘土ブロック・砂粒中量、焼土ブロック少量 | 6 黄褐色 白色粘土ブロック中量、焼土ブロック・砂粒少量 |
| 3 に近い黄褐色 白色粘土ブロック・砂粒中量、炭化物・焼土粒子少量 | 7 オリーブ褐色 白色粘土粒子・砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 オリーブ褐色 焼土粒子中量、白色粘土粒子・砂粒少量 | 8 黄褐色 白色粘土ブロック・焼土粒子・砂粒中量 |



第167図 第71号住居跡実測図

- | | | | | | |
|----|-------|---------------------------|----|------|------------------|
| 9 | オリブ褐色 | 焼土ブロック・炭化物・白色粘土粒子・砂粒中量 | 13 | 灰黄褐色 | 炭化粒子・白色粘土粒子・砂粒少量 |
| 10 | オリブ褐色 | 焼土ブロック・炭化物・白色粘土粒子・砂粒少量 | 14 | 灰黄褐色 | 白色粘土粒子・砂粒中量 |
| 11 | にぶ赤褐色 | 焼土ブロック・白色粘土粒子・砂粒中量 | | | |
| 12 | 暗赤褐色 | 焼土ブロック・白色粘土粒子・砂粒中量・炭化粒子少量 | | | |

ピット 深さ20cmで、東壁際に位置し、竈に関連するピットの可能性も考えられるが、性格は不明である。

ピット土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|----------------|---|-----|------------------|
| 1 | 黒褐色 | 炭化物多量、白色粘土粒子微量 | 2 | 黄褐色 | 炭化粒子・白色粘土粒子・砂粒少量 |
|---|-----|----------------|---|-----|------------------|

覆土 5層に分けられる。不自然な堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

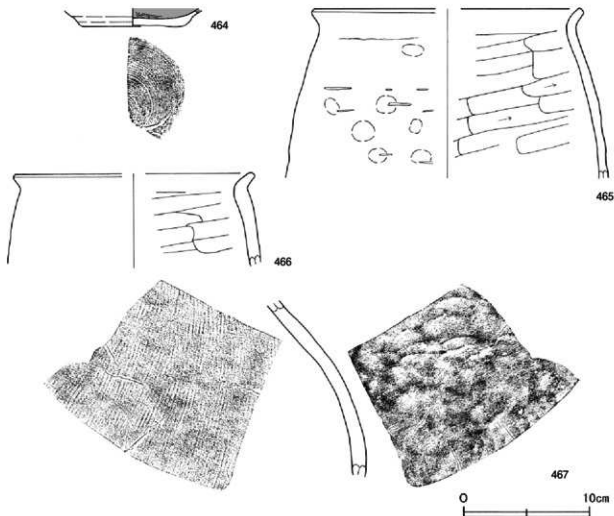
土層解説

- | | | | | | |
|---|-------|----------------------|---|-----|------------------|
| 1 | 褐色 | 砂粒中量、白色粘土ブロック・焼土粒子中量 | 4 | 暗褐色 | 焼土粒子・白色粘土粒子・砂粒少量 |
| 2 | にぶ赤褐色 | 白色粘土粒子・砂粒中量、焼土粒子少量 | 5 | 暗褐色 | 白色粘土粒子中量、砂粒少量 |
| 3 | 暗褐色 | 白色粘土粒子・砂粒少量 | | | |

遺物出土状況 土師器片42点(椀類8、甕34)、須恵器片1点(甕)、雲母片岩2点、細礫6点が出土している。

464・465は竈内、466・467は南壁際の覆土下層及び床面からそれぞれ出土している。Q29・Q30は、それぞれ竈右袖・左袖の補強材として使用されていたものである。

所見 時期は、出土土器から10世紀前半と考えられる。



第168図 第71号住居跡出土遺物実測図(1)

第72号住居跡 (第170図)

位置 調査ⅡA区中央部のF5d7区で、標高17.1mの平坦な低地上に位置している。

重複関係 第16号溝に掘り込まれている。

規模と形状 削平された状態で竈のみが確認されたため、規模及び形状については不明である。主軸方向はN-77°-Eと推定される。

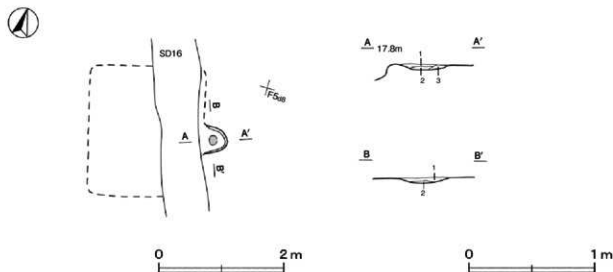
竈 東壁に付設されていたと推定される。規模は、竈の層厚が薄く不明である。火床部は床面と同じ高さの地山面を掘りくぼめて使用しており、火床面は火熱を受けて赤変している。

竈土層解説

- 1 にふい青褐色 砂粒中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量 3 黒褐色 砂粒多量、炭化物微量
2 灰黄褐色 砂粒多量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片5点(椀類2、甕類3)が竈内から出土している。いずれも細片で、図示できない。

所見 時期は、出土土器が細片のため明確ではないが、出土土器及び遺構の様相から10世紀後半以降と考えられる。



第170図 第72号住居跡実測図

第73号住居跡 (第171～174図)

位置 調査ⅡA区南部のI5a4区で、標高17.2mほどの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 長軸3.3m、短軸3.0mの長方形で、主軸方向はN-92°-Eである。壁高は5～17cmで外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦である。

竈 東壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで104cmで、袖部は確認されなかったが、両袖部の位置から雲母片岩が立位で、また右袖部脇から径30cmほどの雲母片岩が出土していることから、切り石組竈の可能性も考えられる。火床部は床面とほぼ同じ高さの地山面をわずかに掘りくぼめて使用しており、火床面及び内壁は赤変硬化している。煙道部は壁外へ70cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

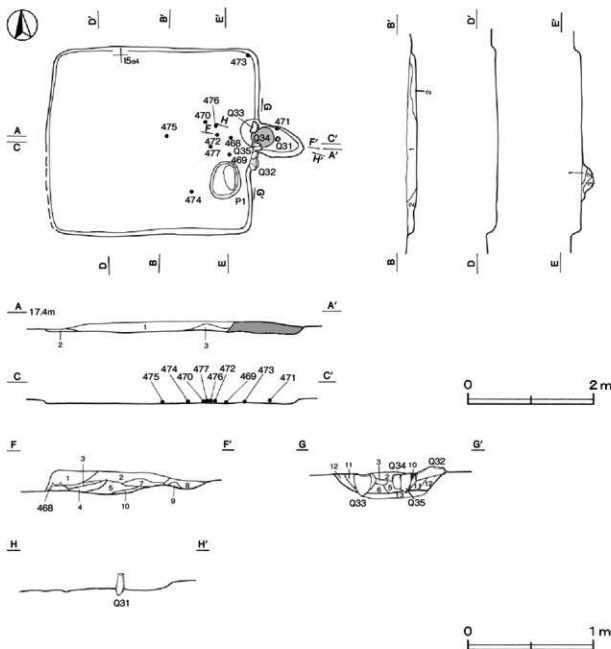
竪土層解説

- | | |
|----------------------------------|-----------------------------------|
| 1 にぶい黄褐色 砂粒多量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 陶 灰 色 砂粒多量、白色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 にぶい黄褐色 砂粒多量、焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量 | 9 灰黄褐色 白色粘土粒子少量、焼土粒子微量 |
| 3 褐 色 焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子・砂粒少量 | 10 暗赤褐色 焼土粒子中量、白色粘土粒子少量 |
| 4 黒 褐色 炭化粒子中量、焼土ブロック・砂粒少量 | 11 にぶい黄褐色 白色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 にぶい黄褐色 砂粒多量、炭化物・焼土粒子微量 | 12 灰黄褐色 炭化粒子・白色粘土粒子微量 |
| 6 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子・灰・砂粒少量 | 13 灰黄褐色 白色粘土粒子多量 |
| 7 灰黄褐色 砂粒多量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | |

ピット 深さ20cmで、位置と配置から主柱穴と考えられる。

ピット土層解説

- | | |
|---------------------------------|-------------------------------|
| 1 黒 褐色 焼土粒子中量、白色粘土ブロック少量、炭化粒子微量 | 2 灰黄褐色 白色粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 灰黄褐色 白色粘土粒子多量、焼土粒子微量 | |



第171図 第73号住居跡実測図

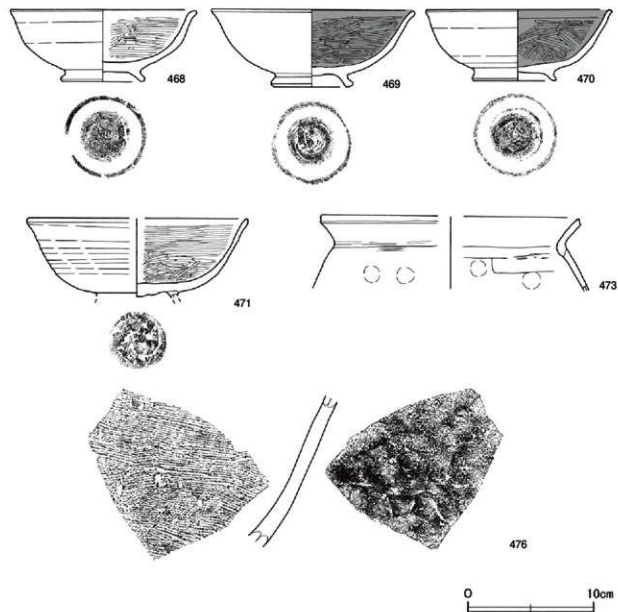
覆土 3層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

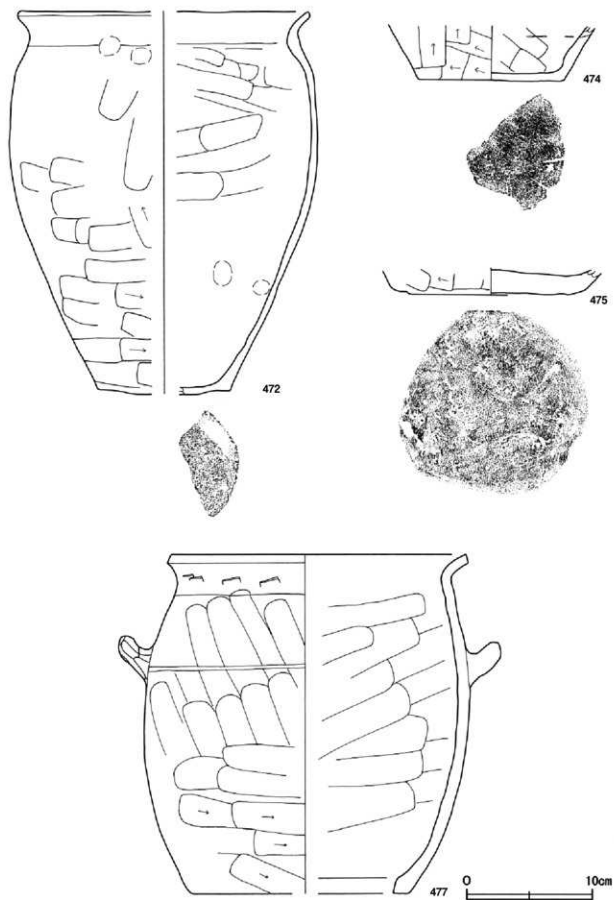
- | | |
|----------------------------------|----------------|
| 1 灰黄褐色 砂粒多量、白色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 2 褐灰色 白色粘土粒子中量 |
| 3 黒褐色 砂粒多量、焼土粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片143点（椀類51、小皿1、甕81、瓶10）、石製品1点（支脚）、切り石組竈の構築材4点、細線8点が出土している。竈周辺の遺物は、逆位や、横位につぶれた状態で重なるように出土している。468～470・472・476・477は焚口部前の床面、471は竈内、473は北東コーナー部の覆土下層からそれぞれ出土している。Q31は火床面の奥から出土し、火熱痕が確認されることから支脚として使用されていたと考えられる。Q32は竈の右袖部付近から出土し、焚口部の天井石が崩落したものと推定され、竈の左袖部から出土しているQ33、右袖部から出土しているQ34・Q35と合わせて、切り石組竈の可能性が考えられる。

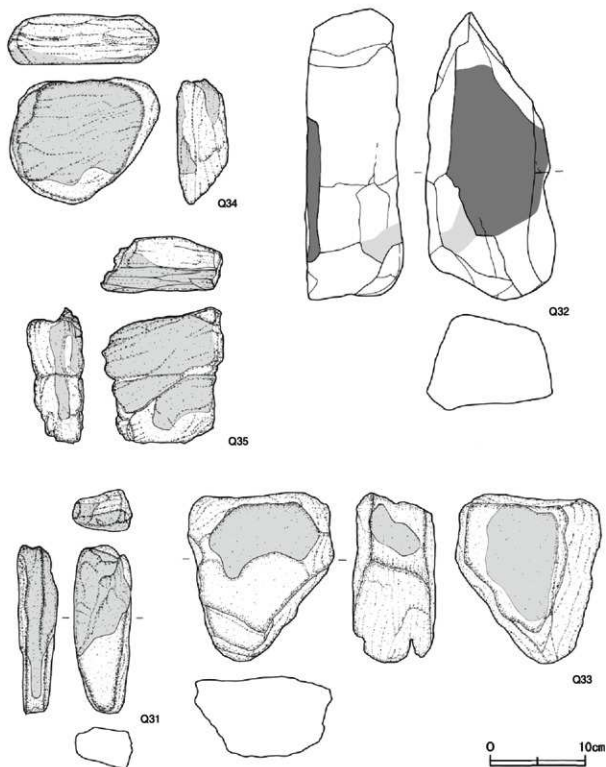
所見 時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。



第172図 第73号住居跡出土遺物実測図(1)



第173图 第73号住居跡出土遺物実測図(2)



第174図 第73号住居跡出土遺物実測図(3)

第73号住居跡出土遺物観察表(第172～174図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
468	土師器	高台付碗	14.6	5.8	6.4	雲母・赤色粒子	にぶい期	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き ヘラ切り後 高台取り付け	底部回転	90% PL43
469	土師器	高台付碗	15.9	6.4	6.0	雲母・長石	にぶい期	普通	内面ヘラ磨き 高台取り付け	底部回転 ヘラ切り後高	80% PL43
470	土師器	高台付碗	14.7	5.8	6.5	長石・石英・ 赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き ヘラ切り後高台取り付け	底部回転	70% PL43

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
471	土師器	高台付椀	[17.3]	(6.4)	-	雲母・長石	橙	普通	ロクロナデ、内面へう磨き、底面回転へう切上げ、高台部分指	壺内	60% PL43
472	土師器	甕	[22.2]	30.3	[10.6]	長石・石英・白色粘土	にぶい赤褐色	普通	体部外面へう磨り、内面へうナデ	床面	30% PL35
473	土師器	甕	[20.4]	(5.8)	-	雲母・長石・石英	明赤褐色	普通	体部内面へうナデ、内外面指頭痕	覆土下層	5%
474	土師器	甕	-	(4.3)	[11.5]	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	体部外面下端へう削り、内面へうナデ指頭痕	覆土下層	5%
475	土師器	甕	-	(2.1)	15.1	雲母・石英	褐	普通	体部外面下端へう削り	覆土下層	5%
476	須恵器	甕	-	(11.8)	-	長石・石英	暗灰	良好	体部外面斜位の平行明き	床面	5%
477	土師器	瓶	23.5	27.0	[17.0]	長石・赤色粘土	にぶい橙	普通	体部内外面へうナデ、外面沈線、下層へう磨り、指手	床面	40% PL51

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q 31	支脚	17.8	6.2	4.4	620	雲母片岩	角柱状に成形、火熱痕	壺内	PL54
Q 32	甕構築材	30.9	13.8	10.3	6310	ホルンフェルス	角柱状に成形、煤付着、火熱痕	壺内	
Q 33	甕構築材	17.9	15.5	8.5	3060	雲母片岩	三角形状に成形、火熱痕	壺内	
Q 34	甕構築材	13.4	15.8	5.3	1470	雲母片岩	底部平面に成形、火熱痕	壺内	
Q 35	甕構築材	14.5	12.9	6.0	1270	雲母片岩	四角形状に成形、火熱痕	壺内	

第74号住居跡（第175図）

位置 調査ⅡA区南部のI 5 h7区で、標高17.6mほどの平坦な低地上に位置している。

重複関係 北東コーナーから南東コーナーにかけて第21号溝に掘り込まれている。

規模と形状 床面がほぼ露出した状態で確認されたため、わずかに残る覆土と柱穴の位置から規模と形状を推定した。確認された範囲は、南北軸3.3 m、東西軸3.0 mほどで、平面形は方形もしくは長方形と推定され、主軸方向はN-104°-Eである。壁高は6 cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

竈 東壁中央部から南寄りに付設されている。焚口部、袖部は溝跡に掘り込まれているため、規模は不明である。火床部は床面とほぼ同じ高さの地山面をわずかに掘りくぼめて使用しており、火床面は赤変硬化している。

甕土層解説

- 1 にぶい黄褐色 白色粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子少量
- 3 灰黄褐色 焼土粒子中量、白色粘土粒子少量、炭化粒子微量

ビット 深さ20cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。

ビット土層解説

- 1 灰黄褐色 炭化物中量、焼土粒子微量
- 2 灰黄褐色 焼土粒子・白色粘土粒子少量、炭化材微量

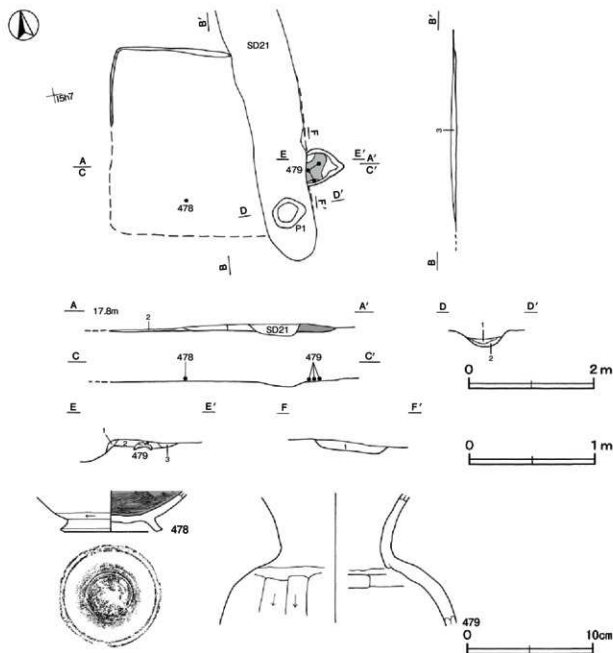
覆土 2層に分けられる。層厚が薄く堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 にぶい黄褐色 焼土粒子中量、炭化粒子・青灰色粘土粒子微量
- 2 灰黄褐色 青灰色粘土粒子中量

遺物出土状況 土師器片33点（椀類12、壺4、甕類17）が壺内やビット内から出土しているが、ほとんど細片である。478は中央部南寄りの覆土下層から出土している。479は竈火床部奥に立位の状態で埋め込まれており、支脚として使用されていたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。



第175図 第74号住居跡・出土遺物実測図

第74号住居跡出土遺物観察表（第175図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
478	土師器	高台付碗	-	(32)	7.5	長石・石英	にふい赤黒	普通	体部内面ヘラ磨き 底面回転ヘラ切り 底面石張り付付	覆土下層	20%
479	土師器	壺	-	(10.4)	-	長石・石英	橙	普通	体部外面ヘラ磨り 内面ヘラナデ	壺内	10% PL.37

第75号住居跡（第176・177図）

位置 調査ⅡA区中央部のF5h6区で、標高17.5mほどの平坦な低地上に位置している。

確認状況 第60号住居下に確認されている。

規模と形状 長軸3.0m、短軸2.4mの長方形で、主軸方向はN-100°-Eである。壁高は12～25cmほどで、

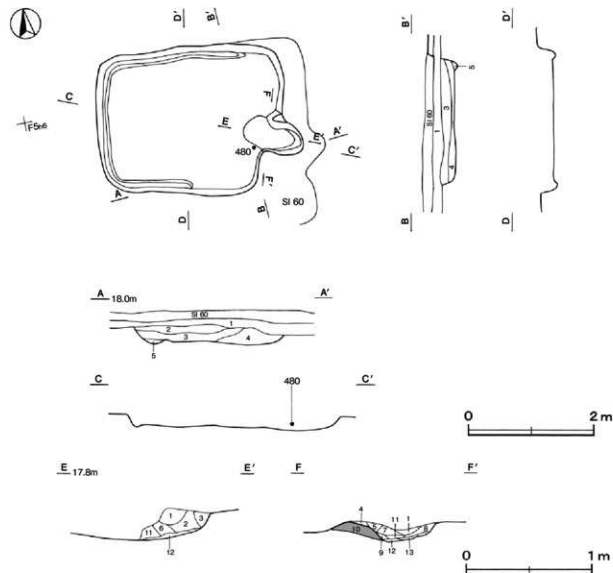
外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。壁溝が北東コーナー部から南壁中央部まで周回しており、断面形はU字状である。

竈 東壁中央部やや南寄りに付設されている。焚口部から煙道部まで96cm、袖幅は80cmである。左袖部は白色粘土と砂粒を主体とした土で構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さの地山面を掘りくぼめて使用しており、火床面は赤変していない。煙道部は壁外へ50cmほど掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|---------------------------|-----------|-----------------------------|
| 1 褐 色 | 砂粒中量、炭化粒子少量、焼土粒子・白色粘土粒子微量 | 9 暗 褐色 | 炭化粒子・砂粒少量、焼土粒子微量 |
| 2 灰 黄 褐色 | 砂粒多量、炭化物・焼土粒子微量 | 10 黄 褐色 | 白色粘土粒子・砂粒中量、焼土ブロック少量、炭化物微量 |
| 3 にぶい黄褐色 | 砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 11 暗 褐色 | 焼土ブロック中量、砂粒少量、炭化粒子・白色粘土粒子微量 |
| 4 黄 褐色 | 炭化物中量 | 12 暗 褐色 | 砂粒中量、炭化粒子少量、焼土粒子・白色粘土粒子微量 |
| 5 黄 褐色 | 白色粘土粒子・砂粒中量、焼土ブロック少量 | 13 にぶい黄褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量 |
| 6 灰 黄 褐色 | 白色粘土粒子・砂粒中量、炭化粒子微量 | | |
| 7 にぶい黄褐色 | 白色粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | | |
| 8 にぶい黄褐色 | 焼土粒子・白色粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量 | | |



第176図 第75号住居跡実測図

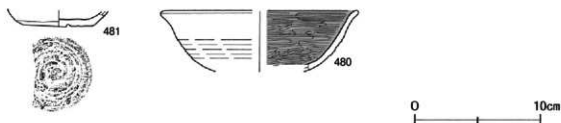
覆土 4層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。第1層は、第60号住居の下に確認され、本住居がこの層を掘り込んだ様相が無いことから氾濫堆積層と想定される。

土層解説

1	にぶい黄褐色	白色粘土ブロック少量	4	にぶい黄褐色	白色粘土粒子中量
2	褐色	白色粘土ブロック微量	5	にぶい黄褐色	白色粘土粒子・砂粒少量
3	にぶい黄褐色	白色粘土ブロック中量			

遺物出土状況 土師器片76点（碗類29、甕類47）、細礫1点が出土している。遺物は東壁際を中心に出土しているが、ほとんど細片である。480は遮右袖付近の覆土下層、481は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、10世紀後葉から11世紀前葉と考えられる第60号住居跡下の氾濫堆積層下に確認されていること及び出土土器から10世紀後半と考えられる。



第177図 第75号住居跡出土遺物実測図

第75号住居跡出土遺物観察表（第177図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
480	土師器	高台付碗	[15.4]	(4.8)	-	雲母・長石	にぶい褐	普通	ロクロナデ 内面ヘタ磨き	覆土下層	15%
481	土師器	碗	-	(1.4)	5.6	長石・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘタ切り	覆土中	20%

第77号住居跡（第178～180図）

位置 調査ⅡB区南部のM5b3区で、標高17.4mほどの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 長軸3.7m、短軸2.9mの長方形で、主軸方向はN-95°-Eである。壁高は10～15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦である。壁溝が南東コーナーを除き周囲しており、断面形はU字状である。

竈 東壁中央部やや南寄りに付設されている。焚口部から煙道部まで130cm、袖部幅は100cmである。袖部は、青灰色粘土、砂粒、焼土粒子、炭化粒子を混ぜた土で構築され、右袖部には補強材として土師器甕片を使用している。火床部は床面とほほ同じ高さの地山面を掘りくぼめて使用しており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外へ80cmほど掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

土層解説

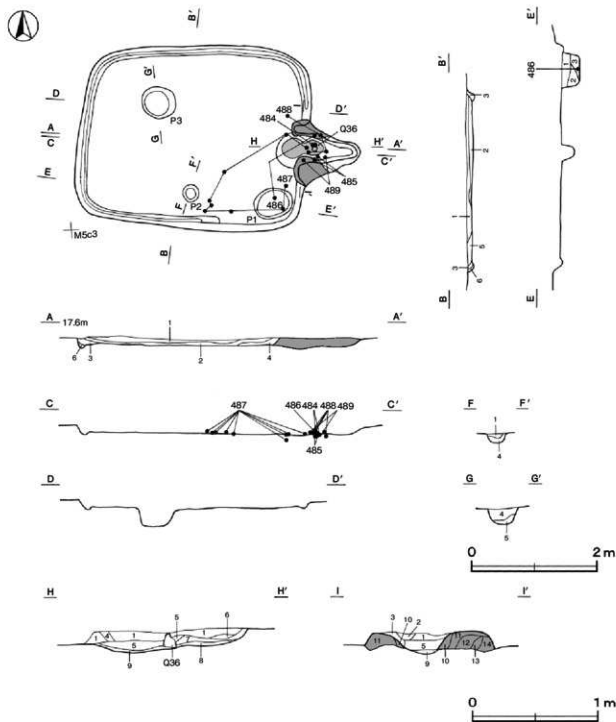
1	オリブ褐色	白色粘土ブロック・砂粒少量、焼土粒子微量	9	暗赤褐色	灰多量、焼土ブロック・白色粘土粒子中量
2	黄褐色	砂粒中量、白色粘土ブロック少量	10	赤褐色	焼土粒子・砂粒中量、青灰色粘土粒子少量
3	赤褐色	焼土ブロック中量、青灰色粘土粒子少量	11	にぶい黄褐色	青灰色粘土ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
4	暗褐色	焼土粒子中量			
5	暗灰黄褐色	焼土粒子中量、炭化粒子少量	12	にぶい黄褐色	青灰色粘土粒子多量、炭化粒子微量
6	暗赤褐色	焼土粒子中量、青灰色粘土粒子・砂粒少量	13	にぶい黄褐色	炭化物・青灰色粘土粒子・砂粒少量
7	にぶい黄褐色	砂粒少量、焼土粒子・青灰色粘土粒子微量	14	灰黄褐色	青灰色粘土粒子多量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
8	暗褐色	焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量、青灰色粘土粒子微量			

ピット 3か所。P1・P3は深さ30cmほどで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P2は深さ20cmで、補助柱穴と考えられる。

ピット土層解説 (P1～P3共通)

- | | |
|---------------------------------|----------------------------------|
| 1 にぶい黄褐色 焼土ブロック・炭化物・白色粘土粒子・砂粒少量 | 4 にぶい黄褐色 白色粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 にぶい黄褐色 焼土ブロック・白色粘土粒子・砂粒中量 | |
| 3 にぶい黄褐色 炭化粒子中量、砂粒少量 | 5 にぶい黄褐色 砂粒少量、白色粘土粒子微量 |

覆土 6層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。



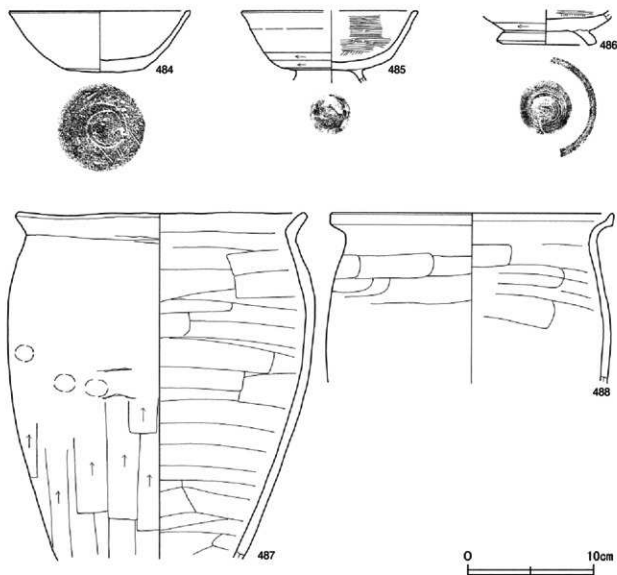
第178図 第77号住居跡実測図

土層解説

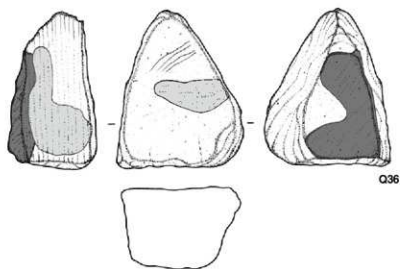
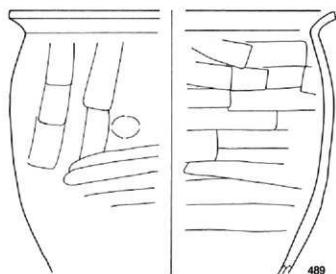
- | | | | |
|---------|-----------------|--------|------------------|
| 1 紫褐色 | 白色粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | 炭化粒子・白色粘土粒子・砂粒微量 |
| 2 暗褐色 | 白色粘土粒子中量 | 5 暗褐色 | 炭化物・白色粘土粒子微量 |
| 3 にい黄褐色 | 白色粘土粒子少量 | 6 灰黄褐色 | 白色粘土粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片176点（椀類67、甕類109）、灰軸陶器片1点（皿）、石製品1点（支脚）、細礫1点が出土している。遺物は竈内、南東コーナー部を中心に出土している。484・485は竈内から出土している。486は竈内とP1底部から出土した破片が接合したものである。487は竈内、P1内と南壁際の床面から出土した破片が、488は竈内と竈左袖付近の床面から出土した破片がそれぞれ接合したものである。489は右袖の補強材として使用されていたものが、竈内から出土した破片と接合したものである。Q36は竈火床部に立位の状態で埋め込まれており、火熱痕が見られることから支脚として使用されていたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。



第179図 第77号住居跡出土遺物実測図(1)



第180図 第77号住居跡出土遺物実測図(2)

第77号住居跡出土遺物観察表 (第179図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
484	土師器	坏	142	49	6.8	雲母・赤色砂子	橙	普通	体部外面漸減 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り	壺内	65% PL39
485	土師器	高台付碗	[140]	(5.8)	-	雲母・赤色砂子	橙	普通	ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	壺内	50%
486	土師器	高台付碗	-	(2.7)	6.8	雲母・長石・石英・赤色砂子	にふい黄	普通	内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	壺内・内	30%
487	土師器	甕	226	(27.5)	-	雲母・長石・石英・赤色砂子	にふい赤	普通	体部外面下端ヘラ磨り 外面指頭痕	壺内・内	40% PL35
488	土師器	甕	224	(13.6)	-	長石・石英	にふい黒	普通	体部内外面ヘラナデ	壺内・床面	30% PL37
489	土師器	甕	[257]	(21.0)	-	雲母・長石・石英	明赤陶	普通	体部内外面ヘラナデ 外面指頭痕	壺内	30% PL37
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴			出土位置	備考
Q36	支脚	126	9.8	6.5	950	雲母片岩	三角形状に成形	火熱痕	煤付着	壺内	PL54

表 11 II 区平安時代堅穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形状	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	出土遺物	時期	備考
								土柱	土柱	土柱	土柱				
11	J 5g3	N-4°-W	方形	2.7×2.5	5	平坦	-	-	-	覆1	-	自然土師器片	9世紀後半 11世紀前半	本跡→SK74	
12	J 5g1	[N-0°]	[方形]	[3.3]×[3.2]	-	平坦	-	1	-	覆1	-	不明土師器片	9世紀後半 11世紀前半	本跡→SI13	
13	J 4g0	[N-90°-E]	[方形]	[3.0]×[2.9]	-	平坦	-	-	-	覆1	-	不明土師器片	9世紀後半 11世紀前半	SI12→本跡	
14	K 4b0	[N-6°-W]	不明	-	-	-	-	-	-	覆1	-	不明土師器片	9世紀後半 11世紀前半		
15	K 4c8	[N-36°-W]	[長方形]	4.6×[3.7]	6~11	平坦	-	-	-	覆1	-	不明土師器片	11世紀後半		
16	K 4d0	[N-6°-W]	不明	-	-	-	-	-	-	覆1	-	不明土師器片	9世紀後半 11世紀前半		
17	K 4f9	N-110°-E	長方形	3.8×3.2	12~20	平坦	-	2	-	覆1	-	人為土師器片	10世紀後半	本跡→SI8→SK61 →SK65	
18	K 4f8	N-100°-E	長方形	2.7×2.3	15~17	平坦	-	-	-	覆1	-	人為土師器片、須恵土師器片	10世紀後半 11世紀前半	SI17→本跡→SK61 →SK65	
19	K 4f8	[N-5°-E]	[長方形]	3.4×[1.6]	10~20	平坦	-	1	-	覆1	-	自然土師器片	9世紀後半		
20	K 4g8	N-5°-E	長方形	3.6×3.0	20	平坦	-	2	-	覆1	-	人為土師器片	10世紀後半		
21	L 5g1	N-90°-E	方形	3.2×3.0	13	平坦	一部	1	-	覆1	1	人為土師器片、須恵土師器片	10世紀後半 11世紀前半	SE1→本跡	
22	K 4b0	N-87°-E	長方形	4.3×3.3	10	平坦	全周	3	-	覆1	-	不明土師器片、須恵土師器片	10世紀後半 11世紀前半	本跡→SI24	
24	K 4b0	N-90°-E	方形	[4.2]×[4.0]	-	平坦	-	1	-	覆1	-	不明土師器片	11世紀後半	SI23→本跡	
25	K 5j1	N-97°-E	[長方形]	3.4×[2.7]	-	平坦	-	-	-	覆1	-	不明土師器片	10世紀後半	本跡→SI45	
26	K 4f8	N-90°-E	[長方形]	[3.7]×[2.5]	-	平坦	-	4	-	覆1	-	不明土師器片	10世紀後半		
27	K 4f8	N-105°-E	長方形	3.2×2.9	10	平坦	-	4	-	覆1	-	人為土師器片、須恵土師器片	10世紀後半	本跡→本跡	
28	L 4c9	N-105°-E	方形	3.3×3.0	10	平坦	-	2	-	覆1	-	人為土師器片、須恵土師器片	11世紀前半 12世紀	本跡→SK26	
29	L 5c2	N-90°-E	[長方形]	3.1×[1.9]	5	平坦	-	1	-	覆1	-	不明土師器片	10世紀前半		
30	L 4e8	N-90°-E	長方形	3.8×3.3	12	平坦	-	3	-	覆1	-	人為土師器片、須恵土師器片、灰陶器片	10世紀後半 11世紀前半		
31	L 5d4	N-13°-W	長方形	3.5×2.9	25~29	平坦	-	2	-	覆1	-	人為土師器片、須恵土師器片	11世紀前半 12世紀		
33	L 4g8	N-20°-E	長方形	4.6×4.1	14~18	平坦	-	3	-	覆1	-	人為土師器片、須恵土師器片、灰陶器片、灰片	10世紀後半 11世紀前半		
34	M 4e8	N-9°-E	方形	4.5×4.2	12	平坦	-	1	-	覆1	-	自然土師器片、灰片	11世紀前半		
35	M 4f0	N-100°-E	長方形	3.6×3.2	18~21	平坦	-	1	1	覆1	-	人為土師器片	10世紀後半 11世紀前半	本跡→SK15・31・ 183	
36	M 4g0	N-105°-E	長方形	3.2×2.7	9~12	平坦	-	2	1	覆1	-	自然土師器片	10世紀後半 11世紀前半	本跡→SK11・16・ 182	
37	M 4e8	N-9°-E	方形	3.4×3.2	24~28	平坦	-	2	-	覆1	-	人為土師器片、灰片	10世紀後半	本跡→SD10	
38	L 4f9	N-23°-E	方形	3.0×2.9	8	平坦	-	-	-	覆1	-	不明土師器片、須恵土師器片	9世紀後半	本跡→SI20→SK28	
39	L 4f9	N-24°-E	[方形]	3.0×[3.0]	5	平坦	-	-	-	覆1	-	不明土師器片	10世紀前半	SI38→本跡→SK27・ 28	
40	L 5a3	N-83°-E	[方形]	[3.7]×[3.7]	4	平坦	-	1	-	覆1	-	不明土師器片	10世紀後半	本跡→SK63	
41	M 5f1	N-93°-E	方形	2.6×2.4	7~24	平坦	-	1	-	覆1	-	自然土師器片	10世紀後半	本跡→SD6	
42	M 5e1	N-100°-E	方形	3.5×3.3	21~31	平坦	-	4	1	覆1	-	自然土師器片、須恵土師器片	10世紀後半		
43	M 5a2	N-9°-E	長方形	3.2×2.8	37~45	平坦	部	4	1	覆1	-	自然土師器片、須恵土師器片、灰陶器片	10世紀前半	本跡→SK29	
44	M 4a9	N-54°-W	[方形]	[2.9]×[2.7]	5	平坦	-	-	-	覆1	-	不明土師器片	9世紀後半		
45	K 5j2	N-90°-E	[方形]	[2.6]×[2.5]	16	平坦	-	-	-	覆1	-	不明土師器片	10世紀後半	SE25→本跡→SK43	
46	L 5f3	N-97°-E	長方形	3.4×2.9	50	平坦	-	3	-	覆1	-	人為土師器片、須恵土師器片	10世紀後半	本跡→SK50・51	
47	L 5b3	N-89°-E	長方形	3.7×2.6	12~15	平坦	-	4	1	覆1	-	人為土師器片、須恵土師器片	10世紀後半 11世紀前半	本跡→SK33・62・ 68・69・70・71	
48	M 5c3	N-100°-E	方形	3.1×2.9	28~45	平坦	-	4	-	覆1	-	人為土師器片	10世紀後半		
49	L 5b3	[N-95°-E]	[長方形]	4.3×[3.0]	20~40	平坦	-	-	-	覆1	-	自然土師器片	11世紀前半 12世紀	本跡→SK63	
50	L 4f9	[N-125°-E]	[長方形]	4.6×3.7	12	平坦	-	-	-	覆1	-	自然土師器片	10世紀後半		
51	L 5g1	N-95°-E	[長方形]	3.4×[0.9]	17	平坦	-	-	-	覆1	-	人為土師器片	10世紀後半	本跡→SI21	
52	L 5g4	N-93°-E	長方形	3.5×2.5	22~27	平坦	-	4	-	覆1	-	自然土師器片、須恵土師器片	10世紀後半 11世紀前半		
53	L 5f4	N-100°-E	長方形	3.0×2.7	20~28	平坦	部	2	-	覆1	-	不明土師器片、須恵土師器片	10世紀後半		
54	L 5g3	N-115°-E	[長方形]	[2.9]×[2.5]	13	平坦	-	4	1	覆1	-	不明土師器片	10世紀後半	本跡→SK51	
55	J 5f2	N-94°-E	[長方形]	[3.2]×[2.2]	3	平坦	-	-	-	覆1	-	不明土師器片	10世紀後半		
56	L 5d3	N-87°-E	方形	3.0×2.8	15~20	平坦	-	1	-	覆1	-	自然土師器片	10世紀後半	本跡→SK77・79	
57	F 5d7	N-105°-E	[長方形]	2.2×[1.5]	6~10	平坦	-	2	-	覆1	-	人為土師器片、須恵土師器片、灰陶器片	10世紀後半		

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	出土遺物	時期	備考 新旧関係 (旧→新)
								主柱穴	土間	入口	ピット				
58	F 5e7	N-90°-E	[長方形]	2.1×(0.7)	12	平坦	-	-	-	-	覆1	-	自然土層碎片	10世紀後半	
59	F 5f7	N-90°-E	[長方形]	3.1×(1.4)	10	平坦	-	1	-	覆1	-	自然土層碎片	10世紀後半		
60	F 5h6	N-90°-E	方形	3.3×3.2	6~12	平坦	-	-	-	覆1	-	自然土層碎片	10世紀後半	SI75→本跡→SK85	
61	F 5j8	N-88°-E	方形	3.4×3.2	6	平坦	-	-	-	覆1	-	自然土層碎片	10世紀後半	本跡→SK110・SD16	
63	F 5b7	N-93°-E	方形	2.7×2.5	7~15	平坦	-	-	1	覆1	-	人為土層碎片	10世紀後半		
64	F 5j7	N-90°-E	不明	-	-	-	-	-	-	覆1	-	不明土層碎片	10世紀後半		
65	F 5f7	N-118°-E	方形	2.1×2.0	10	平坦	-	-	-	覆1	-	自然土層碎片	11世紀前半	本跡→SK113	
67	F 5e7	N-93°-E	長方形	2.6×2.1	5	平坦	-	1	1	覆1	-	不明土層碎片	11世紀前半	本跡→SD16	
67	G 5d6	N-20°-E	長方形	3.6×2.9	16~25	平坦	全周	2	-	覆1	-	自然土層碎片	10世紀後半	須恵	
68	F 5f5	N-90°-E	[長方形]	3.2×(1.6)	15~30	平坦	-	1	1	2	覆1	-	人為土層碎片	11世紀前半	須恵 本跡→本跡→SK97
69	H 5i4	N-96°-E	長方形	3.6×2.4	5	平坦	-	2	-	2	覆1	-	不明土層碎片	10世紀後半	須恵
70	H 5h5	N-100°-E	[長方形]	2.8×(2.4)	10~14	平坦	-	1	1	1	覆1	-	自然土層碎片	10世紀後半	
71	F 5e6	N-115°-E	[長方形]	[2.9]×[2.6]	5	平坦	-	-	-	1	覆1	-	人為土層碎片	10世紀後半	須恵 本跡→SI68→SK96
72	F 5d7	N-77°-E	不明	-	-	不明	-	-	-	覆1	-	不明土層碎片	10世紀前半	本跡→SD16	
73	I 5a4	N-92°-E	長方形	3.3×3.0	5~17	平坦	-	1	-	覆1	-	自然土層碎片	10世紀後半		
74	I 5b7	N-104°-E	[長方形]	[3.3]×[3.0]	6	平坦	-	1	-	覆1	-	不明土層碎片	10世紀後半	本跡→SD21	
75	F 5h6	N-100°-E	長方形	3.0×2.4	12~25	平坦	一部	-	-	覆1	-	自然土層碎片	10世紀後半	本跡→SI60	
77	M 5k3	N-95°-E	長方形	3.7×2.9	10~15	平坦	一部	2	-	1	覆1	-	自然土層碎片、灰層	10世紀後半	

(2) 工房跡

第1号工房跡 (SI 22) (第181~184図)

位置 調査ⅡB区北部のK5f1区で、標高17.6mほどの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 長軸5.2m、短軸4.0mの隅丸長方形で、主軸方向はN-90°-Eである。壁高は7~21cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほは平坦である。

竈 東壁中央部の南寄りに付設されている。焚口部から煙道部まで82cm、袖部幅は103cmである。火床部は床面とほぼ同じ高さの地山面を使用しており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外へ40cmほど掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

遺土層解説

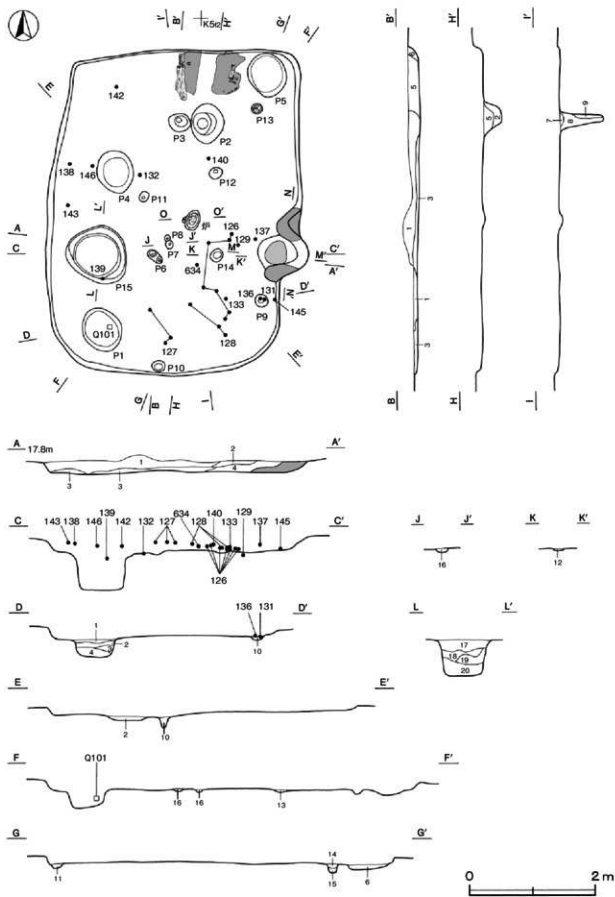
- | | | | |
|--------|---------------------------|--------|--------------------------|
| 1 灰黄褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子・砂粒微量 | 4 灰褐色 | 焼土ブロック中量、白色粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 灰褐色 | 焼土粒子少量、炭化粒子・白色粘土粒子・砂粒微量 | 5 灰褐色 | 焼土ブロック・白色粘土粒子少量 |
| 3 灰黄褐色 | 白色粘土粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子・砂粒微量 | 6 暗赤褐色 | 焼土粒子多量 |

炉 中央部に位置している。長径34cm、短径22cmの楕円形で、床面を7cm掘りくぼめた地床炉である。炉床及び炉壁は火熱を受けて硬化し、青緑色に変色している部分が確認された。

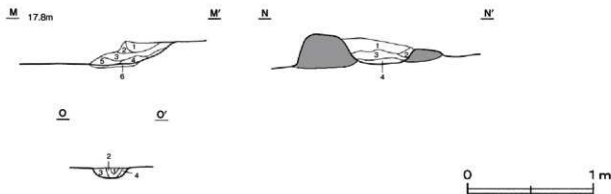
炉土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------|-------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | 白色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量 | 3 陶灰色 | 炭化粒子少量、焼土粒子・白色粘土粒子・砂粒微量 |
| 2 黒色 | 炭化粒子中量、焼土粒子少量、白色粘土粒子・砂粒微量 | 4 黄灰色 | 青灰色粘土粒子多量(地山粘土硬化層) |

ピット 15か所。P1・P2はそれぞれ深さ27cm・34cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P3は深さ70cmで補助柱穴と考えられる。P4・P5は深さが10cmほどで浅く、配置的に主柱穴の可能性が考えられるが性格は不明である。P6~P8は炉付近に位置し、深さ7cmで、覆土に青緑色に変化した成分を含む



第181图 第1号工房跡実測图(1)



第182図 第1号工房跡実測図(2)

であり、炉の可能性も考えられる。P 9～P 14は深さ6～16cmで、鋳型を埋め込む施設等の可能性も考えられるが、性格は不明である。P 15は深さ56cmで、覆土に焼土や炭化物を含み、遺物が多く出土し、工房に関連する施設の可能性が考えられる。

ピット土層解説 (P1～P15共通)

1 黒褐色	焼土ブロック少量、炭化粒子・白色粘土粒子微量	12 暗褐色	焼土ブロック中量、青灰色粘土粒子少量
2 暗褐色	炭化粒子少量、白色粘土ブロック・焼土粒子微量	13 暗灰黄色	炭化粒子少量、青灰色粘土粒子微量
3 暗褐色	焼土ブロック・白色粘土粒子微量	14 黒褐色	炭化物多量、焼土ブロック中量、青灰色粘土粒子少量
4 暗褐色	砂粒中量、焼土ブロック少量、炭化粒子・白色粘土粒子微量	15 暗褐色	炭化物中量、青灰色粘土粒子少量
5 黒褐色	炭化粒子中量、焼土粒子少量、白色粘土粒子微量	16 黒褐色	炭化粒子・白色粘土粒子少量、焼土粒子・緑青微量
6 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子中量、白色粘土粒子少量	17 暗褐色	焼土ブロック中量、青灰色粘土ブロック・炭化粒子少量
7 灰黄色	青灰色粘土ブロック・炭化物中量、焼土粒子少量	18 黒褐色	青灰色粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
8 黒褐色	炭化物・青灰色粘土粒子中量、焼土ブロック少量	19 黒褐色	焼土ブロック・青灰色粘土ブロック少量
9 濃い青褐色	青灰色粘土粒子少量	20 黒褐色	炭化粒子少量
10 黒褐色	炭化粒子中量、青灰色粘土粒子少量、焼土粒子微量		
11 黒暗褐色	青灰色粘土粒子中量、焼土粒子少量		

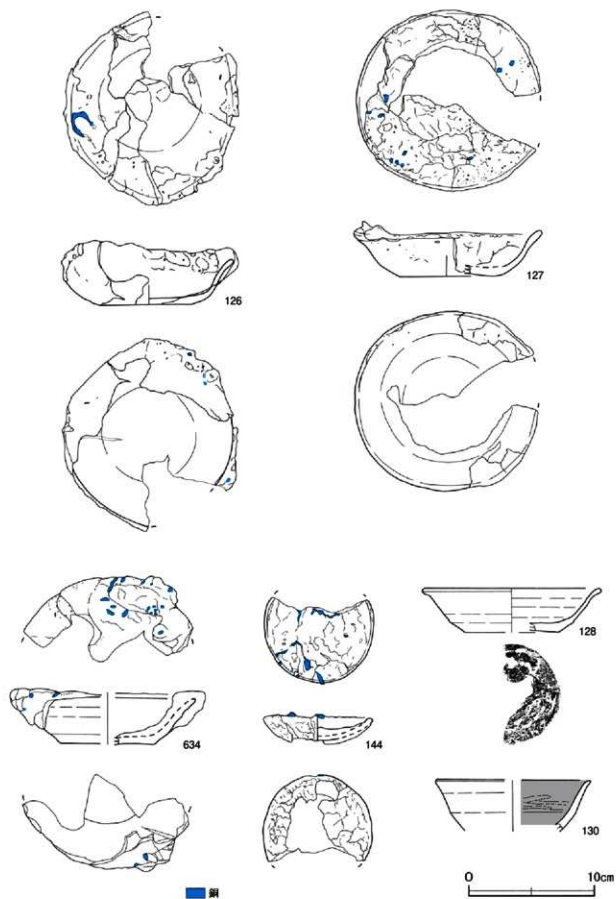
覆土 6層に分けられる。焼土や炭化物を含み、不自然な堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

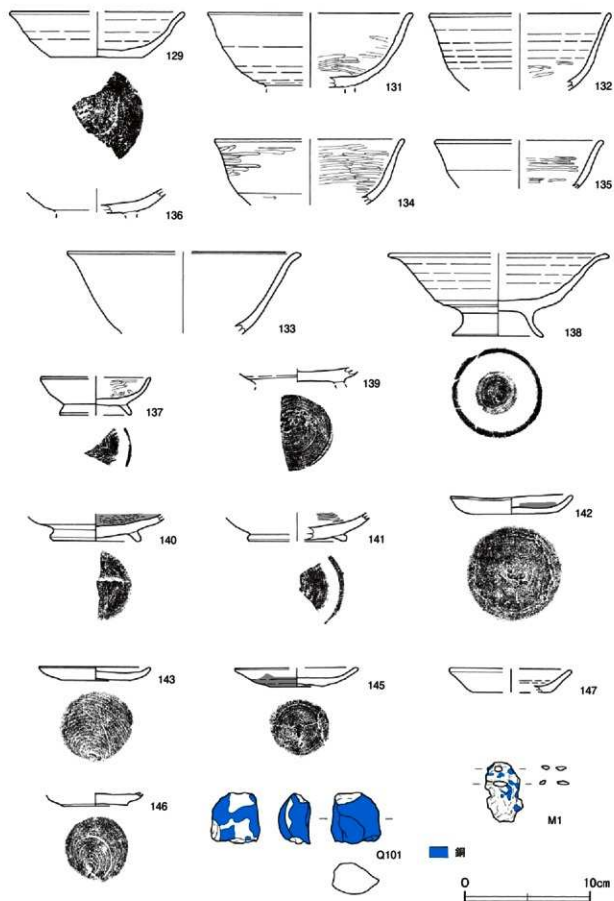
1 黒褐色	炭化粒子中量、焼土粒子少量、青灰色粘土粒子微量	4 褐色	青灰色粘土ブロック・焼土粒子中量、炭化粒子微量
2 暗褐色	焼土ブロック・青灰色粘土粒子少量、炭化粒子微量	5 暗褐色	焼土ブロック・青灰色粘土ブロック・炭化材中量
3 暗褐色	炭化物・青灰色粘土粒子少量、焼土粒子微量	6 褐色	炭化粒子・青灰色粘土粒子中量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片332点(椀類217, 小皿15, 甕類100), 須恵器片5点(坏2, 甕3), 不明鉄製品1点, 銅洋7点, 鉄洋10点, 鋳型片と考えられる粘土塊36点, 粘土塊10点, 礫11点が散在して出土している。北壁際の中央部付近からは炭化材がまると出土しているが、他に広がる範囲が確認されていないため、焼土住居の様相は見られない。銅洋が付着し増地に転用されたと考えられるI26は、竈西側の覆土下層から床面にかけ出土した破片が接合したものである。I27は南壁際中央部の覆土下層, I44は覆土中から出土し, 634は中央部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。I28は南東コーナー部の覆土下層, I29は竈西側の床面から出土している。I31はP 9の覆土下層から出土した破片が接合したものである。I34はP 15覆土中, I37は焚口部前, I38は西壁際中央部の覆土中層から逆位で、それぞれ出土している。I40は中央部, I42は北西コーナー部の覆土下層, I43は西壁際中央部の覆土中層, I45は南東コーナー部壁際の覆土下層, I47はP 15覆土中からそれぞれ出土している。また、青緑色の成分が付着したQ101はP 1の覆土中層から出土している。

所見 本住居からは、増地に転用したと考えられる銅洋が付着した坏や小皿、鋳型と考えられる土製の細片が出土していることから工房跡と考えられる。鋳型片は何であったか推測できる程接合できず、製品は不明である。また、竈を有していることから住居兼工房跡であり、時期は、出土土器から10世紀後葉以降と考えられる。



第183図 第1号工房跡出土遺物実測図(1)



第184图 第1号工房跡出土遺物実測図(2)

第1号工房跡（第22号住居跡）出土遺物観察表（第183・184図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
126	土師器	坏	14.1	5.2	7.5	長石・赤色粒子	にぶい黄緑	普通	ロクロナデ 埋堀転用	底部回転ヘラ切り 副付着	覆土下層 - 床面	70% PL44
127	土師器	坏	14.8	3.6	[8.6]	長石・赤色粒子	灰	普通	ロクロナデ 埋堀転用	底部回転ヘラ切り 副付着	覆土下層	60% PL44
634	土師器	坏	[13.6]	3.8	[7.5]	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 埋堀転用	底部回転ヘラ切り 副付着	覆土下層	30% PL44
128	土師器	坏	14.1	3.5	7.4	雲母・長石・ 赤色粒子	明赤褐	普通	ロクロナデ	底部回転糸切り	覆土下層	45%
129	土師器	坏	[14.0]	3.6	[7.2]	雲母・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ	底部回転ヘラ切り	床面	25%
130	土師器	坏	[12.3]	(4.1)	-	雲母・長石・ 石英・石英	灰褐	普通	ロクロナデ	内面ヘラ磨き	P15覆土中	10%
131	土師器	高台付椀	[16.3]	(5.9)	-	雲母・長石・ 石英・石英	にぶい赤褐	普通	ロクロナデ	内面ヘラ磨き 高台部欠損	P9覆土下層	30%
132	土師器	高台付椀	[14.2]	(6.1)	-	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ	内面ヘラ磨き	床面	30%
133	土師器	高台付椀	[18.3]	(6.5)	-	雲母・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ	床面	20%	
134	土師器	高台付椀	[15.1]	(5.2)	-	雲母・長石	にぶい橙	普通	ロクロナデ	内面ヘラ磨き	P15覆土中	10%
135	土師器	高台付椀	[13.2]	(3.9)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	ロクロナデ	内面ヘラ磨き	P15覆土中	20%
136	土師器	高台付椀	-	(2.0)	-	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ	高台部欠損	P9覆土中	5%
137	土師器	高台付椀	[8.6]	3.0	[5.6]	雲母・長石	にぶい橙	普通	ロクロナデ	内面ヘラ磨き	覆土中層	20%
138	土師器	高台付椀	[17.6]	6.6	7.0	雲母・長石・石 英・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ	底部回転ヘラ切り後高台部 貼り付け	覆土中層	50% PL44
139	土師器	高台付椀	-	(1.1)	-	雲母・長石	橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台部 貼り付け	高 P15覆土中	30%	
140	土師器	高台付椀	-	(2.2)	6.7	雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り 後高台部貼り付け	覆土下層	20%	
141	土師器	高台付椀	-	(2.3)	[7.6]	雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ切り 後高台部貼り付け	覆土中層	10%	
142	土師器	小皿	9.6	1.5	7.0	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ	底部回転ヘラ切り 椀付着	覆土下層	100% PL51
143	土師器	小皿	8.7	1.0	5.6	雲母・長石・石 英・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ	底部回転糸切り	覆土中層	100% PL51
144	土師器	小皿	8.7	1.9	-	雲母・長石・ 赤色粒子	灰黄褐	普通	底部回転ヘラ切り 副付着	埋堀転用	覆土中	70% PL51
145	土師器	小皿	[9.7]	1.5	4.4	雲母・赤色粒子	灰黄褐	普通	体部内面ナデ	底部回転ヘラ切り 埋堀付着	覆土下層	50%
146	土師器	小皿	-	(1.0)	5.0	雲母・長石・ 赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り	覆土下層	50%	
147	土師器	小皿	[9.7]	1.9	[6.3]	長石・赤色粒子	明赤褐	普通	ロクロナデ		P15覆土中	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
M1	不明	(4.3)	(3.1)	0.9	(15.2)	鉄	孔2か所 副付着	覆土中	PL55

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q101	自然石	4.1	3.9	2.5	46	ハンレイ岩	副付着	P1覆土中層	

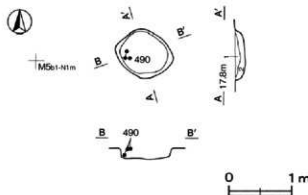
(3) 土坑

第9号土坑（第185・186図）

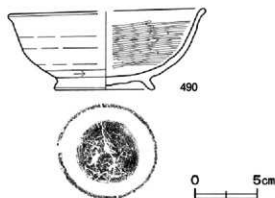
位置 調査ⅡB区南部のM5a1区で、標高17.6m
ほどの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 長径0.8 m、短径0.7 mの楕円形で、
長径方向はN-58°-Wである。深さは15 cmで、
底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分けられる。焼土や炭化粒子を含む
人為堆積と考えられる。



第185図 第9号土坑実測図



土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック・白色粘土ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒灰色 白色粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片15点(碗類5, 甕10)が出土している。490は西壁際の覆土層から下層にかけて出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。

第186図 第9号土坑出土遺物実測図

第9号土坑出土遺物観察表 (第186図)

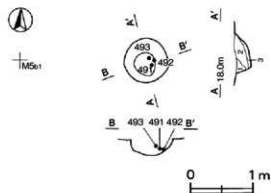
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
490	土師器	高台付碗	(15.5)	6.3	7.6	雲母・赤色粒子	にぶい濁	普通	ロクロナデ 内面へら磨き へら切り後色留まり付	底部回転 覆土上層 下層	60% PL44

第20号土坑 (第187・188図)

位置 調査ⅡB区南部のM5b1区で、標高17.6mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 径0.7mの円形である。深さは25cmで、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分けられる。焼土や炭化粒子を含む人為堆積と考えられる。



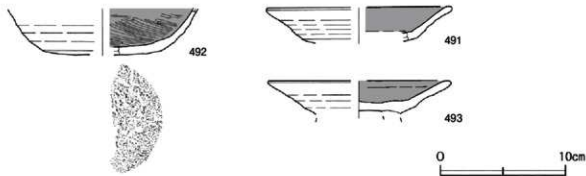
土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子微量
- 2 黒褐色 焼土ブロック中量、青灰色粘土ブロック・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 焼土粒子少量、青灰色粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片5点(坏2, 皿1, 高台付皿1, 甕1), 細礫1点が、中央部北東寄りの位置から出土している。491・492は覆土下層, 493は覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後半と考えられる。

第187図 第20号土坑実測図



第188図 第20号土坑出土遺物実測図

第20号土坑出土遺物観察表(第188図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
491	土師器	皿 <small>ナ</small>	[14.5]	(2.8)	-	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ	覆土下層	10%
492	土師器	坏	-	(3.8)	[9.4]	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面摩擦 内面へう磨き 底部回転へう切り	覆土下層	20%
493	土師器	高台付皿	[14.3]	(2.7)	-	雲母・赤色粒子	明黄陶	普通	ロクロナデ 底部回転へう切り 高台 貼り付け 高台部分欠	覆土中層	10%

第25号土坑(第189図)

位置 調査ⅡB区中央部のL4 b0区で、標高17.6mほどの平坦な低地上に位置している。

確認状況 土層観察用トレンチを掘削中に確認された。

規模と形状 確認された範囲は東西径1.3m、南北径0.9mほどで、楕円形と推定され、長径方向はN-0°である。深さは40cmで、底面は平坦である。壁はほぼ直立している。

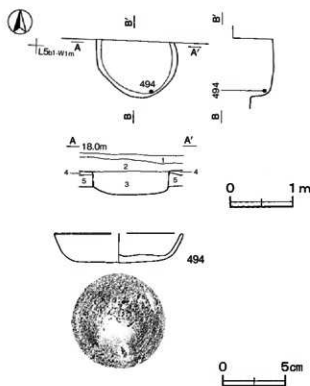
覆土 単一層であり、第3層が本跡の土層である。焼土や炭化粒子、粘土ブロックを含み、一気に埋め戻された人為堆積と考えられる。第1・2層は耕作土、第4・5層は地山粘土層で、本跡は第4層を掘り込んで構築されている。

土層解説

- 1 暗褐色 砂粒少量
- 2 暗褐色 青灰色粘土粒子・鉄分微量
- 3 暗褐色 青灰色粘土ブロック中量、炭化物・焼土粒子微量
- 4 暗赤褐色 白色粘土粒子・鉄分中量
- 5 黄灰色 青灰色粘土粒子多量

遺物出土状況 土師器片25点(椀類10、小皿9、甕6)が出土している。494は南壁際の底面から逆位で出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。



第189図 第25号土坑・出土遺物実測図

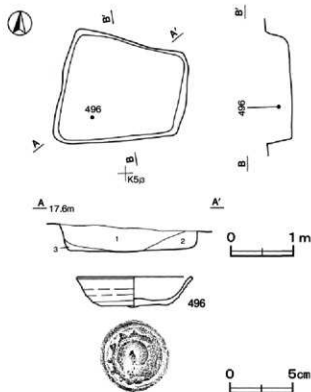
第25号土坑出土遺物観察表(第189図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
494	土師器	小皿	[10.0]	2.3	7.0	雲母・長白・石炭・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 底部回転へう切り	覆土下層	60%

第42号土坑(第190図)

位置 調査ⅡB区中央部のK5 i3区で、標高17.5mほどの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 長径2.0m、短径1.8mの隅丸長方形で、長径方向はN-75°-Wである。深さは45cmで、底面は平



第190図 第42号土坑・出土遺物実測図

第42号土坑出土遺物観察表(第190図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
496	土師器	小皿	9.2	2.4	5.3	長石・赤色砂子	橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	覆土中層	80% PL47

坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分けられる。各層に粘土ブロックを含む。人為堆積と考えられる。

土層解説

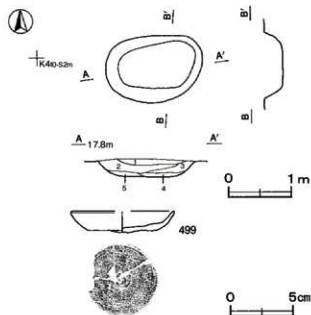
- 1 褐色 白色粘土ブロック少量
- 2 暗褐色 白色粘土ブロック中量
- 3 暗褐色 白色粘土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片33点(小皿11、甕22)、須恵器片3点(甕)が出土している。また、流れ込んだ縄文土器片3点(深鉢)のほかに、混入した磁器片2点(碗)も出土している。496は南西コーナー部の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀後葉から11世紀前葉と考えられる。

第48号土坑(第191図)

位置 調査ⅡB区中央部のK40区で、標高17.6mほどの平坦な低地上に位置している。



規模と形状 長径1.6m、短径1.1mの楕円形で、長径方向はN-77°-Eである。深さは25cmで、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 5層に分けられる。各層に焼土や炭化物を含む。人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 に灰・黄褐色 焼土ブロック・炭化物少量
- 2 に灰・黄褐色 青灰色粘土ブロック・焼土粒子少量
- 3 に灰・黄褐色 青灰色粘土ブロック中量、焼土ブロック少量
- 4 暗褐色 青灰色粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量
- 5 暗褐色 焼土ブロック・青灰色粘土ブロック・炭化物微量

第191図 第48号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片17点（椀類8、小皿6、甕3）のほかに、流れ込んだ須恵器片2点（甕）も出土している。499は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から11世紀前半以降と考えられる。

第48号土坑出土遺物観察表（第191図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
499	土師器	小皿	[8.1]	1.7	5.5	長石	にぶい橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	覆土中	60%

第49号土坑（第192図）

位置 調査ⅡB区中央部のL5G3区で、標高17.6mほどの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 長径1.2m、短径0.9mの楕円形で、長径方向はN-0°である。深さは36cmで、底面は平坦である。壁はほぼ直立している。

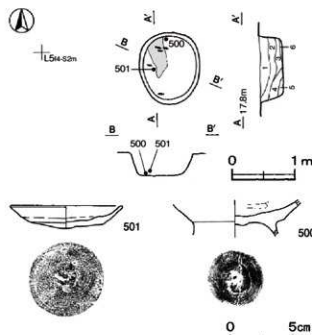
覆土 6層に分けられる。各層に焼土や炭化物を含む。人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 にぶい黄褐色 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子微量
- 3 暗褐色 青灰色粘土粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 焼土ブロック・炭化物少量、青灰色粘土粒子微量
- 5 にぶい黄褐色 青灰色粘土ブロック中量、焼土粒子微量
- 6 黒褐色 炭化物中量、焼土粒子少量

遺物出土状況 土師器片44点（椀類29、小皿4、甕11）のほかに、流れ込んだ須恵器片1点（甕）も出土している。覆土下層から床面にかけて土器片とともに焼土と炭化物が散在し、投棄された様相を呈している。500は底面、501は覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から11世紀前半以降と考えられる。



第192図 第49号土坑・出土遺物実測図

第49号土坑出土遺物観察表（第192図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
500	土師器	高台付椀	-	(3.0)	-	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	底面	15%
501	土師器	小皿	8.8	1.9	5.8	長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	覆土下層	90% PL47

第51号土坑（第193・194図）

位置 調査ⅡB区中央部のL5G3区で、標高17.6mほどの平坦な低地上に位置している。

重複関係 第46・54号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径6.0m、短径5.0mの楕円形で、長径方向はN-0°である。深さは24cmで、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

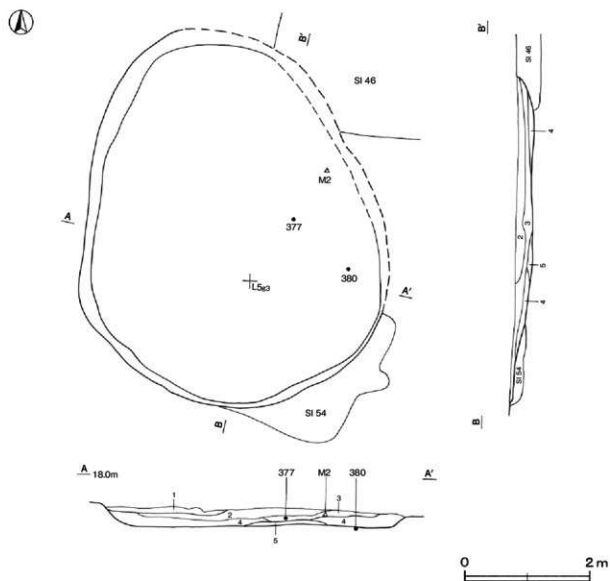
覆土 5層に分けられる。第1・2層はレンズ状の堆積状況から自然堆積、第3～5層はブロック状の堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

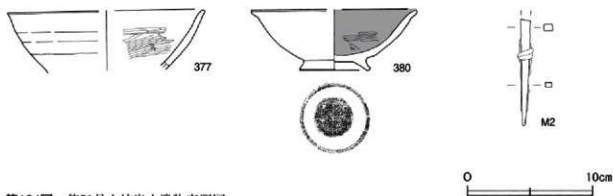
- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | 青灰色粘土粒子微量 | 4 灰黄褐色 | 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 灰黄褐色 | 焼土粒子・青灰色粘土粒子微量 | 5 暗褐色 | 青灰色粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 灰黄褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子・青灰色粘土粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師器片140点（椀類77、小皿1、甕62）、灰釉陶器片1点（碗）、鉄製品1点（釘）、細砂3点が出土している。377は中央部東寄りの覆土下層、380は底面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、重複関係及び出土土器から11世紀前半以降と考えられる。



第193図 第51号土坑実測図



第194図 第51号土坑出土遺物実測図

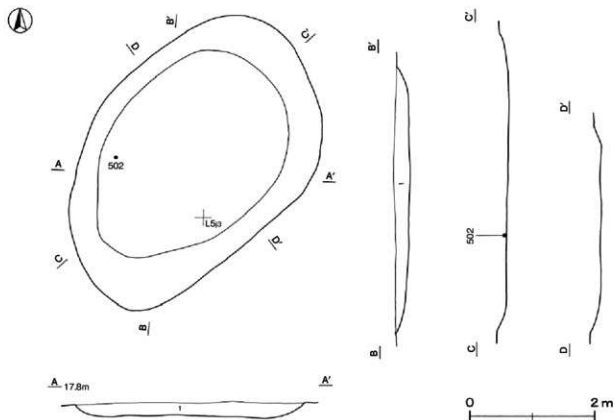
第51号土坑出土遺物観察表(第194図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
377	土師器	椀	[15.5]	(4.8)	-	雲母・赤色粒子	にぶい肌	普通	ロクロナデ 内面へう磨き	覆土下層	10%
380	土師器	高台付椀	[13.0]	4.9	5.2	長石・赤色粒子	にぶい肌	普通	ロクロナデ 内面へう磨き へう切り後高台取り付	底部回転 底面	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
M2	釘	(8.5)	0.8	0.5	(7.3)	鉄	断面長方形	覆土中層	

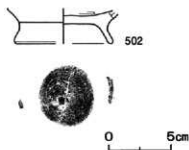
第59号土坑 (第195・196図)

位置 調査ⅡB区中央部のL5j2区で、標高17.6mほどの平坦な低地上に位置している。



第195図 第59号土坑実測図

規模と形状 長径4.8m、短径3.3mの楕円形で、長径方向はN-41°-Eである。深さは20cmで、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。



第196図 第59号土坑出土遺物実測図

覆土 単一層である。焼土や炭化物等の含有物を含まず、同質の層であることから自然堆積と考えられる。

土層解説
I 層 褐色 青灰色粘土粒子少量

遺物出土状況 土師器片59点（椀類25、甕34）、灰軸陶器片1点（皿）、鉄製品1点（不明）が出土している。502は西壁中央部付近の底面から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後半と考えられる。

第59号土坑出土遺物観察表（第196図）

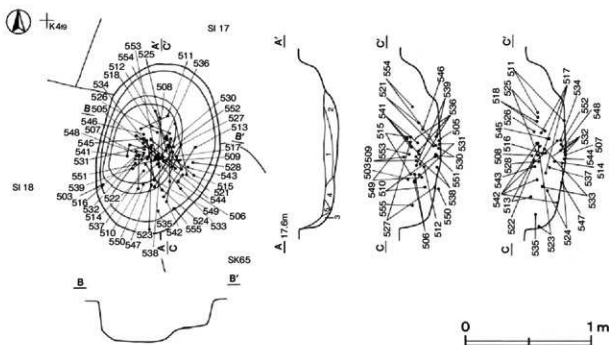
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
502	土師器	高台付椀	-	(29)	(7.5)	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	底面	10%

第61号土坑（第197～200図）

位置 調査ⅡB区北部のK49区で、標高17.5mほどの平坦な低地上に位置している。

重複関係 第17・18号住居跡、第65号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.3m、短径1.0mの楕円形で、長径方向はN-20°-Eである。深さ30cm。底面は皿状で、北側がわずかに低くなっている。壁は外傾して立ち上がっている。



第197図 第61号土坑実測図

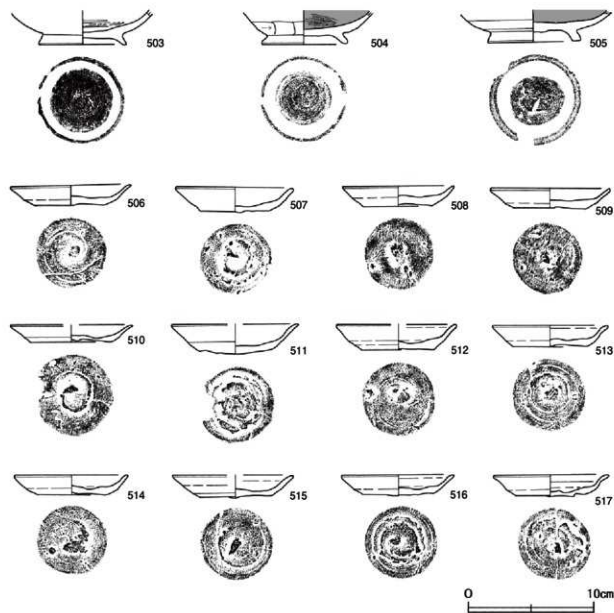
覆土 5層が確認された。出土遺物が多く、その出土状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

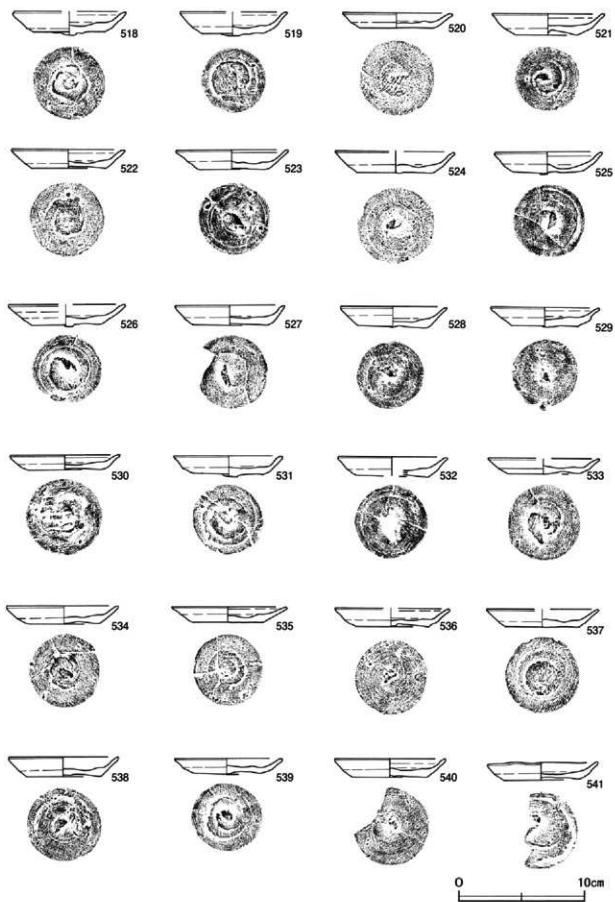
- | | | | | | |
|---|--------|----------------------|---|----|-------------|
| 1 | にびい赤褐色 | 焼土ブロック中量、青灰色粘土ブロック少量 | 4 | 褐色 | 青灰色粘土ブロック少量 |
| 2 | 明褐色 | 焼土ブロック・青灰色粘土ブロック少量 | 5 | 褐色 | 炭化物中量 |
| 3 | 褐色 | 焼土ブロック中量 | | | |

遺物出土状況 土師器片1336点（椀類11，小皿1293，甕32）が出土している。土器片は覆土上層から底面にかけて出土している。また，離れた位置での接合関係も確認されることから，焼土ブロックや炭化物とともに一括して投棄されたものと考えられる。さらに，焼成の悪い小皿片も出土している。504は覆土中，505は中央部の覆土下層から出土している。506～555の小皿は，中央部の覆土中層を中心として各層から出土しており，覆土上層から下層にかけて出土したものが接合関係にある。

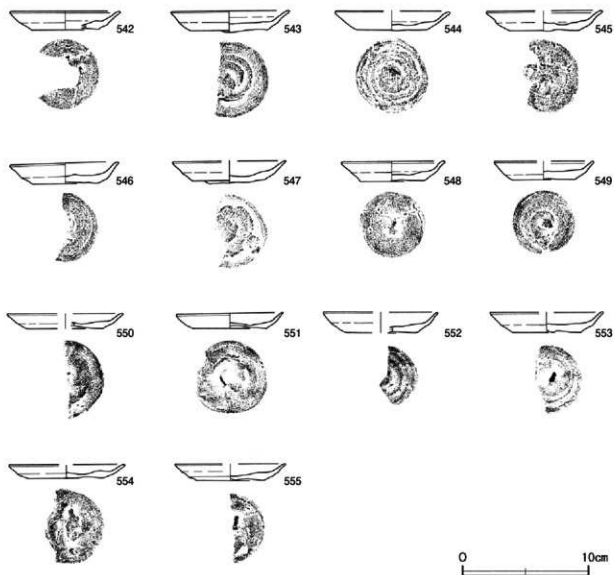
所見 時期は，重複関係及び出土土器から11世紀前半以降と考えられる。



第198図 第61号土坑出土遺物実測図(1)



第199図 第61号土坑出土遺物実測図(2)



第200図 第61号土坑出土遺物実測図(3)

第61号土坑出土遺物観察表(第198～200図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
503	土師器	高台付碗	-	(2.7)	6.8	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	体部内面へラ磨き 有長高台取り付け	底部回転へラ切り	覆土中層	40%
504	土師器	高台付碗	-	(2.7)	6.6	長石・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	体部内面へラ磨き 有長高台取り付け	底部回転へラ切り	覆土中	30%
505	土師器	高台付碗	-	(2.4)	7.0	雲母・長石・石英	にぶい赤褐色	普通	体部内面へラ磨き 有長高台取り付け	底部回転へラ切り	覆土下層	30%
506	土師器	小皿	9.5	1.7	5.5	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ	底部回転へラ切り	覆土中層	80% PL47
507	土師器	小皿	9.2	2.0	5.5	長石・赤色粒子・黄色粒子	にぶい黄	普通	ロクロナデ	底部回転へラ切り	覆土下層	80% PL47
508	土師器	小皿	8.8	1.7	5.5	長石・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	ロクロナデ	底部回転へラ切り	覆土上層	80% PL47
509	土師器	小皿	9.4	1.9	5.5	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ	底部回転へラ切り	覆土中層	90% PL47
510	土師器	小皿	[9.8]	1.4	6.3	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ	底部回転へラ切り	覆土中層	60% PL47
511	土師器	小皿	[9.9]	2.4	5.7	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ	底部回転へラ切り	覆土上層 ～底面	50% PL47
512	土師器	小皿	[9.4]	2.0	5.8	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ	底部回転へラ切り	覆土中層	60% PL47
513	土師器	小皿	9.0	1.7	5.8	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ	底部回転へラ切り	覆土上層 ～中層	70% PL47
514	土師器	小皿	8.9	1.3	5.4	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ	底部回転へラ切り	覆土下層	60% PL48
515	土師器	小皿	[9.6]	1.8	5.8	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ	底部回転へラ切り	覆土中層	60% PL48

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
516	土師器	小皿	8.9	1.7	5.7	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土中層	70% PL48
517	土師器	小皿	9.0	1.7	5.4	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土中層	80% PL48
518	土師器	小皿	[8.9]	1.9	5.7	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土中層 ～下層	70% PL48
519	土師器	小皿	[8.5]	2.0	4.8	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土中層	60% PL48
520	土師器	小皿	8.7	1.1	5.7	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土中層	70% PL48
521	土師器	小皿	8.8	1.7	4.9	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土中層	80% PL48
522	土師器	小皿	8.9	1.5	6.0	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土上層	70% PL48
523	土師器	小皿	8.9	1.7	5.4	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土中層	70% PL48
524	土師器	小皿	[9.4]	1.8	6.1	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土中層 ～下層	60% PL48
525	土師器	小皿	8.5	1.9	5.5	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土中層	80% PL48
526	土師器	小皿	[9.3]	1.8	5.5	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土上層	60% PL49
527	土師器	小皿	8.6	1.6	5.9	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土中層 ～底面	70% PL49
528	土師器	小皿	8.3	1.7	5.5	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土中層	80% PL49
529	土師器	小皿	8.6	1.6	5.3	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土中層	95% PL49
530	土師器	小皿	8.7	1.2	5.8	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土下層	95% PL49
531	土師器	小皿	8.6	1.8	5.5	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土下層	80% PL49
532	土師器	小皿	8.7	1.6	5.7	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土中層	80% PL49
533	土師器	小皿	[8.8]	1.2	5.7	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土中層	60% PL49
534	土師器	小皿	8.9	1.5	5.6	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土下層	80% PL49
535	土師器	小皿	9.1	1.3	5.5	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土中層	80% PL49
536	土師器	小皿	[9.0]	1.5	5.7	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土中層	60% PL49
537	土師器	小皿	[8.8]	1.4	5.8	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土中層	60% PL49
538	土師器	小皿	8.7	1.6	5.8	長石・赤色粒子	にぶい黄緑	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土中層 ～下層	60% PL50
539	土師器	小皿	8.5	1.3	5.2	石英・赤色粒子	にぶい黄	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土中層 ～下層	80% PL50
540	土師器	小皿	8.9	1.5	5.9	長石・赤色粒子	にぶい黄緑	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土中層	60% PL50
541	土師器	小皿	[8.7]	1.5	6.0	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土中層	80% PL50
542	土師器	小皿	8.7	1.5	5.3	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土中層 ～底面	70% PL50
543	土師器	小皿	9.3	1.6	6.1	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土上層	30% PL50
544	土師器	小皿	[8.9]	1.5	5.6	長石・赤色粒子	にぶい黄	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土下層	70% PL50
545	土師器	小皿	[9.2]	1.6	5.5	長石・赤色粒子	にぶい黄	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土下層	30% PL50
546	土師器	小皿	8.5	1.7	5.2	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土中層	50% PL50
547	土師器	小皿	[9.0]	1.7	5.7	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	底面	40% PL50
548	土師器	小皿	8.0	1.6	5.1	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土下層	90% PL50
549	土師器	小皿	[7.9]	1.5	5.0	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土中層 ～下層	70% PL50
550	土師器	小皿	[9.2]	1.2	[6.0]	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	底面	40% PL51
551	土師器	小皿	8.4	1.3	5.8	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土下層	60% PL51
552	土師器	小皿	[9.0]	1.6	[5.5]	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土下層	30% PL51
553	土師器	小皿	[9.0]	1.6	5.4	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土中層	40% PL51
554	土師器	小皿	[9.2]	1.1	5.8	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土中層 ～下層	40% PL51
555	土師器	小皿	[8.8]	1.3	5.4	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄	普通	ロクロナテ 底部回転へう切り	覆土中層	40%

第62号土坑 (第21回)

位置 調査ⅡB区南部のL5h2区で、標高176mほどの平坦な低地上に位置している。

重複関係 第47号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.6m、短径0.5mの長楕円形で、長径方向はN-76°-Eである。深さは12cmで、底面はほぼ

平坦で、赤変硬化した面と炭化物が広がる面が確認された。壁は外傾して立ち上がっている。

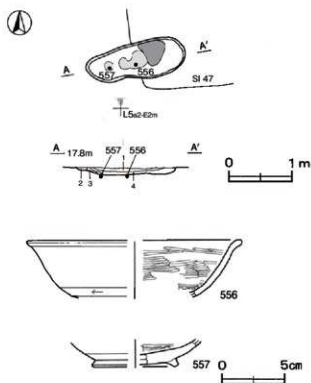
覆土 4層に分けられる。各層に焼土炭化物を含む、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 白色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化物少量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化物粒子・白色粘土粒子少量
- 3 にぶい黄褐色 焼土粒子・炭化物中量、白色粘土粒子少量
- 4 にぶい黄褐色 焼土ブロック・炭化物中量、白色粘土粒子少量

遺物出土状況 土師器片4点（高台付椀）が出土している。556・557は底面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、重複関係及び出土土器から11世紀前半以降と考えられる。



第201図 第62号土坑・出土遺物実測図

第62号土坑出土遺物観察表（第201図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
556	土師器	椀	[16.8]	(4.5)	-	雲母・長石	にぶい橙	普通	ロクロナデ 内面へう磨き	底面	15%
557	土師器	高台付椀	-	(2.2)	(6.6)	粘土・石英・炭化粒子	にぶい橙	普通	体部内面へう磨き 底部回転へう切り 後高台張り付け	底面	10%

第65号土坑（第202・203図）

位置 調査ⅡB区北部のK4 19区で、標高17.5mほどの平坦な低地上に位置している。

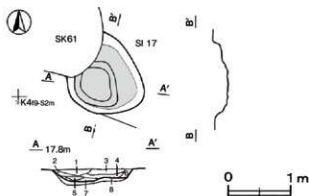
重複関係 第17号住居跡を掘り込み、第61号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 土坑に掘り込まれているため確認された規模は、長径1.2m、短径1.1mほどで、形状は楕円形と推定され、長径方向はN-48°-Wである。深さは20cmで、底面は凸凹で赤変硬化している。また、南側が低くなっている。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 8層に分けられる。各層に焼土を含む、人為堆積と考えられる。

土層解説

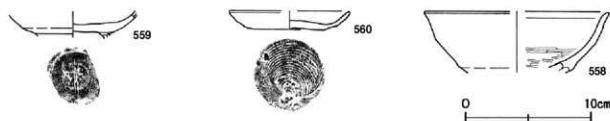
- 1 褐色 焼土ブロック少量
- 2 暗褐色 焼土粒子少量
- 3 暗褐色 焼土粒子中量
- 4 暗褐色 焼土ブロック・炭化物少量
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化物少量
- 6 暗褐色 炭化物中量、焼土ブロック少量
- 7 明赤褐色 焼土ブロック中量
- 8 赤褐色 焼土粒子多量（赤変硬化層）



第202図 第65号土坑実測図

遺物出土状況 土師器片113点（碗類22、小皿59、甕32）が出土している。558～560は覆土中からそれぞれ出土している。また、焼成の悪い小皿片も出土している。

所見 底面が赤変硬化しており、焼成の悪い小皿片も出土していることから、土器焼成遺構の可能性も考えられる。時期は、重複関係及び出土土器から11世紀前半と考えられる。



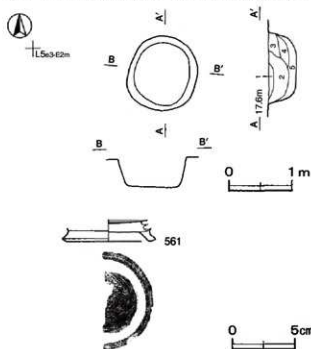
第203図 第65号土坑出土遺物実測図

第65号土坑出土遺物観察表（第203図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
558	土師器	碗	[14.5]	(4.8)	-	長石・赤色粒子	浅黄橙	不良	ロクロナデ	覆土中	15%
559	土師器	高台付碗	-	(2.1)	-	雲母・石英	橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	覆土中	10% ヘラ記号「+」
560	土師器	小皿	[9.5]	1.5	5.1	長石・赤色粒子	浅黄橙	不良	ロクロナデ 底部回転牽切り	覆土中	45%

第78号土坑（第204図）

位置 調査ⅡB区中央部のL5e3区で、標高17.4mほどの平坦な低地上に位置している。



第204図 第78号土坑・出土遺物実測図

規模と形状 長径1.2m、短径1.1mの円形である。深さは45cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 5層に分けられる。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 濃い黄褐色 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子微量
- 2 暗褐色 青灰色粘土ブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 濃い黄褐色 青灰色粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 青灰色粘土粒子少量

遺物出土状況 土師器片19点（碗類6、甕13）、細織1点が出土している。561は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀後葉から11世紀前葉と考えられる。

第78号土坑出土遺物観察表（第204図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
561	土師器	高台付椀	-	(L7)	6.4	長石・石英	橙	普通	体部内面へろ磨き 底部回転へろ切り 後高台取り付け	覆土中	10%

第99号土坑（第205図）

位置 調査ⅡA区中央部のG 5a5区で、標高17.5mほどの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 長径1.3m、短径1.2mの円形である。深さは10cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

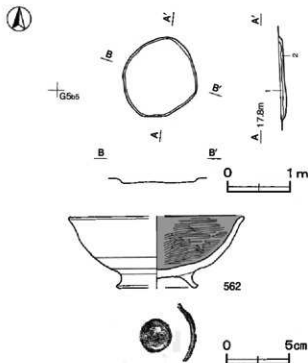
覆土 2層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子・白色粘土粒子微量
- 2 にい黄褐色 白色粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片14点（椀類6、甕8）が出土している。562は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。



第205図 第99号土坑・出土遺物実測図

第99号土坑出土遺物観察表（第205図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
562	土師器	高台付椀	[13.8]	5.7	[5.8]	長石・石英・白色粒子	橙	普通	ロタロナデ 内面へろ磨き へろ切り後高台取り付け	覆土中	30%

第107号土坑（第206図）

位置 調査ⅡB区北部のK 4b9区で、標高17.3mほどの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 長径1.4m、短径1.3mの円形である。深さ190cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

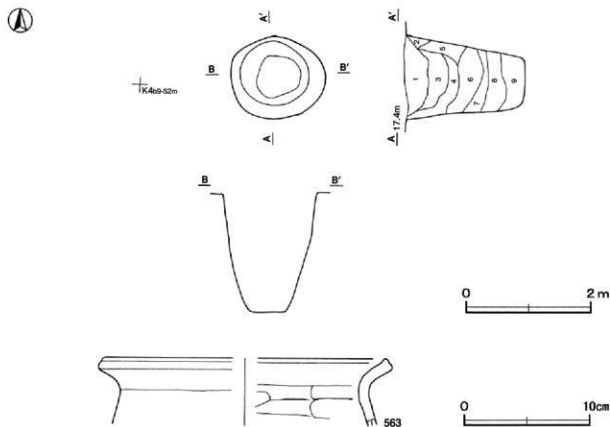
覆土 9層に分けられる。焼土や炭化物を含む、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|--------------------------------|-------------------------------------|
| 1 灰褐色 焼土ブロック・炭化物中量 | 6 灰黄褐色 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量、白色粘土ブロック微量 | 7 にい黄褐色 青灰色粘土ブロック中量、白色粘土粒子少量、焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 焼土ブロック多量、炭化物中量 | 8 にい黄褐色 青灰色粘土ブロック中量、焼土ブロック・白色粘土粒子微量 |
| 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子中量 | 9 にい黄褐色 青灰色粘土ブロック・白色粘土ブロック少量 |
| 5 灰黄褐色 青灰色粘土ブロック少量、焼土粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片40点（椀類11、甕29）、須恵器片7点（坏1、甕6）、灰軸陶器片1点（瓶類）が出土している。土器片は焼土を含む覆土から上面を中心に出土している。563は覆土中から出土している。

所見 掘り込みが深く井戸跡の可能性も考えられるが、周辺の遺構の様相から土坑として捉えた。時期は、出土土器から10世紀前半と考えられる。



第206図 第107号土坑・出土遺物実測図

第107号土坑出土遺物観察表（第206図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
563	土師器	甕	[223]	(5.4)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部横ナデ 体部内面ヘラナデ	覆土中	5%

第129号土坑（第207図）

位置 調査ⅡA区南部のI5c7区で、標高17.4mほどの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 長径1.5m、短径1.1mの楕円形で、長径方向はN-52°-Eである。深さは40cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

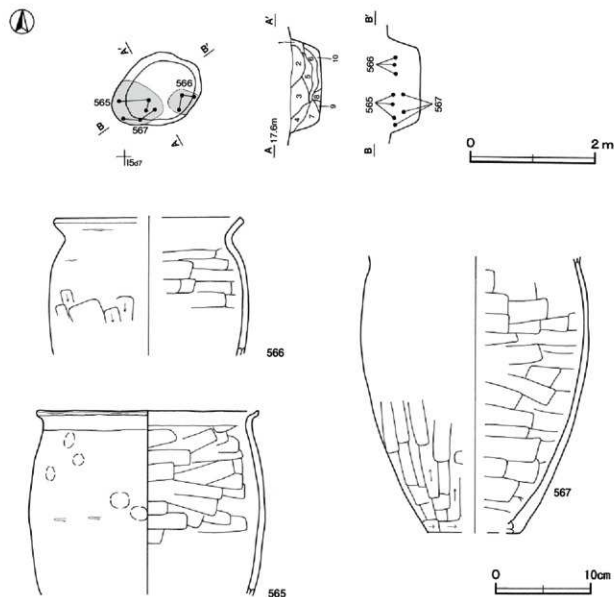
覆土 10層に分けられる。焼土や炭化物を含む。人為堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 灰黄褐色	炭化粒子・砂粒中量、焼土粒子微量
2 黒褐色	砂粒多量、焼土ブロック少量	7 に近い黄褐色	白色粘土粒子中量
3 黒褐色	砂粒中量、白色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	8 に近い黄褐色	砂粒中量、白色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 灰黄褐色	砂粒多量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 に近い黄褐色	砂粒中量
5 に近い黄褐色	砂粒中量、焼土ブロック・炭化粒子少量	10 に近い黄褐色	白色粘土粒子・砂粒中量

遺物出土状況 土師器片60点(葉)が出土している。565・566は覆土上層から出土し、567は覆土上層と覆土中層から出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。



第207図 第129号土坑・出土遺物実測図

第129号土坑出土遺物観察表(第207図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
565	土師器	甕	23.2	(19.5)	-	紫褐色・長石・赤色胎土	にぶい・粗	普通	口縁部黒ナデ・体部外面指頭痕 横・内面ヘラナデ	覆土上層	20% PL.37
566	土師器	甕	[19.5]	(14.7)	-	長石・石英	にぶい赤黒	普通	体部外面ヘラ削り 輪積痕 内面ヘラナデ	覆土上層	20%
567	土師器	甕	-	(29.2)	[9.7]	紫褐色・長石・石英	にぶい・粗	普通	体部外面下端ヘラ削り 指頭痕 内面ヘラナデ	覆土上層 ~中層	35%

表12 II区平安時代の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m)		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 時期: 新II区(旧I→新)
				長径×短径	深さ (cm)					
9	M 5 a1	N-58'-W	楕円形	0.8×0.7	15	外傾	平坦	丸瓦	土師器片	10世紀後半
20	M 5 b1	N-0'	円形	0.7×0.7	25	外傾	隆状	丸瓦	土師器片	9世紀後半
25	L 4 b0	N-0'	[楕円形]	(0.9)×1.3	40	直立	平坦	丸瓦	土師器片	10世紀後半
42	K 5 i3	N-75'-W	隅丸長方形	2.0×1.8	45	外傾	平坦	丸瓦	土師器片 須恵器片	10世紀後半 SK60-SK61→本跡
48	K 4 d0	N-77'-E	楕円形	1.6×1.1	25	傾斜	平坦	丸瓦	土師器片 須恵器片	11世紀前半以降
49	L 5 i3	N-0'	楕円形	1.2×0.9	36	直立	平坦	丸瓦	土師器片 須恵器片	11世紀前半以降
51	L 5 i3	N-0'	楕円形	6.0×5.0	24	傾斜	平坦	丸瓦	土師器片 灰釉陶器片	11世紀前半以降
59	L 5 i2	N-41'-E	楕円形	4.8×3.3	20	傾斜	平坦	自然	土師器片 灰釉陶器片	9世紀後半
61	K 4 d9	N-20'-E	楕円形	1.3×1.0	30	外傾	隆状	丸瓦	土師器片	11世紀前半以降 SD17 →SK18→SK60→本跡
62	L 5 i2	N-76'-E	長楕円形	1.6×0.5	12	外傾	平坦	丸瓦	土師器片	11世紀前半以降 SK17→本跡
65	K 4 d9	N-48'-W	[楕円形]	(1.1)×1.2	20	外傾	凸凹	丸瓦	土師器片	11世紀前半 SK17→本跡→SK61
78	L 5 e3	N-0'	円形	1.2×1.1	45	外傾	平坦	丸瓦	土師器片	10世紀後半 ～11世紀前半
99	G 5 a5	N-0'	円形	1.3×1.2	10	外傾	平坦	自然	土師器片	10世紀後半
107	K 4 b9	N-0'	円形	1.4×1.3	190	外傾	平坦	丸瓦	土師器片 灰釉陶器片 須恵器片	10世紀前半
129	I 5 c7	N-52'-E	楕円形	1.5×1.1	40	外傾	平坦	丸瓦	土師器片	10世紀後半

3 近世の遺構と遺物

調査II区の一次面から近世の堀跡1条、溝跡9条、石組遺構1か所が確認された。以下、遺構と遺物について記述する。なお、第1号堀跡・第16・18号溝跡の平面図は全体図に掲載する。

(1) 堀跡

第1号堀跡 (SD17) (第208・209図)

位置 調査II A区中央部のG 5 d4～I 5 e2区で、標高17.2～17.4mのほぼ平坦な低地上に位置している。

重複関係 第70号住居跡を掘り込み、第18号溝に掘り込まれている。

規模と形状 G 5 d4区の調査区域際確認され、東方向(N-95'-E)に長さ16.5mほど延び、G 5 e8区で立ち上がっている。第16号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。さらに、G 5 e6区で南方向(N-185'-S)へ「T」字状に分流している。分流地点から東側は、2条の掘り込みが確認された。西側は調査区域外に延びているため不明である。「T」字状の合流部から長さ21mほど直線的に延びているが、その先は複屈を受けており不明である。また、H 5 a5区から南西方向へ続いていると推定される。H 5 b4区から長さ27mほど直線的に延び、H 5 h3区で東方向(N-110'-E)にほぼ直角に屈曲し、H 5 i5区から真南方向へ直線的に長さ26mほど延びている。さらにI 5 e5区で第19・22号溝跡と合流し、真西方向へ直角に屈曲し、I 5 e2区で調査区域外へ至っている。確認された長さは、123.5mで、上幅1.2～2.4m、下幅0.2～0.5m、深さ65～105cmである。底面は平坦で、壁は直立気味に、外傾して立ち上がっている。断面形は、箱葉研堀の形状を呈している。

覆土 レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

A-A' ~ C-C' 土層解説

- | | |
|----------------------------|-----------------------------------|
| 1 暗 褐色 砂粒少量、炭化粒子・鉄分微量 | 9 灰 黄 褐色 青灰色粘土粒子・鉄分少量 |
| 2 灰 黄 褐色 炭化粒子・青灰色粘土粒子・鉄分微量 | 10 にぶい黄褐色 青灰色粘土粒子少量、鉄分微量 |
| 3 灰 黄 褐色 青灰色粘土ブロック・鉄分微量 | 11 にぶい黄褐色 白色粘土粒子少量、鉄分微量 |
| 4 暗 褐色 青灰色粘土ブロック少量、鉄分微量 | 12 暗 褐色 白色粘土粒子少量、鉄分微量 |
| 5 にぶい黄褐色 白色粘土ブロック少量、鉄分微量 | 13 暗 褐色 白色粘土粒子・鉄分微量 |
| 6 にぶい黄褐色 炭化粒子・白色粘土粒子微量 | 14 にぶい黄褐色 炭化粒子少量、青灰色粘土粒子・白色粘土粒子微量 |
| 7 暗 褐色 鉄分少量、白色粘土粒子微量 | |
| 8 暗 褐色 炭化粒子・白色粘土粒子・鉄分微量 | |

D-D' 土層解説

- | | |
|----------------------------------|------------------------------|
| 1 暗 褐色 白色粘土粒子少量、青灰色粘土ブロック・炭化粒子微量 | 5 暗 褐色 鉄分中量、青灰色粘土粒子・白色粘土粒子微量 |
| 2 暗 褐色 鉄分少量、炭化粒子微量 | 6 暗 褐色 炭化粒子・鉄分少量 |
| 3 暗 褐色 鉄分少量、青灰色粘土ブロック微量 | 7 暗 褐色 鉄分中量、白色粘土粒子少量 |
| 4 暗 褐色 鉄分中量、青灰色粘土ブロック微量 | 8 暗 褐色 鉄分少量、炭化粒子・青灰色粘土粒子微量 |

F-F'・G-G' 土層解説

- | | |
|----------------------|---------------------------|
| 1 灰 黄 褐色 砂粒中量、炭化粒子少量 | 3 にぶい黄褐色 砂粒中量、白色粘土粒子少量 |
| 2 暗 褐色 砂粒中量、炭化粒子少量 | 4 にぶい黄褐色 白色粘土粒子・砂粒少量、鉄分微量 |

I-I'・K-K' 土層解説

- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 黄褐色 砂粒多量、白色粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 4 にぶい黄褐色 白色粘土粒子中量、砂粒微量 |
| 2 暗 褐色 白色粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量 | 5 にぶい黄褐色 砂粒中量、炭化粒子・白色粘土粒子微量 |
| 3 にぶい黄褐色 白色粘土粒子少量、炭化粒子・砂粒微量 | 6 灰 黄 褐色 炭化粒子少量、白色粘土粒子・砂粒微量 |

L-L' 土層解説

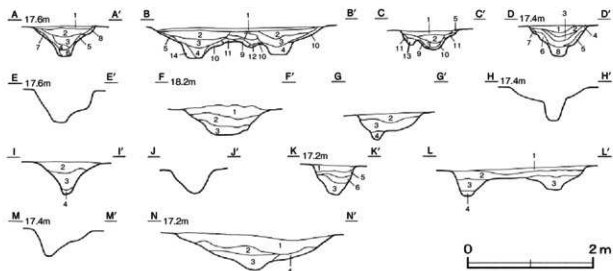
- | | |
|-----------------------------|----------------------|
| 1 灰 黄 褐色 砂粒中量、炭化粒子少量 | 3 黒 褐色 白色粘土粒子・砂粒少量 |
| 2 にぶい黄褐色 砂粒中量、白色粘土粒子・炭化粒子少量 | 4 暗 褐色 白色粘土粒子中量、砂粒微量 |

N-N' 土層解説

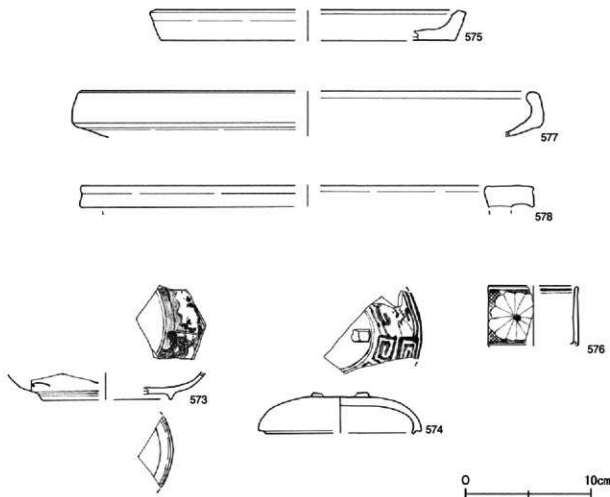
- | | |
|------------------------|-----------------|
| 1 灰 黄 褐色 白色粘土粒子少量 | 3 暗 褐色 白色粘土粒子少量 |
| 2 にぶい黄褐色 炭化粒子・白色粘土粒子少量 | 4 黒 褐色 白色粘土粒子少量 |

遺物出土状況 土師質土器片6点(焙5、羽釜1)、陶器片4点(罎り鉢1、甕3)、磁器片12点(碗8、蓋1、高台付皿3)、古銭1点、不明鉄製品17点が出土している。また、流れ込んだ縄文土器片1点(深鉢)、土師器片68点(椀類6、小皿2、甕60)、須恵器片2点(甕)も出土している。573～575は北部、576～578は中央部の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 第1号旧河道跡と合流する第19・22号溝跡と合流していたと考えられることから、河川から水を取り込んだ水路的な施設の可能性が想定される。時期は、出土土器から近世と考えられる。



第208図 第1号堀跡実測図



第209図 第1号堀跡出土遺物実測図

第1号堀跡 (第17号溝跡) 出土遺物観察表 (第209図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
573	磁器	小皿	-	(2.2)	[10.2]	精良・透明釉	灰白・灰	良好	内面低背線文・外面唐草文 欄線・波打無輪	高台二重	覆土中 10% PLS 肥後系
574	磁器	蓋	[12.9]	3.3	-	精良・透明釉	白・灰白	良好	外面書文		覆土中 3% PLS 肥後系
575	土師質	始筒	[24.0]	2.4	[23.4]	雲母・石英・ 赤色粒子	にび・黄緑	普通	体部内外面ナテ		覆土中 10%
576	磁器	小碗	[7.0]	(4.8)	-	精良・透明釉	灰白・灰白	良好	菊花繫書文 貝類絵	高台欠損	覆土中 13% PLS 肥後系
577	土師質	始筒	[36.0]	(3.6)	[37.3]	雲母・長石・ 赤色粒子	黒褐	普通	体部内外面ナテ		覆土中 10%
578	土師質	甕掛け	[35.8]	(1.7)	-	雲母・石英・ 赤色粒子	黒褐	普通	上・下・側面ナテ		覆土中 10%

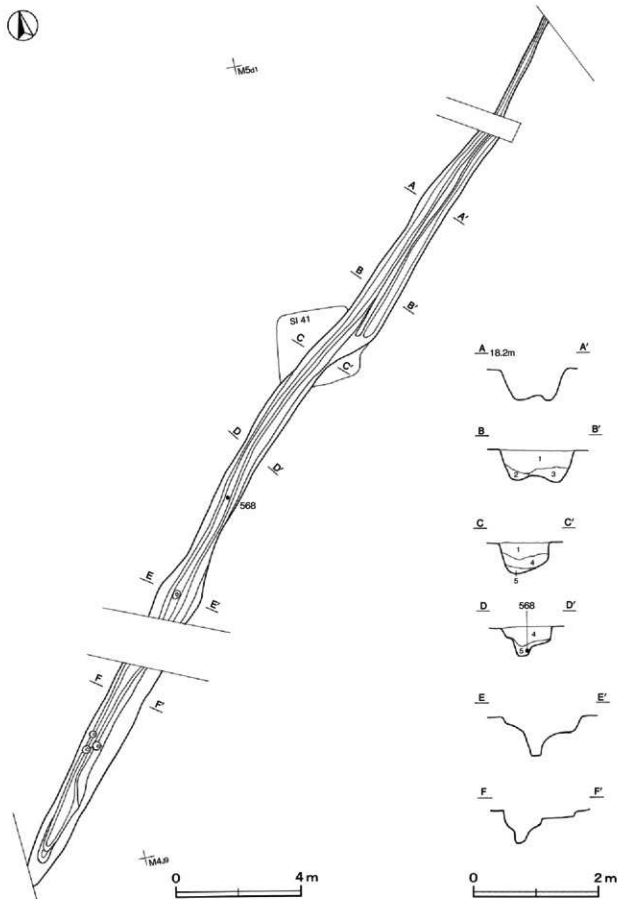
(2) 溝跡

第6号溝跡 (第210・211図)

位置 調査ⅡB区南部のM5d3～M4j8区で、標高180mの平坦な低地上に位置している。

重複関係 第41号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北東側が調査区域外へ延びているため、全体の確認はできなかった。M5d3区から南西方向 (N-50°-W) へほぼ直線的に延び、M4j8区で緩やかに立ち上がっている。確認された長さは32.5mで、上幅0.2～1.3m、下幅0.1～0.3m、深さ22～50cmである。M5d2区からM5j1区間は2条の掘り込みが確認された。



第210图 第6号沟迹实测图

底面は浅いU字状であるが、南部には径20cmほどのビット状の掘り込みが確認されている。壁は直立気味に、外傾して立ち上がっている。

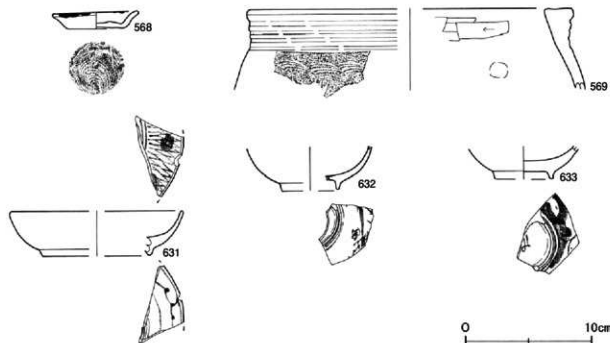
覆土 5層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	炭化粒子・白色粘土粒子・シルト少量	4 黒褐色	白色粘土粒子少量、炭化粒子微量
2 褐色	白色粘土粒子微量	5 灰黄褐色	白色粘土粒子少量
3 褐色	白色粘土粒子少量		

遺物出土状況 土師質土器片1点（小皿）、陶器片3点（碗）、磁器片10点（高台付碗）、鉄製品1点（釘）、鉄洋1点、不明土製品1点が出土している。また、流れ込んだ土師器片58点、須恵器片3点、灰輪陶器片1点も出土している。568は中央部の覆土下層、569・631～633は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器及び陶磁器から近世と考えられる。



第211図 第6号溝跡出土遺物実測図

第6号溝跡出土遺物観察表（第211図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
568	土師質	小皿	6.7	1.5	4.3	雲母・砂粒	にぶい橙	普通	口タロナデ 底部回転糸切り	覆土下層	100% PL47
569	土師質	鏝	25[6]	(6.4)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部4条の沈線	覆土中	10%
631	磁器	皿	13[5]	3.6	[8.4]	精良・透明釉	灰白・灰白	良好	染付 内面一重瀬目文 外面唐草文 底面割出し高台	覆土中	10% 肥前系
632	磁器	高台付碗	-	(3.5)	[4.4]	精良・透明釉	灰白・灰白	良好	染付 外面唐草花文 畳付無輪	覆土中	20% 肥前系
633	磁器	高台付碗	-	(2.7)	[4.5]	精良・透明釉	灰白・灰白	良好	外面草花文 高台二重瀬線 畳付無輪	覆土中	10% 肥前系

第16号溝跡（第212図）

位置 調査ⅡA区北部から南部のF5c7～15c6区で、標高17.4～17.7mのほぼ平坦な低地上に位置している。
重複関係 第61・66号住居跡を掘り込み、第110・137号土坑、第18号溝、第2号ビット群に掘り込まれている。

規模と形状 F 5c7区から南東方向(N-160°-E)に12mほど延びた後、H 58区から南西方向(N-175°-W)に弧状に延び、I 5c6区で立ち上がっている。また、第1号堀跡と重複しているが層厚が薄く新旧関係は不明である。G 58区で削平されているが、H 5c8区で再び確認されている。確認された長さは、110mほどで、上幅0.2~1.2m、下幅0.1~0.7m、深さ10~28cmである。底面は浅いU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。

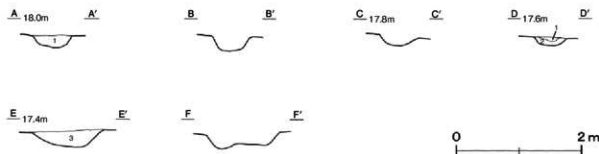
覆土 3層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 灰黄褐色 白色粘土粒子中量、焼土粒子微量 3 暗褐色 砂粒少量、焼土粒子・炭化粒子微量
 2 暗褐色 白色粘土粒子中量、砂粒少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 陶器片6点(皿1、搦鉢1、甕4)、磁器片2点(碗)、土製品1点(土人形)が出土している。また、流れ込んだ縄文土器片4点(深鉢)、土師器片44点(椀類6、小皿4、甕34)も出土している。遺物は、いずれも細片で図示できない。

所見 時期は、重複関係及び出土陶磁器から近世と考えられる。



第212図 第16号溝跡実測図

第18号溝跡 (第213図)

位置 調査ⅡA区南部のH 5g7~I 5c6区で、標高17.2~17.4mのほぼ平坦な低地上に位置している。

重複関係 第1号堀跡・第16・22号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 H 5g7区から南方向(N-170°-W)に16mほど延び、I 5a6区からほぼ真南の方向に直線的に延びている。H 5j6区で2条の掘り込みが確認され、I 5a6区で再び1条の掘り込みになる。確認された長さは35mほどで、上幅0.3~0.8m、下幅0.1~0.4m、深さ10~24cmである。底面は浅いU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。

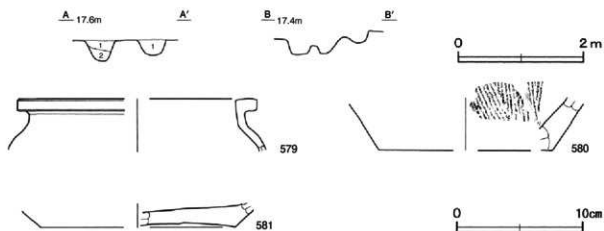
覆土 2層に分けられる。焼土や炭化物を含み、不自然な堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 砂粒少量、焼土粒子・炭化粒子微量 2 灰黄褐色 砂粒中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 陶器片9点(皿1、搦鉢2、甕6)が出土している。また、流れ込んだ土師器片4点(甕)も出土している。579~581は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土陶器から近世と考えられる。



第213図 第18号溝跡・出土遺物実測図

第18号溝跡出土遺物観察表(第213図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・施釉	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
579	陶器	甕	[188]	(4.1)	-	精良・灰釉	灰・黄緑	良好	口唇部平坦	覆土中	10% 黒土・灰遺存*
580	陶器	部跡	-	(4.2)	[138]	精良・灰釉	灰白・に ぶい赤黒	良好	11条1単位の縞り目*	覆土中	10% 黒土・灰遺存*
581	陶器	部跡	-	(1.9)	[15.4]	精良	にぶい赤黒	良好	夏型7条1組の縞目 三角形状* 高 背有り	覆土中	10% 黒土・灰遺存*

第19A～C号溝跡(第214図)

位置 調査ⅡA区南部のI5d6～I5f8区で、標高17.2mほどのほぼ平坦な低地上に位置している。

確認状況 第1号旧河道跡から派生し第1号堀跡に合流する4条の溝跡が確認された。北側の溝跡を除き、様相を同じくする3条の溝跡を第19A～C号溝跡とした。

重複関係 旧堤防下に確認されており、東側が第1号旧河道跡、西側が第1号堀跡・第22号溝跡と合流している。また、C号溝跡は第21号溝跡と合流している。

規模と形状 A号溝跡は北東方向(N-77°-E)に、弧状に10mほど延びている。規模は上幅0.8～1.1m、下幅0.3～0.5m、深さ40～50cmである。底面は浅いU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。B号溝跡は北東方向(N-85°-E)に、弧状に8.8m延びている。規模は上幅0.5～0.7m、下幅0.1～0.2m、深さ22～40cmである。底面は浅いU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。C号溝跡は東方向(N-95°-E)に、弧状に9.2m延びている。規模は上幅1.6～2.0m、下幅0.2～0.4m、深さ35～50cmである。底面は浅いU字状で、北壁は外傾し、南壁は緩やかに立ち上がっている。A～C号溝跡はいずれも東の第1号旧河道跡側から第1号堀跡に向かって緩やかに傾斜している。

覆土 3層に分けられる。各層に粘土ブロックを含む人為堆積と考えられる。

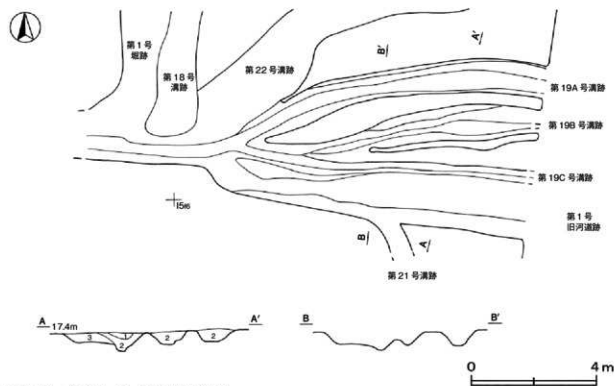
土層解説

- 1 灰黄褐色 白色粘土ブロック・砂粒少量、炭化物微量 3 黒褐色 白色粘土ブロック・砂粒中量
- 2 にぶい黄褐色 砂粒中量、白色粘土ブロック少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 磁器片7点(高台付碗5、蓋2)、不明鉄製品1点が出土している。また、流れ込んだ土器器片19点(碗類4、甕15)も出土している。いずれも細片であり図示できない。

所見 本跡は旧堤防下に確認され、第1号旧河道跡及び第1号堀跡と同時期に存在していたと考えられる。さ

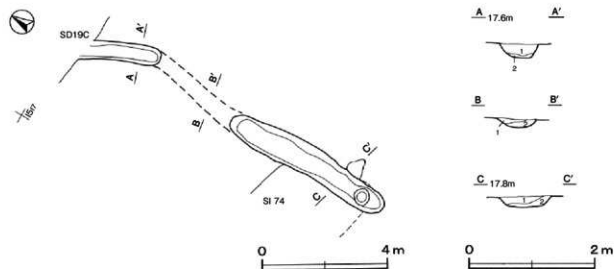
らに、第1号旧河道跡から第1号溝跡に向かって傾斜していることから、取水のための施設の可能性も想定される。時期は、第1号堀跡と同時期と推定されることから近世と考えられる。



第214図 第19A・B・C号溝跡実測図

第21号溝跡（第215図）

位置 調査ⅡA区南部のI 5 f7～I 5 h7区で、標高17.2～17.6mの北へ緩やかに傾斜する斜面部に位置している。



第215図 第21号溝跡実測図

重複関係 旧堤防下に確認されており、第74号住居跡を掘り込み、第19C号溝跡に合流している。

規模と形状 I 5h7区から北方向（N-5°-E）に5.6mほど直線的に延びている。I 5g7区の北側が削平されているため確認できなかったが、I 5f7区で再び確認でき、北西方向（N-25°-W）に2.6m延びて第19C号溝跡と合流している。確認された長さは11.2mほどで、上幅0.6～1.0m、下幅0.3～0.7m、深さ10～30cmである。底面は浅いU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分けられる。各層に粘土ブロックを含む、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-------------------|-------------------------|
| 1 灰黄褐色 白色粘土ブロック少量 | 2 黒褐色 白色粘土ブロック少量、炭化粒子微量 |
|-------------------|-------------------------|

遺物出土状況 土師器片4点（椀類1、甕3）が覆土中から出土しているが、流れ込んだ可能性が考えられる。

所見 時期は、重複関係から近世と考えられる。

第22A・B号溝跡、第1号石組遺構（第216～221図）

位置 調査ⅡA区南部のI 5d6～I 5d9区で、標高17.2～17.6mの西へ緩やかに傾斜する斜面部に位置している。

確認状況 第1号旧河道跡から派生し、第1号堀跡に合流する4条の溝跡が確認された。北側の溝跡は様相が異なるため第22A・B号溝跡とした。

重複関係 旧堤防下に確認されており、東側が第1号旧河道跡、西側が第1号堀跡、第19A～C号溝跡と合流している。

規模と形状 第22A号溝跡はI 5e6区の合流地点から北東方向（N-40°-E）に弧状に4mほど延びた後、I 5d7区からは真東方向（N-86°-E）に直線的に6m延び、第1号旧河道跡に至っている。第22B号溝跡の第1号旧河道跡との合流部付近を埋め戻し、第1号石組遺構を伴う第22A号溝跡が構築されたものと推定される。土層から推測すると、石組遺構の西端から1.2m付近では、第22B号溝跡は埋め戻されておらず、第22B号溝跡の流路をそのまま利用していたと考えられる。石組遺構の西側の規模は第22B号溝跡とほぼ同様である。

第22B号溝跡は、規模が上幅1.3～2.0m、下幅0.4～0.8m、深さ40～70cmである。底面は浅いU字状で、壁は緩やかに立ち上がっているが、弧状部は南側が外傾して立ち上がった後、上部は緩やかに立ち上がっている。

第1号石組遺構 第22A号溝跡内に、主軸方向N-86°-Eで、五輪塔が直線状に敷設されている。規模は、東西長4.0m、南北長0.6m、深さ40cmほどである。五輪塔を直方体状に組んで構築され、東西壁は開口している。底面は火輪部5、水輪部2、地輪部7個体が敷きつめられている。原位置を留めないものもあるが、北側面は火輪部6、地輪部7、南側面は火輪部6、地輪部7、上面は空輪部1、火輪部10、地輪部1、計52個体を使用している。石組された内部には土が入り込んでいたが、空洞部分もあり、当初は空洞であったと考えられる。底面に敷き詰められた石の下は粘土ブロックを含む黄褐色土で埋め土されていたが、第22A号溝跡を故意に埋め戻した後に構築したが、埋め戻された溝跡を利用して構築したかは不明である。南壁外側は20～40cm、北壁外側は90cmほどの範囲に黄褐色土や黒褐色土を埋め込んで部材を固定している。

覆土 12層に分けられる。第1・2層は表土及び旧堤防の盛土、第15層は石組遺構内に流入した土である。各層に粘土ブロックを含む、人為堆積と考えられる。

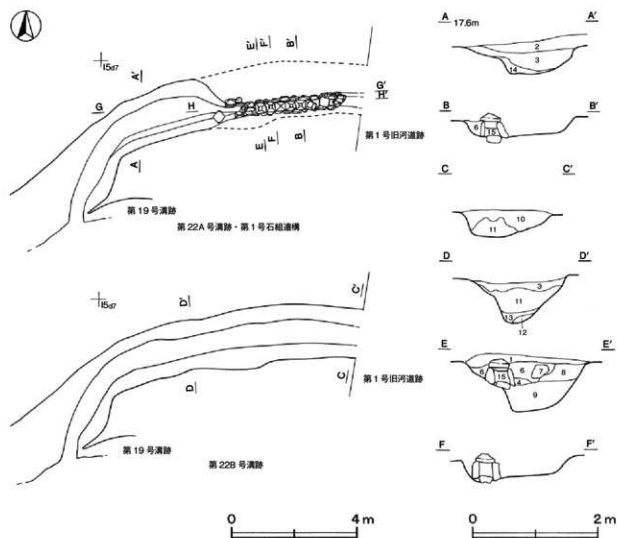
土層解説

- | | |
|-----------------------------|-------------------------------|
| 1 にい黄褐色 青灰色粘土中粒、燧土粒子・炭化粒子微量 | 5 灰黄褐色 白色粘土ブロック少量、燧土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 灰黄褐色 青灰色粘土ブロック中粒、燧土粒子微量 | 6 灰黄褐色 白色粘土ブロック中粒、燧土粒子微量 |
| 3 にい黄褐色 白色粘土ブロック少量、炭化粒子微量 | 7 黒褐色 青灰色粘土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 4 にい黄褐色 青灰色粘土ブロック少量、炭化粒子微量 | 8 暗褐色 青灰色粘土ブロック・燧土粒子少量 |

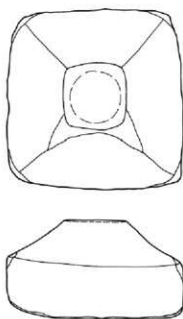
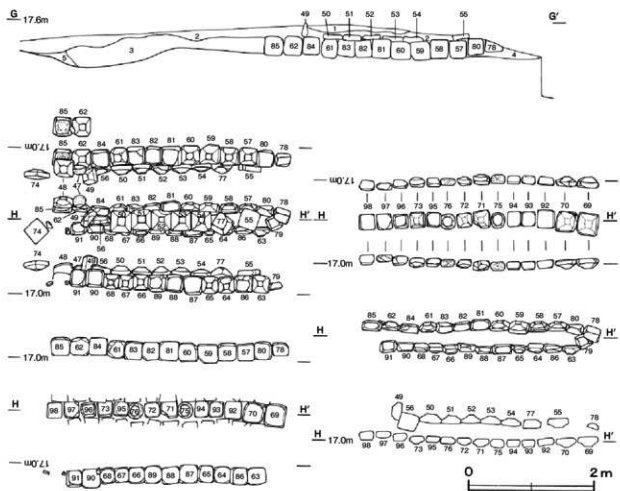
- | | | | | | |
|----|--------|--------------------|----|--------|-------------------|
| 9 | にぶい黄褐色 | 青灰色粘土ブロック・炭化粒子微量 | 13 | 黒褐色 | 黒色粘土ブロック中量、炭化粒子少量 |
| 10 | にぶい黄褐色 | 青灰色粘土ブロック中量、炭化粒子微量 | 14 | にぶい黄褐色 | 黒色粘土ブロック・炭分少量 |
| 11 | 灰黄褐色 | 白色粘土ブロック少量、炭化粒子微量 | 15 | 暗褐色 | 黄褐色粘土ブロック・砂粒微量 |
| 12 | にぶい黄褐色 | 黄褐色粘土ブロック少量 | | | |

遺物出土状況 A・B号溝跡からは磁器片1点(碗), 第1号石組遺構から崩れた五輪塔の空風輪部1点のほかに、流れ込んだ縄文土器片1点(深鉢), 土師器片42点(椀類12, 甕30)も出土している。石組遺構からは遺構を構成する五輪塔52点のほかに、石を固定するのに使用されたと考えられる中礫4点(雲母片岩)及び流れ込んだ土師器甕の細片も出土している。

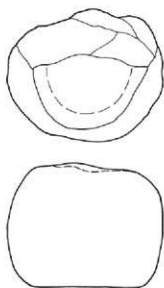
所見 B号溝跡は旧堤防下に確認され、第1号旧河道跡及び第1号堀跡、第19号溝跡と同時期に存在していたと考えられる。第1号旧河道跡から第1号堀跡に向かって傾斜していることから、取水のための施設の可能性も想定される。時期は、第1号堀跡と同時期と推定されることから近世と考えられる。また、第1号石組遺構は、堤防構築に際し、河道から第1号堀跡への取水や排水のための暗渠として構築された可能性も推定されるが、性格は明確でない。A号溝跡も第1号堀跡との同時期の存在が想定されることから近世と考えられるが、A号溝跡は、B号溝跡を埋め戻して構築されていることから、B号溝跡より新しいと考えられる。



第216図 第22A・B号溝跡・第1号石組遺構実測図



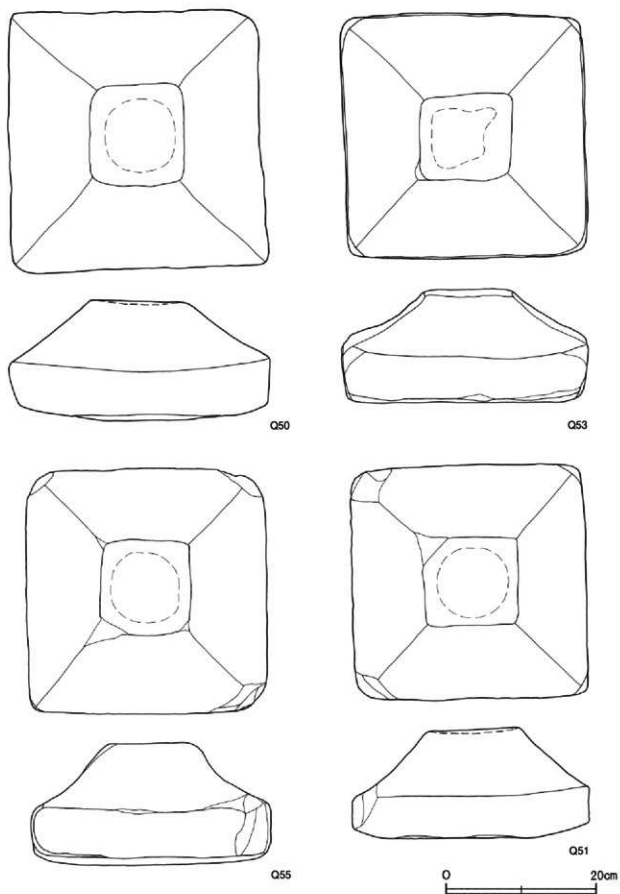
Q67



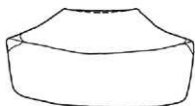
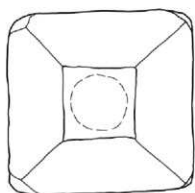
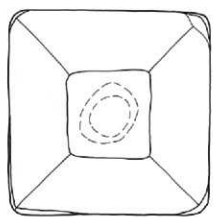
Q47



第217図 第1号石組遺構出土遺物実測図(1)

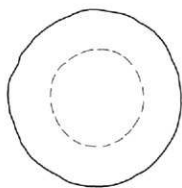
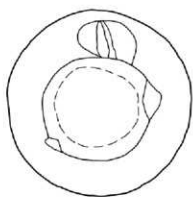


第218図 第1号石組遺構出土遺物実測図(2)



Q57

Q73

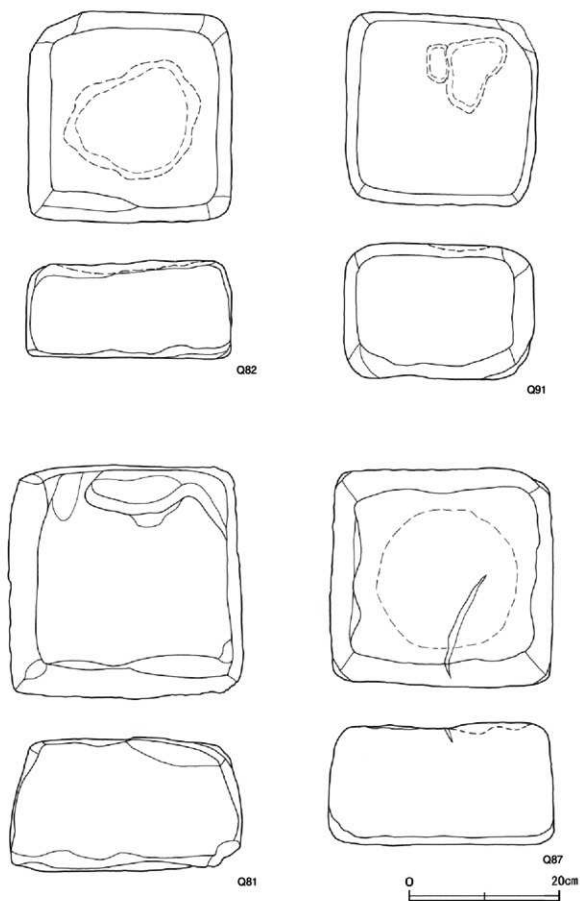


Q75

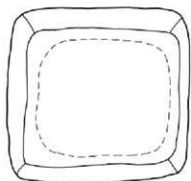
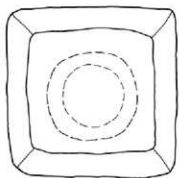
Q76



第219図 第1号石組遺構出土遺物実測図(3)

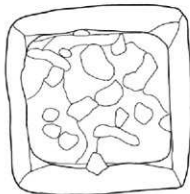
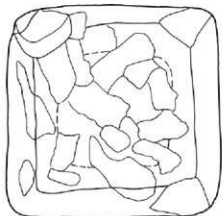


第220図 第1号石組遺構出土遺物実測図(4)



Q93

Q94



Q92

Q98



第221图 第1号石组遺構出土遺物実測図(5)

第1号石組遺構出土土物観察表 (第217～221図)

番号	器種	幅	奥行	厚さ	重さ	材質	特 徴	出土位置	備考
Q 47	空風輪	20.6	(17.6)	16.4	(7.3)	花崗岩	底部わずかにくぼみあり 側面丸みあり 上部欠損	上面*	実測図 PL52
Q 48	火輪	31.3	29.4	13.5	19.0	花崗岩	上面わずかにくぼみあり 軒先わずかに外反	上面*	
Q 49	火輪	30.0	(26.8)	14.4	(18.1)	花崗岩	上面わずかにくぼみあり 軒先わずかに外反	上面*	
Q 50	火輪	34.5	34.9	16.0	29.4	花崗岩	上面わずかにくぼみあり 軒先わずかに外反	上面*	実測図 PL52
Q 51	火輪	31.5	31.3	14.5	22.8	花崗岩	上面わずかにくぼみあり 軒先わずかに外反	上面	実測図
Q 52	火輪	32.1	31.0	15.0	21.2	花崗岩	上面わずかにくぼみあり 軒先わずかに外反	上面	
Q 53	火輪	33.8	32.6	15.0	24.6	花崗岩	上面くぼみあり 軒先外反	上面	実測図 PL52
Q 54	火輪	31.6	31.0	12.5	17.8	花崗岩	上面わずかにくぼみあり 軒先欠損	上面	
Q 55	火輪	31.9	32.5	15.1	24.6	花崗岩	上面くぼみあり 軒先わずかに外反	上面	実測図
Q 56	火輪	31.8	31.3	12.0	20.0	花崗岩	上面くぼみあり 軒先外反	上面*	
Q 57	火輪	25.8	27.3	10.5	14.0	花崗岩	上面わずかにくぼみあり 軒先わずかに外反	北側面	実測図 PL52
Q 58	火輪	29.8	28.7	13.5	15.8	花崗岩	上面わずかにくぼみあり 一部欠損 風化顕著	北側面	
Q 59	火輪	30.5	30.5	14.6	20.6	花崗岩	上面わずかにくぼみあり 軒先外反	北側面	
Q 60	火輪	30.6	29.3	14.3	20.2	花崗岩	上面わずかにくぼみあり 軒先わずかに外反	北側面	
Q 61	火輪	28.7	28.5	13.0	14.0	花崗岩	上面凸凹 軒先欠損	北側面	
Q 62	火輪	30.5	29.4	14.3	17.1	花崗岩	上面わずかにくぼみあり 軒先外反	北側面	
Q 63	火輪	28.3	27.8	13.8	14.1	花崗岩	上面わずかにくぼみあり 軒先わずかに外反	南側面	
Q 64	火輪	27.0	25.5	12.0	14.4	花崗岩	上面くぼみあり 軒先外反	南側面	
Q 65	火輪	27.0	25.1	13.0	13.8	花崗岩	軒先直線状	南側面	
Q 66	火輪	24.5	24.0	12.8	14.4	花崗岩	上面くぼみあり 軒先外反	南側面	
Q 67	火輪	23.5	24.0	13.0	11.6	花崗岩	上面わずかにくぼみあり 軒先わずかに外反	南側面	実測図 PL52
Q 68	火輪	22.5	21.8	10.6	7.8	花崗岩	上面わずかにくぼみあり 軒先風化顕著	南側面	
Q 69	火輪	34.5	33.7	17.0	26.8	花崗岩	上面くぼみあり 軒先わずかに外反	底面	
Q 70	火輪	32.4	32.3	16.1	22.0	花崗岩	上面わずかにくぼみあり 軒先わずかに外反	底面	
Q 71	火輪	28.1	27.3	13.2	15.0	花崗岩	上面わずかにくぼみあり 軒先外反 一部欠損	底面	
Q 72	火輪	23.0	22.8	11.0	19.5	花崗岩	上面わずかにくぼみあり 軒先わずかに外反	底面	
Q 73	火輪	24.8	24.2	13.1	13.5	花崗岩	上面くぼみあり 軒先外反	底面	実測図 PL52
Q 74	火輪	30.3	29.7	13.3	19.5	花崗岩	上面くぼみあり 軒先わずかに外反	上面*	
Q 75	水輪	24.4	24.8	15.3	13.2	花崗岩	上面くぼみあり 底部平坦 側面の丸み明瞭	底面	実測図 PL53
Q 76	水輪	23.0	23.5	11.5	9.2	花崗岩	上面くぼみあり 底部平坦 側面の丸み明瞭	底面	実測図 PL53
Q 77	地輪	29.3	28.8	15.6	25.5	花崗岩	上面わずかにくぼみあり 断面台形状	上面	
Q 78	地輪	26.1	25.5	11.0	13.3	花崗岩	上面くぼみあり 断面長方形形状 一部欠損	北側面	
Q 79	地輪	24.3	22.2	11.0	11.4	花崗岩	上面わずかにくぼみあり 断面長方形形状	南側面	
Q 80	地輪	26.4	26.3	12.5	15.8	花崗岩	上面わずかにくぼみあり 断面長方形形状	北側面	
Q 81	地輪	31.1	30.9	17.7	32.2	花崗岩	上面くぼみあり 断面台形状	北側面	実測図
Q 82	地輪	27.3	28.5	13.0	19.0	花崗岩	上面くぼみあり 断面台形状	北側面	実測図 PL53
Q 83	地輪	27.3	27.0	14.7	18.9	花崗岩	上面くぼみあり 断面台形状	北側面	
Q 84	地輪	28.0	27.9	13.2	18.8	花崗岩	上面くぼみあり 断面台形状	北側面	
Q 85	地輪	29.7	29.4	15.2	22.0	花崗岩	上面くぼみあり 断面台形状	北側面	
Q 86	地輪	28.5	27.0	13.4	16.4	花崗岩	上面わずかにくぼみあり 断面長方形形状	南側面	
Q 87	地輪	30.0	29.2	16.2	27.5	花崗岩	上面わずかにくぼみあり 断面長方形形状	南側面	実測図 PL53
Q 88	地輪	28.3	26.6	12.0	17.0	花崗岩	上面わずかにくぼみあり 断面台形状	南側面	
Q 89	地輪	27.8	27.6	14.0	17.4	花崗岩	上面くぼみあり 断面丸みのある台形状	南側面	
Q 90	地輪	28.4	28.3	13.0	18.6	花崗岩	上面くぼみあり 断面台形状	南側面	
Q 91	地輪	25.3	25.8	18.0	21.5	花崗岩	上面凸凹状のくぼみあり 断面長方形形状	南側面	実測図
Q 92	地輪	28.5	28.0	12.5	18.5	花崗岩	上面凸凹状のくぼみあり 断面台形状	底面	実測図

番号	器種	幅	奥行	厚さ	重さ	材質	特徴		出土位置	備考
Q 93	地輪	22.8	22.6	12.5	13.5	花崗岩	上面くぼみあり	断面台形状	底面	実測図
Q 94	地輪	24.2	23.3	10.5	12.0	花崗岩	上面凸凹状のくぼみあり	断面台形状	底面	実測図 PL53
Q 95	地輪	22.6	22.2	10.0	9.5	花崗岩	上面くぼみあり	断面台形状	底面	
Q 96	地輪	24.4	24.0	11.6	10.6	花崗岩	上面凸凹状のくぼみあり	断面台形状	底面	
Q 97	地輪	26.0	24.0	11.0	11.5	花崗岩	上面凸凹状のくぼみあり	断面長方形状 底部平坦	底面	
Q 98	地輪	24.5	25.3	14.5	15.4	花崗岩	上面くぼみあり	断面台形状	底面	実測図 PL53

表 13 II 区近世の溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模				断面	覆土	出土遺物	備考
				長さ (m)	上幅 (m)	下幅 (m)	深さ (cm)				
6	M5d3-M4j8	N-50°-W	直線状	(32.5)	0.2-1.3	0.1-0.3	22-50	U字状	自然	土師器片・須恵器片・磁器片・土師器片・縄文土器片・土師器片	SI41→本跡
16	F5c7-15c6	N-100°-E N-175°-W	直線状 弧状	(110.0)	0.2-1.2	0.1-0.7	10-28	U字状	自然	土師器片・須恵器片・磁器片・土師器片・縄文土器片・土師器片	SI91-66→本跡→SK10-137・SI08・PI2 第1号堀跡・SI06・PI2 第1号堀跡・SI06・PI2
18	H5g7-15c6	N-170°-W	直線状	35.0	0.3-0.8	0.1-0.4	10-24	U字状	人為	陶器片・土師器片	SI22→本跡
19A	15c6-15f8	N-77°-E	弧状	(10.0)	0.8-1.1	0.3-0.5	40-50	U字状	人為	磁器片・土師器片	本跡→旧堀跡
19B	15c6-15f8	N-85°-E	弧状	(8.8)	0.5-0.7	0.1-0.2	22-40	U字状	人為	磁器片・土師器片	本跡→旧堀跡
19C	15c6-15f8	N-95°-E	弧状	(9.2)	1.6-2.0	0.2-0.4	35-50	U字状	人為	磁器片・土師器片	本跡→旧堀跡
21	15f7-15h7	N-5°-E N-25°-W	直線状	(11.2)	0.6-1.0	0.3-0.7	10-30	U字状	人為	土師器片	SI74→本跡→旧堀跡
22A	15c6-15d9	N-80°-E N-86°-E	直線状 直線状	10.0	0.6-2.0	0.4-0.8	40-70	U字状	人為	磁器片・土師器片・縄文土器片・土師器片	第1号石堀跡・本跡→旧堀跡
22B	15c6-15d9	N-40°-E N-86°-E	直線状 直線状	10.0	1.3-2.0	0.4-0.8	40-70	U字状	人為	磁器片・土師器片・縄文土器片・土師器片	本跡→SI22A→旧堀跡

4 その他の遺構と遺物

時期が明確でない溝跡7条、土坑117基、柱穴列跡2か所、ビット群4か所、旧河道路1条、旧堤防跡2か所が確認された。以下、遺構と遺物について記述する。なお、第12号溝跡の平面図は全体図に掲載する。

(1) 溝跡

第7号溝跡 (第222図)

位置 調査II B区中央部のL4 b8区・L4 c8区で、標高17.7mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 L4 b8区のトレンチ調査を行った南側に確認されており、南方向(N-180°)へ直線の延長、L4 c8区で立ち上がっている。確認された長さは58mで、上幅0.6-0.9m、下幅0.2-0.3m、深さ17-22cmである。底面は浅いU字状であるが、南部にはビット状の掘り込みが確認されている。壁は緩やかに立ち上がっている。

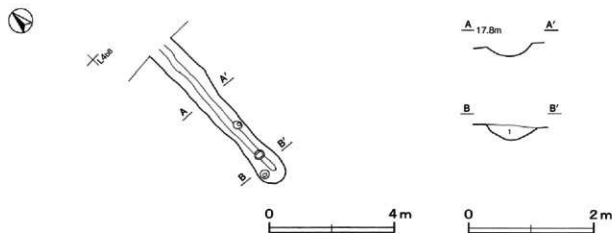
覆土 単一層で、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色 青灰色粘土・鉄分少量

遺物出土状況 土師器片4点(甕)、須恵器片1点(甕)、灰軸陶器片1点(瓶)が出土しているが、流れ込んだものと考えられる。いずれも細片であり図示できない。

所見 時期は、出土土器がなく不明である。



第222図 第7号溝跡実測図

第10号溝跡 (第223図)

位置 調査ⅡB区南部のM4 d7区・M4 d8区で、標高17.9mの平坦な低地上に位置している。

重複関係 第37号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 M4 d7区から北東方向(N-60°-E)へ1mほど延び、さらに東方向(N-100°-E)へ直線的に延び、M4 d8区で立ち上がっている。確認された長さは7.7mで、上幅0.5～0.9m、下幅0.3～0.6m、深さ12～22cmである。底面は浅いU字状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

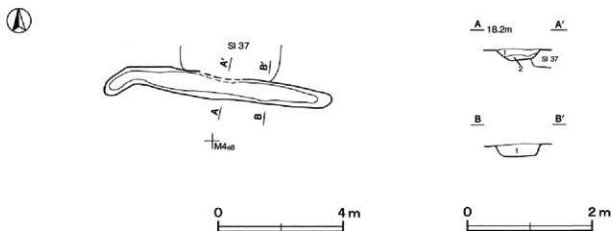
覆土 2層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒 褐色 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子微量 2 黒 褐色 青灰色粘土粒子・鉄分少量

遺物出土状況 土師器片9点(壺)が出土しているが、流れ込んだものと考えられる。いずれも細片であり図示できない。

所見 時期は、出土土器がなく不明である。



第223図 第10号溝跡実測図

第11号溝跡 (第224図)

位置 調査ⅡB区北部のJ 4 c0～J 5 c3区で、標高17.3mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 東西側とも調査区域外に延びているため、全体を確認することができなかった。J 4 c0区から南東方向(N-113°-E)へ直線的に延びている。確認された長さは14.0mで、上幅0.5～0.8m、下幅0.2～0.4m、深さ50～55cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立に立ち上がった後外傾して立ち上がっている。

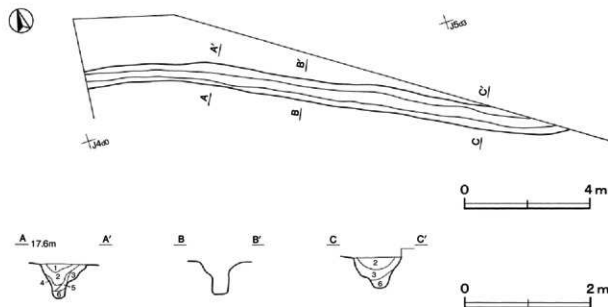
覆土 6層に分けられる。各層に粘土ブロックを含み、不自然な堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-------------------------------|-------------------------|
| 1 暗オリーブ色 白色粘土ブロック微量 | 4 暗オリーブ色 白色粘土ブロック少量 |
| 2 暗オリーブ色 白色粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 灰黄褐色 白色粘土ブロック中量 |
| 3 暗オリーブ色 白色粘土ブロック微量 | 6 黒褐色 白色粘土ブロック少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片1点(甕)、陶器片1点(碗)、磁器片1点(高台付碗)が出土している。いずれも細片であり図示できない。

所見 時期は、出土土器が遺構に伴うものか明確ではなく、また細片のため不明である。



第224図 第11号溝跡実測図

第12号溝跡 (第225図)

位置 調査ⅡB区北部のK 5 b4～K 5 i4区で、標高17.4mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 東側が調査区域外に延びているため、全体を確認することができなかった。K 5 b4 区から南方向(N-170°-E)へ直線的に延び、K 5 i4区で立ち上がっている。確認された長さは28.7mで、上幅0.3～0.9m、下幅0.2～0.8m、深さ36～60cmである。底面は浅いU字状で、西壁は外傾して立ち上がっている。

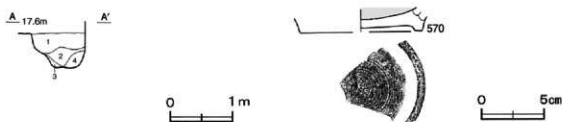
覆土 4層に分けられる。不自然な堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | | | |
|---|--------|-------------|---|-----|-------------|
| 1 | にがい黄褐色 | 焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 | 暗褐色 | 青灰色粘土ブロック少量 |
| 2 | 暗褐色 | 青灰色粘土ブロック中量 | 4 | 暗褐色 | 青灰色粘土粒子中量 |

遺物出土状況 縄文土器片1点(深鉢), 須恵器片1点(甕), 灰軸陶器片1点(瓶), 磁器片2点(碗), 鉄製品1点(鎌)が出土している。570は覆土中から出土している。

所見 時期は, 出土土器が細片で混在しており不明である。



第225図 第12号溝跡・出土遺物実測図

第12号溝跡出土遺物観察表(第225図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・施釉	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
570	陶器	瓶	-	[1.8]	[0.8]	精良・灰釉	灰白・浅黄	良好	底部内面灰釉付着 顔り出し高台	覆土中	10%

第13号溝跡(第226図)

位置 調査ⅡA区北部のE5g9~E5j9区・E5j9~E6j1区で, 標高17.2~17.4mの南へ緩やかに傾斜する斜面部に位置している。

重複関係 第1号旧河道跡の埋土を掘り込んでいる。

規模と形状 E6j1区で調査区域外に伸びているため, 全体を確認することはできなかった。E5g9区から西方向(N-110°-W)へ2.4m伸び, 南東方向(N-165°-E)に8.6m, さらに東方向(N-90°-E)へ7m逆「コ」の字状を呈して伸びている。確認された長さは18.0mで, 上幅0.3~1.0m, 下幅0.1~0.6m, 深さ10~84cmである。特にE5h9で掘り込みが深くなり, 底面が南側へ傾斜している。底面は浅いU字状で, 壁は外傾して立ち上がっている。

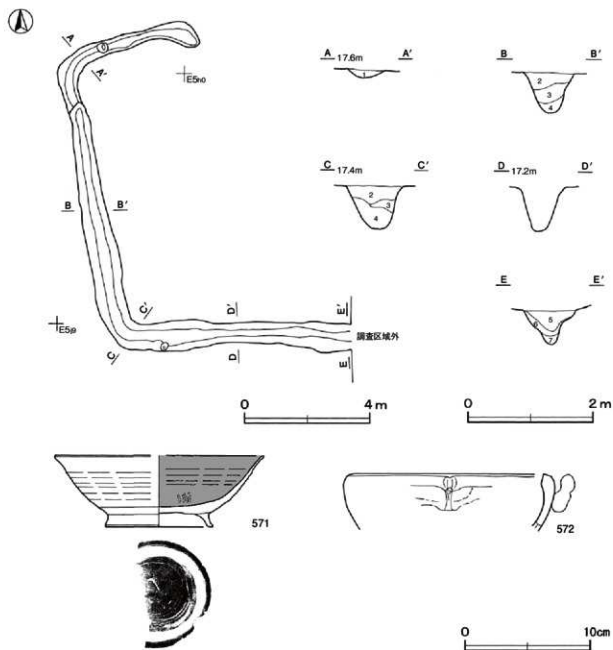
覆土 7層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|----------------|---|-----|---------------------------|
| 1 | 黒褐色 | 黄褐色粘土粒子少量 | 5 | 暗褐色 | 砂粒中量, 焼土粒子・炭化粒子・黄褐色粘土粒子微量 |
| 2 | 黒褐色 | 焼土粒子・黄褐色粘土粒子微量 | 6 | 暗褐色 | 砂粒多量, 黄褐色粘土粒子微量 |
| 3 | 黒褐色 | 炭化粒子・黄褐色粘土粒子微量 | 7 | 黒褐色 | 砂粒中量, 黄褐色粘土粒子微量 |
| 4 | 暗褐色 | 焼土粒子・黄褐色粘土粒子微量 | | | |

遺物出土状況 縄文土器片1点(深鉢), 土師器片49点(椀類17, 甕類32), 須恵器片6点(甕), 陶器片3点(碗1, 鉢2), 磁器片1点(碗), 鉄製品1点(釘)が出土している。571・572は覆土中から出土しているが, 流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は, 第1号旧河道跡を掘り込んでいるが, 遺構に伴う出土土器がなく不明である。



第226図 第13号溝跡・出土遺物実測図

第13号溝跡出土遺物観察表 (第226図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
571	土師器	高台付椀	[16.4]	5.7	8.2	長石・石英・赤色粒子	灰黄褐	普通	ロケロナデ、内面へラ磨き、へら切り後高台磨り付け	覆土中	50%
572	縄文土器	鉢	[16.2]	(4.5)	-	赤褐色・長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	口辺部に「V」字状の隆帯貼付	覆土中	20%

第14号溝跡 (第227図)

位置 調査ⅡA区北部のE 5 g7～E 5 B9区で、標高17.6～17.7mの南へ緩やかに傾斜する斜面部に位置している。

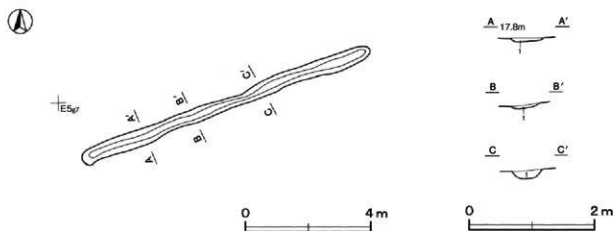
規模と形状 E 5 g7区から北東方向（ $N-70^{\circ}-E$ ）へ直線的に延び、E 5 f9区で立ち上がっている。確認された長さは9.8mで、上幅0.3～0.6m、下幅0.1～0.3m、深さ4～16cmである。底面は浅いU字状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 単一層で、層厚が薄く堆積状況は不明である。

土層解説

1 黒褐色 炭化粒子・黄褐色粘土粒子微量

所見 時期は、出土土器がなく不明である。



第227図 第14号溝跡実測図

第15号溝跡（第228・229図）

位置 調査ⅡA区北部のE 5 d9～E 5 g0区で、標高17.6～17.8mの南へ緩やかに傾斜する斜面部に位置している。

重複関係 第1号周溝状遺構を掘り込んでいる。

規模と形状 E 5 d9区から南東方向（ $N-170^{\circ}-E$ ）へ直線的に延び、E 5 g0区で掘り込みが浅くなり立ち上がっている。確認された長さは11.5mで、上幅0.3～0.6m、下幅0.1～0.4m、深さ10～36cmである。底面は浅いU字状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 単一層で、層厚が薄く堆積状況は不明である。



第228図 第15号溝跡実測図

土層解説

1 褐色 黄褐色粘土粒子中量

遺物出土状況 土師器片13点(椀類6, 甕類7), 土師質土器片1点(搦鉢), 磁器片1点(碗)が出土しているが, 流れ込んだものと考えられる。TP22は覆土中から出土している。

所見 時期は, 出土土器がなく不明である。



第229図 第15号溝跡出土遺物実測図

第15号溝跡出土遺物観察表(第229図)

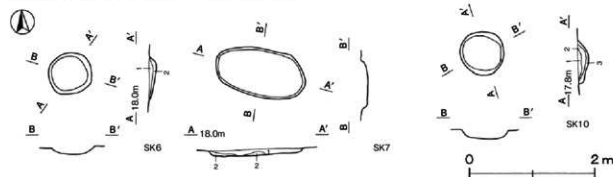
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP22	土師質	搦鉢	-	(4.2)	-	長石・石英	に灰赤褐色	普通	1単位7条以上の摺り目	覆土中	

表14 II区その他の溝跡一覧表

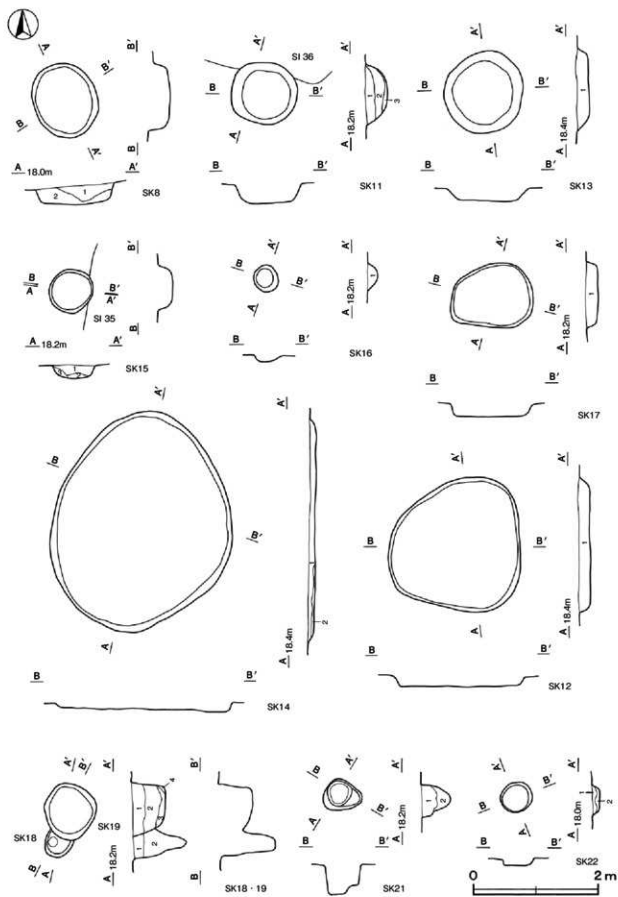
番号	位置	方向	形状	規模			断面	覆土	出土遺物	備考	
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)					深さ(cm)
7	L 4b8・L 4c8	N-180°	直線状	(5.8)	0.6~0.9	0.2~0.3	17~22	U字状	自然	土師器片・須恵器片・灰釉陶器片	新旧関係(旧→新)
10	M 4d7・M 4d8	N-60°-E	直線状	(7.7)	0.5~0.9	0.3~0.6	12~22	U字状	自然	土師器片	SK37→本跡
11	J 4c0-J 5c3	N-113°-E	直線状	(14.0)	0.5~0.8	0.2~0.4	50~55	U字状	人為	土師器片・陶器片・磁器片	
12	K 5b4-K 5d4	N-170°-E	直線状	(28.7)	0.3~0.9	0.2~0.8	36~60	U字状	人為	土師器片・須恵器片・灰釉陶器片・磁器片	
13	E 5g9-E 5j9 E 5j9-E 6j1	N-110°-W N-90°-E	溝字状	(18.0)	0.3~1.0	0.1~0.6	10~84	U字状	自然	縄文土器片・土師器片・須恵器片・陶器片・磁器片	第1号旧河道跡→本跡
14	E 5g7-E 5g9	N-70°-E	直線状	9.8	0.3~0.6	0.1~0.3	4~16	U字状	不明	-	
15	E 5d9-E 5g9	N-170°-E	直線状	11.5	0.3~0.6	0.1~0.4	10~36	U字状	不明	土師器片・土師質土器片・磁器片	第1号旧溝跡→本跡

(2) 土坑

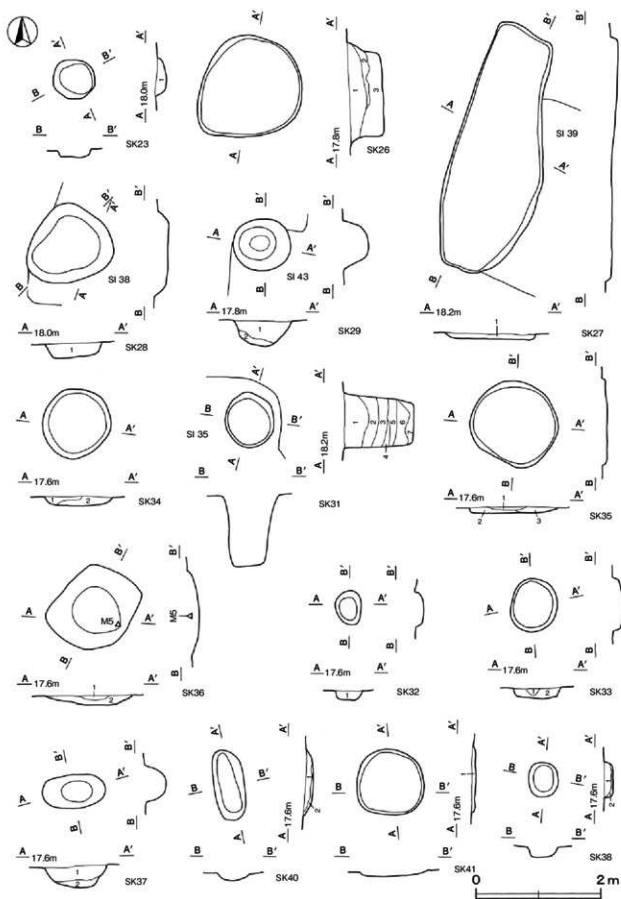
今回の調査で時期及び性格が明確でない土坑117基が確認された。以下, それらの土坑について, 実測図, 土層解説及び一覧表を掲載する。なお, 第87~90・120~126・138・139号土坑は, 第1号旧河道跡の底面に掘り込んでいるが, その時期については不明である。



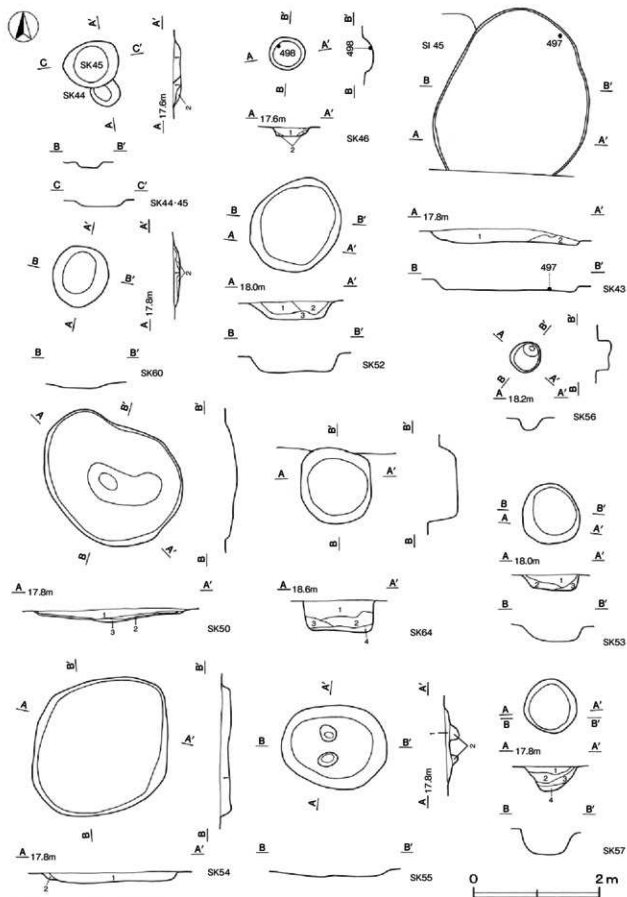
第230図 その他の土坑実測図(1)



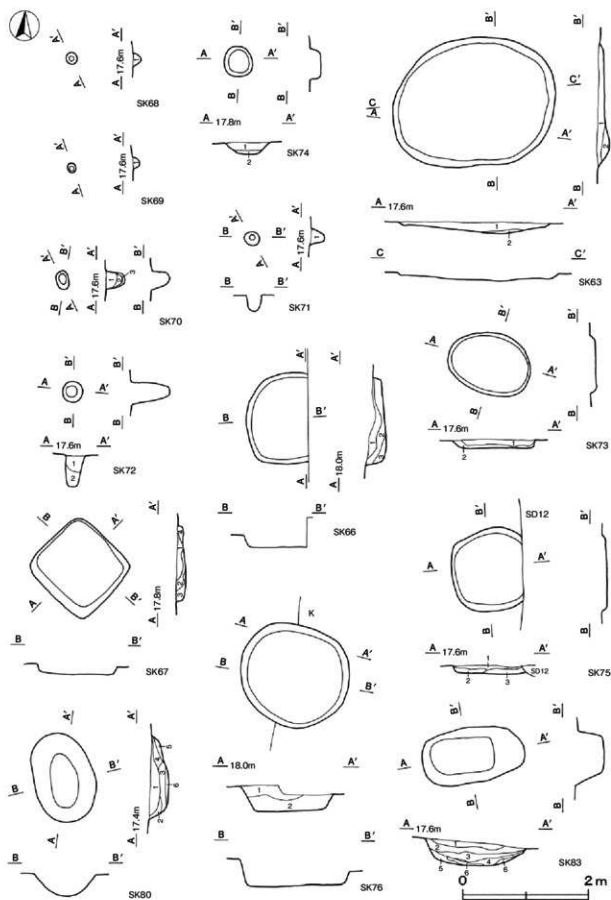
第231図 その他の土坑実測図(2)



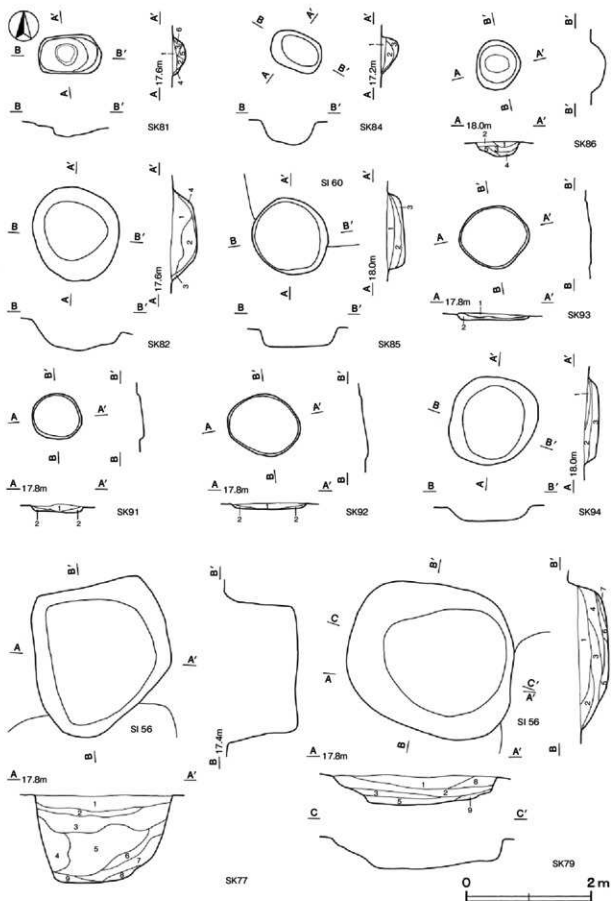
第232図 その他の土坑実測図(3)



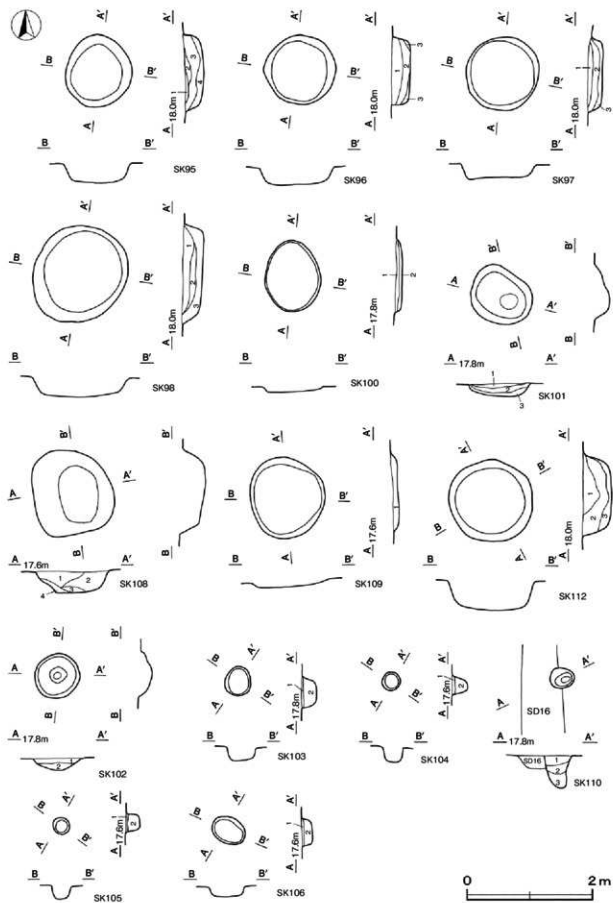
第233図 その他の土坑実測図 (4)



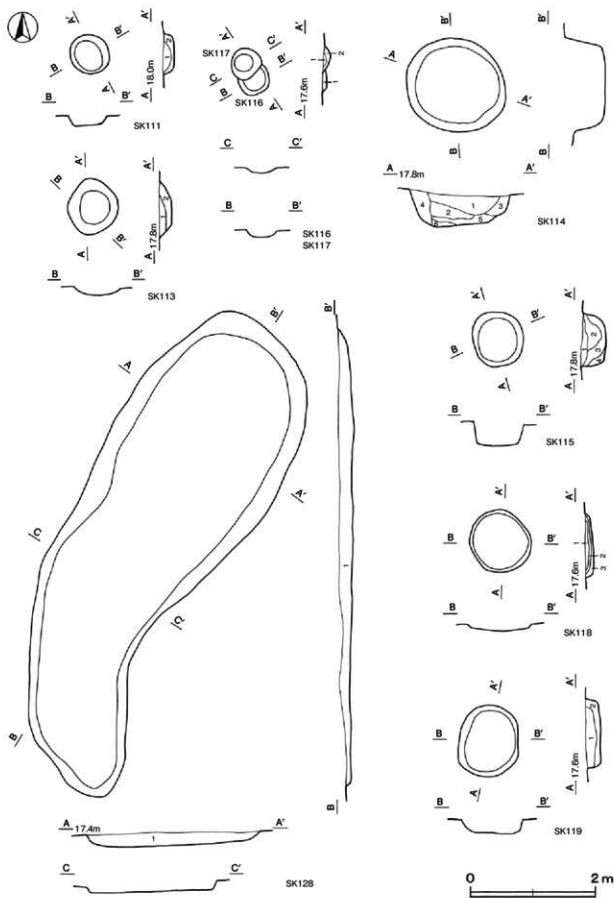
第234図 その他の土坑実測図(5)



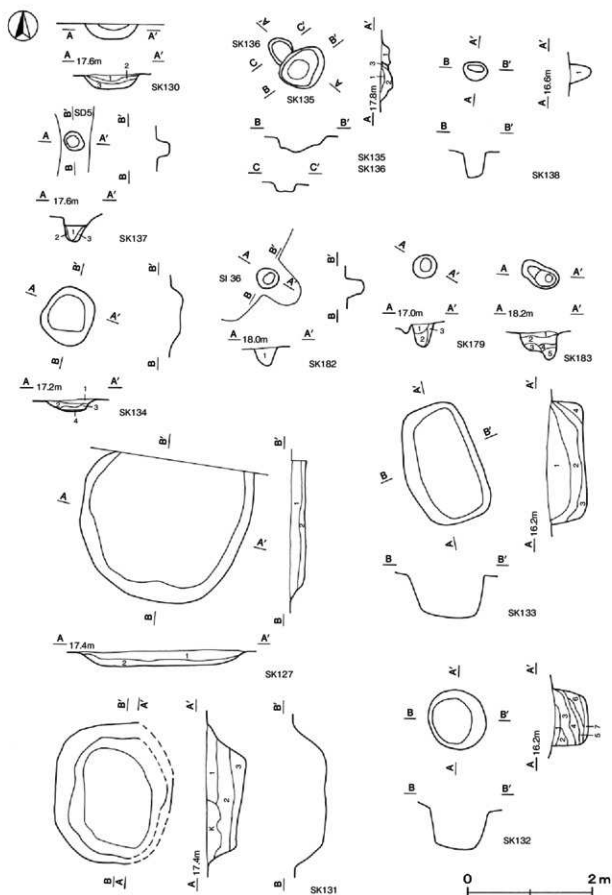
第235図 その他の土坑実測図(6)



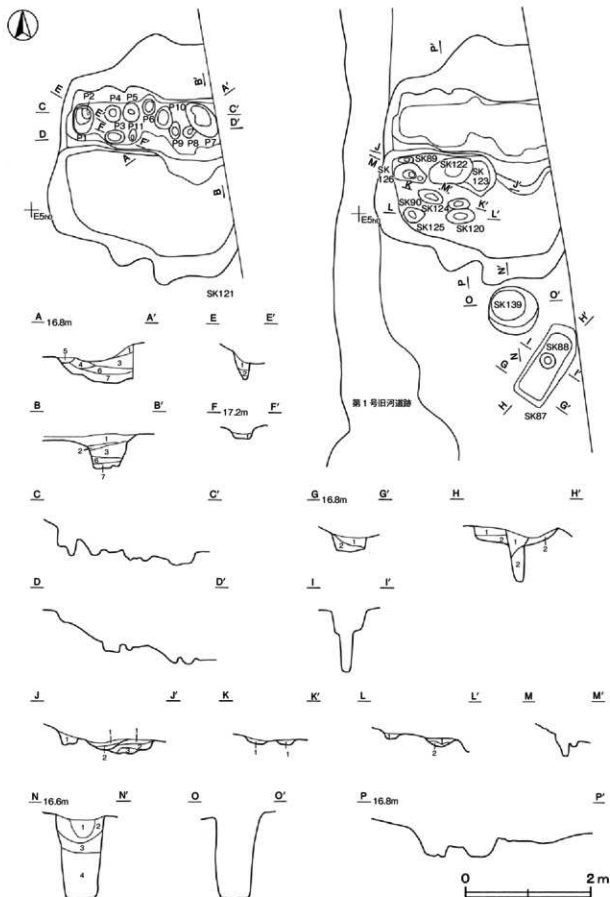
第236図 その他の土坑実測図7)



第237図 その他の土坑実測図(8)



第238図 その他の土坑実測図9)



第239図 その他の土坑実測図(10)

第6号土壌層解説

- 1 にぶい黄褐色 青灰色粘土ブロック少量
- 2 褐色 青灰色粘土ブロック中量

第7号土壌層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子・白色粘土粒子微量
- 2 灰黄褐色 鉄分少量、白色粘土粒子微量

第8号土壌層解説

- 1 黒褐色 黄褐色粘土ブロック中量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 黄褐色粘土ブロック少量

第10号土壌層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・白色粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、白色粘土粒子微量
- 3 黒褐色 白色粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

第11号土壌層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子・白色粘土粒子少量
- 2 黒褐色 白色粘土ブロック少量、炭化粒子微量
- 3 褐色 白色粘土ブロック中量

第12号土壌層解説

- 1 灰黄褐色 白色粘土粒子・鉄分微量

第13号土壌層解説

- 1 黒褐色 白色粘土粒子・鉄分少量

第14号土壌層解説

- 1 灰黄褐色 白色粘土粒子少量、鉄分微量
- 2 褐色 白色粘土ブロック中量、鉄分微量

第15号土壌層解説

- 1 暗褐色 白色粘土粒子・鉄分微量
- 2 暗褐色 白色粘土ブロック微量
- 3 灰黄褐色 白色粘土ブロック・焼土粒子微量

第16号土壌層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子・白色粘土粒子微量

第17号土壌層解説

- 1 褐色 白色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

第18号土壌層解説

- 1 にぶい黄褐色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 白色粘土粒子少量

第19号土壌層解説

- 1 褐色 白色粘土粒子微量
- 2 黒褐色 白色粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黄褐色 白色粘土ブロック微量
- 4 暗褐色 白色粘土ブロック少量

第21号土壌層解説

- 1 黒褐色 鉄分中量、炭化物少量、白色粘土ブロック微量
- 2 暗褐色 白色粘土粒子・鉄分中量

第22号土壌層解説

- 1 褐色 白色粘土ブロック多量、焼土粒子微量
- 2 褐色 白色粘土ブロック・鉄分中量、焼土粒子・炭化粒子微量

第23号土壌層解説

- 1 褐色 白色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

第26号土壌層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック・炭化物少量、青灰色粘土粒子・赤褐色粘土粒子微量
- 2 暗褐色 炭化物・焼土粒子・青灰色粘土粒子・赤褐色粘土粒子微量
- 3 灰褐色 焼土粒子・炭化粒子・青灰色粘土粒子・赤褐色粘土粒子微量

第27号土壌層解説

- 1 褐色 赤褐色粘土粒子中量、青灰色粘土粒子少量

第28号土壌層解説

- 1 黒褐色 青灰色粘土粒子・赤褐色粘土粒子中量

第29号土壌層解説

- 1 褐色 炭化粒子・白色粘土粒子微量
- 2 暗褐色 白色粘土粒子微量

第31号土壌層解説

- 1 灰褐色 焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量
- 2 暗褐色 白色粘土粒子微量
- 3 暗褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子・白色粘土粒子微量
- 4 黒褐色 白色粘土粒子微量
- 5 黒褐色 白色粘土粒子少量
- 6 暗褐色 白色粘土粒子・鉄分微量
- 7 にぶい黄褐色 黒色粘土粒子微量

第32号土壌層解説

- 1 黒褐色 青灰色粘土ブロック・炭化粒子微量

第33号土壌層解説

- 1 黒褐色 白色粘土粒子少量
- 2 黒褐色 白色粘土ブロック少量、焼土粒子微量

第34号土壌層解説

- 1 黒褐色 白色粘土粒子・鉄分少量
- 2 黒褐色 白色粘土ブロック・鉄分微量

第35号土壌層解説

- 1 暗褐色 赤褐色粘土ブロック中量
- 2 暗褐色 赤褐色粘土粒子中量
- 3 褐色 赤褐色粘土粒子少量

第36号土壌層解説

- 1 灰黄褐色 赤褐色粘土ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 赤褐色粘土粒子微量

第37号土壌層解説

- 1 褐色 赤褐色粘土粒子中量
- 2 暗褐色 赤褐色粘土粒子中量、白色粘土粒子微量

第38号土壌層解説

- 1 暗褐色 赤褐色粘土粒子中量、白色粘土粒子微量
- 2 褐色 白色粘土粒子少量、赤褐色粘土粒子微量

第40号土壌層解説

- 1 暗褐色 青灰色粘土ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 青灰色粘土粒子微量

第41号土壌層解説

- 1 暗褐色 赤褐色粘土粒子微量

第43号土壌層解説

- 1 暗褐色 青灰色粘土ブロック少量
- 2 暗褐色 青灰色粘土粒子少量

第44号土壌層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック中量、白色粘土粒子微量
- 2 褐色 白色粘土ブロック少量、焼土粒子微量

第45号土壌層解説

- 1 暗褐色 赤褐色粘土粒子中量、白色粘土ブロック少量

第46号土壌層解説

- 1 黒褐色 青灰色粘土ブロック少量
- 2 暗褐色 青灰色粘土粒子少量

第50号土壌層解説

- 1 にぶい黄褐色 青灰色粘土ブロック・焼土粒子微量
- 2 褐色 黄褐色粘土粒子少量
- 3 にぶい黄褐色 青灰色粘土ブロック少量

第52号土壌層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック・白色粘土ブロック微量
- 2 黒褐色 白色粘土ブロック少量、黄褐色粘土ブロック微量
- 3 黒褐色 白色粘土ブロック・黄褐色粘土ブロック微量

第53号土壌層解説

- 1 暗褐色 白色粘土粒子・黄褐色粘土粒子・鉄分微量
- 2 暗褐色 鉄分少量、白色粘土ブロック微量
- 3 にぶい黄褐色 白色粘土粒子・黄褐色粘土粒子・鉄分微量

第54号土壌層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・青灰色粘土粒子微量
- 2 灰黄褐色 青灰色粘土粒子中量

第55号土壌層解説

- 1 黒褐色 青灰色粘土ブロック微量
- 2 黒褐色 青灰色粘土粒子微量

第57号土壌層解説

- 1 褐色 焼土粒子少量、炭化粒子・青灰色粘土粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 炭化物・青灰色粘土粒子少量、焼土粒子微量
- 3 灰黄褐色 青灰色粘土粒子中量
- 4 暗褐色 青灰色粘土ブロック少量

第60号土壌層解説

- 1 にぶい黄褐色 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 青灰色粘土粒子中量

第63号土壌層解説

- 1 褐色 青灰色粘土ブロック中量
- 2 暗黄褐色 青灰色粘土ブロック少量

第64号土壌層解説

- 1 暗褐色 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 炭化粒子・青灰色粘土粒子微量
- 3 黒褐色 青灰色粘土粒子少量
- 4 黒褐色 青灰色粘土粒子微量

第66号土壌層解説

- 1 暗灰色 青灰色粘土ブロック少量
- 2 オリーブ黄色 青灰色粘土ブロック中量
- 3 オリーブ黄色 青灰色粘土粒子中量

第67号土壌層解説

- 1 褐色 砂粒少量
- 2 暗灰色 青灰色粘土粒子中量、鉄分少量
- 3 灰黄褐色 砂粒少量、鉄分微量
- 4 黄褐色 青灰色粘土ブロック中量、鉄分少量

第68号土壌層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量

第69号土壌層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量

第70号土壌層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 白色粘土粒子少量
- 3 暗褐色 白色粘土粒子微量

第71号土壌層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量

第72号土壌層解説

- 1 黒褐色 青灰色粘土ブロック・砂粒少量
- 2 暗褐色 青灰色粘土粒子少量、炭化粒子微量

第73号土壌層解説

- 1 褐色 白色粘土ブロック微量
- 2 にぶい黄褐色 白色粘土ブロック中量

第74号土壌層解説

- 1 灰黄褐色 白色粘土ブロック・焼土粒子微量
- 2 灰黄褐色 青灰色粘土粒子中量、白色粘土ブロック微量

第75号土壌層解説

- 1 にぶい黄褐色 白色粘土粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 白色粘土粒子中量
- 3 褐色 白色粘土粒子微量

第76号土壌層解説

- 1 黒褐色 青灰色粘土粒子・鉄分中量
- 2 暗褐色 青灰色粘土ブロック中量、炭化粒子微量

第77号土壌層解説

- 1 にぶい黄褐色 白色粘土ブロック少量、焼土粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子・白色粘土粒子微量
- 3 黒褐色 青灰色粘土粒子中量、焼土粒子微量
- 4 暗褐色 青灰色粘土粒子中量、白色粘土ブロック微量
- 5 黄褐色 青灰色粘土ブロック中量
- 6 暗褐色 白色粘土ブロック微量
- 7 灰黄褐色 白色粘土ブロック中量
- 8 暗褐色 黄褐色粘土粒子少量
- 9 褐色 黄褐色粘土粒子中量

第79号土壌層解説

- 1 灰黄褐色 焼土ブロック・白色粘土粒子微量
- 2 灰黄褐色 白色粘土粒子少量、焼土粒子微量
- 3 灰黄褐色 焼土粒子・白色粘土粒子少量
- 4 暗褐色 焼土粒子・白色粘土粒子微量
- 5 黒褐色 白色粘土粒子少量
- 6 暗褐色 白色粘土ブロック微量
- 7 暗褐色 白色粘土ブロック少量
- 8 暗褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 9 褐色 白色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

第80号土壌層解説

- 1 暗褐色 炭化物中量
- 2 にぶい黄褐色 砂粒中量、青灰色粘土粒子少量
- 3 暗褐色 青灰色粘土粒子少量、砂粒微量
- 4 暗褐色 青灰色粘土ブロック少量、砂粒微量
- 5 灰黄褐色 青灰色粘土ブロック・砂粒中量
- 6 にぶい黄褐色 青灰色粘土粒子・砂粒少量

第81号土壌層解説

- 1 暗褐色 砂粒少量
- 2 にぶい黄褐色 青灰色粘土ブロック・砂粒中量
- 3 にぶい黄褐色 砂粒中量、青灰色粘土ブロック少量
- 4 灰黄褐色 青灰色粘土ブロック少量、砂粒少量
- 5 灰黄褐色 青灰色粘土ブロック少量
- 6 灰黄褐色 青灰色粘土ブロック中量

第82号土壌層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子・砂粒微量
- 2 暗褐色 青灰色粘土粒子少量、砂粒微量
- 3 暗褐色 青灰色粘土粒子・砂粒少量
- 4 暗褐色 砂粒少量、青灰色粘土粒子微量

第83号土壌層解説

- 1 暗褐色 青灰色粘土粒子・砂粒少量
- 2 暗褐色 砂粒少量、青灰色粘土ブロック微量
- 3 暗褐色 青灰色粘土ブロック・砂粒微量
- 4 にぶい黄褐色 青灰色粘土ブロック中量、砂粒微量
- 5 黒褐色 青灰色粘土ブロック少量、砂粒微量
- 6 にぶい黄褐色 青灰色粘土粒子少量、砂粒微量

第84号土壌土層解説

- 1 暗 褐色 青灰色粘土粒子少量、砂粒微量
- 2 にぶい黄褐色 砂粒中量、青灰色粘土粒子少量
- 3 黒 褐色 青灰色粘土粒子少量、炭化粒子・砂粒微量

第85号土壌土層解説

- 1 褐 色 砂粒中量、焼土粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 白色粘土ブロック少量、焼土粒子微量
- 3 にぶい黄褐色 白色粘土粒子少量

第86号土壌土層解説

- 1 灰 黄 褐色 砂粒中量、白色粘土粒子少量
- 2 灰 黄 褐色 砂粒中量、白色粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 灰 黄 褐色 白色粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子微量
- 4 灰 黄 褐色 白色粘土粒子・砂粒少量、炭化物微量
- 5 にぶい黄褐色 白色粘土粒子少量

第87号土壌土層解説

- 1 黒 褐色 白色粘土粒子少量
- 2 暗 褐色 白色粘土ブロック少量

第88号土壌土層解説

- 1 黒 褐色 白色粘土粒子少量
- 2 黒 褐色 白色粘土ブロック少量

第89号土壌土層解説

- 1 にぶい黄褐色 白色粘土粒子・粗砂粒少量

第90号土壌土層解説

- 1 暗 褐色 白色粘土粒子・粗砂粒・鉄分量

第91号土壌土層解説

- 1 灰 黄 褐色 砂粒中量、白色粘土ブロック少量
- 2 にぶい黄褐色 砂粒中量、白色粘土粒子少量

第92号土壌土層解説

- 1 にぶい黄褐色 砂粒中量、白色粘土粒子少量、鉄分量
- 2 にぶい黄褐色 砂粒中量、白色粘土粒子・鉄分量

第93号土壌土層解説

- 1 にぶい黄褐色 砂粒中量、白色粘土粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 砂粒中量、白色粘土粒子少量

第94号土壌土層解説

- 1 暗 褐色 白色粘土ブロック少量
- 2 暗 褐色 白色粘土ブロック中量
- 3 暗 褐色 白色粘土ブロック・青灰色粘土ブロック少量

第95号土壌土層解説

- 1 暗 褐色 白色粘土粒子少量、焼土粒子微量
- 2 暗 褐色 白色粘土ブロック少量、焼土粒子微量
- 3 暗 褐色 白色粘土ブロック・青灰色粘土ブロック少量
- 4 暗 褐色 白色粘土ブロック・青灰色粘土ブロック微量

第96号土壌土層解説

- 1 暗 褐色 白色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗 褐色 白色粘土粒子少量、青灰色粘土ブロック微量
- 3 暗 褐色 白色粘土粒子少量

第97号土壌土層解説

- 1 暗 褐色 白色粘土ブロック少量、焼土粒子微量
- 2 暗 褐色 白色粘土ブロック中量、焼土粒子微量
- 3 暗 褐色 白色粘土ブロック少量

第98号土壌土層解説

- 1 暗 褐色 白色粘土粒子少量、焼土粒子微量
- 2 暗 褐色 白色粘土ブロック少量、焼土粒子微量
- 3 暗 褐色 白色粘土ブロック少量

第100号土壌土層解説

- 1 暗 褐色 砂粒中量、白色粘土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗 褐色 砂粒中量、白色粘土粒子少量

第101号土壌土層解説

- 1 暗 褐色 砂粒中量、炭化粒子少量、白色粘土粒子微量
- 2 暗 褐色 白色粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量
- 3 にぶい黄褐色 砂粒中量、白色粘土粒子少量、炭化粒子微量

第102号土壌土層解説

- 1 褐 色 砂粒中量、白色粘土ブロック微量
- 2 褐色 砂粒中量、白色粘土粒子少量

第103号土壌土層解説

- 1 暗 褐色 砂粒中量、白色粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 砂粒中量、白色粘土粒子少量

第104号土壌土層解説

- 1 暗 褐色 砂粒中量、白色粘土ブロック・鉄分量
- 2 暗 褐色 砂粒中量、白色粘土粒子・鉄分量

第105号土壌土層解説

- 1 黒 褐色 砂粒中量、白色粘土粒子少量
- 2 灰 黄 褐色 砂粒中量、白色粘土粒子・鉄分量

第106号土壌土層解説

- 1 黒 褐色 砂粒中量、白色粘土粒子・鉄分量
- 2 にぶい黄褐色 砂粒中量、鉄分量、白色粘土粒子微量

第108号土壌土層解説

- 1 暗 褐色 砂粒中量、炭化粒子・白色粘土粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 砂粒中量、白色粘土粒子微量
- 3 灰 黄 褐色 砂粒中量、白色粘土粒子少量
- 4 にぶい黄褐色 砂粒少量、白色粘土粒子微量

第109号土壌土層解説

- 1 暗 褐色 焼土粒子・白色粘土粒子少量、炭化粒子微量

第110号土壌土層解説

- 1 にぶい黄褐色 焼土粒子・青灰色粘土粒子少量
- 2 暗 褐色 青灰色粘土粒子中量、焼土粒子少量
- 3 暗 褐色 青灰色粘土粒子中量

第111号土壌土層解説

- 1 黒 褐色 白色粘土粒子少量、炭化物・焼土粒子微量
- 2 黒 褐色 白色粘土ブロック少量、炭化粒子微量

第112号土壌土層解説

- 1 暗 褐色 白色粘土ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒 褐色 白色粘土ブロック中量、炭化粒子微量
- 3 黒 褐色 白色粘土粒子少量

第113号土壌土層解説

- 1 にぶい黄褐色 炭化粒子・白色粘土粒子少量、焼土粒子微量
- 2 暗 褐色 炭化粒子中量、白色粘土粒子少量

第114号土壌土層解説

- 1 黒 褐色 細砂粒少量、原色粘土ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒 褐色 青灰色粘土ブロック・黒色粘土ブロック微量
- 3 暗 褐色 黒色粘土ブロック少量、鉄分量
- 4 暗 褐色 黒色粘土粒子少量、鉄分量
- 5 灰 黄 褐色 青灰色粘土粒子中量、鉄分量
- 6 にぶい黄褐色 青灰色粘土粒子・鉄分量

第115号土壌土層解説

- 1 灰 黄 褐色 細砂粒中量、白色粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 灰 黄 褐色 細砂粒中量、白色粘土粒子少量
- 3 灰 黄 褐色 細砂粒中量、白色粘土粒子・焼土粒子微量
- 4 灰 黄 褐色 細砂粒中量、白色粘土ブロック少量

第116号土壌土層解説

- 1 暗 褐色 砂粒中量、白色粘土ブロック微量

第117号土壌土層解説

- 1 にぶい黄褐色 砂粒多量、白色粘土粒子微量
- 2 灰 黄 褐色 白色粘土ブロック中量

第118号土壌層解説

- 1 灰黄褐色 青灰色粘土粒子少量、焼土粒子微量
- 2 灰黄褐色 青灰色粘土ブロック少量、焼土粒子微量
- 3 褐灰色 青灰色粘土粒子中量

第119号土壌層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック・青灰色粘土ブロック少量
- 2 暗褐色 青灰色粘土粒子少量、炭化物・焼土粒子微量

第120号土壌層解説

- 1 暗褐色 砂粒少量、黄褐色粘土ブロック微量
- 2 暗褐色 黄褐色粘土ブロック少量、鉄分微量

第121号土壌層解説

- 1 暗褐色 粗砂粒中量、黄褐色粘土ブロック少量
- 2 褐色 鉄分少量、黄褐色粘土ブロック微量
- 3 黒褐色 粗砂粒多量、黄褐色粘土ブロック微量
- 4 黒褐色 粗砂粒中量、黄褐色粘土ブロック少量
- 5 灰黄褐色 粗砂粒中量、黄褐色粘土ブロック・鉄分微量
- 6 黒褐色 粗砂粒多量、鉄分少量、黄褐色粘土粒子微量
- 7 褐灰色 粗砂粒多量、黄褐色粘土ブロック・鉄分少量

第121号土壌P1～P4土層解説

- 1 灰黄褐色 粗砂粒中量、黄褐色粘土ブロック少量、鉄分微量
- 2 灰黄褐色 粗砂粒中量、黄褐色粘土ブロック少量
- 3 灰黄褐色 黄褐色粘土ブロック微量
- 4 灰黄褐色 粗砂粒中量、黄褐色粘土粒子少量
- 5 暗褐色 粗砂粒多量、黄褐色粘土ブロック微量
- 6 黒褐色 粗砂粒中量、鉄分少量、黄褐色粘土粒子微量
- 7 灰黄褐色 粗砂粒多量、黄褐色粘土粒子・鉄分微量

第122号土壌層解説

- 1 黒褐色 黄褐色粘土ブロック少量、細砂粒・鉄分微量
- 2 黒褐色 黄褐色粘土粒子中量、粗砂粒・鉄分微量

第123号土壌層解説

- 1 暗褐色 黄褐色粘土ブロック・黒色粘土粒子少量、鉄分微量
- 2 暗褐色 黄褐色粘土ブロック少量、黒色粘土粒子・鉄分微量
- 3 暗褐色 黄褐色粘土粒子中量、黒色粘土粒子少量、鉄分微量

第124号土壌層解説

- 1 褐色 黄褐色粘土ブロック・粗砂粒少量

第125号土壌層解説

- 1 棕褐色 黄褐色粘土ブロック少量、黒色粗砂粒微量

第127号土壌層解説

- 1 濃い黄褐色 砂粒中量、炭化粒子微量
- 2 濃い黄褐色 砂粒多量、白色粘土粒子少量

第128号土壌層解説

- 1 灰黄褐色 砂粒多量、炭化粒子微量

第130号土壌層解説

- 1 灰黄褐色 白色粘土ブロック・砂粒少量、炭化粒子微量
- 2 褐灰色 白色粘土ブロック中量、白色粘土粒子少量
- 3 黒褐色 炭化粒子中量、白色粘土ブロック少量

第131号土壌層解説

- 1 濃い黄褐色 白色粘土ブロック中量
- 2 灰黄褐色 白色粘土粒子多量、焼土粒子微量
- 3 黒褐色 白色粘土ブロック少量

第132号土壌層解説

- 1 灰黄褐色 青灰色粘土粒子少量、炭化物微量
- 2 灰黄褐色 青灰色粘土ブロック中量、炭化粒子微量
- 3 灰黄褐色 青灰色粘土ブロック中量、炭化粒子微量
- 4 灰黄褐色 青灰色粘土粒子中量、炭化粒子微量
- 5 灰黄褐色 青灰色粘土粒子少量
- 6 灰黄褐色 青灰色粘土粒子微量
- 7 灰黄褐色 青灰色粘土ブロック微量

第133号土壌層解説

- 1 黒褐色 青灰色粘土粒子少量、炭化物・鉄分微量
- 2 黒褐色 青灰色粘土粒子少量
- 3 黒褐色 青灰色粘土ブロック少量、鉄分微量
- 4 褐色 青灰色粘土粒子中量

第134号土壌層解説

- 1 暗褐色 白色粘土粒子少量、炭化物・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 白色粘土ブロック少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 白色粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 4 灰黄褐色 白色粘土粒子少量

第135号土壌層解説

- 1 黒褐色 青灰色粘土ブロック・炭化物微量
- 2 灰黄褐色 青灰色粘土ブロック少量、鉄分微量
- 3 灰黄褐色 鉄分少量、炭化粒子微量

第136号土壌層解説

- 1 灰黄褐色 鉄分少量、炭化粒子微量

第137号土壌層解説

- 1 暗褐色 細砂粒中量、白色粘土ブロック・鉄分微量
- 2 暗褐色 鉄分中量、青灰色粘土ブロック・細砂粒少量
- 3 暗褐色 細砂粒中量、鉄分少量、白色粘土ブロック微量

第138号土壌層解説

- 1 褐灰色 砂粒中量、黄褐色粘土ブロック少量

第139号土壌層解説

- 1 灰黄褐色 砂粒・鉄分中量、黄褐色粘土粒子微量
- 2 棕褐色 黄褐色粘土ブロック・炭化物・砂粒少量
- 3 暗褐色 黄褐色粘土粒子・砂粒・鉄分微量
- 4 褐色 褐色砂粒・鉄分・白色砂粒少量、炭化粒子微量

第179号土壌層解説

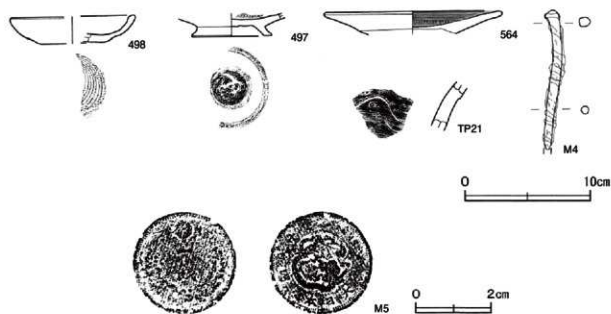
- 1 黒褐色 白色粘土ブロック・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 白色粘土粒子少量
- 3 暗褐色 黄褐色粘土粒子中量、炭化粒子微量

第182号土壌層解説

- 1 灰黄褐色 白色粘土粒子少量、焼土粒子微量

第183号土壌層解説

- 1 灰黄褐色 焼土粒子少量、白色粘土ブロック微量
- 2 濃い赤褐色 焼土粒子中量、白色粘土粒子少量
- 3 黒褐色 白色粘土ブロック・焼土粒子少量
- 4 黒褐色 焼土粒子中量、白色粘土ブロック微量
- 5 暗褐色 焼土粒子・白色粘土粒子微量



第240図 その他の土坑出土遺物実測図

その他の土坑出土遺物観察表 (第240図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
497	土師器	高台付椀	-	(1.8)	6.1	苧母・赤色砂子・黒色砂子	にぶい橙	普通	体部内面へラ磨き 底部回転へラ切り	SK43	10%
498	土師器	小皿	[9.8]	2.1	[5.0]	長石・赤色砂子	浅黄橙	普通	口クロナデ 底部回転糸切り	SK46	20%
564	土師器	高台白皿	14.0	(1.8)	-	赤色砂子	にぶい黄橙	普通	体部内面へラ磨き 高台部欠損	SK128	40%
TP21	須臾器	甕	-	(3.7)	-	長石・石英	灰	良好	櫛歯状工具による波状文	SK64	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
M 4	釘	(11.0)	1.2	0.8	(17.4)	鉄	断面長方形	SK35	

番号	銭名	径	厚さ	重量	鋳造年	材質	特徴	出土位置	備考
M 5	銅貨	2.7	0.1	6.6	明治7	銅	一銭	SK36	

表15 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m)		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径×短径	深さ (cm)					
6	M 4 g0	-	円形	0.7 × 0.7	15	外傾	籠状	人為	-	
7	M 4 g0	N - 75° - W	隅丸長方形	1.5 × 0.8	10	外傾	平坦	自然	-	
8	M 4 h0	N - 23° - W	楕円形	1.2 × 1.0	30	外傾	平坦	人為	-	
10	M 5 a1	-	円形	0.7 × 0.7	15	外傾	平坦	人為	土師器	
11	M 4 g9	-	円形	1.1 × 1.0	30	外傾	平坦	人為	-	SI36 → 本跡
12	N 4 i6	N - 27° - E	円形	2.2 × 2.1	15	外傾	平坦	人為	-	
13	M 4 j6	-	円形	1.3 × 1.3	22	外傾	平坦	人為	-	
14	M 4 j6	N - 12° - E	楕円形	3.5 × 2.8	10	外傾	平坦	自然	-	
15	M 4 d9	-	円形	0.7 × 0.7	22	外傾	平坦	人為	-	SI35 → 本跡 → SK30
16	M 4 g9	-	円形	0.4 × 0.4	10	外傾	平坦	自然	-	SI36 → 本跡
17	M 4 e0	N - 90° - E	楕円形	1.3 × 1.0	20	外傾	平坦	人為	土師器、陶器	
18	M 4 e0	N - 0°	[楕円形]	(0.5) × 0.4	50	外傾	籠状	人為	-	本跡 → SK19
19	M 4 e0	N - 0°	楕円形	0.9 × 0.8	32	外傾	平坦	人為	-	SK18 → 本跡
21	M 4 d0	N - 60° - W	楕円形	0.6 × 0.5	44	外傾	平坦	人為	-	

番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m)		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係 (旧→新)
				長径×短径	深さ (cm)					
22	M 5a1	-	円形	0.5 × 0.5	10	外傾	平坦	人為	-	
23	M 5a1	N-54°-W	楕円形	0.7 × 0.6	12	外傾	平坦	人為	-	
26	L 4b9	N-52°-W	楕円形	1.9 × 1.8	47	外傾	平坦	人為	土師器、須恵器、鉄製品	SI28 → 本跡
27	L 4 8	N-15°-E	長楕円形	4.1 × 1.5	11	外傾	平坦	自然	土師器、須恵器	SI29 → 本跡
28	L 4 9	N-39°-W	楕円形	1.5 × 1.3	12	外傾	平坦	人為	土師器	SI29 → SI38 → 本跡
29	M 5a2	N-90°-E	楕円形	0.9 × 0.8	40	外傾	平坦	人為	-	SI43 → 本跡
31	M 4 0	N-0°	楕円形	0.8 × 0.7	90	直立	平坦	人為	土師器	SI35 → 本跡
32	K 4c9	N-15°-W	楕円形	0.6 × 0.4	15	外傾	平坦	自然	-	
33	K 5c1	N-0°	楕円形	0.9 × 0.7	15	外傾	壘状	人為	土師器片	
34	K 5c2	N-0°	楕円形	1.2 × 1.0	15	外傾	平坦	人為	-	
35	J 5j2	-	円形	1.4 × 1.4	10	外傾	平坦	人為	鉄製品	
36	J 5j2	N-32°-E	隅丸長方形	1.4 × 1.2	15	縦斜	平坦	人為	土師器、磁器、鐵貨	
37	J 5j2	N-85°-E	長楕円形	1.0 × 0.5	31	外傾	平坦	人為	-	
38	J 5j2	N-0°	円形	0.5 × 0.5	16	外傾	平坦	自然	土師器	
40	K 4a0	N-11°-W	長楕円形	1.1 × 0.5	10	縦斜	壘状	自然	-	
41	J 5j1	-	円形	1.1 × 1.0	10	縦斜	平坦	自然	-	
43	K 5j2	N-16°-E	[楕円形]	(3.0) × 2.4	10	外傾	平坦	人為	土師器	SI45 → 本跡
44	J 5b2	N-43°-W	[楕円形]	(0.3) × 0.4	10	外傾	平坦	人為	土師器	本跡 → SK 45
45	J 5b2	N-51°-E	楕円形	0.9 × 0.7	10	外傾	平坦	人為	-	SI44 → 本跡
46	J 5b1	-	円形	0.6 × 0.5	15	外傾	平坦	自然	土師器	
50	L 5e4	N-41°-W	楕円形	2.4 × 1.9	20	縦斜	平坦	人為	土師器、須恵器	SI46 → 本跡
52	L 4 0	N-35°-E	楕円形	1.6 × 1.3	25	外傾	平坦	人為	-	
53	L 4 9	N-40°-W	楕円形	1.0 × 0.9	15	外傾	平坦	人為	-	
54	L 5j4	N-9°-E	方形	2.2 × 2.1	15	縦斜	平坦	自然	土師器	
55	L 5i4	N-79°-W	楕円形	1.7 × 1.3	10	縦斜	平坦	人為	-	
56	M 4 0	N-30°-E	楕円形	0.5 × 0.4	20	外傾	壘状	不明	-	
57	L 5b3	-	円形	0.8 × 0.8	32	外傾	平坦	人為	土師器	SI47 → 本跡
60	L 5i4	-	円形	1.0 × 0.9	10	縦斜	平坦	自然	-	
63	L 5a2	N-81°-E	楕円形	2.6 × 2.0	10	縦斜	平坦	人為	土師器	SI40・49 → 本跡
64	L 4b9	-	円形	1.2 × 1.1	40	外傾	平坦	人為	土師器、須恵器	
66	J 5j4	-	[円形]	1.4 × (1.0)	21	外傾	平坦	人為	-	
67	J 5j4	N-44°-W	方形	1.3 × 1.3	15	外傾	平坦	人為	土師器	
68	L 5b3	-	円形	0.2 × 0.2	10	外傾	壘状	人為	-	SI47 → 本跡
69	L 5b3	-	円形	0.1 × 0.1	10	外傾	壘状	人為	-	SI47 → 本跡
70	L 5b3	-	円形	0.3 × 0.3	25	直立	平坦	人為	-	SI47 → 本跡
71	L 5b3	-	円形	0.2 × 0.2	15	外傾	壘状	人為	-	SI47 → 本跡
72	K 5i4	-	円形	0.3 × 0.3	52	直立	壘状	人為	-	
73	K 5c3	N-72°-W	楕円形	1.3 × 1.0	11	外傾	平坦	人為	-	
74	J 5g3	N-0°	楕円形	0.5 × 0.4	26	外傾	平坦	人為	-	SI11 → 本跡
75	K 5e4	N-9°-W	[方形]	1.3 × 1.3	10	縦斜	平坦	人為	-	SD12 → 本跡
76	L 5e1	-	円形	1.7 × 1.7	40	外傾	平坦	人為	-	本跡 → SD 8
77	L 5d3	N-23°-E	不整形方形	2.8 × 2.4	110	外傾	平坦	人為	-	SI56 → 本跡
79	L 5d2	N-74°-W	楕円形	2.7 × 2.4	50	外傾	平坦	人為	土師器	SI56 → 本跡
80	F 5 9	N-14°-W	楕円形	1.4 × 1.0	30	外傾	壘状	人為	土師器	
81	F 5b9	N-88°-E	楕円形	1.1 × 0.6	20	縦斜	平坦	人為	土師器	
82	F 5g9	N-0°	楕円形	1.5 × 1.4	40	外傾	平坦	人為	土師器	
83	F 5 9	N-80°-E	楕円形	1.6 × 0.9	45	外傾	平坦	自然	土師器	

番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m)		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係 (旧→新)
				長径×短径	深さ (cm)					
84	F 5 d9	N-66°-W	楕円形	0.9×0.6	40	外傾	崖状	人為	-	
85	F 5 h6	-	円形	1.2×1.2	30	外傾	平坦	自然	土師器	SI60→本跡
86	F 5 f7	N-0°	楕円形	0.8×0.7	25	外傾	崖状	人為	土師器	
87	E 5 h0	N-29°-E	長方形	1.3×0.6	35	外傾	平坦	自然	-	第1号田河道跡→本跡→SK58
88	E 5 h0	-	円形	0.2×0.2	96	直立	平坦	自然	-	第1号田河道跡→SK57→本跡
89	E 5 g0	N-90°-E	楕円形	0.2×0.1	10	外傾	平坦	自然	-	第1号田河道跡→SK121→本跡
90	E 5 g0	N-70°-W	楕円形	0.4×0.2	10	外傾	崖状	自然	-	第1号田河道跡→SK121→本跡
91	G 5 b6	N-90°-E	楕円形	0.8×0.7	10	外傾	平坦	自然	-	
92	G 5 a6	N-80°-W	楕円形	1.2×1.0	5	外傾	平坦	自然	-	
93	G 5 a6	N-80°-E	楕円形	1.1×1.0	5	外傾	平坦	自然	-	
94	F 5 d6	-	円形	1.4×1.4	25	外傾	平坦	人為	土師器	
95	F 5 d6	N-0°	楕円形	1.2×1.0	30	外傾	平坦	自然	土師器	
96	F 5 e6	-	円形	1.2×1.1	26	外傾	平坦	自然	土師器	SI71→本跡
97	F 5 h5	-	円形	1.2×1.2	25	外傾	平坦	人為	土師器	SI68→本跡
98	F 5 g5	-	円形	1.5×1.5	30	外傾	平坦	自然	土師器	
100	G 5 b5	N-0°	卵形	1.2×0.9	10	外傾	平坦	自然	-	
101	G 5 d5	N-55°-W	楕円形	1.1×0.9	25	外傾	平坦	人為	土師器	
102	G 5 b7	-	円形	0.7×0.7	20	外傾	崖状	人為	-	
103	G 5 c7	-	円形	0.5×0.4	22	外傾	平坦	人為	-	
104	G 5 c7	-	円形	0.4×0.4	23	直立	平坦	人為	-	
105	G 5 c8	-	円形	0.3×0.3	21	直立	平坦	人為	-	
106	G 5 c8	N-65°-W	楕円形	0.6×0.4	25	外傾	平坦	人為	-	
108	E 5 i0	N-24°-W	楕円形	1.5×1.3	40	外傾	平坦	人為	-	
109	K 4 d9	-	円形	1.3×1.2	10	縦斜	平坦	自然	土師器	
110	F 5 j8	N-64°-E	楕円形	0.4×0.3	50	外傾	崖状	人為	-	SI61→SD16→本跡
111	F 5 h5	-	円形	0.6×0.6	15	外傾	平坦	人為	土師器	
112	F 5 h5	-	円形	1.3×1.3	47	外傾	平坦	人為	土師器	
113	F 5 i7	-	円形	0.9×0.8	15	縦斜	平坦	自然	土師器	SI65→本跡
114	E 5 h8	N-54°-E	楕円形	1.7×1.5	65	外傾	平坦	人為	土師器、陶器	
115	F 5 h6	-	円形	0.9×0.8	35	外傾	平坦	人為	土師器	
116	G 5 i7	N-0°	[楕円形]	(0.4)×0.5	10	外傾	平坦	自然	-	本跡→SK117
117	G 5 i7	-	円形	0.5×0.5	10	縦斜	平坦	自然	-	SK116→本跡
118	L 5 c1	-	円形	1.0×1.0	15	縦斜	平坦	人為	土師器	
119	L 5 b1	N-13°-E	楕円形	1.1×1.0	25	外傾	平坦	人為	土師器	
120	E 5 h0	N-90°-E	楕円形	0.5×0.2	30	外傾	平坦	自然	-	第1号田河道跡→SK121→本跡
121	E 5 g0	N-0°	[不定形]	3.9×(2.9)	15	縦斜	平坦	自然	-	第1号田河道跡→本跡→SK99-90-120-126 第1号田河道跡→SK120→SK121→本跡
122	E 5 g0	N-71°-E	楕円形	0.7×0.4	15	外傾	平坦	自然	-	第1号田河道跡→SK120→本跡→SK121→本跡
123	E 5 g0	N-0°	[楕円形]	0.6×(0.5)	15	外傾	平坦	自然	-	第1号田河道跡→SK120→本跡→SK121→本跡
124	E 5 g0	N-90°-E	楕円形	0.3×0.2	5	外傾	平坦	自然	-	第1号田河道跡→SK121→本跡
125	E 5 h0	N-82°-E	楕円形	0.3×0.2	10	外傾	崖状	自然	-	第1号田河道跡→SK121→本跡
126	E 5 g0	N-69°-W	楕円形	0.5×0.3	40	外傾	平坦	自然	-	第1号田河道跡→SK121→本跡
127	H 5 b6	N-73°-W	[楕円形]	2.7×(2.3)	22	縦斜	平坦	自然	-	
128	H 5 e5	N-33°-E	不定形	(7.7)×2.8	15	外傾	平坦	自然	土師器	
130	L 5 b1	N-90°-E	[円形]	0.8×(0.2)	20	外傾	崖状	人為	土師器	
131	H 5 h8	N-0°	楕円形	2.2×1.9	50	外傾	平坦	人為	土師器、須恵器	
132	F 5 g0	-	円形	0.9×0.9	60	外傾	平坦	人為	須恵器	
133	F 5 i0	N-21°-W	長方形	1.9×1.3	55	外傾	平坦	人為	-	

番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m)		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係 (旧→新)
				長径×短径	深さ (cm)					
134	H 5 h5	N - 29° - E	隅丸方形	0.9 × 0.8	15	外傾	平坦	人為	土師器	
135	F 5 e6	N - 43° - E	楕円形	0.8 × 0.6	25	外傾	皿状	人為	土師器	SI36 → 本跡
136	F 5 e6	N - 42° - W	[楕円形]	(0.4) × 0.4	15	外傾	皿状	人為	-	本跡 → SK135
137	G 5 d8	N - 51° - W	楕円形	0.4 × 0.3	20	外傾	平坦	自然	-	本跡 → SD16
138	E 5 0	N - 90° - E	楕円形	0.4 × 0.3	35	外傾	平坦	自然	-	第1号旧河道跡 → 本跡 → SD13
139	E 5 h0	-	円形	0.8 × 0.8	130	直立	平坦	自然	-	第1号旧河道跡 → 本跡
179	I 5 h6	-	円形	0.4 × 0.4	35	外傾	皿状	人為	-	
182	M 4 g9	N - 57° - W	楕円形	0.4 × 0.3	30	外傾	平坦	人為	-	SI36 → 本跡
183	M 4 0	N - 45° - W	不正楕円形	0.6 × 0.3	40	外傾	皿状	人為	-	SI35 → 本跡

(3) 柱穴列跡

第1号柱穴列跡 (第241図)

位置 調査ⅡB区南部のM4e7・M4d7・M4e6・M4f6区で、標高17.9mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 方向はN-18°-Eで、17か所の柱穴が長さ138mに渡ってほぼ一直線上に並んでいる。柱穴は径18～44cmの円形で、深さ8～50cmである。柱穴間の寸法は24～180cmで、不規則である。

覆土 P9・P10は2層に分けられる。焼土や炭化粒子を含む人為堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色 白色粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 2 灰黄褐色 焼土粒子少量、白色粘土ブロック微量

遺物出土状況 P4から須恵器片1点(甕)、P7から磁器片1点(猪口)が出土しているが、流れ込んだものと考えられる。

所見 柱穴がほぼ一直線上に並んでいるが、柱穴の規模や柱穴間の寸法には規則性が確認されなかった。時期は、出土土器がなく不明である。

第2号柱穴列跡 (第241図)

位置 調査ⅡB区南部のM4e6・M4d6・M4e6・M4f6区で、標高17.9mの平坦な低地上に位置している。

規模と形状 方向はN-18°-Eで、21か所の柱穴が長さ124mに渡ってほぼ一直線上に並んでいる。柱穴は径10～50cmの円形又は楕円形で、深さ8～54cmである。柱穴間の寸法は10～120cmで、不規則である。

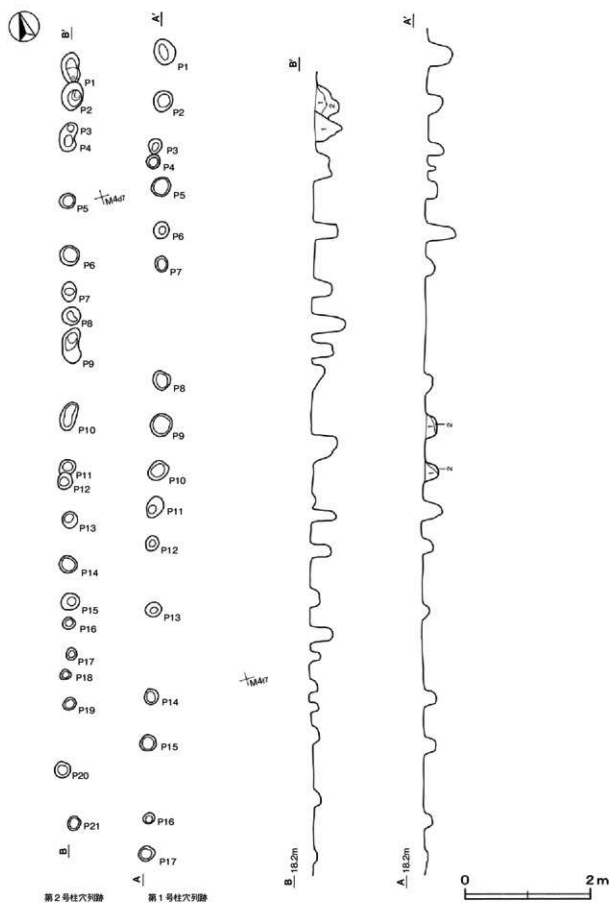
覆土 P1・P2は2層に分けられる。焼土や炭化粒子を含む人為堆積と考えられる。

土層解説

1 灰黄褐色 白色粘土粒子少量、炭化粒子微量 2 暗褐色 焼土粒子・白色粘土ブロック少量

遺物出土状況 P16から土師器片1点(甕)が出土しているが、流れ込んだものと考えられる。

所見 柱穴がほぼ一直線上に並んでいるが、柱穴の規模や柱穴間の寸法には規則性が確認されなかった。また、第1号柱穴列跡と約140cmの間隔で、ほぼ並行に位置しているが、柱穴の配置には規則性が確認されず、関連性は不明である。時期は、出土土器がなく不明である。



第241图 第1·2号柱穴列跡実測图

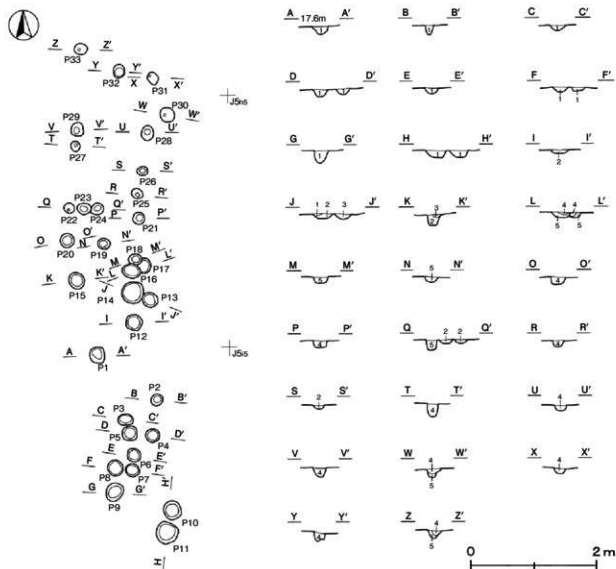
表 16 II 区柱穴列跡一覧表

番号	位置	走行方向	長さ (m)	柱間寸法 (m)	柱穴			出土遺物	備考
					柱穴数	平面形	深さ (cm)		
1	M4c7～M4d6	N-18'-E	13.8	不定	17	円形	8～50	-	
2	M4c6～M4d6	N-18'-E	12.4	不定	21	円形・楕円形	8～54	-	

(4) ビット群

第1号ビット群 (第242図)

調査II B区北部のJ 5g4～J 5i4区で、標高17.5mほどの平坦な低地上に位置している。ビット群の範囲は東西2.0m、南北8.4mほどである。ビットの配列は不規則であり、竪穴住居跡や掘立柱建物跡を想定することは困難である。時期は、出土土器がないため明確ではない。以下、各柱穴の規模を表にまとめる。



第242図 第1号ビット群実測図

第1号ピット群ピット計測表

番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P 1	55	42	28	P 2	37	35	32	P 3	45	38	18
P 4	44	40	20	P 5	46	45	27	P 6	41	40	20
P 7	45	39	13	P 8	41	39	18	P 9	62	53	30
P10	52	48	32	P11	72	68	30	P12	52	50	12
P13	50	48	8	P14	72	66	18	P15	52	52	36
P16	57	47	17	P17	48	48	17	P18	43	32	22
P19	38	34	15	P20	45	44	24	P21	40	40	22
P22	36	33	32	P23	43	35	12	P24	42	38	10
P25	36	32	22	P26	34	30	11	P27	32	29	44
P28	46	38	16	P29	43	41	29	P30	50	42	28
P31	43	33	16	P32	42	34	30	P33	40	33	25

土層解説

- 1 黒 褐色 焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量
 2 にぶい黄褐色 白色粘土粒子・鉄分微量
 3 にぶい黄褐色 白色粘土ブロック微量
 4 暗 褐色 白色粘土粒子・鉄分微量
 5 暗 褐色 白色粘土粒子少量、鉄分微量

第2号ピット群 (第243図)

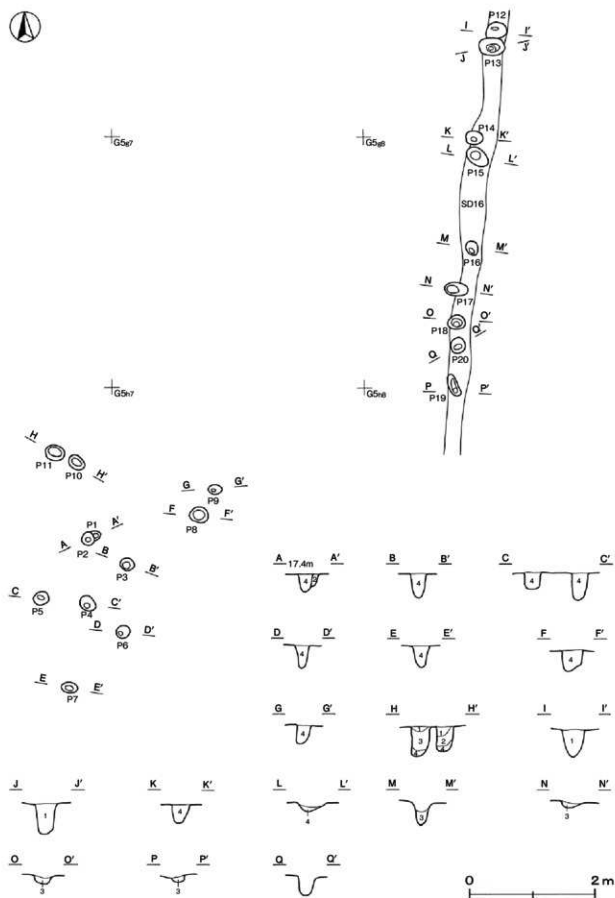
調査ⅡA区中央部のG 5 08～G 5 06区で、標高17.3mほどの平坦な低地上に位置している。ピット群の範囲は東西8.0m、南北11.0mほどである。ピットの配列は不規則であり、竪穴住居跡や掘立柱建物跡を想定することは困難である。時期は、出土土器がないため明確ではない。以下、各柱穴の規模を表にまとめる。

第2号ピット群ピット計測表

番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P 1	32	(30)	42	P 2	40	37	58	P 3	49	40	79
P 4	56	44	89	P 5	50	41	57	P 6	47	42	77
P 7	56	34	70	P 8	62	50	70	P 9	44	33	62
P10	58	44	80	P11	62	50	96	P12	70	51	83
P13	83	56	97	P14	53	41	60	P15	77	52	34
P16	49	40	75	P17	72	42	23	P18	60	48	34
P19	77	35	24	P20	53	50	64				

土層解説

- 1 にぶい黄褐色 砂粒中量、炭化粒子微量
 2 にぶい黄褐色 砂粒中量
 3 暗 褐色 砂粒中量、炭化粒子・白色粘土粒子微量
 4 灰黄褐色 砂粒少量



第243図 第2号ピット群実測図

第3号ピット群 (第244・245図)

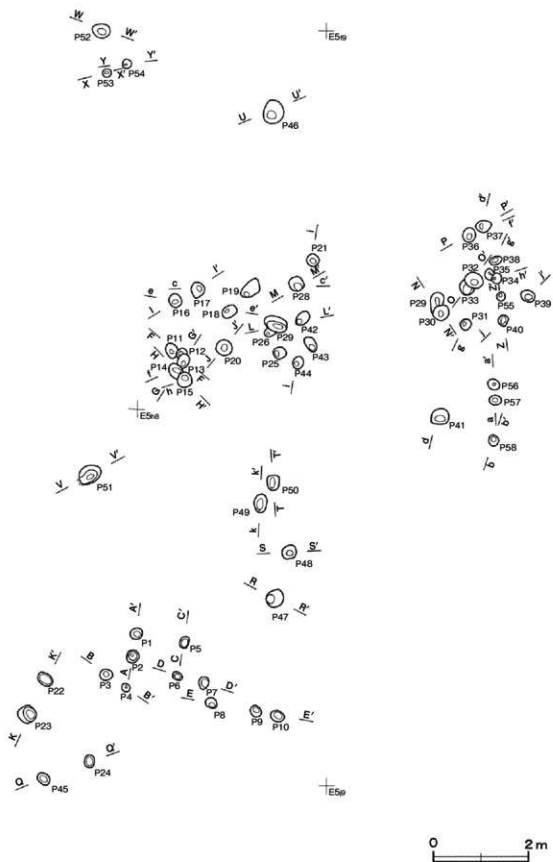
調査ⅡA区北部のE 577～E 588区で、標高17.3mほどの平坦な低地上に位置している。ピット群の範囲は東西9.0m、南北12.0mほどである。ピットの配列は不規則であり、堅穴住居跡や掘立柱建物跡を想定することは困難である。遺物は、縄文土器片がP1・P7・P20・P51・P52・P57から、土師器の高台付碗がP14から出土しているが、周辺の遺構から流れ込んだものであり時期は不明確である。以下、各柱穴の規模を表にまとめる。

第3号ピット群ピット計測表

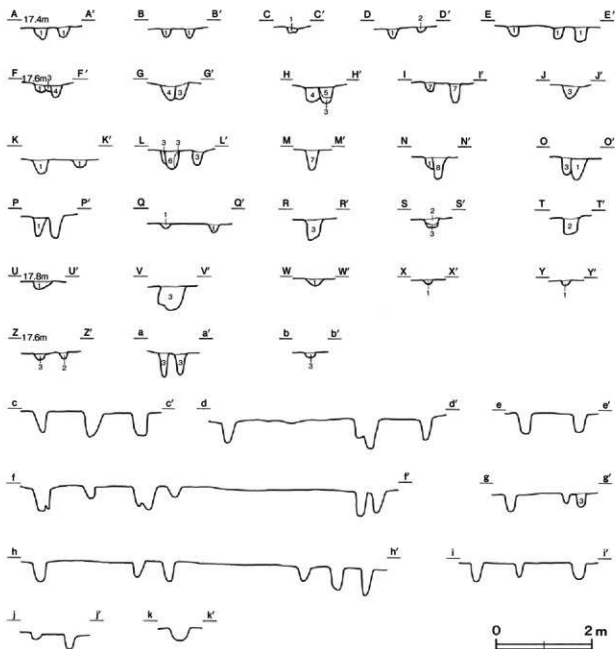
番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P 1	48	46	46	P 2	50	50	56	P 3	48	47	42
P 4	34	32	48	P 5	48	34	24	P 6	44	32	50
P 7	52	40	30	P 8	45	43	45	P 9	52	40	54
P10	55	40	64	P11	(63)	40	38	P12	50	(20)	26
P13	60	38	50	P14	(57)	48	65	P15	64	60	70
P16	55	51	87	P17	66	54	90	P18	64	43	67
P19	92	55	102	P20	69	62	54	P21	55	50	72
P22	66	47	32	P23	69	67	62	P24	56	42	36
P25	53	45	65	P26	(42)	35	(63)	P27	101	64	82
P28	64	62	98	P29	(94)	56	48	P30	70	60	93
P31	50	43	73	P32	83	59	96	P33	(60)	62	92
P34	41	41	118	P35	40	(38)	46	P36	56	52	85
P37	68	52	94	P38	52	31	58	P39	60	48	60
P40	48	40	28	P41	75	60	85	P42	72	42	70
P43	71	41	88	P44	48	42	80	P45	60	39	28
P46	100	80	30	P47	78	69	88	P48	68	57	37
P49	78	52	53	P50	65	50	72	P51	112	73	106
P52	74	61	32	P53	38	36	17	P54	42	38	24
P55	36	30	30	P56	50	47	95	P57	52	40	106
P58	42	40	24								

土層解説

- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1 黒 褐色 白色粘土ブロック少量 | 5 暗 褐色 炭化粒子・白色粘土粒子微量 |
| 2 にぶい黄褐色 白色粘土粒子中量 | 6 褐 色 白色粘土粒子中量 |
| 3 暗 褐色 白色粘土粒子少量 | 7 灰黄褐色 炭化粒子・白色粘土粒子微量 |
| 4 暗 褐色 炭化粒子・白色粘土粒子微量 | 8 黒 褐色 炭化粒子・白色粘土粒子微量 |



第244図 第3号ビット群実測図(1)



第245図 第3号ピット群実測図(2)

第4号ピット群 (第246図)

調査ⅡA区南部のH 5 b4～H 5 d5区で、標高17.3 mほどの平坦な低地上に位置している。ピット群の範囲は東西5.0 m、南北6.5 mほどである。ピットの配列は不規則であり、竪穴住居跡や掘立柱建物跡を想定することは困難である。時期は、出土土器がないため明確ではない。以下、各柱穴の規模を表にまとめる。

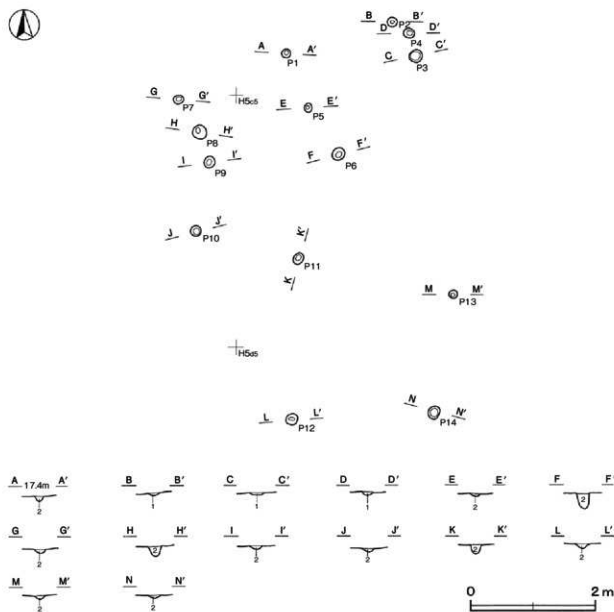
土層解説

1 灰黄褐色 砂粒中量、白色粘土粒子少量

2 暗褐色 白色粘土粒子・黄褐色粘土粒子・砂粒少量

第4号ビット群ビット計測表

番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P 1	28	26	20	P 2	31	29	10	P 3	40	37	8
P 4	38	31	15	P 5	30	25	10	P 6	40	38	52
P 7	32	25	15	P 8	44	43	34	P 9	38	33	15
P10	34	32	8	P11	38	28	17	P12	38	29	15
P13	28	27	10	P14	40	34	10				



第246図 第4号ビット群実測図

(5) 旧河道跡

第1号旧河道跡 (SX1) (第247～254回)

位置 調査ⅡA区の東側調査区域際のE 5b0～J 5a0区で、標高17.8～17.2mほどの南へ傾斜する低地上に位置している。

重複関係 第87～90・120～126・132・133・138・139号土坑、第13・15号溝に掘り込まれている。第19A～C号溝跡や第22A・B号溝跡と合流していたと推定される。

規模と形状 北・東・南側が調査区域域外になるため、全体を確認することはできなかった。E 5b0区からほぼ真南方向へ向かい、H 5f9区付近でやや西方向(N-175°-W)に延びながら調査区域域外に至っている。確認された長さは198mで、上幅0.1～11.0m、下幅0.1～3.2m、深さ70～240cmである。底面は北から南へ傾斜しており、形状は不整逆台形状を呈している。壁は緩やかに立ち上がっている。

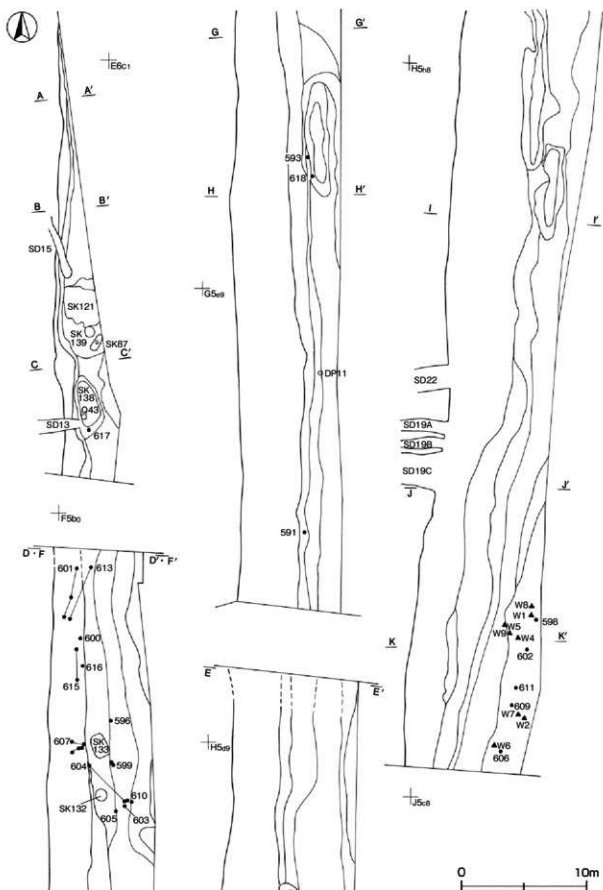
覆土 28層に分けられる。第1層は表土層である。上層から中層にかけてはブロック状の堆積状況を示す人為堆積が確認されるが、その他は岸辺からの傾斜に沿って堆積する自然堆積と考えられる。

土層解説

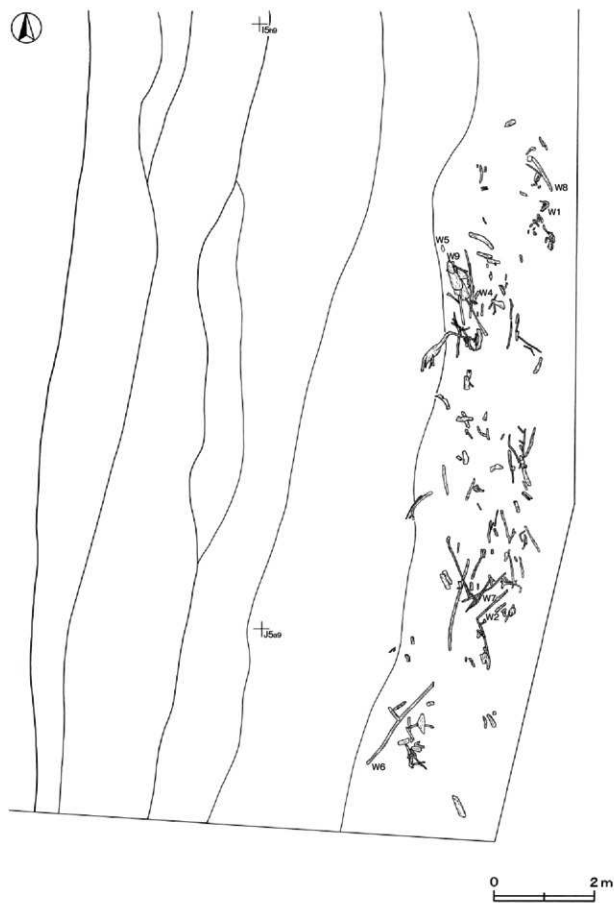
1 暗 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量	15 灰黄褐色 鉄分多量、白色粘土粒子少量
2 に灰黄褐色 砂粒少量、焼土粒子・鉄分微量	16 に灰黄褐色 白色粘土粒子・鉄分少量
3 暗 褐色 砂粒少量、焼土粒子微量	17 に灰黄褐色 粗砂粒中量、砂粒少量、黄褐色粘土ブロック微量
4 に灰黄褐色 粗砂粒・鉄分少量	18 暗 褐色 粗砂粒多量、白色粘土粒子微量
5 に灰黄褐色 砂粒中量	19 に灰黄褐色 鉄分多量、砂粒微量
6 に灰黄褐色 砂粒・鉄分少量、焼土粒子微量	20 に灰黄褐色 黄褐色粘土粒子・鉄分中量、砂粒少量
7 暗 褐色 砂粒少量、鉄分微量	21 に灰黄褐色 粗砂粒少量、黄褐色粘土粒子微量
8 暗 褐色 砂粒・鉄分少量	22 黒 褐色 砂粒中量、白色粘土粒子微量
9 に灰黄褐色 砂粒中量、焼土粒子微量	23 灰黄褐色 砂粒多量、鉄分微量
10 暗 褐色 砂粒少量	24 に灰黄褐色 粗砂粒中量、黄褐色粘土粒子微量
11 に灰黄褐色 砂粒中量、鉄分少量、炭化粒子微量	25 暗灰黄色 粗砂粒多量、鉄分微量
12 暗 褐色 白色粘土粒子中量、砂粒・鉄分少量	26 暗 褐色 粗砂粒多量、鉄分微量
13 暗 褐色 鉄分中量、砂粒少量、黄褐色粘土粒子微量	27 黄 褐色 粗砂粒・鉄分多量
14 暗 褐色 白色粘土粒子・砂粒・鉄分少量	28 灰黄褐色 砂粒多量

遺物出土状況 縄文土器片62点(深鉢)、土師器片1334点(椀類632、甕類702)、須恵器片57点(坏4、甕53) 灰釉陶器片2点(短頸壺、長頸瓶)、陶器片5点(甕)、石器・石製品2点(鏃・不明)、土製品16点(置き籠3、羽釜2、紡錘車1、管状土鍾6、不明4)、金属製品21点(刀子3、鏃1、釘1、不明16)、木製品20点(鉤1、杵2、鎌柄1、杭2、柱材1、部材8、不明5)、礫38点が出土している。遺物は覆土下層から底面にかけて出土している。出土した遺物はいずれも西側に広がる集落と時期が一致しており、流れ込んだものと考えられる。南部の調査区域域際からは、土師器片・灰釉陶器片とともに木製品・木片が出土し、この位置が河道の屈曲部の先端付近であったと推定される。593・618は中央部の覆土中層、596・600・604・610・613は北部の底面、605は覆土下層、606・609・611・W1・W2は南部の底面からそれぞれ出土している。594・597・608・612・614はそれぞれ覆土中から出土している。

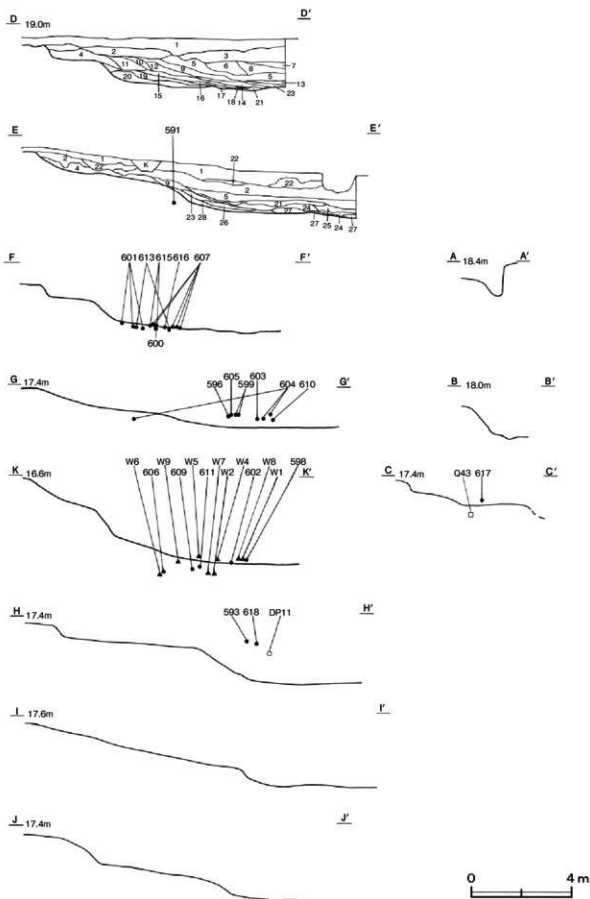
所見 覆土下層から底面にかけて堆積する砂粒は、河床の堆積物と考えられるため河道と捉えた。西側に位置する集落の遺物が入り込んでおり、同時期にこの河道が存在し、人々が投棄したものが、氾濫により遺物が流れ込んだのかは不明である。また、近世の堀跡と同時期の存在も想定される。河道の埋没時期は、出土遺物から近世以降と考えられるが、詳細は不明である。



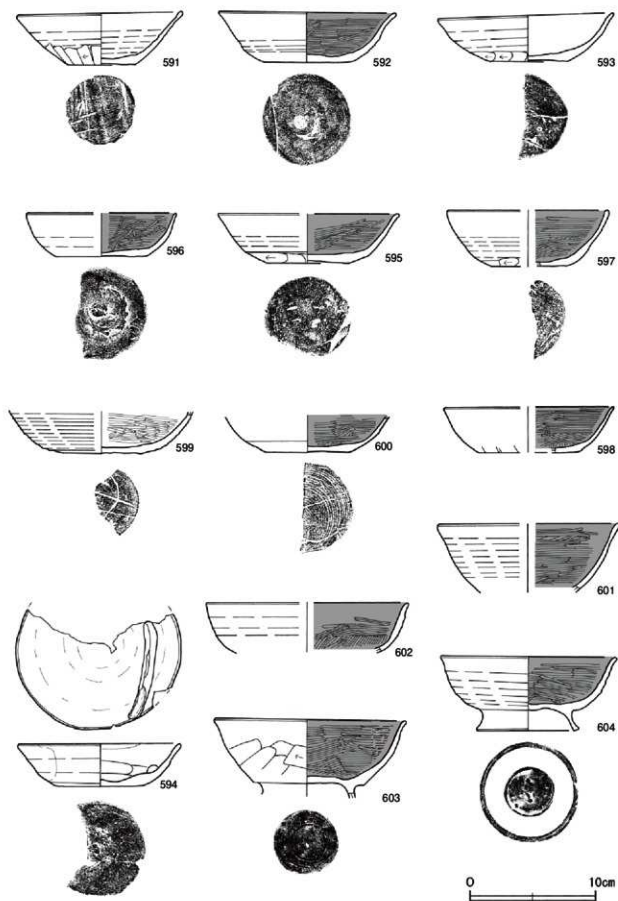
第247图 第1号旧河道跡実測图(1)



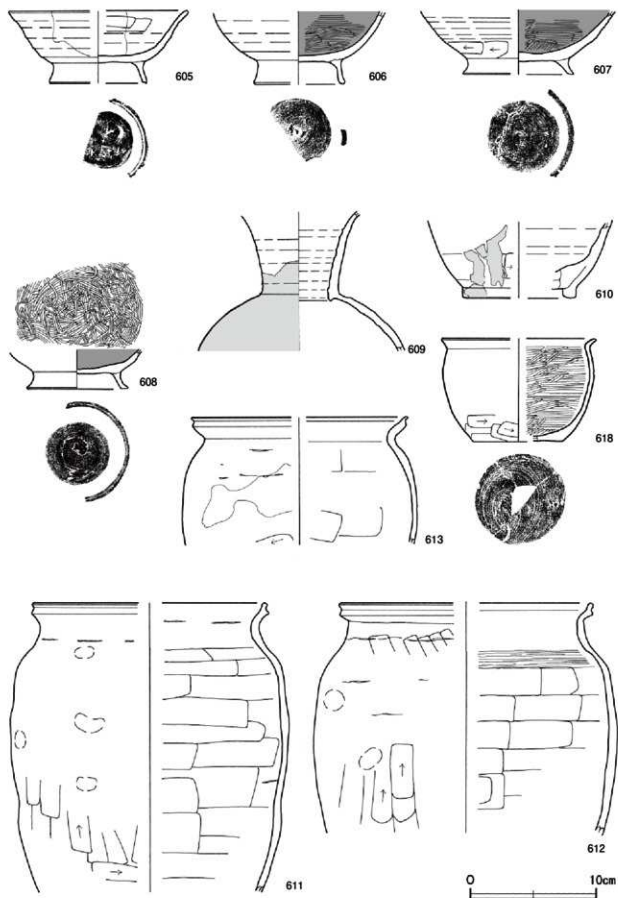
第248図 第1号旧河道跡実測図(2)



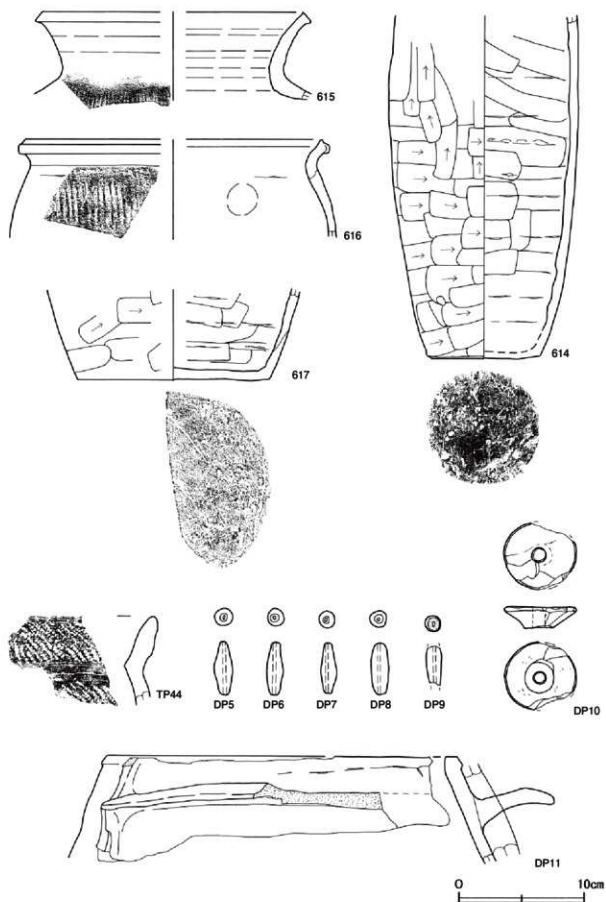
第249图 第1号旧河道跡実測図(3)



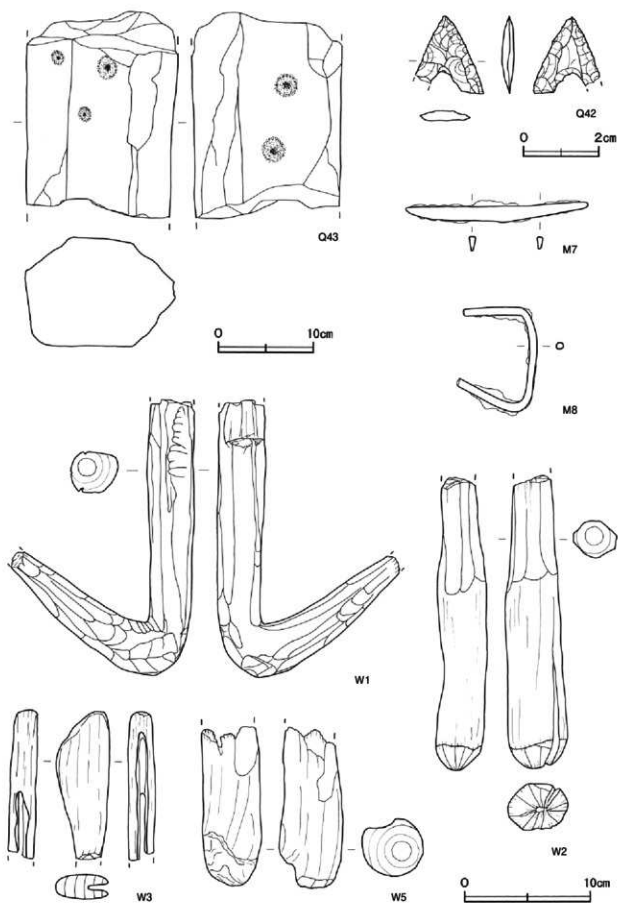
第250图 第1号旧河道跡出土遺物実測図(1)



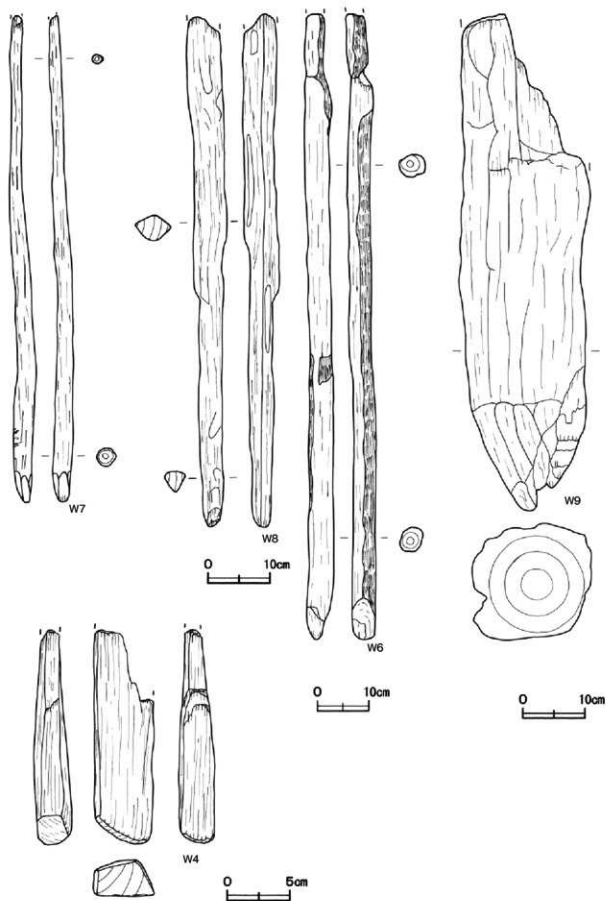
第251图 第1号旧河道跡出土遺物実測図(2)



第252図 第1号旧河道跡出土物実測図(3)



第253图 第1号旧河道跡出土遺物実測図(4)



第254图 第1号旧河道跡出土物実測图(5)

第1号旧河道跡出土土物観察表 (第250～254図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
391	須恵器	坏	130	4.2	5.4	長石・石英	灰黄褐	不良	ロクロナデ 体部下端手持らへう割り 底部一方側のへう割り	中部墓土下層	90% PL40
392	土師器	坏	140	4.0	7.0	長石・赤色粒子	にぶい・橙	普通	ロクロナデ 内面へう磨き 底部回転	覆土中	80% PL39
393	土師器	坏	140	3.9	6.1	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 体部下端手持らへう割り 底部多方向のへう割り	中部墓土上層	50% PL39
394	土師器	坏	128	3.4	7.1	長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	普通	ロクロナデ 底部回転へう割り 鉄分 付着	覆土中	60% PL39
395	土師器	坏	[143]	3.9	6.5	雲母・石英・赤色粒子	にぶい・橙	普通	ロクロナデ 内面へう磨き 底部回転 へう切り後多方向のへう割り	覆土中	50% PL39
396	土師器	坏	[118]	3.5	7.0	長石・石英・赤色粒子	にぶい・橙	普通	ロクロナデ 内面へう磨き 底部回転 へう割り	北部墓土下層	40% PL39
397	土師器	坏	[127]	4.5	[6.0]	雲母・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 内面へう磨き 底部回転	覆土中	30%
398	土師器	坏	[134]	3.6	[7.8]	長石・石英	灰黄褐	普通	ロクロナデ 内面へう磨き 底部回転 へう割り	南部墓土下層	30%
399	土師器	坏	-	(3.3)	[6.0]	長石・石英	にぶい・橙	普通	ロクロナデ 内面へう磨き 底部回転	北部墓土下層	25%
400	土師器	坏	-	(2.9)	6.8	長石・石英	にぶい・橙	普通	内面へう磨き 底部回転赤切り	北部墓土下層	30%
401	土師器	碗	[143]	(5.4)	-	雲母・赤色粒子	にぶい・橙	普通	ロクロナデ 内面へう磨き	北部墓土下層	30%
402	土師器	碗	[160]	(4.0)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい・橙	普通	ロクロナデ 内面へう磨き	南部墓土下層	10%
403	土師器	高台付碗	150	(6.2)	-	長石・赤色粒子	にぶい・橙	普通	ロクロナデ 内面へう磨き へう切り後高台筋り付け	北部墓土上層	90% PL44
404	土師器	高台付碗	138	5.9	7.7	雲母・長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 内面へう磨き へう切り後高台筋り付け	北部墓土下層	75% PL44
405	土師器	高台付碗	[140]	5.7	[7.6]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 底部回転へう割り後高台筋り付け	北部墓土下層	40% PL44
406	土師器	高台付碗	-	(5.7)	[6.8]	雲母・長石	灰褐	普通	ロクロナデ 内面へう磨き へう切り後高台筋り付け	南部墓土下層	30%
407	土師器	高台付碗	-	(5.0)	[8.6]	長石・石英・赤色粒子	にぶい・橙	普通	ロクロナデ 内面へう磨き へう切り後高台筋り付け	北部墓土下層	30%
408	土師器	高台付碗	-	(3.1)	7.9	長石・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ 内面へう磨き 底部回転	覆土中	30%
409	灰輪陶器	長頸瓶	-	(11.1)	-	緻密・灰輪	灰・灰白	良好	ロクロナデ 1層部無釉 付着 内面無釉	南部墓土下層	30% PL37
410	灰輪陶器	短頸壺	-	(6.0)	[8.8]	緻密・灰輪	灰黄・灰黄	良好	体部内面・胴縁へう割り 物だれ付着 内外面無釉	北部墓土下層	5%
411	土師器	甕	[184]	(22.8)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい・橙	普通	体部外面へう割り 輪轆痕 指頭痕	南部墓土上層	30%
412	土師器	甕	[199]	(18.4)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面へう割り 輪轆痕 内面へうナデ	覆土中	30%
413	土師器	甕	[170]	(10.1)	-	長石・赤色粒子	にぶい・橙	普通	体部外面へう割り 輪轆痕 内面へうナデ	北部墓土下層	25%
414	土師器	甕	-	(27.3)	9.0	長石・石英	橙	普通	体部外面へう割り 内面へうナデ	覆土中	70% PL51
415	須恵器	甕	[208]	(6.9)	-	長石・石英	灰	良好	体部外面部位の平行叩き	北部墓土下層	5%
416	須恵器	甕	[234]	(7.8)	-	長石・石英	橙	不良	体部外面部位の平行叩き 内面出頭痕	北部墓土下層	5%
417	須恵器	甕	-	(7.2)	[15.1]	雲母・石英	灰白	良好	体部外面下縁へう割り 内面へうナデ 輪轆痕	北部墓土上層	10%
418	土師器	小形甕	[120]	8.2	7.0	長石・石英・赤色粒子	にぶい・赤	普通	体部外面・底縁 内面へう磨き 底部回転赤切り	中部墓土上層	60% PL37
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP44	縄文土器	深鉢	-	(7.1)	-	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい・橙	普通	R1の車筋縄文施文	覆土中	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特 徴		出土位置	備考	
Q 42	石蔵	(2.1)	1.9	0.3	(0.8)	硬質頁岩	両面押圧溝調整		覆土中	PL56	
Q 43	不明	(22.0)	15.8	11.5	(6210)	安山岩	窪み部有り		北部墓土下層	PL54	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特 徴		出土位置	備考	
M 7	刀子	13.9	1.1	0.1	20.3	鉄	片刃		覆土中	PL55	
M 8	鏡*	8.3	6.4	0.5	30.3	鉄	断面円形		覆土中	PL55	
番号	器種	長さ	幅	口径	厚さ	重さ	材質	特 徴		出土位置	備考
DP5	管状土鉢	4.3	1.5	0.3	6.6	土製	ナデ 一方からの穿孔		覆土中	PL54	
DP6	管状土鉢	4.2	1.4	0.3	6.3	土製	ナデ 一方からの穿孔		覆土中	PL54	
DP7	管状土鉢	4.0	1.3	0.2	6.0	土製	ナデ 一方からの穿孔		覆土中	PL54	
DP8	管状土鉢	4.1	1.3	0.3	7.1	土製	ナデ 一方からの穿孔		覆土中	PL54	
DP9	管状土鉢	(3.1)	1.2	0.4	(4.5)	土製	ナデ 一方からの穿孔		覆土中		

番号	器種	最大口径	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考		
DP10	紡錘車	5.6	1.0	1.7 (36.1)	土製	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	PL54		
番号	器種	口径	器高	底径	重さ	材質	特徴	出土位置	備考	
DP11	置き壺	(27.8)	(8.5)	-	(780)	土製	体部外面へラ削り 内面へラナデ	中央部覆土中	PL54	
番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
W 1	工具	鉤	(220)	14.5	3.2	(280)	コナク属クスギ節	芯持丸木 全面ケズリ加工	南部覆土下層	PL55
W 2	農具	杵*	(233)	4.8	3.7	(230)	コナク属クスギ節	芯持丸木 先端部摩滅	南部覆土下層	PL55
W 3	農具	鎌柄	(118)	4.2	2.0	(50)	コナク属クスギ節	穂目 万部装着取有り	南部覆土下層	PL55
W 4	部材	角材	(170)	4.8	3.0	(120)	コナク属クスギ節	みかん割り割り出し 面取り	南部覆土下層	
W 5	農具	杵*	(127)	5.1	4.5	(150)	モミ属	芯持丸木 先端部摩滅	南部覆土下層	
W 6	土木材	杭	(117.2)	4.8	4.2	(2070)	コナク属クスギ節	芯持丸木 先端部斜断状のケズリ加工 例	南部覆土下層	
W 7	土木材	杭	(79.1)	3.5	3.0	(360)	クスノキ科	芯持丸木 先端部芯状のケズリ加工	南部覆土下層	
W 8	部材	角材	(80.8)	6.0	4.0	(840)	クリ	みかん割り 面取り	南部覆土下層	
W 9	建築材	柱材	(79.1)	(21.0)	(19.0)	(14000)	ヤナギ属	芯持丸木 面取り 求芯状のケズリ加工	南部覆土下層	

(6) 旧堤防跡

調査Ⅱ区にはA区からB区に続く第1A号堤防が構築されていた。A区では、東側調査区域際に遺構の存在が確認されていたため、第1A号堤防を除去した後、表土除去を行った。堤防を除去する際に、調査ⅡA区の南側調査区域際で、東側の第1号旧河道跡から西側の調査区域際まで東西方向に土層を観察することができたので、旧河道の様相や堤防の構築状況、平坦部の堆積状況を明らかにする手がかりになることから、堤防の範囲外も含めた土層図を掲載する。なお、観察した土層から、第1A号堤防には古い堤防が構築されていたと考えられ、この古い堤防を第1B号堤防とした。

第1A・B号旧堤防跡 (第255回)

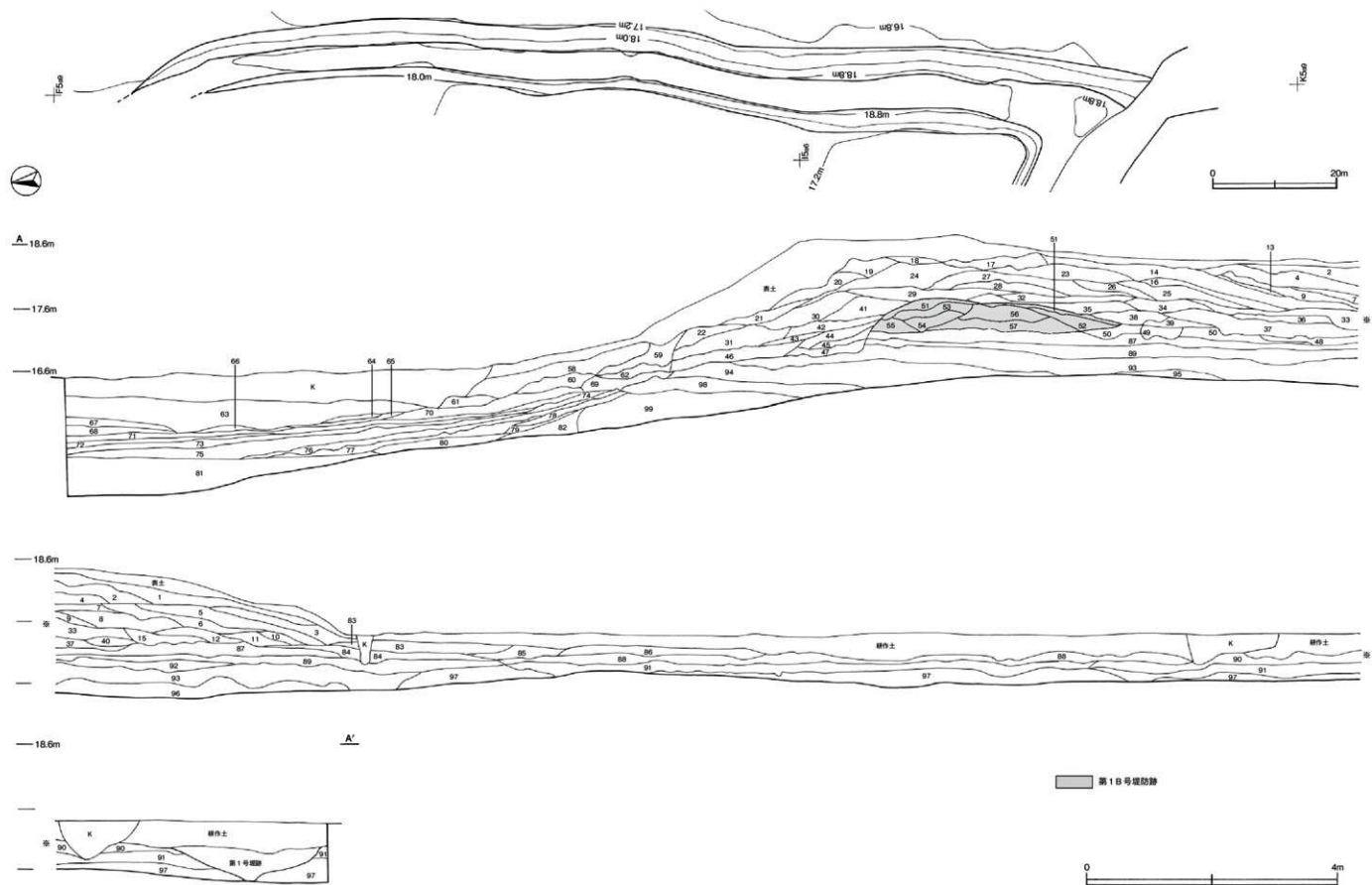
位置 調査ⅡA区のE5b7～J5d8区、東側調査区域を南北に延び、西側標高17.6～18.4m、東側標高16.8～17.6mの南へ緩やかに傾斜する低地上に位置している。

規模と形状 第1A号堤防跡は、削平されて高まりが低くなっているE5b7区から南東方向(N-155°-E)に18mほど延び、G5b2区から南西方向(N-175°-W)に直線的に130mほど延びた後、南側の調査区域際で現代の水路に分断される。この水路に沿って北西方向(N-55°-W)と、ⅡB区方向(N-185°-E)の2方向に分かれて構築されている。確認された長さは140mで、上幅2.0～7.0m、下幅8.0～13mである。高さは東側で0.8～2.0m、西側で0.4～1.2mであり、東側が低くなっているため高低差が大きい。断面形は台形状である。第1B号堤防跡は土層観察用壁面に確認されており、上幅2.0m、下幅4.0mほどで、断面形は台形状である。第1A号堤防跡と同じ方向に構築されていたと推測されるが、内容は不明である。

覆土 第1層から第47層までがA号堤防、第51層から第57層がB号堤防の土層である。第70層から第82層が第1号旧河道跡の流れによる堆積層である。また、第49層は住居跡の竈と推定され、第50層は西側が削平されているが、平安時代の生活面の一部と考えられる。

土層解説

- | | |
|------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色 炭化粒子微量 | 3 灰黄褐色 細砂粒少量、炭化物・鉄分微量 |
| 2 灰褐色 細砂粒中量、鉄分微量 | 4 にい黄褐色 細砂粒中量、焼土粒子・鉄分微量 |



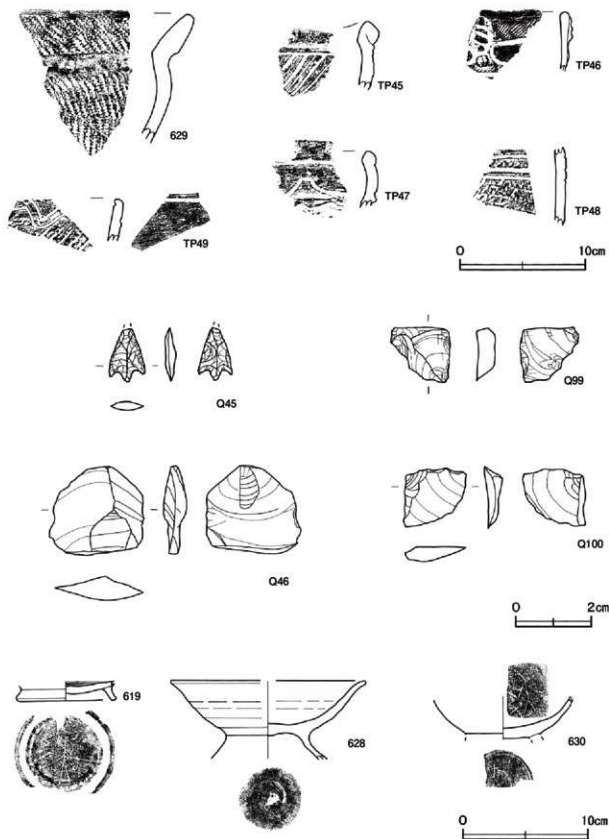
第255图 第1A·B号旧堤防迹实测图

5	暗褐色	細砂中量、鉄分微量	54	灰褐色	青灰色粘土ブロック、黒色粘土粒子、細砂粒・鉄分少量
6	暗褐色	細砂中量、黒色粘土粒子・鉄分微量	55	灰黄褐色	青灰色粘土ブロック、細砂粒・鉄分少量
7	にぶ黄褐色	細砂中量、黒色粘土ブロック、焼土粒子微量	56	暗褐色	青灰色粘土ブロック中量、細砂粒・鉄分少量、炭化粒子微量
8	にぶ黄褐色	細砂中量、黒色粘土粒子少量、鉄分微量	57	黒褐色	青灰色粘土ブロック多量、細砂粒・鉄分少量、炭化物微量
9	灰黄褐色	細砂中量、黄褐色粘土ブロック微量	58	暗褐色	細砂中量、黄褐色粘土ブロック、焼土粒子・鉄分微量
10	暗褐色	細砂少量、青灰色粘土ブロック・鉄分微量	59	にぶ黄褐色	細砂少量、黄褐色粘土ブロック・鉄分微量
11	褐色	細砂中量、白色粘土ブロック・黒色粘土ブロック微量	60	暗褐色	細砂中量、白色粘土粒子・黒色粘土粒子少量
12	にぶ黄褐色	細砂中量、白色粘土ブロック・黒色粘土ブロック少量	61	暗褐色	細砂中量、炭化粒子・鉄分微量
13	褐色	細砂中量、白色粘土ブロック・鉄分微量	62	灰黄褐色	細砂少量、焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子微量
14	褐色	細砂中量、黒色粘土粒子少量、鉄分微量	63	灰黄褐色	黄褐色粘土ブロック、青灰色粘土ブロック、細砂少量、炭化粒子・鉄分微量
15	暗黄褐色	細砂中量、白色粘土粒子・黒色粘土粒子少量	64	灰黄褐色	炭化物・細砂粒・鉄分少量、黄褐色粘土ブロック微量
16	暗褐色	細砂中量、白色粘土粒子少量	65	黒褐色	炭化物・細砂少量、鉄分微量
17	黒褐色	細砂少量、黄褐色粘土ブロック・炭化粒子微量	66	黒褐色	炭化物・細砂少量、白色粘土ブロック・鉄分微量
18	黒褐色	細砂少量、黄褐色粘土粒子・鉄分微量	67	灰黄褐色	細砂中量、白色粘土ブロック・黄褐色粘土粒子・鉄分微量
19	暗褐色	細砂中量、炭化粒子・鉄分微量	68	暗褐色	細砂中量、炭化粒子・鉄分微量
20	暗褐色	細砂中量、焼土粒子・白色粘土粒子微量	69	暗褐色	細砂中量、黒色粘土粒子少量、炭化粒子微量
21	暗褐色	細砂中量、黒色粘土粒子少量、焼土粒子微量	70	灰黄褐色	黒色粘土粒子・細砂中量、黄褐色粘土ブロック微量
22	暗褐色	細砂中量、黒色粘土粒子・鉄分微量	71	灰黄褐色	細砂中量、鉄分微量
23	黒褐色	細砂中量、白色粘土粒子微量	72	褐色	細砂中量、青灰色粘土粒子少量、鉄分微量
24	暗褐色	細砂少量、白色粘土粒子・黄褐色粘土粒子・鉄分微量	73	暗黄褐色	細砂多量、青灰色粘土粒子少量、鉄分微量
25	暗褐色	細砂中量、黄褐色粘土粒子微量	74	灰黄褐色	黒色粘土粒子・細砂中量、炭化粒子・鉄分微量
26	暗褐色	細砂中量、焼土粒子・炭化粒子・黄褐色粘土粒子微量	75	褐色	細砂中量、青灰色粘土粒子・鉄分微量
27	暗褐色	細砂中量、黄褐色粘土ブロック微量	76	暗褐色	細砂多量、青灰色粘土ブロック少量
28	黒褐色	細砂中量、青灰色粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	77	暗褐色	細砂中量、青灰色粘土ブロック少量、鉄分微量
29	暗褐色	細砂中量、青灰色粘土ブロック、焼土粒子微量	78	灰褐色	細砂中量、白色粘土ブロック・黒色粘土ブロック少量、鉄分微量
30	灰黄褐色	細砂中量、鉄分微量	79	灰黄褐色	細砂中量、鉄分微量
31	灰黄褐色	細砂中量、青灰色粘土粒子・黒色粘土粒子・鉄分微量	80	灰黄褐色	細砂多量
32	暗褐色	細砂中量、焼土ブロック・炭化物・黄褐色粘土粒子微量	81	暗黄褐色	灰色細砂中量、褐色粗砂粒・鉄分少量
33	褐色	細砂中量、白色粘土粒子微量	82	灰黄褐色	白色細砂粒・褐色細砂少量、白色粘土ブロック・鉄分微量
34	にぶ黄褐色	細砂中量、白色粘土ブロック少量、焼土粒子微量	83	褐色	白色粘土ブロック・細砂粒・鉄分少量、炭化粒子・細砂微量
35	灰黄褐色	細砂中量、青灰色粘土ブロック・炭化粒子・鉄分微量	84	にぶ黄褐色	細砂少量、白色粘土粒子・黄褐色粘土粒子微量
36	にぶ黄褐色	細砂中量、黒色粘土ブロック・炭化粒子微量	85	灰黄褐色	青灰色粘土粒子・細砂粒・鉄分少量、炭化粒子・白色粘土粒子微量
37	褐色	細砂中量、黄褐色粘土ブロック・炭化粒子・黒色粘土粒子・鉄分微量	86	褐色	細砂中量、白色粘土粒子・鉄分微量
38	黒褐色	黒色粘土ブロック・細砂中量、白色粘土粒子少量	87	灰黄色	青灰色粘土粒子中量、鉄分少量、細砂粒微量
39	暗褐色	焼土ブロック・細砂少量、白色粘土粒子・黄褐色粘土粒子微量	88	灰黄褐色	青灰色粘土粒子中量、白色粘土粒子・細砂少量、鉄分微量
40	にぶ黄褐色	黒色粘土粒子・細砂少量、白色粘土ブロック・炭化粒子・鉄分微量	89	黒褐色	青灰色粘土粒子・黄褐色粘土粒子少量、鉄分微量
41	にぶ黄褐色	細砂中量、白色粘土粒子・黒色粘土粒子・鉄分微量	90	褐色	青灰色粘土粒子・黄褐色粘土粒子・鉄分微量
42	灰褐色	細砂少量、焼土ブロック微量	91	暗褐色	黄褐色粘土粒子・鉄分微量
43	にぶ黄褐色	細砂中量、黒色粘土粒子少量、白色粘土粒子微量	92	黒褐色	細砂少量、白色粘土粒子・鉄分微量
44	にぶ黄褐色	細砂中量、黒色粘土粒子少量、焼土粒子・黄褐色粘土粒子微量	93	黒褐色	細砂粒・鉄分少量、黄褐色粘土粒子微量
45	にぶ黄褐色	青灰色粘土ブロック・細砂少量、鉄分微量	94	褐色	細砂中量、鉄分少量、黄褐色粘土粒子微量
46	灰黄褐色	青灰色粘土ブロック・細砂少量、黄褐色粘土粒子・鉄分微量	95	にぶ黄褐色	黄褐色粘土粒子・鉄分少量
47	褐色	青灰色粘土ブロック中量、細砂少量、鉄分微量	96	褐色	黄褐色粘土粒子中量、黒褐色粘土粒子少量、鉄分微量
48	褐色	黒色粘土粒子・細砂中量、白色粘土ブロック・鉄分少量	97	にぶ黄褐色	細砂少量、鉄分微量
49	暗赤褐色	焼土ブロック・炭化粒子中量、白色粘土粒子・細砂少量	98	にぶ黄褐色	黄褐色粘土粒子・細砂粒・鉄分少量
50	黒褐色	青灰色粘土ブロック中量、白色粘土ブロック・細砂粒・鉄分少量	99	黄褐色	黄褐色粘土粒子多量、鉄分少量
51	にぶ黄褐色	細砂中量、白色粘土ブロック少量、鉄分微量			
52	灰黄褐色	青灰色粘土ブロック中量、細砂粒・鉄分少量、黒色粘土粒子微量			
53	灰黄褐色	細砂中量、青灰色粘土ブロック・鉄分少量			

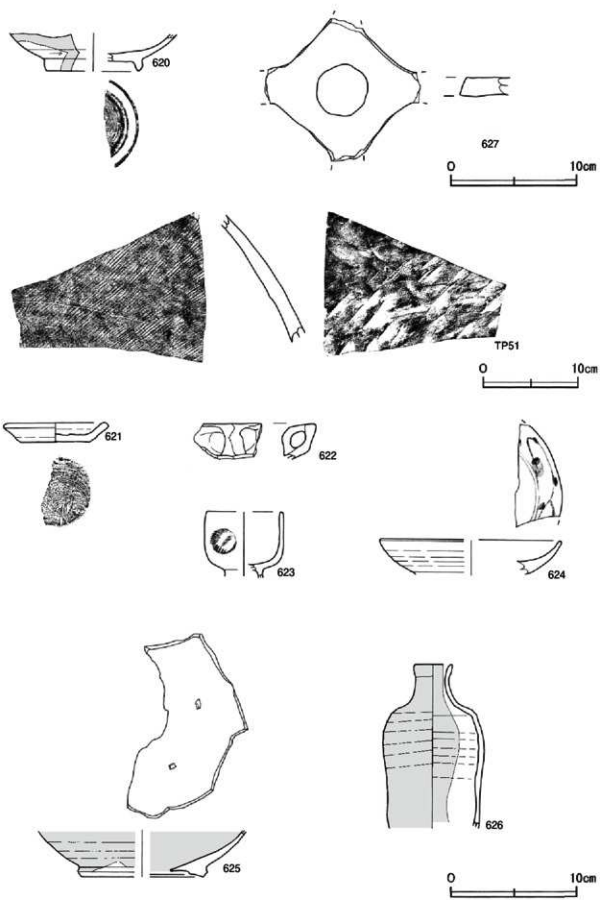
所見 第1A号旧堤防跡はそれまでに存在した第1B号旧堤防跡に更に土盛りして構築されており、時期は近代と考えられる。第1B号旧堤防跡は、土層のみの確認で正確な位置や範囲の判断は困難であるが、土層から規模は下幅が約4mと確認され、第1号石組遺構の幅とはほぼ一致する。明確ではないが、第1号石組遺構がこの堤防の下を通る暗渠と捉えれば、近世に構築されたものと推測される。

(7) 遺構外出土遺物

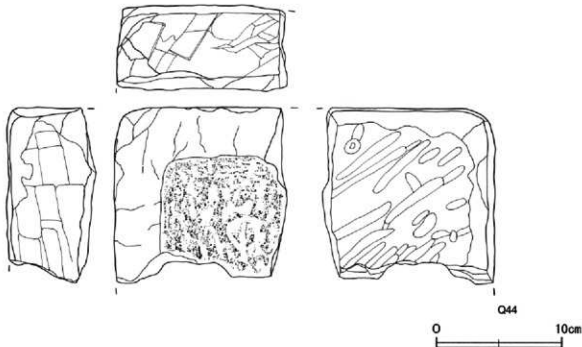
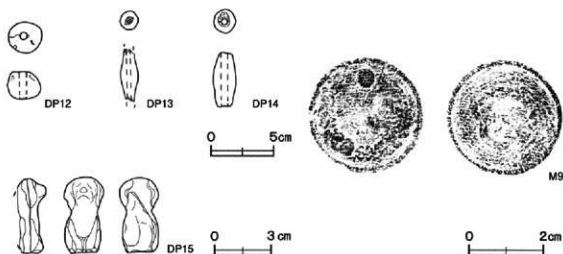
今回の調査で、遺構に伴わない主な遺物について、実測図及び観察表で掲載する。



第256図 遺構外出土遺物実測図(1)



第257図 遺構外出土遺物実測図(2)



第258図 遺構外出土遺物実測図(3)

遺構外出土遺物観察表 (第256～258図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
629	縄文土器	深鉢	-	(10.3)	-	赤褐色・長石・石英	橙	普通	R.Lの単節縄文施文	F 5 b7区	10%
TP45	縄文土器	深鉢	-	(4.6)	-	赤褐色・長石・石英・赤色砂子	にぶい橙	普通	口唇部直下に2条の平行沈線 斜位の沈線により文様抽出	F 5 e6区	中期中葉
TP46	縄文土器	深鉢	-	(4.8)	-	長石・赤色砂子	にぶい赤褐	普通	口唇部直下に2条の平行沈線及び斜位の沈線を有する扇形の罫線及び斜位の文様抽出 口唇部の沈線より口唇部の文様抽出 施文はTRの単節縄文	II A区表土中	後期中葉
TP47	縄文土器	深鉢	-	(4.4)	-	赤褐色・長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部直下に単節沈線文及び山形の扇形沈線文で口唇部の文様抽出	F 5 e7区	中期中葉
TP48	縄文土器	深鉢	-	(6.1)	-	長石・石英	明褐	普通	斜位の沈線施文	2次面G5区	中期後葉
TP49	縄文土器	深鉢	-	(3.3)	-	長石・石英	明褐	普通	口唇部に2条1組の沈線及び斜位の沈線施文・内面口唇部直下に1条の沈線	2次面G5区	中期後葉

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q 45	石鏝	(1.4)	0.9	0.2	(0.3)	チャート	有茎鏝 両面押圧調整	SH 東土中	
Q 46	潤片	2.3	2.5	0.6	2.5	頁岩	背面に前段階の調整を有する縦長潤片	K 512区	
Q 99	潤片	1.5	1.5	0.5	1.1	黒曜石	小形の潤片の未端部	L 4e9区	
Q100	潤片	1.6	1.6	0.4	1.1	黒曜石	小形の潤片の未端部	第1号墓跡東土中	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
619	土師器	高台付椀	-	(1.5)	7.6	雲母・長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部内面へう磨き 底部回転へう切り後高力磨り付行	L 544区	30% へう磨り(磨)
628	土師器	高台付椀	[15.4]	(6.2)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ 底部回転へう切り後高台磨り付行	第1号墓跡東土中	40%
630	土師器	高台付椀	-	(3.4)	-	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ 内面へう磨き 高台部欠組	F 5 a5区	5% 割溝* [□]
620	灰輪陶器	皿*	-	(3.0)	[7.2]	白色粒子	灰	良好	ロクロナデ 体部下層無軸 軸たれ付者	G 6 d1区	10%
627	須恵器	瓶	-	(1.5)	-	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	5孔式底部片	G 5 e4区	5%
TP51	須恵器	壺	-	(13.4)	-	石英・黒色粒子	黄灰	良好	体部外面斜位の平行押き	F 5 a5区	3%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・軸差	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
621	土師質	小皿	7.6	1.5	5.4	雲母・長石	橙	普通	ロクロナデ 底部回転糸切り	E 5 6区	55%
622	土師質	焙烙	-	(2.9)	-	長石・石英	黒褐	普通	体部内外面ナデ	G 5 g0区	5%
623	磁器	小碗	[5.8]	(5.2)	-	精良・透明釉	白・灰白	良好	外面丸に交文草文 割り出し高台	J 5 c1区	23% 肥後系*
624	磁器	小皿	[14.2]	(2.8)	-	精良・透明釉	灰白・灰白	良好	磨き唐草 高台部欠組	E 5 6区	3% 肥後系*
625	陶器	皿*	-	(3.7)	[9.8]	精良・灰輪	黄白・浅黄	良好	細かい貫入 割り出し高台 高台部無軸 下ナデ組	J 5 c1区	30% 肥後系*
626	陶器	小瓶	2.9	(13.0)	-	精良・鉄輪	灰・にぶい灰	良好	製部押圧 沈線 べこかん形	BAR 東土中	3% 肥後系*

番号	器種	最大径	口径	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
DP12	球状土鉢	2.7	0.6	2.2	13.0	土製	ナデ 一方からの穿孔	M 4 e7区	

番号	器種	長さ	幅	口径 (口径)	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
DP13	管状土鉢	(4.3)	1.4	0.4	(6.2)	土製	ナデ 一方からの穿孔	L 5 h5区	
DP14	管状土鉢	4.4	1.8	0.5	11.0	土製	ナデ 一方からの穿孔	F 5 d0区	
DP15	土人形	4.0	2.1	(1.5)	(9.3)	土製	犬形 ナデ 型合わせ	F 5 a5区	

番号	銭名	径	孔幅	重量	製造年	材質	特徴	出土位置	備考
M 9	銅貨	3.1	0.2	11.7	不明	銅	二銭*	D 5 8区	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q 44	石押*	(14.0)	(13.5)	(7.0)	(3600)	安山岩	上・側面削り痕有り 文字有り*	BAR 東土中	

第5節 ま と め

当遺跡は、小貝川右岸の堤防内の沖積低地に位置している。周辺は近世までは、鬼怒川・小貝川が氾濫を繰り返し、流域に幾度となく洪水をもたらし、流路はさまざまに変遷していた。そのため、川の氾濫や浸食・堆積作用によって、確認することが困難な遺跡がたくさんあると考えられる。このような河川流域の沖積低地の遺跡は、堤防が築かれていなかった時代には人が住めるような場所でもなかったと考えられていたため、確認することも困難であった¹⁾。本県でも、大河流域の沖積低地における遺跡の調査事例は非常に少ない。その中で、当遺跡は生活の痕跡が確認された極めて貴重な遺跡である。

今回の調査は限られた範囲だけで、全容が明らかになったわけではない。調査Ⅰ区・Ⅱ区をあわせて、二次面からは縄文時代の陥し穴、屋外炉、土坑、ピット群、遺物包含層が、一次面からは当遺跡の中心となる平安時代の竪穴住居跡、工房跡、土坑などが確認され、集落が営まれていたことが明らかになった。中・近世では堀跡、溝跡が確認されている。また、時代や時期は明確でないが、旧堤防跡や旧河道跡も確認されている。

ここでは、当遺跡の特筆すべき点を取り上げながら、それぞれの時期の概要を述べてまとめたい。

1 縄文時代

調査Ⅰ区では、調査区域中央部の第二次面で遺構が確認されている。第4・5号土坑の2基は、遺物は出土していないが、規模や形状から縄文時代の陥し穴と判断した。また、第3号土坑は、この陥し穴の周辺に位置していることから、縄文時代のもつと判断した。後期の土器片が遺構外から出土している。縄文海進の最盛期には、常総市(旧石下町)付近が汽水域になっていたと考えられ、下妻台地の南側の低地に海は進入していなかった²⁾。後期を中心とした集落が近くにあることが推測される。

調査Ⅱ区では、調査前の試掘で現地表面下1mほどの黄褐色土中に遺構が確認されており、平安時代の遺構の調査終了後、黄褐色土まで掘り下げて調査を行った。

ⅡA区の北側では、現地表面から20cmほど掘り下げたところで黄褐色土が表れ、1mほど掘り下げなければならぬと思っていたため、この高さから黄褐色土が表れたことは驚きであった。この黄褐色土は火山灰起源と思われる自形をした鉱物が含まれているが、河川によって運搬・堆積された氾濫原堆積物と考えられ³⁾、当遺跡内の土壌は川の影響をうけて形成されていることが再確認されている。この高さから中期中葉の土器片を多量に含む遺構が確認された。出土した土器片は阿玉台式を主体として、膳板式、大木式のものが含まれている。形状は不整形円形もしくは卵形と表現するのが適切と考えられる溝状の掘り込みがあり、西側で溝がとぎれながら延びている。土器片は北西から北東側の溝内に、投棄された様相を示し、集中して出土している。遺構確認時は、住居跡と考え調査を進めたが、炉、柱穴が確認できなかったため周溝状遺構として扱った。土器片の出土状況及び遺構の形状をもとに、中期中葉の住居跡と捉えられるかどうかは、今後の類例の報告を待ちたい。

次に、この時代の地形について考えてみたい。周溝状遺構が確認された黄褐色土の面は、第48図では第17層の上面にあたり、基本土層面では第12層に相当する。今回の調査では、この黄褐色土の面を指標として縄文時代の遺構を確認してきた。この層を南へたどっていくと緩やかに傾斜し、第1号遺物包含層の南端を過ぎたあたりからまた緩やかに立ち上がり始める。第48図では、第1号周溝状遺構までの土層を示すことができなかったが、周溝状遺構の確認面の高さは標高約178m、第48図の北端に表れる第17層の上面の高さが標高約168mであるので、約1mの高低差があり、更に南に行けば高低差は開いていく。これらのことから、周溝状遺構の位置する周辺は、当時丘陵状の高まりであり、南方向に低くならだかに傾斜していたと考えられる。第1号遺

物包含層の南端からは第17層の上に泥質の黒色土の層である第16層がのっており、南の立ち上がりは、通路により土層が確認できないが、通路から北には第16層が確認されないことから、第1号遺物包含層の南端付近が一番低くなっていたところと推測される。その第16層の上に黒褐色土層である第14・15層がのっている。これらの層は基本土層図の第9・10層にあたり、包含層を形成している層である。この第14・15層は、第2号遺物包含層もこの層に相当するものと推定され、広範囲に広がっているものと考えられる。遺物包含層は、この谷津状の低地に泥とともに土器片が流れ込んで形成されたものと考えられる。第1号遺物包含層は中期中葉の土器片が主体であり、第1号周溝状遺構周辺からの流れ込みが推定される。第1号周溝状遺構周辺から落ち込みを見せている黄褐色土の面は、第1号遺物包含層付近で低くなった後、緩やかに立ち上がり、多少の起伏はあるが調査ⅡB区まで広がりをを見せている。第2号遺物包含層付近では、包含層下の黄褐色土中から、屋外炉や前期前葉の土器片が出土した土坑が確認され、前期前葉から中期中葉の時期にはこの黄褐色土が生活面であった可能性も考えられる。調査ⅡB区には、黄褐色土の面から屋外炉、ピット群が確認されている。第6号ピット群は第1号屋外炉の周囲に半円を描くように確認されており、当初は住居跡として調査を行ったがピットの配置が全周せず、住居跡と捉えられなかった。遺物包含層を形成する黒褐色土層にあまり焦点を当てずに調査を進めたが、整理作業を通して、黄褐色土層の上にあるこの黒褐色土層を精査することで、さらに縄文時代の様相や当時の地形が明らかになると考えるに至った。

2 平安時代

(1) 時期について

調査Ⅰ区では、南部から中央部にかけての第一次面で竪穴住居跡10軒、Ⅱ区では第1号堀跡付近を除きほぼ全城から63軒が確認されている。

出土した最も古い時期の土器片は、口縁部を上方向に積み上げている甕に代表され、9世紀後葉のものと考えられる。その他の出土土器は高台付碗、口縁部を角形や丸形に仕上げた甕、小皿などの土師器を主体としており、須恵器片の出土量が少ないことから10世紀以降のものと考えられる。10世紀以降の土器編年案は、県内では数少なく、周辺の遺跡をもとにした編年案も確立していないことから、当遺跡から一番近いつくば市の烏名熊の山遺跡における編年案を参考に時期判断を行った⁴⁾。当遺跡の時期を5段階に分け、それぞれの段階に年代をあてはめているが、今回の調査だけでは、明確な時期決定はできず、遺跡全体の発掘調査終了後の十分な検討を待ちたい。

第1段階は、口縁部を上方向に積み上げる常盤型の甕、皿が出土する段階で、9世紀後葉と考えられる。住居跡が調査区域外に延びていたり、攪乱を受けていたり、削平のため覆土が薄かったりと全容は明らかではないが、第3(調査Ⅰ区)・19・38・44号住居跡が該当するものと考えられる。

第2段階は、土師器高台付碗を主体とし、角形や丸形、積み上げたりして多様化した口縁部を持つ甕が出土する段階で、10世紀前半と考えられる。また、酸化焙焼成の橙色を呈した須恵器坏や土師器瓶、羽釜も出土している。第6(調査Ⅰ区)・27・29・30・33・37・39・43・71号住居跡が該当するものと考えられる。

第3段階は、前段階よりも高台が内側につき形態の高台付碗を主体とし、口径10cm程度の小皿、足高台付碗が出土する段階で10世紀後半と考えられる。また、小皿と区別しにくい坏や置き甕も出土している。第1・2・5・7・10(調査Ⅰ区)・17・20・25・40～42・46・51・53・54・57～59・70・73～75・77号住居跡が該当する。

第4段階は、高台付椀の高台が前段階に比べて低脚化するとともに小皿の出土が普遍化し、口径が10cm以下の小皿が出土する段階で、10世紀後葉から11世紀前葉と考えられる。第18・21・23・35・36・45・47・48・55・56・60・61・64・69号住居跡が該当するものと考えられる。

第5段階は、高台付椀の高台はさらに低脚化が顕著で断面三角形のものや外反するものが見られ、口径が縮小し9cm程度の小皿が出土する段階で、11世紀前半以降と考えられる。第11・15・24・28・31・34・49・65・66・68号住居跡が該当するものと考えられる。

(2) 住居の形態について

住居跡の規模は大きくても一辺が4mほどで小形のものが多く、柱穴が確認できる住居跡は少なかった。畷内における住居跡の様相は、古墳時代から平安時代になるにつれて小形化する傾向が見られるが、当遺跡は一辺が2mほどの極めて小形の住居跡も確認されている。すべての住居跡は竈を持っており、北竈を持つ住居跡と東竈を持つ住居跡とに大きく分けられる。竈の位置は、10世紀代になると北壁から東壁へと移り10世紀前半には住居跡の主軸方向がやや東に振れ始め、小皿が出土する10世紀後半には東壁に竈が構築されるという傾向が見られる。東壁に竈を持つ住居跡では、東壁南寄りに付設されている住居跡が多く確認されている。11世紀代に構築されたと考えられる住居跡の竈の位置には規則性が認められず、今後の調査の結果を待ちたい。竈の形態は、焚口部幅に対して煙道部が長く、非常に細長いのが特徴的である。また、袖部が確認できなかった住居跡も多く、その理由としては以下のことが考えられる。覆土の粘土質の層は乾燥するとかなり固く縮まり、調査中に何度も移植ごとが折れまがってしまうほどの固さであった。粘土層の地山の中に粘土層の覆土が存在し、地山の粘土をそのまま利用して竈を構築したと推定される。現在、当地域は細粒灰色低地土壌の地域であり、後背湿地となっていた時期もあると推定され³⁾、火床面や内壁など赤変硬化している部分は確認できたが、地山と同化してしまった部分については確認できなかったと考えられる。また、床の面積が小さいため、室内空間を広くするために、はっきりと張り出した袖部を構築しなかった可能性も考えられる。

(3) 洪水による影響について

当遺跡は、覆土などからもわかるが洪水の影響を受けている。洪水が起これば住居は埋没してしまい、同じ人たちが、あるいは新しく移り住んで来た人たちは不明であるが、水が引けばまた新しい住居が作られるといった時期がおおよそ100年にわたってこの地でくり返し続いていたと推定される。今回の整理作業において、洪水の影響を受けながらもこの地に住み続けた様子を層位的に捉えられればと考えていたが、明確に捉えきれなかった。ただ、第60号住居跡と第75号住居跡の関係には、洪水の影響を受けた痕跡が確認されている。第75号住居跡が下、第60号住居跡は上に確認されており、当然第60号住居跡の方が新しい。土層を観察すると、第60号住居跡が第75号住居跡を掘り込んでおらず、両住居跡の間に、立ち上がりの見られない層が確認されている。この層は氾濫による堆積層と考えられ、洪水の後に、新たに住居が作られたことが確認できる事例と考えられる。

(4) 工房跡について

ⅡB区北部に確認されており、当初住居跡として調査を進めたが、黒灰色をした溶融物が付着した坯、小皿が出土しており、これらが増埧として使用されたと考えられたため、工房跡として判断した。溶融物が付着した坯、薄緑色の付着物のある石、工房内から出土した粒状物の3点の成分分析を行った。分析結果の詳細は付章を参照していただきたい。坯に付着した溶融物からは銅・鉄・錫・鉛の金属元素が検出されており、この坯は鉛・錫を含む銅合金の溶解作業あるいは溶融物の受器として使用された可能性が高い

という結果が出ている。また、石に付着した薄緑色をした付着物は、微粒の銅洋を含む土砂が湿分とともに固着したものであり、石は作業現場付近に存在していたものと考えられている。粒状物は銅合金の溶解作業中に生成した湯玉と考えられるという結果が出ている。これらの結果から、この工房跡では銅合金の溶解作業が行われていたことが推定され、また、鋳型と考えられる土製の破片も出土しており、溶解から製品の製造といった一連の作業が行われていたことが推測される。しかし、出土した鋳型片はいずれも細片で、製造されていた製品について解明するまでには至らなかった。

工房跡の形態は、長軸5.2m、短軸4.0mの隅丸長方形を呈している。東壁中部からやや南寄りの位置に竈、ほぼ中央部に炉が確認されており住居兼工房跡と考えられる。炉の形状は、長径34cm、短径22cmで楕円形を呈している。炉床・炉壁には、銅の成分が流れ出たことにより青緑色に変色した部分が確認された。また、火熱を受けて硬化しているが、赤変した部分は確認されなかった。ピットは15か所確認されているが、柱穴とは考えられない径20cmほどの小ピットが9か所確認されている。覆土に青緑色の成分を含むピットもあり、炉や鋳型を埋め込む施設等の可能性も考えられるが、明確に判断することはできなかった。また、北東コーナー付近からは炭化材が出土しており、製品の製造過程において使用された可能性も考えられる。

工房は、10世紀後葉以降に機能していたものと考えられ、この時期、この集落における生産活動の中心が、この工房であった可能性も考えられる。今回の調査で工房跡は1軒のみの確認であったが、付近には土器焼成遺構と推測される土坑も確認されており、一体となった生産活動が行われていたとも推測され、西側の調査による成果を待ちたい。

(5) 歴史的な背景について

歴史的にみると、この時期は平安時代の中期にあたり、10世紀頃を区切りとして寄進系荘園が発達した時期である。これは、律令体制からの離脱を目的とした、地方の大小の土地所有者からの中央権力者への積極的結合によって成立したものである。下妻地方においても、904年に岡田郡が豊田郡へと改称され、この豊田郡を平将門は地盤としており、『将門記』には本拠地として、鎌倉の宿（旧子代川村鎌庭）が登場している。また、馬の調教の場として設営された「御厩」が存在し、大結馬牧（放牧地と厩と製鉄施設とを一体のものとする兵部省所管の官牧）の全体の経営管理責任者は将門にあり、この支配を巡る争いが平将門の乱（935～940年）の大きな要因の一つとなっている。この地域も戦乱に巻き込まれ、平良兼と戦った「子剣之渡」は旧子代川村大岡木に比定されており、小貝川の渡し場で河川交通の拠点であった可能性も考えられている。乱後、将門の敗北の上に乗ってこの地方の歴史が展開し、勝者の繁盛流平氏一族は常陸南部から下総北部にかけて確実に勢力を展開させた。平氏一族の富豪化は顕著で、繁盛の子平権幹は長保2年（1000年）に五位の位を入手し、同時に絹と馬を京に送進するなど、10世紀代には、平氏がこの地方に勢力を伸ばしていったことが分かる。平氏一族の在地基盤の確立とともに、古代郡縣の解体・変容が進み、12世紀中葉頃には「下妻庄」「松岡庄」なる荘園が出現している⁴¹。当地域は、豊田郡への郡名改称にも見られるように、低地開発が進んでいたと考えられる地域であり、新羅糸里・加養条里遺跡の他に、肘谷・樋橋・柳原などに糸里遺跡が存在したことが報告されている⁷⁾。当遺跡の西側には、山尻・肘谷・樋橋付近を蛇行する旧河道の痕跡があり、蛇行の規模が大きく、鬼怒川の本流あるいは分流であったと考えられている。下妻市南部は、後背湿地が多いが、当遺跡の周辺は、沖積層の基底等高線が高く、削り残された部分ではなかったかと考えられ⁸⁾、この旧河道によって大規模な自然堤防が発達し、比較的広い面積を持つ微高地上になっていたと推定される。その微高地上に人々が進出し、集落が形成されたのではないだろうか。また、平氏一族の影響力が大きかった地域でもあり、低地開発のための集落であった

可能性も考えられる。

3 中世・近世

調査Ⅰ区では、南部の第一次面で溝跡1条、北部の第一次面で溝跡1条が確認された。南部の第5号溝跡からは内耳鍋が出土していることから、時期は中世と判断した。溝が区域外へ延びていることと調査区域が極端に細長く、周辺の様相がわからないため性格は不明である。北部の第4号溝跡からは瀬戸産の陶器が出土しており、時期は近世と判断した。位置する地形と形状から用排水路として機能していたと考えられる。

調査Ⅱ区では、堀跡1条、溝跡9条、石組遺構1か所が確認された。堀跡や溝跡からは、生産年代が17世紀後半から19世紀後半と考えられる陶・磁器が出土しており、近世に機能していたものと判断した。

第1号堀跡は、調査ⅡA区中央部で「T」字状の分岐が確認され、クランク状に屈曲を繰り返し南へ向かっている。調査ⅡA区の南部で第19・22号溝跡と合流するものと推定され、その後、西へ向かい調査区域外に延びている。第19・22号溝跡は旧堤防跡の下から確認されており、この旧堤防跡の東側には旧河道跡が確認されていることから、第19・22号溝跡は、第1号堀跡と旧河道跡をつなぐ役割を果たしていたものと推定される。いずれも旧河道側から底面のレベルが堀跡に向けて下がっており、取水溝の役割を果たしていたと考えられる。第19号溝跡は3条に分かれており、本報告では北から順に19A～19C号溝跡としている。いずれも同時期に存在していたと考えられ、旧河道からの取水施設と考えられるが、第22B号溝跡とともに開渠の状態を確認されているため、旧堤防構築以前に機能していたものと考えられる。また、第22A号溝跡は石組遺構を伴い、B号溝跡を埋め戻して構築されたものと推定される。石組遺構は旧堤防跡との関連が予想されることから、開渠していた第19号溝跡より後の時期に機能していたものと考えられる。ただ、それまで4条あった取水溝から得る水量を、堤防の下を通して構築されている第22B号溝跡だけでまかなえたかどうかはさらに検討する必要があると思う。

第1号堀跡は、西側の調査区域の調査が進むとともに全容が明らかになるものと思われる。そのクランク状を呈する平面形から何らかの区画を示すものと考えられ、灌漑施設の可能性は高い。しかし、今回の調査では、水田跡は検出されておらず、調査前の現況は畑地や原野であり、明治16年作成のフランス式彩色地図⁹⁾でも当遺跡周辺は畑となっているため、河川から水を取り込んで流す灌漑施設と現段階で明確に判断することはできない。また、第16・18号溝跡は、旧堤防跡の裾野に沿うように掘削されており、これらの機能についても傾例をもとにした検討課題としたい。

調査Ⅰ・Ⅱ区を通して、堀跡、溝跡が多数確認されている。現段階では用・排水施設としての利用が想定されるが、当遺跡の中央部の調査が進めば、その性格も明らかになると思われる。

4 石組遺構と旧堤防跡について

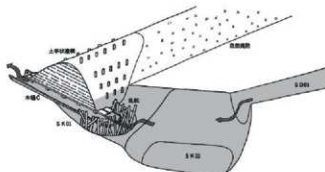
第22A号溝跡と旧河道跡の合流部付近からは、旧河道跡と直交するように石組遺構が確認されている。これは五輪塔を底面、南北側面、上面に敷き詰め、直方体状に組んだもので、長さ4.0m、幅0.6m、深さ40cmほどの規模で構築されている。空風輪1、火輪27、水輪2、地輪22、計52点の五輪塔が使用されており、少なくとも27体の五輪塔を解体して構築されている。使用された五輪塔はその形態から16世紀代に製作されたものと考えられる。石組みされた内部には土が流れ込んでいたが、土がぎっしりと詰まっている状態ではなく、空洞部分も見られたことから、構築当初は空洞であったと考えられる。この石組遺構は、土層から第22B号溝跡を埋め戻した後に構築されたものと推定される。石組遺構の構築目的については、堤防の強度を保つための基礎という

ことも考えられるが、中を空洞にし、箱状に五輪塔を組む必要性には疑問が生じる。開渠として機能していた第22B号溝跡と第19A～C号溝跡に代わる施設として、堤防構築に伴ってこの石組遺構が構築されたものと推測する方が理にかなうように思われる。水害を防ぐために堤防を構築しても継続して第1号堀跡へ川から水を供給する必要性があり、堤防内に水を通して水を取り入れる方法を考えたのではないだろうか。石組遺構には上面にも五輪塔を敷き詰めることで蓋の役割をさせていたと考えられる。ただ、堤防保護のために、堤防の中に水を通す方法があるかどうかは、検討の余地がある。

次に堤防についてであるが、調査当初の土層観察では、最初台形状に土を盛って堤防の基部を作り、更にそれを覆うように土を盛って堤防を構築したと考えていた。しかし、整理の段階で石組遺構と堤防の関連を調べている際に、基部として構築されたと考えていた部分の幅と石組遺構の長さが4.0mほどほぼ一致することから、堤防が2段階にわたって機能していた時期があり、最初の段階の堤防、第1B号堤防跡と石組遺構が関連するものと推定した。この第1B号堤防跡は、土層のみの確認であるため、河道に沿ってどのように連なっていたのかは不明である。堤防の構築方法とあわせて今後検討の余地があると考えられる。また、堤防を構築するに際して石組遺構を作ったのか、もともとあった堤防のその部分だけを掘削し、設置した後に埋め戻したのかは明確ではない。第1A号堤防跡であるが、土層観察において旧河道跡西岸ぎりぎりの位置から構築されているものと捉えられる。河川ぎりぎりの位置に堤防を構築するとは考えられず、この第1A号堤防跡が構築されたのは、ある程度河道の流路が東側、現流路側へ寄っていた時期と推定される。

石組遺構は、堤防の下を横断していることから竈樋として機能していたものと推定される。竈樋についても全国から調査事例が報告されている。構築時期と、樋の構成材が違っているが、愛知県の「室遺跡」では⁸8世紀から10世紀後半にかけて作り替えをしながら機能していたと考えられる木樋B・C、11世紀前半に設置されたと考えられる木樋Aについて報告されている。この報告書では、わかりやすい構造図が掲載されているので、転載させていただくことにする（第259図）。構造図は木樋Cを例にしているものである。河川から取水し、導水溝によって水を導き入れ、土手状遺構（堤防）の手前に水溜を掘り、一旦水を貯めてから、木樋を通して、土手状遺構の内側に水を送るという構造である。土手状遺構の内側には水田の存在が想定され、灌漑施設の一部として機能していた可能性が考えられている。水の取り入れ口には杭を多数打ち込みゴミの浸入を防いだり、また取水側より高い標高の排水側へ水を送る原理を取り入れたり、水流が直接土手状遺構に当たらないようにするなどの工夫がされている。当遺跡においても、ぎりぎりの位置に堤防を構築したとは考えられず、竈樋として構築された石組遺構の河川側がすぐに取水口になっているものではなく、何らかの施設が築かれていたと推定されるが、それらの構造を明確に捉えることができなかった。また、石組遺構が確認された第22B号溝跡を含め、当遺跡で確認された第22・19号溝跡の底面の標高はそれぞれ第1号堀跡に向かって低くなっているが、「室遺跡」のように標高の低い位置から高い位置へ水を送る方法が確立していたとすれば、これらの溝跡が排水溝として機能していたことも考えられる。

では、ある程度の高い身分を持った者の供養塔である五輪塔を暗渠として使用するものなのかという疑問が生じる。使用されている石材の性格は違いますが、大阪府狭山池の「中樋



第259図 大型木樋を伴った灌漑施設の構造図
『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第49巻「室遺跡」より転載』

遺構¹³⁾にその類例を認めることができる。「中樋遺構」が構築されたのは、慶長13年(1608)の改修時とされている。樋本体の両側に古墳の家形石棺などを2段に積み上げて、中樋に集まる水の勢いから堤防を守る、いわゆる護岸設備としての役割を持たせていたと考えられている。中樋遺構の発掘調査時に、石棺と同時に出土した重源狭山池改修碑の銘文からは、建仁2年(1202)の狭山池改修時に、僧重源によっていずれかの古墳から石棺がこの地に搬送され、石工によってそれらを加工し、樋管として利用したことが明らかとなっている。その時樋管として利用されていた石棺が慶長の改修時に掘り出され、今度は護岸として再々利用されたものと考えられている。僧侶である重源によって石棺を樋管として利用するこの工事の指揮がとられたことは非常に興味深いものである。使用された石棺は古墳時代後期から終末期のものが主体とされ、石樋として使用された時は、石樋として使用された時から500年以上の歳月を経ている。

当遺跡の石組遺構に使用されている五輪塔の制作年代は16世紀代と考えられ、おそらく200年を経過した後には石組遺構は構築されたと推定される。率直に考えるならば、このような再利用が行われる背景には、「被葬者・被供養者の権力が及ばなくなった」ということがあげられるであろうが、そのあたりの宗教観には更に検討の余地がありそうである。石棺という墓の構築材を、樋として利用している狭山池の例をみてもわかる通り、当遺跡の五輪塔を利用した石組遺構が暗渠として機能していた可能性は非常に高いものと考えられる。

5 旧河道跡について

調査ⅡA区の堤防の東側、小貝川側から河道跡が確認された。東側が調査区域外になるため全容は明らかではないが、底面には砂が堆積しており河道が埋まったものと捉えた。

現在の鬼怒川・小貝川は真壁・結城地方を別々に南流しているが、奈良時代には「毛野川」とよばれ、下妻市長塚付近で大きく東へ向きを変え、下妻台地の南側を東流し、下妻市東古沢付近で小貝川と合流する一つの流れであった。「常陸国風土記」の新治郡の郡界の条には「南は毛野川」とあり、この「毛野川」はこの流れを指しているものと思われ、常陸国と下総国の国境となっていた。現在もこの旧河道の一部は糸織川として利用されている。その後、『将門記』には「子剣之渡」の記載があり、10世紀代には、「子剣川」と呼ばれる流れが存在していたと推定されることから、平安時代には現在のような鬼怒川と小貝川の流路が成立していたと考えられている。明治16年作成の彩色地図や昭和23年に米軍により撮影された空中写真¹⁴⁾からは、それらの痕跡が確認できる。空中写真には様々な旧河道跡の痕跡が確認されており、当遺跡付近には、現在の鬼怒川からの分岐地点は不明瞭であるが、下妻市二本紀、新堀の北側を抜けて、東古沢付近で現在の糸織川に合流し、さらに谷田部・山尻・肘谷の集落を蛇行しながら南流し、樋橋付近で現在的小貝川に合流する流れも確認できる。このように当遺跡周辺は様々な旧河道の存在が確認できるのである。

今回の調査で確認されたのは、史実から判断すると、「子剣川」と推測することもできる。当遺跡の2kmほど下流に「子剣之渡」と比定される地点が存在している。調査区域の東側を流れる現在的小貝川の川幅が、調査区域内にまで広がっていたのか、また、流路が調査区域側に寄っていたかといった判断は、流路が変化する河川において明確にすることはできない。明治16年作成の彩色地図で、当遺跡付近を観察してみると、川の流れも現在とほとんど変化がないように見え、今回の調査で取り除いた堤防も確認できる。従って、調査区内にまで川幅が広がっていたのはこの時期より前ということになる。遺物が出土する位置は川底周辺からであり、川の埋没過程に流れ込んだというよりも、川が存在した時期に流れ込んだものが川底に留まった、または流されてきたと考えの方が自然であると考えられる。この推察から、出土した遺物は、9世紀後葉から11世紀前半までの土器であり、ほぼ当遺跡の年代と一致することから、集落で使用されていた土器が流れ込んだものと考

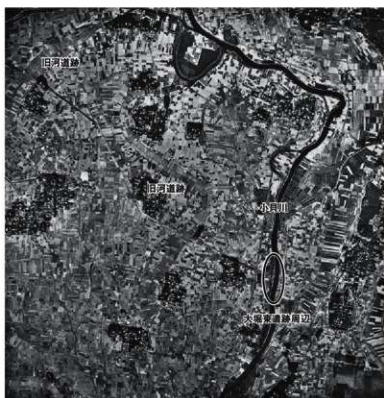
えられ、平安時代の集落があった当時、この位置に川が流れていた可能性は高い。

遺物の出土状況については、まともに出土する位置が点在している。特に調査区域南部に、土器片とともに木製品や木片が多数出土している地点が確認されている。川の運搬・堆積作用から考えると、蛇行する川の湾曲する先端部（ポイントバー）を少し過ぎて水流が弱まる位置（滑走斜面）は水流が弱まるため物が堆積しやすく、ちょうどこのあたりが当時、この滑走斜面に当たるものと考えられる³¹。口絵カラーの写真は下流側から撮ったものであり、この時すでにⅡA区の堤防は取り去ってしまっているが、下流から堤防に沿って目を移してみると昔の川の流路が想像される。そう考えるとまともに出土する位置が点在することから、この河道の流路が直線状ではなく様々な蛇行していたものと考えられる。

次に、堤防については、明治16年作成の彩色地図には旧堤防跡の存在が確認できる。また、昭和23年の米軍撮影の空中写真には、調査Ⅰ区西側に新堤防が南北に築かれているのが確認できる。旧堤防の構築時期については、「下妻市史中 近世」に、江戸時代に入り、寛保2年（1742）、安政4年（1775）、7年、天明3年（1783）と氾濫を繰り返していた下妻市高道祖・比毛付近の蛇行部分（大曲り・七曲り）に対する流路改修工事を、流域住民が幕府に嘆願するも、なかなか聞き入れない中で、



第260図 明治16年作成フランス式彩色地図（財）日本地図センター発行



第261図 米軍撮影の空中写真（昭和23年撮影） 国土地理院

古沢、加養、谷田部、山尻、樋橋、柳原六か村が水防組合を結成して、農民自らの手で、小貝川西岸の山尻村境から樋橋村境の柳原村地内に1360間の堤防を築いたという記録が「柴崎一家文書」に残されていると掲載されている¹⁴⁾。市史からでは堤防が築かれた年代は不明であるが、この時に築かれた堤防の位置を地名から判断すると、当遺跡付近に築かれたとも推測でき、明確ではないが流路改修工事に対する嘆願が継続して行われた18世紀後半の時期に、当遺跡に現存していた堤防が構築された可能性も考えられる。また、この時機築されたのが当遺跡に存在していた堤防とするならば、規模、当時の労働力から推定して、第1B号堤防跡であったと考えられる。



第262図 平成15年撮影の空中写真 国土地理院

6 小結

今回のⅠ、Ⅱ区の調査で当遺跡の様相が少しずつ解明されつつあるが、遺跡全体の様相解明には今後の発掘調査の成果を待たなければならない。ここで、当遺跡の downstream に所在する小貝川川底遺跡との関連性について述べたい。小貝川川底遺跡は、旧千代川村とつくば市にかかる愛国橋周辺に位置し、川底から大量の土器が採集されている。土器の年代は縄文時代から近世までと長期にわたっているが、8世紀初頭から11世紀前半までが主体となっている。遺物は、過去の洪水によって二次堆積したものが、現在の流路によって再び洗い出されている可能性があり、採集地点に集落が営まれていたとは考えにくい。逆に、遺物量や個々の遺物の遺存状況から遙か上流から流されてきたとも考えがたく、採集地点のごく近くに大規模な集落が存在していたのではないかと指摘されている。当遺跡は、小貝川川底遺跡から約1km上流という近い場所に位置し、時期も9世紀後葉から11世紀前半である。現在の調査の推移を見て、かなり大規模な集落跡と考えられるため、指摘された集落跡である可能性も考えられる。

今後の調査によって年代や性格が検討され、低地開発のための集落跡であるのか、小貝川川底遺跡との関連性はあるのかなど、当遺跡の解明が明らかにされていくことを期待したい。また、鬼怒川・小貝川の流路の変遷が大きく関係しており、地学的な分野からも検討されていくことを期待したい。

明治16年の彩色地図と昭和23年、平成15年¹⁶⁾の空中写真を掲載したが、当道跡の東側を流れる小貝川の流れは、あまり変化がないと見てとれる。しかし、新たな堤防が築かれたり、川岸が掘削されていたりと水害から人々の生活を守るための努力の痕跡は写し出されている。調査終了後、既に調査Ⅱ区内は川幅拡張工事が開始されており、当道跡周辺の様相が変化している。空中写真が次回撮影される際には、水害を防ぐための努力の成果として、また違った小貝川の姿が写し出されることと思う。最後に、3時期それぞれの当道跡付近を拡大したものを掲載し、本報告を終わりにする。



第263図 明治16年作成彩色地図



第264図 昭和23年米空軍撮影



第265図 平成15年国土院撮影

注

- 1) 福田健司「多摩川中流域における沖積地の開発－沖積地の道跡と開発の契機を探る－」〔帝京大学山梨文化財研究所研究報告〕第7集 帝京大学山梨文化財研究所 1996年10月
- 2) 千代川村史編纂委員会「村史 千代川村生活史 第1巻 自然と環境」千代川村 1998年8月
- 3) 元筑波大学助教（陸域環境研究センター）池田史代のご指示による
- 4) 福田義弘「熊の山道跡 鳥名・福田坪一休型特定土地調整事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」〔茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告〕第190集 2002年3月
福田義弘「熊の山道跡出土の平安時代の土器様相－土師器を中心として－」『道跡の研究』阿久津久先生還暦記念事業実行委員会 2003年3月 著者は、平安時代をⅠ～Ⅳ期に分け、Ⅰ・Ⅱ期を9世紀後半、Ⅲ期を10世紀前半、Ⅳ期を10世紀後半、Ⅴ～Ⅶ期を10世紀後半からそれ以降、Ⅷ期以降の実年代については、今後の研究課題としている。
- 5) 註2)に同じ
- 6) 下妻市史編纂委員会『下妻市史上 原始・古代・中世』下妻市 1993年3月
- 7) 赤井博之「鬼怒・小貝川中流域における低地道跡の基礎的研究」〔茨城県史研究〕第79号 茨城県立歴史館 1997年10月
- 8) 註2)に同じ
- 9) 明治前期測量2万分の1フランス式彩色地図－第一軍管地方二万分一迅速測量図復刻版－ 茨城県下妻市北部・真壁郡岡城町地区・茨城県下妻市南部・結城郡八千代町南東部・千代川村・石下地区 1/20000を任意縮小 実物はカラー（財）日本地図センター発行
- 10) 川井啓介 柳泉輔也 大橋正明他「室道跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』第49集 1994年3月
- 11) 市川秀之 植田隆司 光谷拓夫 渡道正巳『狭山池 埋蔵文化財編』狭山池調査事務所 1998年3月
- 12) 国土交通省国土地理院 昭和23年10月22日米空軍撮影空中写真 1/15860を任意縮小（財）日本地図センター発行
- 13) 註3)に同じ
- 14) 下妻市史編纂委員会『下妻市史中 近世』下妻市 2004年11月
- 15) 註7)に同じ
- 16) 国土交通省国土地理院 平成15年12月7日撮影空中写真「真図」1/30000を任意縮小（財）日本地図センター発行

参考文献

- ・佐久間好雄監修『国説 結城・真壁・下館・下妻の歴史』郷土出版社 2004年2月
- ・下妻市史編纂委員会『下妻市史下 近現代』下妻市 2005年3月
- ・千代川村史編纂委員会「村史 千代川村生活史 第3巻 前近代史料」千代川村 1998年8月
- ・鬼怒川・小貝川読本編纂会議、編纂委員会「鬼怒川・小貝川－自然 文化 歴史」鬼怒川・小貝川サミット会議 1993年3月
- ・寺門千穂 大岡式「明石道跡 明石北原道跡 上白畑道跡 主要地方道つくば真岡線緊急地方道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書」〔茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告〕第164集 2002年3月
- ・嶋志田祐一 早川麗司「大田神社前道跡2 北関東自動車道（協和～友都）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅹ」〔茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告〕第248集 2005年3月
- ・佐々木聡編著『鉄と鋼の生産の歴史 古代から近世初頭にいたる』2002年2月
- ・第7回日本埋蔵文化財研究会山梨大会実行委員会「治水・利水道跡を考える－人は水とどのようにつきあってきたか－」第1分冊資料編 第2分冊発表要旨・紙上発表編 1998年2月

付章

大堀東遺跡出土金属遺物の成分分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

大堀東遺跡では、発掘調査により、平安時代（9世紀後半～10世紀）の住居跡内から銅滓および銅滓付着物が検出されている。今回の自然科学分析では、これらの金属学的調査を行い、遺物の由来ならびに製作過程に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、銅滓付着土器（試料 No. 1）、銅滓付着石（試料 No. 2）、銅滓<粒状物>（試料 No. 3）の3点である。

2. 分析方法

各遺物の外観の特徴を記録した後、代表的な箇所を数mmから数cmの大きさで採取した。採取した試料は、断面が観察面になるように真空下でエポキシ系樹脂に埋め込み組織を固定した。観察面を鏡面仕上げまで研磨して組織を現出させ、光学顕微鏡にて代表的な組織を観察・記録した。また、構成鉱物相について、X線マイクロアナライザー（EPMA）にて分析を行い、構成成分を求めた。使用した装置を以下に示す。

外観観察：デジタルカメラ（富士写真フィルム工業製 Finepix F401型）

断面組織観察：光学顕微鏡（オリンパス光学工業製 BX51M型）

鉱物相分析：EPMA（日本電子製 JXA-8100型）

3. 結果・考察

(1)銅滓付着土器（試料 No. 1）

図版1に外観と断面組織を示す。大きさが90×75×21mmの土器破片内側に黒灰色をした溶融物が6~7mmの厚さで付着している。表層から深さ方向に約半分ほどが溶融している領域で、土器に接している側は未反応領域である。図1と表1に溶融部（A部）と未反応部分（B部）の分析結果を示す。溶融部からは、耐火物組成が主体であるが、少量の銅・鉄・錫・鉛の金属元素が検出される。したがって、この土器は錫・鉛を含む銅合金の溶解作業あるいは溶融物の受器として使用されていたことが推定される。

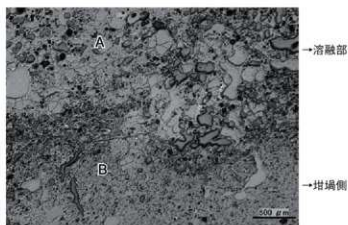
図版1 銅付着土器（試料 No.1）の外観と断面マクロ・ミクロ組織



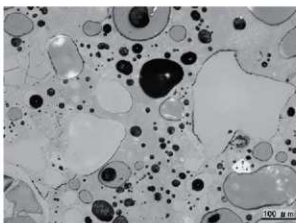
1. 外観写真（矢印は試料採取箇所）



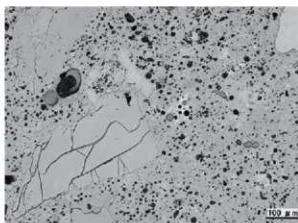
2. 断面マクロ写真



3. 熔融部界面



4. 写真3のA部拡大



5. 写真3のB部拡大

表1. EPMAによる成分分析結果 (単位:重量%)

試料No.	分析箇所	FeO	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	CuO	SnO ₂	PbO	As ₂ O ₃	P ₂ O ₅	K+Na
No. 1	① (A部)	6.04	52.5	20.5	7.83	1.08	2.35	0.36	1.21	—	0.6	6.79
	② (B部)	11	56.8	19.7	1.61	3.43	—	—	—	—	0.35	4.24
No. 2	① (A部)	18.2	59.6	7.77	0.66	4.72	<0.1	—	—	—	—	8.8
	② (B部)	4.29	69.6	15.4	4.61	0.99	—	—	—	—	—	4.82
No. 3	① (A部)	Cu: 97.1, Sn: 0.42, As: 1.70, P: 0.75										
	② (B部)	10.1	42.1	12.7	6.39	1.35	3.17	2.6	12.7	0.83	1.52	5.39

1) 分析箇所は、図1-3の分析箇所に対応する。

2) K+Na = K₂O+Na₂O

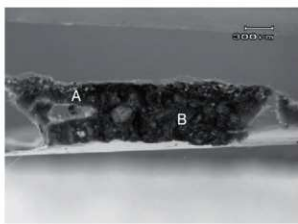
(2)銅滓付着石 (試料No.2)

図版2に外観と断面組織を示す。37×37×25mmの大きさを有する石塊の表面に、厚さが0.5-0.6mmの薄緑色をした付着物が存在する。付着力は弱く、触れると容易に剥離する。この薄い付着物の一部を採取し断面を観察した。非常に脆く研磨途中でも一部が剥離した。図2および表1に分析結果を示した。主体は耐火物組成で、鉄分を多く含むが、銅は0.1%以下と僅かであった。恐らく、溶解作業現場近傍にあった石で、微粒の銅滓を含む土砂が湿分とともに固着したためと考えられる。

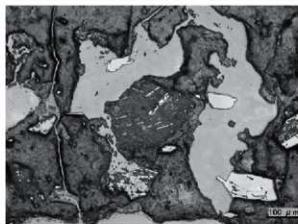
図版2 銅附着石（試料 No.2）の外観と断面マクロ・ミクロ組織



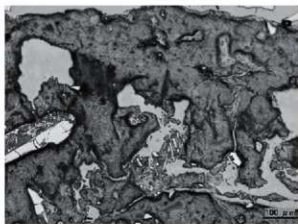
1. 外観写真（矢印は試料採取箇所）



2. 断面マクロ写真



3. 写真2のA部拡大

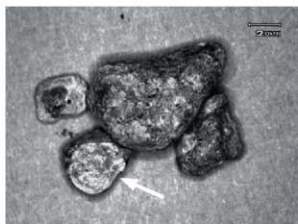


4. 写真2のB部拡大

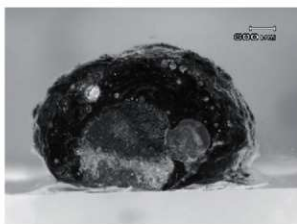
(3)銅滓（試料 No. 3）

図版3に外観と断面組織を示す。楕円形をした3-8mmの粒状物で、一部は薄緑色を呈する。調査試料は、比較的丸みを帯びた外径約5mmの粒子を選定した。中央部に約2mmの円形を呈する金属銅部分（A部）が存在し、周囲は微細球状の金属銅粒子が分散しているガラス相（B部）である。中央の金属銅の半分は酸化して酸化銅となっている。図3および表1に、これらの領域の成分分析結果を示す。金属部分は、錫・砒素・銅を含む銅であった。周囲のガラス相は耐火物成分が主体であるが、銅のほかは錫・鉛・砒素が検出された。このガラス相は錫と鉛の強度比からみて、ほぼ同様の組成を有することから、この銅滓はNo.1土器で銅合金を溶解している際に生成した湯玉と見ることができる。

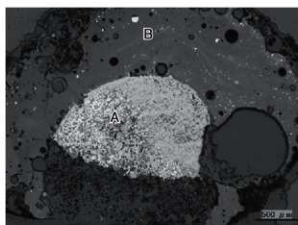
図版3 銅滓（試料 No.3）の外観と断面マクロ・ミクロ組織



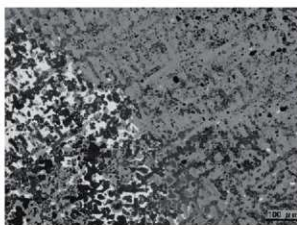
1. 外観写真（矢印は調査試料）



2. 断面マクロ写真



3. 断面マクロ写真



4. 写真3のA部拡大



5. 写真3のB部拡大

4. まとめ

土器片に付着した銅滓から錫・鉛が検出されたことから、この土器片は錫・鉛を含んだ銅合金の溶解作業に使われたものと考えられる。

銅滓は楕円形を呈する形状ならびに構成成分から、銅合金の溶解作業中に生成した湯玉と考えられる。

石に付着した薄緑色をした付着物は、溶解作業現場近傍に存在し、周囲の微細な粉末粒子が湿分とともに固着したものと考えられる。

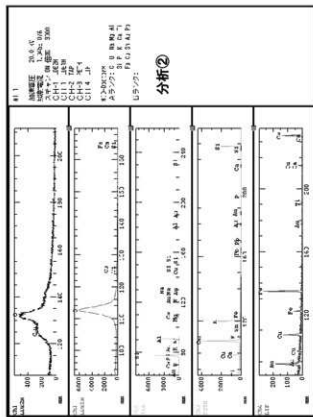
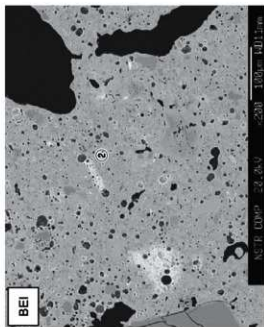
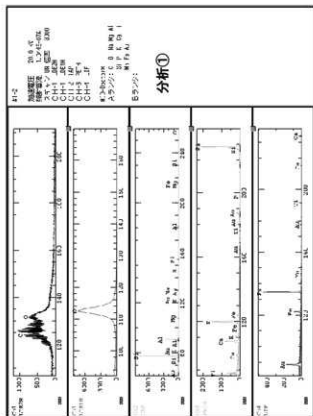
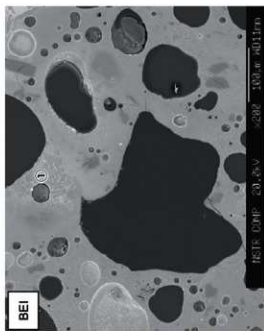


図1. 試料No.1のEPMAによる定性分析結果

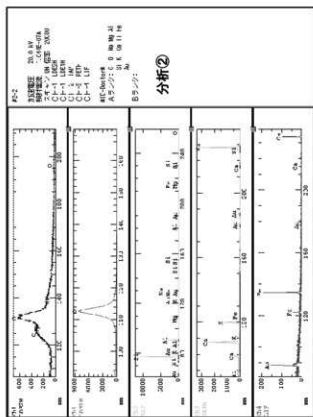
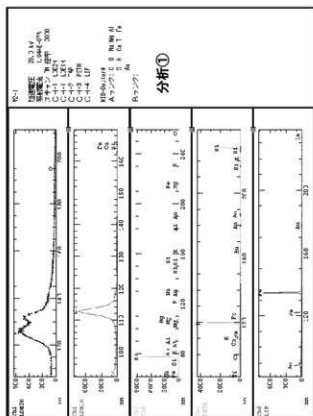
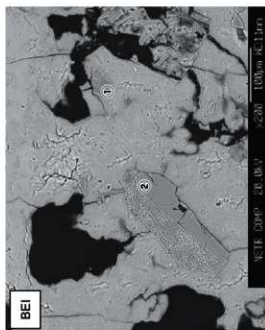


図2. 試料No.2のEPMAによる定性分析結果

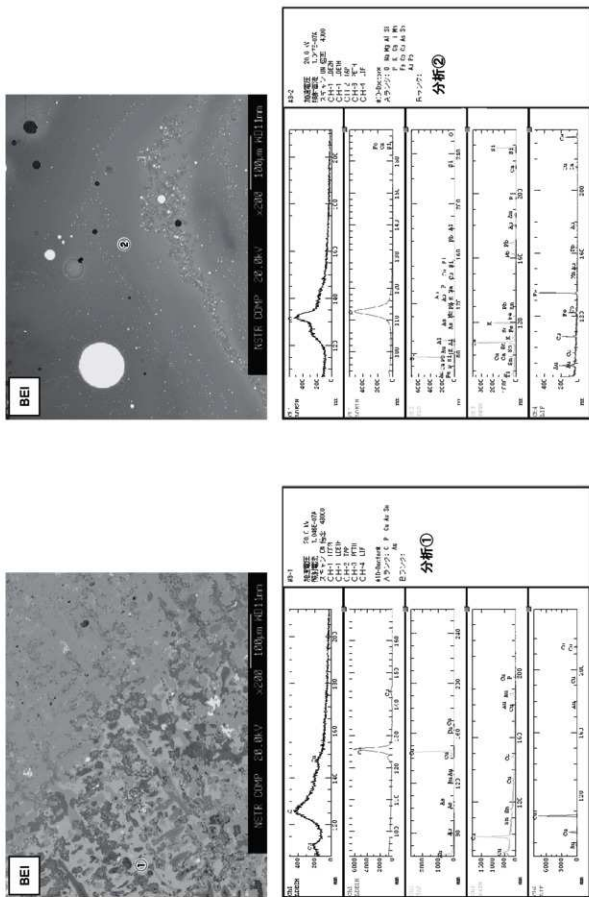


図3. 試料 No.3 の EPMA による定性分析結果

写 真 图 版

(調 査 I ・ II 区)



第61号土坑出土土器



調査 I 区遠景（南西から）

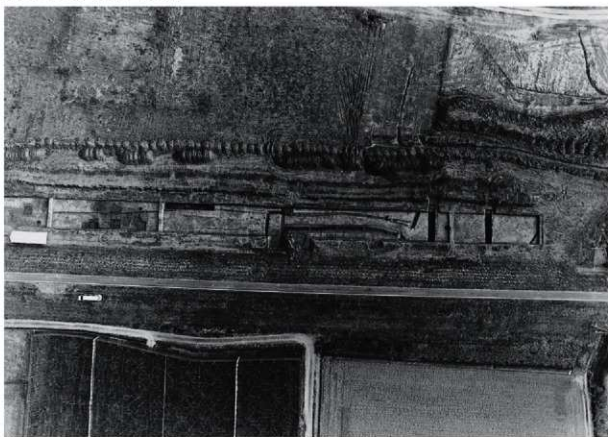


調査 I 区遠景（北から）

PL2



調査 I 区全景 (北部～中央部)



調査 I 区全景 (中央部～南部)

調査 I 区
調査終了状況
(中央部)



調査 I 区
調査終了状況
(南部)



第 1 号住居跡
完掘状況



PL4



第2号住居跡
完掘状況



第2号住居跡
遺物出土状況



第6号住居跡
遺物出土状況

第7号住居跡
完掘状況



第7号住居跡
竈完掘状況



第10号住居跡
竈遺物出土状況



PL6



第1号陥し穴
完掘状況



第2号陥し穴
完掘状況

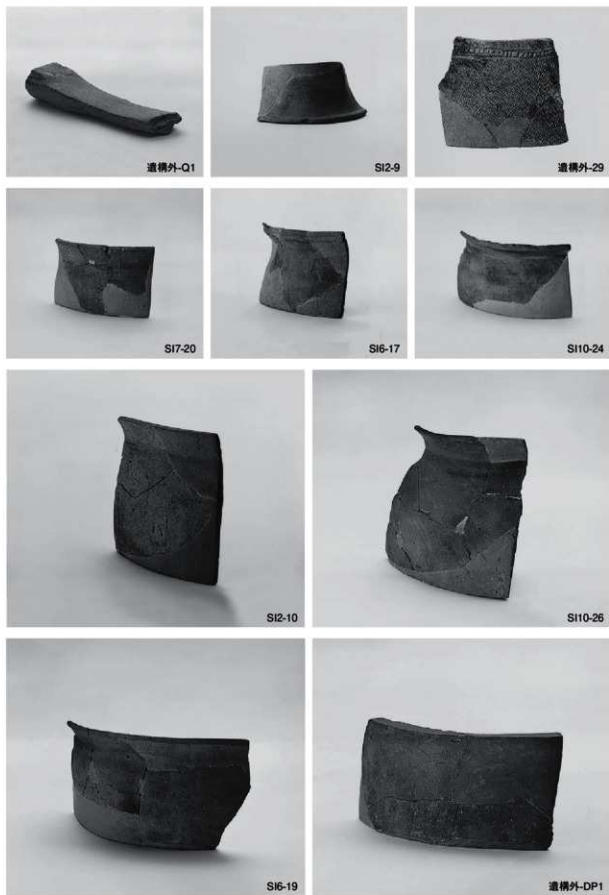


第2・5号溝跡
完掘状況



第1・2・6号住居跡，第4号溝跡，遺構外出土土器

PL8



第2・6・7・10号住居跡出土土器，遺構外出土土器・土製品・石器



調査ⅡA区遠景（南東から）



調査ⅡA区全景

PL10



調査ⅡB区遠景（北から）



調査ⅡB区全景

PL11

第1号周溝伏遺構
遺物出土状況



第1号周溝伏遺構
遺物出土状況



第1号周溝伏遺構
遺物出土状況



PL12



第20号住居跡
完掘状況

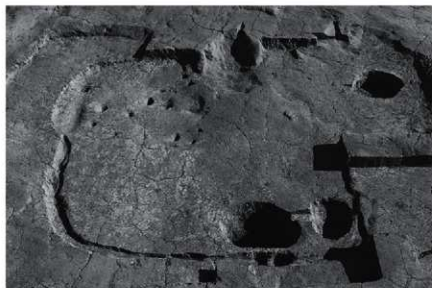


第20号住居跡
遺物出土状況



第20号住居跡
瓦遺物出土状況

第21号住居跡
完掘状況



第30号住居跡
完掘状況



第30号住居跡
竈遺物出土状況



PL14



第31号住居跡
完掘状況



第34号住居跡
完掘状況



第35号住居跡
完掘状況

第37号住居跡
完掘状況



第37号住居跡
遺物出土状況



第37号住居跡
遺物出土状況



PL16



第42号住居跡
完掘状況



第42号住居跡
遺物出土状況



第42号住居跡
竈遺物出土状況

第43号住居跡
完掘状況



第43号住居跡
竈遺物出土状況



第43号住居跡
竈遺物出土状況



PL18



第46号住居跡
竈遺物出土状況



第47号住居跡
完掘状況



第47号住居跡
完掘状況

第48号住居跡
完掘状況



第48号住居跡
遺物出土状況



第48号住居跡
竈遺物出土状況



PL20



第52号住居跡
完掘状況



第53号住居跡
完掘状況



第53号住居跡
遺物出土状況

PL21



第59号住居跡
完掘状況



第59号住居跡
遺物出土状況



第59号住居跡
竈遺物出土状況

PL22



第60号住居跡
完掘状況



第60号住居跡
竈完掘状況



第60号住居跡
竈遺物出土状況

第67号住居跡
完掘状況



第67号住居跡
竈完掘状況



第67号住居跡
竈遺物出土状況



PL24



第68号住居跡
遺物出土状況



第69号住居跡
完掘状況



第69号住居跡
遺物出土状況

第70号住居跡
完掘状況



第70号住居跡
竈遺物出土状況



第73号住居跡
完掘状況



PL26



第73号住居跡
完掘状況



第73号住居跡
遺物出土状況



第77号住居跡
完掘状況

第77号住居跡
竈完掘状況



第77号住居跡
竈遺物出土状況



第1号工房跡
完掘状況



PL28



第 1 号工房跡
遺物出土状況



第 61 号土坑
遺物出土状況



第 129 号土坑
遺物出土状況



第1号堀跡
完掘状況(北部)



第1号堀跡
完掘状況(中央部)



第1号堀跡
完掘状況(中央部)

PL30



第 1 号石組遺構
確認状況(北西から)



第 1 号石組遺構
確認状況(北東から)



第 1 号石組遺構
確認状況(東から)

第1号旧河道跡
完掘状況(北部)



第1号旧河道跡
完掘状況(中央部)



第1号旧河道跡
遺物出土状況



PL32



第 1 号旧河道跡
遺物出土状況(南部)



第 1 号旧河道跡
遺物出土状況(南部)



第 1 号旧河道跡
遺物出土状況(南部)

第6号溝跡
完掘状況



第16号溝跡
完掘状況



第1・2号柱穴列跡
完掘状況





第1号周满状遺構，第20号住居跡出土土器



PL36



第20・33・43・52・59・67・68号住居跡出土土器



第68・74・77号住居跡，第129号土坑，第1号旧河道跡出土土器

PL38



第17・21・30・37・40・41・43・48号住居跡出土土器



S159-398



S168-433



S168-432



S177-484



第1号旧河道跡-593



第1号旧河道跡-592



第1号旧河道跡-595



第1号旧河道跡-596



第1号旧河道跡-594



S137-238

PL40



第17・20・23・24・31・37・42号住居跡，第1号旧河道跡出土土器



第47～49号住居跡出土土器

PL42



第52・54・56号住居跡出土土器



第46・59・70・73号住居跡出土土器

PL44

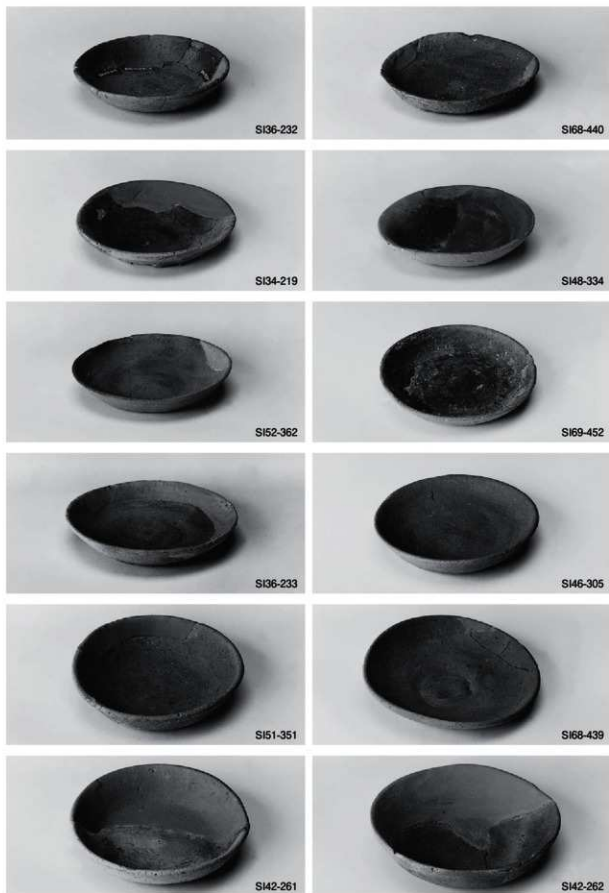


第1号工房跡，第9号土坑，第1号旧河道跡出土土器

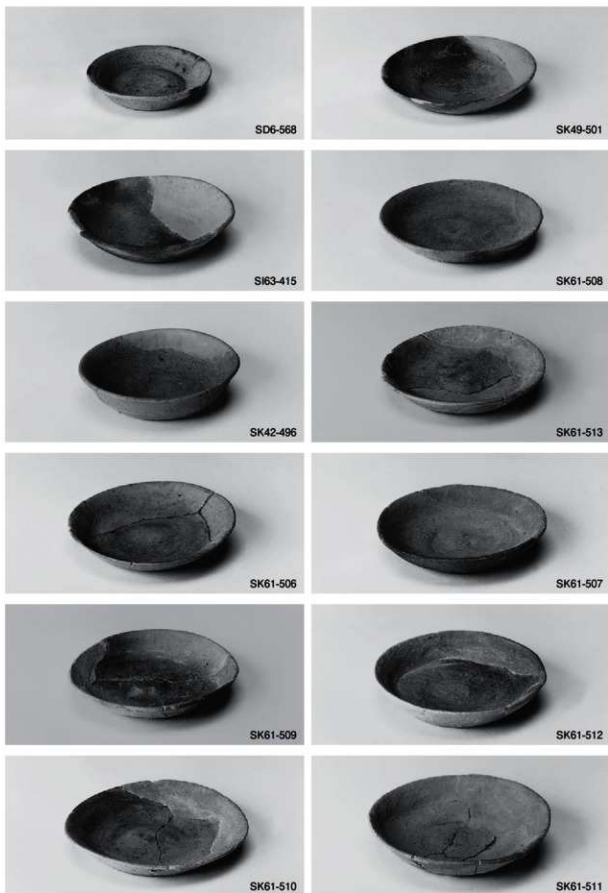


第17·20·21·31号住居跡出土土器

PL46

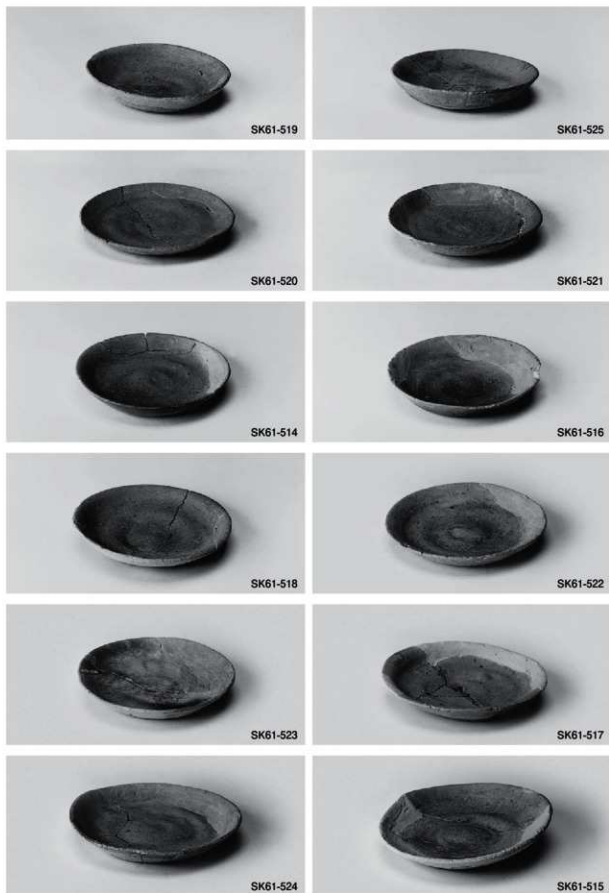


第34·36·42·46·48·51·52·68·69号住居跡出土土器



第63号住居跡，第42・49・61号土坑，第6号溝跡出土土器

PL48



第61号土坑出土土器



PL50



第61号土坑出土土器



SK61-550



SK61-551



SK61-552



第1号工房跡-143



SK61-553



第1号工房跡-142



SK61-554



第1号工房跡-144



第1号旧河道跡-614



SI73-477

第73号住居跡，第1号工房跡，第61号土坑，第1号旧河道跡出土土器

PL52



第1号石組遺構構築材（五輪塔）



第1号石組遺構-Q76



第1号石組遺構-Q75



第1号石組遺構-Q94



第1号石組遺構-Q98



第1号石組遺構-Q82



第1号石組遺構-Q87

第1号石組遺構構築材(五輪塔)

PL54



出土土製品（紡錘車・管状土鐘・置き竈・支脚），石製品（支脚）



出土土器（墨書・刻書）、磁器、木製品、金属製品



第1号周溝状遺構-41

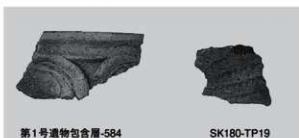
第1号周溝状遺構-42

第1号周溝状遺構-43



第1号周溝状遺構-TP6

第1号周溝状遺構-TP4



第1号遺物包含層-584

SK180-TP19



第1号周溝状遺構-TP12

第1号周溝状遺構-TP11



第1号遺物包含層-583

第1号遺物包含層-TP24



第1号遺物包含層-TP27

第1号遺物包含層-TP32



第1号遺物包含層-TP35

第1号遺物包含層-TP38



第2号遺物包含層-TP39

第2号遺物包含層-TP40

第2号遺物包含層-TP43

第2号遺物包含層-TP41



第1号遺物包含層-Q37

第1号遺物包含層-Q39

第1号旧河道跡-Q42

第1号遺物包含層-Q40

茨城県教育財団文化財調査報告第269集

大堀東遺跡

小貝川中流部河道掘削事業地内
埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

平成19(2007)年3月19日 印刷

平成19(2007)年3月23日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

T E L 029-225-6587

印刷 株式会社 あけほの印刷社

〒310-0804 水戸市白梅1丁目2番11号

T E L 029-227-5505